

---

# 廻る世界の錬金術師(元:面倒事が嫌いな錬金術師)

空想ブレンド

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

廻る世界の錬金術師（元：面倒事が嫌いな錬金術師）

### 【Nコード】

N4244M

### 【作者名】

空想ブレンド

### 【あらすじ】

神様だか悪魔だか分からない奴に手違いで殺されてしまった聡介は、せめてもの償いに・・・と別の世界に送られてしまう。望んだ力は錬金術の使用と、使用時における法則の無視の2つ。そのうえ世界のシステムが生んだ思わぬ幸運も加わりちよつと強くなった聡介だが、その心は未だ一般人のまま……。まだまだその力を振るうには覚悟が足りない。異世界の中で人々と接する内に成長することが出来るのか？その力を使いこなすことが出来るのか？この物語は『一般人』であった聡介が成長しつつ、異世界で過ごしていく物

語です。

まだまだ最強じゃありませんし、成長していく過程なので弱いです  
タイトル変更しました、内容と合わないためです。お手数をかけ  
ます(^-^;) )

- 000 - **まず初めに・w・（前書き）**

本文中に不適切な表現があったので修正いたしました。御不快な気分になさずまい、申し訳ありませんでした。

- 000 - まず初めに・w・

どうも皆様こんにちは、空想ブレンドと申します。

この物語は元の世界で神様が悪魔がよくわからないモノに手違いで殺されてしまって、可哀そうだからと異世界に送ってあげるよ、A H A H A H A っという非常にシンプルかつ分かりやすい、そしてありふれた異世界トリップものの物語です。

数ある良作の中で腐敗しないようにそつと見守っていただけたらなあとは祈っております。

神は特に信じていませんが…。(不運続きで神なんてもう信じられないわ！)

しかし、なにぶん初心者な上に専門学校1年生という多忙な時期なので更新は不定期的になると思われます。

そんな、空想ブレンドー(空想が多分にブレンドされてるってことです)ですがどうぞよろしく見守ってくださいm(´`ー´`メ)m

P・S 試作のために最初のほうは視点がぶれまくりです。有る程度書いたら決めるのでご了承を

では、今回は説明だけのための回でしたので次回から始めます

001 死亡と世界の仕組み 文章一部改定（前書き）

文章一部改定しました！7月19日20：32

夜の道に流れるヘッドライトの人工的な光が都会の中で放つ鋭さは、まるで夜闇にまぎれて獲物を狙う眼光のようである。

その鋭い眼光は、まっすぐに道をわたる自分のことを睨みつけると、レシプロエンジンの高いうなりをあげて猛然と駆けてきた。

なぜ。と思う間もなく鉄で形成された鎧をもつ無機質な猛獣が、自分の体をはるか上空へと吹き飛ばしていた。

もちろん、他人から恨みを買うようなことは……あまりしてないはずだし、それもただの友人同士の喧嘩ぐらいで、殺されるほどの強烈な恨みを誰かに植え付けたわけではない。

意識が闇へと吸い込まれる寸前に見た、街頭の明るい光に照らされた緑の色をした金属のボディは、若者の　　自分も十分若者だが好きそうな色をしていた。

どうせ、酒でも飲んで気が大きくなったどこぞのバカが改造した愛車をカッ飛ばしたのが原因なんだろうなあ。

そんなことを思うだけで、気持ちに恨みへとドス黒く変化していく前に自分の意識は更に深い黒い闇の中へと葬られていった。

・・・

・・・

.....

ふと、目を開ければ死んで見えなくなっただけの目に飛び込んできたのは、ただただ白い、距離という概念が存在しないような何も比べるものがないため、ホワイトアウトと同じようなもの 空間だった。

はて？自分は死んだはずではないのだろうか。死後の世界がこのようない世界というのはなんとも味気なく、天国も地獄もへつたくれもありやしないじゃないか。

と思ったのが何も分からない今の自分が思った最初の感想だった。

自分は確か、夜のコンビニにネットゲームをする合間にジューズを買ってこようと思い立って、独り暮らしの自分の牙城から暗い夜の世界へと足を踏み出したのだった。

しばらくの間、コンビニで見かけた車や、ファッション、ミリタリー関連の雑誌を取りとめもなく眺めて少しの暇をつぶした後スポーツドリンクとスナック菓子を買って店を出た自分は、青に変わった歩行者用の信号を見て横断歩道を渡った。

青になったのをしっかりと確認したはずだし左右も確認したが、それでも車はやってきた。

曲がり角から白煙を巻きながらドリフトをしてきた車は、アクセル



を全開にして凶暴なまでのスピードでライトグリーンのボディを夜の闇に躍らせて、赤のままの交差点へとヘッドライトの光を向けた。まったく減速をする様子もなく交差点へ侵入した車は、自分に逃げる余裕さえ与えずに体重62kgの21歳の翼も生えてない肉体を、軽々と上空へと吹き飛ばした。

衝撃でバキバキになった骨はいくつもの鋭い刃となって、柔らかな内臓を串刺しにした。

その時点で上空に吹き飛ばされた自分の意識はブラックアウトしていたのだが、実際は肉体は重力に従って地上へと加速していき、鈍い音とともに着地すると同時に生命活動に完全にトドメをさした。

死んだところまで思い出した自分は、我に返った途端に聞こえた声に動きが固まった。

それもそのはず、自分にとってここは死後の世界のはずで誰もいはいはずなのだから。

「ふむ…君は何もしゃべらないがこの空間に対して何も思わないのかね？私としてはつきり慌てふために喚き散らすのではないのだろうかと思っていたのだが…いや、君が落ち着いた子供であって実に満足だ」

しかし、このまま何も行動しないままでは一向に事態は進展しないと思った自分は、かけられた言葉に反応して自分の体へと停止解除

信号を送ったのだった。

後ろへと振り返る間に考えたことは、なんだかこの人偉そうだなあ。とか、この空間が不思議過ぎて言葉が出てこないだけだ、そもそも自分は子供ではない青少年だ、子供扱いするなコノヤローとか、生産性のない言葉を考えただけだった。

はたして、自分はまたもや肉体へと停止信号をおくるハメになったのだった。

それもそのはず、常識から考えて人語を話しているのだから人間なのだろうと、無意識のうちに決めつけていた自分の常識が打ち破られそうになっているのだから。

後ろへと振り返って目に飛び込んできた映像はとても奇妙なもので、もしや、自分の目は事故のせいで幻覚を映しているのじゃないだろうか、と思えるほどのものだった。

言葉を発したであろうと思われる人物は、その実『人間』ではなく白い世界に浮かぶ、闇よりも深い色の真っ黒い球体のようなものだった。

もちろん顔はないので表情も分からないし、口が無いのでどこから言葉を発したのだろうか、という疑問もわいてきたがここにきて疑問を子供のように喚き散らすのも癪な気がしたのでそのままのみこんだ。

「いや、分からないことが多すぎて何が何だかわからないんだけど

……」

とりあえず、無難な受け答えが出来たと一応満足することにした。

「ふむ、まずは説明することにしようか。単刀直入にいうと君を連れてきたのは私だし、事故を装って殺してしまったのも私だ」「ちょっと」黙っていたまえ話しているのは私だ。さて……話の続きだが、これは私にとっても不本意なことだね。君を殺してしまったのはまったくの勘違いによるものなのだ。ドッペルゲンガーというのは君も聞いたことがあるだろう。その姿形どころか、同姓同名な上に年までも一緒な者がいてね。その死期が来たので狩ろうという話になったのだが、世界までもが誤認してしまつてね。君のほうを殺してしまつたのだ」

衝撃的すぎる事実に向つたをかけようとした瞬間に睨まれて 目  
も何も無いので感覚的なものだが しまつた。

どうも、自分が中心的な考えの持ち主らしい……こういうときは黙つて聞くほかないのだろう。

「流石にこれは理不尽な気がしたが、一度存在を消してしまつて存在することを拒否した時は流石に元には戻せん。まだ寿命も有り余っているからこのまま消してしまうと何かと不都合なことが起きるのだ。生き返すといって元の世界には戻せないから君には別の世界へと行つてもらふ。・・・元の世界には家族もいただろうし友人もいただろう。本当にすまないと思つてゐる。生き返すのもこちらの都合な上に、頼れる人間が一人もない世界に君を独りで生き返す

のだ。文明は君の世界より大幅に遅れている世界だから生活は厳しいだろう。そこで君には2つだけ特殊な能力をつけてやろう。ああ不死や不老はやめてくれ。寿命の関係で送るのにソレでは意味がなくなってしまうからね。それ以外なら君が望むならなんでも叶えてやろう」

どうしよう……本当に死んでしまったらしい。

そのうえ生き返れるが、そのかわりに愛すべき家族や友人を失って、それに加えてたった独りで見知らぬ土地 正確には世界だがに生きなければいけない。

何でもいいという特殊能力は破格なものだけど、何があるか分からない世界なら下手な能力の選択はそのまま死につながるだろうと思われる。

無敵能力なんて論外だ。

敵や生き物がまわりにいない場所にでたのなら無用の長物以外の何物でもない。

なにか生産性のある能力……それも生活に必要な色々なモノを生み出せる能力が必要だろう。

……『錬金術』なんてどうだろう。

とマンガや、小説、ゲームと様々なことをしてきた自分の考えはそんな答えに行きついた。

熟考しても悪い考えではなさそうだったので、とりあえずはコレを選択することにした。

次にもう一つ的能力だが、ただの錬金術では何かと制約があると考えたので　たとえば等価交換や、性質の把握など・・・ただ単に制約されることが面倒なだけとも言える　これらの『世界における法則からの脱却』を求めることにした。

「えーっと、色々言いたいことはあるけど、もうメンドクサイからいいです。どうせ言っても変わらないんでしょうし。ただ……怨むぐらいはさせてください。……それから望む能力は、『錬金術の使用』と、『ソレの使用におけるすべての法則の無視』。これら2つの能力でお願いします」

「分かった。希望どおりになえよう。他に質問があれば聞こう」

とりあえずは、『自分の住むことになるだろう世界について』ある程度のことを聞かなければ話にならないだろう。

まずは知識を手にいれなければ始まらない、情報の有無は時として生死にかかわるのだから。

「僕が行く世界のことについて教えてもらえますか？」

そう聞くと真っ黒な球体は満足げにその輪郭を微かに震わした。

ちよつと気持ち悪いと思つたが、言葉には出さないでおく。

「君が行く世界は、魔法や、ファンタジーあふれる下位世界だよ。君がいた世界ではそういうものにあこがれる人は数多くいただろうね。もちろん文化レベルは高くはない。機械はないし、銃も有るには有るが実用レベルではない。ああ大砲レベルはさすがに開発されているがね。基本的には剣や盾などの白兵戦が主流だ」

ひとつだけ、引つかかる言葉があつた。

文化レベルうんぬんは有る程度予想はしていたが、予想外の単語の登場に少し違和感が生まれた。

「すいませんが……下位世界とはどういうことですか？魔法とかがあるなら、普通は神の加護とかが有るっていうことで、えゝつと……上位世界になるんじゃないんですか？」

そう尋ねると真つ黒な球体は少し考えるように会話に間が空いた。

「ああそういうことか。それは君の世界の勝手な解釈だよ。実際には未発達な下位世界だからこそ、神の加護が必要なのだ。この神の加護がなければ、たちまち人や動物は衰退するだろうね。文化レベルが高くなり、機械などを使えるようになって、つまり、魔法がなくとも自立ができるようになった世界は神の加護を必要とする世界

に対して上位の世界となるのだ。そのため神の加護をなくす代わりに下位世界に対して、上位世界の人間は神の加護がなくても生きていける強力な生命体として認識される。そういえば君もまた上位世界の人間だったね。下位世界では、君もまた強力な生命体として認識されるから、ちょっとやそつとじゃ死なないし、そこの生き物なら素手でも負けることはまずないだろう。……ああそれと神の加護は世界に住む全ての物に対して等しくかけられるから、君もおそらく魔法を使用できるだろう。まあ魔法については生まれつきの機能が無いから、ちょっと力のある魔法師と変わらないぐらいだろうがね」

これで実際に与えられる能力は『肉体強化』と『魔法の使用 少  
しらしいが 』、『錬金術の使用』、『錬金術使用時の法則の無  
視』の4つとなったわけだ。

これぐらい有ればそう困ることはないだろう。

これで生き抜くための術は揃ったはずだ。

「さて、他に質問がなければ、君をめくるめくファンタジーの世界へと送り込みたいんだが？すこし時間がおしていてね。なに、私もそれなりに忙しいんだ」

初めてこの真つ黒な球体がおどけたような口調で話しかけてきた。

それは不思議と、人間味があるような仕草に思えた。

「いえ、これ以上はとくにありません。いつでもいいですよ」

元の世界に決別をつけるため、記憶をずっと覚えていられるよう焼きつけるために目をつむる。

その閉じたまぶたを通して、も明るく白い光が感じられた。

きっと、今自分は白い光の奔流の中に身を横たえて、新たな世界へ旅立とうとしているのだろう。

目をあけると眩しくて荒々しいが、どこか温かみのある光が全身を覆っていた。

「そういえば……あなたは神様ですか？それとも悪魔……なわけはないですよね？」

答えを期待せずに何気なく投げかけた言葉はそれでもしっかりと真っ黒な球体へと届いていたらしい。

「さあどつちかな？もしかしたら神様かもしれないし、悪魔かもしれない。はたまた、そのどちらでもあるかもしれないし、どちらでもないかもしれない。真実とは時に明確であり、時に曖昧なものなのだよ」



そういわれて、なるほど確かにそういうものなのかもしれない。

と、思い言葉を返そうとしたときには、既に自分の意識は温かい光の中に沈んでいていた。

いやぁそれにしても難しいですね@@;

全然話が進んでくれない。まぁ第一話はこんなもんです。実際に異世界で動き始めるのは次話以降になると思われます。楽しみにしてくれているひとがいれば嬉しいです。感想なんか書いてくれちゃったりすると期待されてるんだな〜って思ってた尻尾ふって喜んでますのでなにとぞ。

7月15日 質屋の店主が銅色1枚あればイイ店が買えると言っていたのを5枚にしました。後の話で銅色1枚で買っていないのでその矛盾を埋めるためです。申し訳ありませんでした。

文章一部改定しました！7月19日21：11

002 出会いと親切 文章一部改定

002 出会いと親切

「うん……イタタタ……背中が痛い……」

それもそのはずで、今聡介は固い地面の上に背中を下にした仰向けの恰好で倒れていた。

背中にわずかな痛みを感じながらも体を起こすと、最初に目に飛び込んできたのは深い緑色の木々。

都会に住んでいて、木々を見るといつても国立公園などしかなかった聡介にとって、それは新鮮な光景であり、吸い込んだ澄んだ空気も加わってとても気持ちのいいものだった。

しばらく周りの生き生きとした木々を見渡していた聡介の耳の鼓膜を震わしたのは葉のすれ合う音ではなく、女性特有の鋭い悲鳴。

「な、なに!？」

突然聞こえた悲鳴に飛び上がり、自身の心臓の音が聞こえてしまうんじゃないかというほど鼓動が速くなるのを感じながらも、刺激に餓えた現代人の体は野次馬根性丸出しで、悲鳴が聞こえた方へと走り出していた。

木々を避けながらも進み、開けた場所に出た時には、足元に転がっている西洋の片手剣と、倒れた女性の体、それらよりも奥にいるゴリラを2周りほど大きくさせた生き物と、それを相手に戦う大柄の2人の男達が視界に入る。

倒れこんだ女性の髪は活発そうなショートヘアのオレンジ色で、着込んでいる軽鎧は動きやすさを重視しながらも女性らしさの感じられる防具だった。

普段ならば白くてキレイだろう肌には今では血が張り付きその輝きをいくらか失わせていましたが、なんとか生きているだろうと分かるくらいの浅い呼吸を、繰り返しているだけだった。

「おい！アンタも冒険者だろ！？手を貸してくれ！コイツは俺たちだけじゃ手におえん！剣ならあんたの足元にあるからそれを使い！もつとも切れ味は落ちてるがな！」

こちらに気づいたくすんだ茶色の短髪の男が視線だけは敵から外さずに怒声を張り上げた。

聡介には分からなかったが、男はおそらく聡介の服装を見て判断したのだろう。

聡介の今の服装は、裾を折ったジーパンに、黒色に赤のワンポイントが入ったポロシャツ、服に合わせただろうブレスレットとネックレス、レザーのショルダーバッグといったシンプルな格好だったからだ。

男はジーパンやポロシャツを特殊な繊維を織り込んだ物で、アクセサリーは一種の魔術礼装だと判断したらしい。

聡介には知る由もなかったが、この世界でただの一般人がアクセサリーをつけることは少なく、その理由として金属は大抵武器や防具に回されていて、アクセサリーには大抵体力の増強や、回復などといった魔術がかけられるものだったからだ。

もちろん聡介には動物を殺した経験なんて無いし、ましてや命のやりとりをするような危険極まりない場面に出くわしたことなく全く無い。

とっさに何の変哲もない剣を地面から拾い上げたのはいいが、その行動のせいでどうやら敵にも聡介の存在がバレたらしい。

敵は、二人の相手を延々としてもう一人が合流するよりは先にコチラをつぶした方がいいと判断したのか、体をこちらに向けて猛然と突っ込んできた。

「クソッ！アンタ早く構えろ！死ぬぞ！！」

やばい、殺される……。

と、思っても恐怖で動かない体に、何度も動くように電気信号を送り続け、ようやく動くようになった時には既に敵は目の前に来ていた。

恐怖でがむしゃらに剣を握った腕を振るったが、剣筋も何も有ったものじゃない剣は、当然のごとく敵に弾かれてしまう。

しかし、弾かれたことでバランスを崩した聡介は倒れこみ、結果として敵の突進をかるうじて避けることに成功した。

標的を失った敵の体は、停止するよりもやく後ろの巨木へと衝突し、木の幹に大きくぼみをつけながらも停止することとなった。

即座に後ろから追いついた、くすんだ茶髪の男と深い青色をしたシヨートヘアの男が止まった隙に後ろから飛び掛り、深々と、長い両手剣と片手剣を首筋に突き刺した途端、敵は鋭い悲鳴をあげ動かなくなつた。

「おい、アンタ大丈夫か？俺たちは早くコイツを運ばなきゃいけないから先にいくぞ」

そついうやいなや、二人は聡介がきた方向とは逆の方に女性を抱えて走り去っていった。

一人残された聡介は突然訪れた命の危機にしばらく茫然としていたが、我を取り戻すと急にこの場にいることが怖くなり、二人を追いかけようと走り出していた。

「おい、まってよー！」

聡介の声は再び静かになった森に反響したが、声が返ってくることはなかった。

不安だった、この場にいることのほうが危険な気がした聡介は、とりあえず二人が駆けて行った方向に向かって走り出していた。

「なあ、ジャック。さっきの奴なんだ？ たんだ？ よく考えれば剣も持ってたしここらで見るとな格好でも無かったよな？」

くすんだ茶髪の男は街道を女性を抱えて走りつつ、隣を走る深い青色をした男に話しかけた。

「さあ？ でも、傭兵じゃないみたいだね。恰好はそれっぽい気もしたけど、構えもしなかったし、何より動きがまるっきり素人だったしね。」

話しかけられた男ジャック・バロウズは肩をすくめながら、聡介をみたときの恰好と動きを思い出して言った。

「まあジョージが気にしなくてもいいんじゃない？ 何も知らない奴が迷い込んで入っただけかもよ？」



と、くすんだ茶髪の持ち主のジョージ・アルフレッドに返す。

ジョージはそれもそうだな、と言ってそれから女性をしっかりと抱え直して走る速度を上げた。

「あのーすみません。この近くで町かなにかありませんか？」

街道に出た聡介は、たまたま近くにいた職人氣質なように見える壮年の男に話しかけてみていた。

「ん？なんだ？兄ちゃんここで見るような顔じゃないな。どっか遠くから出稼ぎか？」

壮年の男は聡介の服装を見て興味深そうにしていた。

「あ？ええ……えーっと……そうなんです。……えと……鍛冶をしようかと……」

聡介は質問に質問で返されて、困ったようにこの世界に来る前に候補にあげていた職業の名前をとっさに挙げた。

「へえ……そこまで腕っ節が強そうには見えねえが人はみかけによらねえなあ。……ああそうだ。近くの町だっけか？それなら俺の住んでるガーランドがいい。近いし何より活気がある。俺は今からガーランドに帰るとこなんだが、一緒にいくか？」

「お願いします。こちら辺のコト全然詳しくなくて困ってたんです。助かります。」

「じゃあ自己紹介しないとな。俺の名前はエドガー・バーンスタイン、ガーランドの町で武器・防具を扱う職人だ。もし兄ちゃんの打つモンがよかったら買わせてもらっぜ。」

「僕の名前は神尾聡介って言います。……あつ、名字と名前が逆みたいなんで、合わせるならソウスケ・カミオになります。」

「ソウスケ・カミオか。変わった名前だな。まあこれから大変だろうがよろしくな。」

聡介は人のよさそうなエドガーと一緒に町まで行動をとることにした。

真上にうかがふ強い日差しを放つ太陽はとても明るかった。

「なにい！？身分証明書もなにも持っていないだど！？」

町についた聡介に待っていたのは、この町で商売や就職するときに必要な身分証明書が無くて何も出来ないという事実だった。

「……困ったな。しかたねえ……商工ギルドに掛け合ってみるか。ソウスケ、ちょっと知り合いのギルドのところに話してみるからしばらく待ってろ。……ああそうだ、近いうちに自分の店をひらくつもりならその申請もだしておくが。」

「すみません。何かから何までお世話になります。お店の申請もお願いします。本当にすみません……。」

「まあ仕方ないしな……気にすんな。じゃあそこらへんで時間を潰していてくれ。しばらくしたら戻る。」

そついうとエドガーは町の中へと走って行った。

来る途中に分かったことだが、エドガーはこの町でもそこそこ有名な武器防具店を持つ職人らしく、田舎から出てきた右も左も分からない出稼ぎや弟子を指導したりする面倒見のいい職人らしい。

しかし、時間をつぶしているといわれたところでお金も何もない聡介は、どうしようかと悩んでいたが、目線を通りにめぐらすと、質

屋らしき店が目に入った。

当然売るものも何もない聡介だったが、自分に与えられた能力を試してみるいい機会だと思い、人目の付かない通りの裏に回ってきた。

「よし、誰もいない。ちょっと試してみよっかな。えーっと、材料はないから地面の石や土を使うとして……壺や陶器をつくってみよっかな。」

そういうと聡介は、はて？どう練成するのだろうと考えたが地面に手を重ねて置き、とりあえず、創り上げる壺や彫刻をイメージした。

すると重ねた手から広がるようにして、青白い電気がバチバチと音を鳴らして現れ、それと同時に地面から適当な大きさの何の変哲もない壺と陶器の入れ物が出来た。

「うーん……これじゃあ売れそうに無いなあ……。もっと凝った物の方が売れそうだし……ギリシャ文明のが価値が高そうかな……？」

そう言っつて、陶器や壺を割って、粉々にしたあと、もう一度練成しなおそうと思い、また手を重ねて破片とかしたそれらの上に置く。

今度はイメージを変えて、美術的に価値の高そうな物をイメージしていく。

思いついたイメージは、勝利の女神ニケの彫像『サモトラケのニケ』

。

その翼を広げた優美でダイナミックな姿を、頭の中で創り上げ、長い年月を経たであろう姿を想像して、頭の中にその全体像を完璧に写していく。

頭の中で創り上げられたサモトラケの二ケは、本物よりもかなり小さいが、その優美さと迫力は寸分も変わらない。

掌から溢れる電光はまるで二ケの生誕の喜びをあらわすように、バチバチを大きな音を鳴らしつづけ、二ケの彫像を創り上げていく。

その様はとても神秘的で、目をつむっている聡介には分からないが、第三者がこの光景をみれば言葉をあげることすら忘れて茫然と見続けることだろう。

創り終えた聡介が目を開けると、そこには大きさ以外なら変わりの無いサモトラケの二ケの彫像が悠然と立っていた。

自分自身ですらあまりの迫力に見惚れてしまったが、次第に表の通りの喧騒が自分の耳の中へと再び入ってきて我に返る。

「すごいな……ここまで完璧にできるなんて……。……エドガーさんが返ってくる前に早く換金しないと……。」

そう思い直した聡介は、ふだんなら重くて持てないだろう彫像を軽々と抱えて、質屋に行こうとして、ふとその異様さに気付いた。

普通小さいとはいえ、石で出来た彫像を持つことなど一般人には確実に無理だ。

こんなことが出来るのもやっぱり上位世界から来たからその補正によるものなんだろうなあ……と驚きをおぼえつつまた歩き始める。

質屋につくと、ゴドンという大きな音とともに、表に向かって大きな声を張り上げていた店主の前に置く。

「お、おい……君……コレをドコで見つけたんだ！？教えてくれ！」

「え？え〜っと、とある遺跡の奥の方に眠っていたのを持ってきたんですが……」

しまったなあ、言い訳も何も考えてなかった……と心の中で思いつつ、適当にそれらしいことを言っておく。

「こんなモノがあるなんて……。君10000……いや12000ギル払う！コレを買わせてくれ……！」

「え？12000ギル？」

「ぐっ……。不満かも知れんがこれだけしか払えん……。頼む……。」

こちらとしては『ギル』という単価に疑問を思っただけなのに、聞いただけで相手の方はどうやら値段に不満があるとおもったらしい……単価は分

からないが、まあ円に換算してもそれだけもらえるなら儲け物かなあ、と思った聡介は、それで頷くことにした。

「ありがとう！こんなものがあるなんて驚きだ……。本当にありがとう君！」

「えっと、まあそれはいいんですが。1ギルって大体どれくらいの価値があるんですか？ちよっと田舎からでてきたばかりで分からないんで、教えてもらえるとありがたいのですが。」

「ああいいとも。君は出稼ぎか何かだったのか。なるほどな。これは軍資金がわりというわけか。で、1ギルだが……そうだな、5ギルほどあればだいたい1食分にはなるな。それと硬貨だが1ギル、10ギル、50ギル、100ギル硬貨までが一般的な数字入りの硬貨で、10000ギルからとなると長方形の薄い札で、色がついて偽造防止がかかる、銅色札は100000ギルで、銀色札が1000000ギル、金色札は10000000ギルだ。まあこれらは早々御目にかかることはないけどな。ああこらで店をかうなら、銅色5枚あればイイのが買えるぞ。」

つまり1ギルとはだいたい100円程度らしい。

そう考えると12000ギルとは120万円ぐらいということになるのだろう。

質屋だから利益のことを考えるとだいぶ高い値段がついたのだろう、売るときには何百万円もの価値になるのではないかと聡介は驚きと共に思っていた。

「ありがとうございます、助かりました。それと、もしよければ袋をもらえますか？」

「はあ……。しかたないね、コレをあげるよ。しかし君は全く何も持っていないだね。君の未来が心配だよ。なんなら町をいろいろ紹介してあげようか?」

「いえ、エドガーさんという人が色々お世話してくれてるので大丈夫です、ありがとうございます。」

「おお、エドガーさんか。なら心配ないな！がんばるんだぞ！」

質屋の主の声援を受けつつ、お金のはいつた皮の袋をシヨルダーバッグの中へといれてしつかりと口を閉じると、ちようどエドガーさんが帰ってきたところだった。

「質屋に何かようがあつたのか？まあいい、それよりも商工ギルドで証明カードと店舗開設許可書もらつてきたぞ。それと、古くて使われてない工房がウチの店の近くにあるんだ。そこなら俺も暇なときには面倒みてやれるし、手を加えれば店としても、工房としてもすぐ使えるからソコに店を構えるといい。」

「何から何まで……本当にありがとうございます。本当に……ありがとうございます。……とうとう……」



ちゃんと生きていけるかどうか不安で、そのうえ生命の危機にも  
ち当たった聡介は、ここまでしてくれるエドガーの優しさに触れて  
つい泣き出しそうになってしまった。

「お、おい！？泣くなつて！どうしたんだ！？」

「いえ……エドガーさんがすごい優しくて……僕……すごく不安だ  
つたから。本当にありがとございます。」

「……ああ……いいから早く涙ふけて……はたから見たら俺が悪  
者みたいじゃねえか……。」

そう言いながらもエドガーは、すこしわくちやになったハンカチ  
みたいなものを取り出して聡介に渡しながら、照れたように頭をか  
いていた。

聡介は、やっぱりこの人イイ人だなあと、心の内で思いながらも涙  
をぬぐって、元の表情にもどしながら見ていた。

5665文字です。いやぁ…大変ですね…。今回も下地作りの回で  
ございます。次回からは鍛冶をしていくつもりですので、なにとぞ  
…。

…見捨てないで（・・・）

貨幣価値については色々考えましたが、うまくいったと思えない（  
泣）

それにしてもエドガーさんがめっちゃイイ人や…。

キャラが勝手に動くとかないわゝとか他の方々のあとがきをみて思  
つてた過去の自分を殴りにいきたいです。

プロットも何もない作品ですがこれからヨロシクです！！

003 工房と依頼 誤字修正&文章一部改定(前書き)

文章一部改定しました！7月19日21：34  
2階の部屋が小さすぎたため直しました…。

## 003 工房と依頼 誤字修正&文章一部改定

### 003 工房と依頼

聡介は只今、エドガーの紹介により古びた といっても一階に店舗、その奥に工房と倉庫、二階部分に六畳の部屋が1つと、十畳の部屋が1つある立派な店である 店を、案内されている途中だった。

商工ギルドの不動産屋の話によると、このお店を銅色5枚で譲ってくれるという話だったのだが、実際問題そこまでのお金は無かったので、分割払いをするという方向で話が決まった。

本当ならこのお店はだいぶ古くなっているとはいえ、土地もいい方で、銅色5枚ではなく8枚でようやく買えるような場所だったらしい。

エドガーの新人の世話焼きは町でも有名で、そのエドガーが口利きをしてくれたからこそ、これくらいの値段になったんだよ、とは案内をしてきている不動産屋の話だ。

聡介がソレを聞いて店の奥を見に行っていたエドガーにお礼をいうと、照れたように頭をかきながら、出来上がったばかりの商工ギルドカードを聡介に渡し、自分の店の方向を指さして、俺はそろそろ戻るからな！と言い立ち去って行った。

それから不動産屋から説明を受けた聡介は、頭金として銅色1枚を渡して晴れて契約完了となって、この世界で新たな自分の牙城を手に入れたのであった。

古くなっているとはいえ、木造ではなかったので腐食しているようなところはなく、掃除を徹底的にすれば、汚れはすぐ落ちるようなものだった。

しかし、そのまま放っておくわけにもいかず、聡介は、まずはお店の掃除をすることにした。

店の部分は棚や、剣を立て掛ける木の箱が、傷ついていたがまだ十分使えるようであったのでそのまま使用し、錬金術で汚れを分解して落とすことだけにした。

このとき錬金術で新品同様に直さなかったのは、ボロ屋が一夜で直っていれば不審がられる…と想つてのことである。

店の奥の階段をのぼり、2階の部分にいくと、上の2つの部屋はどちらも蜘蛛の巣が張っていたり、なんだかよく分からない虫が何匹もわがもの顔で占領していた。

聡介は、早々に虫たちにご退場していただくために、窓を開け放ち、引っ搦んでは窓から放り投げていった。

投げ捨てられた虫たちは不機嫌そうに羽音を立てたりしながら各々散って行ったみたいだ。

またもや、錬金術をつかって瞬く間に汚れを落とした聡介は、次に長い年月のせいで出来たのであろうひび割れを、これまた錬金術で次々と修復していった。

新品のようになった2つの部屋を満足げに見渡した聡介は、最後に

のこった工房の方へと足を向ける。

階段を降り、店の奥の階段横の扉を開けて工房に入った聡介の目に入ってきたのは、煤でよごれた溶鉱炉らしきものと、ハンマーや、ふいごなどの工具が雑多に置かれた光景だった。

溶鉱炉は煤けたままで問題は無かったが、前の主人が置いていったのだろう工具類は、錆びて動かなくなったり、ふいごが破れていたりにして使い物にならなかったで、錆を取ってしまえば、多少不自然にはなると分かっていても錬金術で直すほかなかった。

キレイになった工房を見渡すと、錆ついてはいるが頑丈そうな鍵が掛った扉を発見し、その扉の方へと近づく。

鍵は大型の物で、ハンマーなどで壊そうとした形跡があるも、未だにしっかりとその扉を己の役目通りに守っていた。

しかし、そんなものは聡介には一切関係が無かったので、あっさりと鍵を分解すると、鍵は工房の固い床へと落下し、甲高い悲鳴をあげて己の長い役目を終えた。

何があるのだろうか？とワクワクしながら聡介が扉を開けると、その先に広がる物はただの石くずのように見えた。

が、更に扉を開け放ち、もっと多くの光を中に引き入れると、ソコにあるのは光を受けて黒光りする大量の鉄鉱石と木炭であることが分かった。

しかし、鉄鉱石は精製しなければ固いだけのただの石なので、倉庫から全て取り出して、錬金術で鉄のインゴットと、石クズとに分離

していった。

鍛冶に必要不可欠な鉄を手にいれた聡介は、まずは何の変哲もない西洋剣を3本ほど練成してみ、創り方のイメージを掴むことにした。

出来上がったものをエドガーのもとに持っていこうかと思ったが、工房を獲得したその日に3本も出来上がっているのはさすがに不自然かと思い、持っていくのは明日にすることにした。

創り終えて外に出てみると、既に日は傾きすっかり暗くなり、まわりの人影は少なくなっていたので今日のところはこれで終わろうと思、晩ご飯調達のために食事が出来るところを探して通りにでた。

町は暗くなっていたが、すこし遠くに明かりがついている店を見つけ、この時間にやっているということは宿屋か食事処だろうとあたりをつけ、その店の前まで歩いていくことにした。

店の前までいくと、看板にナイフとフォークが交差している板が目に見えたので、店の中へとはいっていく。

「おい、ソウスケ！今から飯か？どうせなら一緒に食おう！」

入った途端にどこか聞き覚えのある声を聞いて右手を見れば、数人

の男性と一緒に楽しそうに酒と肉を頬張るエドガーがコッチを見て手を挙げている姿があった。

「あ、今そつちに行きます。」

そう言った聡介は、周りの人たちは誰だろうと思いつながら、エドガ―の横の席に腰を下ろす。

「おう店の方の準備は順調か？まあまだ鉄鉱石やら木炭やら必要なものはたくさんあるだろうからしばらくは動けないだろうがな。少しくらいならわけてやれるがいるか？」

エドガーがこう言うと、向かいに座った男がエドガーは本当に世話好きだなあワハハハハッ！と豪快に笑う。

「ああそのことなんです工房の奥の扉を開けたら大量の鉄鉱石と木炭が置いてあったんです。たぶん前の持ち主のなんでしょうけど、この際だからありがたく貰っておこうと思っんです。」

「なに！？あの扉をあけたのか！ワハハハハ！！ソウスケは本当に運がいいな！初日に大量の鉄鉱石と木炭をゲットできる奴なんてそうはいないぞ！ワ―ッハッハッハッハ！！！」

酒も入っているのだろうエドガーは、聡介の運の良さを聞いて、楽



しそうに、かつ豪快に笑い飛ばす。

「ソウスケ！今日は俺らのおごりだ、たくさん食べ！！」

「ブッ！ゲホッゲホ…おい、エドガー！？俺らってなんだよ、俺らって！？」

聡介の反対側のエドガーの隣に座っていた男がのんでいた酒を嘔き出して、むせながらエドガーに聞き返す。

エドガーはと言うと、いいじゃねえか、新人の船出だ。こまけえこと気にすんな！と言い、酒をさらにあおる…どうやら完璧に出来上がっているらしい。

その後、迷惑にならない程度食べた聡介は、明日もあるので……と言って、その店から涼しくなった夜の通りへと出た。

「エドガーさん、本当にいい人だなあ…。なんか第二の父親みたいな感じがする。」

と、異世界で出会った面倒見のいいエドガーに感謝しつつ、そんなことを思っていた聡介だった。

翌朝早くおきた聡介は、怪しまれないようにと炉に火をいれて、ハンマーを打ち鳴らしておき、しばらくして火がおさまったのを確認してから、エドガーの店のもとへと3本の西洋剣を携えて歩いて行った。

ガーランドの町の朝は早く、開店準備をする人が既にちらほらと見えてとれる。

「すみませーん。エドガーさんはおられますかー？」

エドガーの店へ着き、準備をしている少し年上に見える従業員の方にエドガーさんの場所を聞くと、店の奥で品物を並べているエドガーさんのもとへと案内される。

「おはようございます、エドガーさん。昨日さっそく剣を3本ほど打ってきたんですけど見てもらえませんか？」

「おう、…おはようソウスケ。ん…剣打ってきたって？どれ、見せてみな…。」

エドガーはいくらか元気に欠ける声音だったが、昨日は飲んでいたり、それとも朝に弱いかなだろうと思いい気に留めなかった。

「ほう…。こいつはすげえな。鉄の純度がこくら辺じゃみないほど

に高いな。コレはソウスケが精製したのか？」

近くの棚から取り出した小さな金槌みたいなもので刀を軽く叩いて音を聞いていたエドガーが顔をあげ、驚きとともにソウスケを見る。

「ええ… ちょっと部外秘なので教えられないんですが、自分の住んでいた処に伝わる独自の精製法でしていて、高い純度で精製できるんです。」

聡介はとっさについた出まかせにしてはつじつまが合うようにうまく誤魔化せたなあ、と感じながら笑顔を顔に浮かべて言った。

「ふむ… そうか、残念だが仕方ない…。いや、それにしてもコレはいい剣だな。俺も儲けは必要だし…… そうだな、1本500ギルでどうだ？」

「分かりました。その値段でお願いします。」

そういうとエドガーはカウンターらしきところの裏にいき、手に1500ギルを持ってきて聡介の剣3本と交換した。

「ああそれと鞘と柄は、今回は俺がつくって合わせておくが、今度から自分でやってくれば、買い取りの値段をもう少し上げれるからな。じゃあそろそろ店も忙しくなるから、悪いが俺はひっこむぞ。」

と周りの商品や、廃材をみていた聡介に告げて店の奥へと歩いていく。

「あの！もし捨てるならこの廃材もらっていてもいいですか！？」

奥へと去るエドガーに、大きくなり始めた町の喧騒に負けないように、声を張り上げて言う。

ああ、好きにもっていきーと適当な返事を返しつつ、エドガーは完全に店の奥へと姿を消した。

あとに残った聡介が大量の鉄くずが入った木箱を抱えようとすると、聡介よりも5歳ほど年上に見える従業員の一人がからかうように笑いながら、君じゃおもくてもてないぞーっと言ったが、聡介がムツとして黙って持ち上げて帰るのを見ると、ソレを啞然とした顔で見ている。

「おいおい…嘘だろ？大の大人が3人でようやく持ち上げて運ぶような重さだぞ…。」

聡介は意に介さず、黙って自分の店へと木箱を抱えて歩いて帰って行った。

「さてと…、この世界がどれほどの治安か分からないけど、防犯に徹するに越したことはないよね…。それに練成をみられると色々面倒な事になりそうだし…。」

もって帰ってきた鉄クズと自分の目の前にある工房へと続く扉を交互に見て、聡介は一人呟いた。

目の前にある扉は、確かに鉄製ではあるが、何度も衝撃を加えてしまえば外れてしまいそうなぐらいの強度にみえる。

盗人どころか強盗が来てしまえば、この扉はいとも簡単に破られてしまうだろうことが容易に想像できる。

嫌な想像をした聡介は、ぶるり…と体を震わせてから、鉄クズを扉の前に持っていき、そこで掌を重ねて練成を開始する。

バチバチと音を立てながら、扉が分厚い鉄の扉へと変わっていく光景を、何度見てもキレイな光だなあと思いつつ、イメージを保っている、次第に光がおさまり、鉄製の分厚い扉が、工房への道を遮る重厚な文字通りの鉄壁となって立ちふさがっていた。

「うん、これなら大丈夫かな？」

確認のためにタツクルをかましてみても、扉はビクともせず、逆に聡介の肩の方が鈍い痛みを発するだけで扉にはなんら変わりは見られなかった。

「イタタタタ…ちょっと強くぶつけすぎたかな…」

鈍い痛みを発し続ける肩をさすりながら扉の出来栄に満足するが、用心を重ねて鍵も練成して扉に取り付けられるようにしておく。

ひとまずやることなくなった聡介だが、そういえば材料の補給はこまめにおこななければ…と思い立ち、冒険者ギルドへと材料の補給は冒険者ギルドに依頼すればいいとエドガーに言われていた。出かけた。

「依頼をしにきたのですが、手続きはどうすればいいんでしょうか？」

冒険者ギルドにやってきた聡介は、受付で素晴らしい営業スマイルを浮かべるお姉さんに話しかけることにした。

「御仕事のご依頼ですね。では、あちらの机でこの用紙に依頼内容

と、報酬、注意事項、依頼受諾場所を指定して書いてきてください。

「

お姉さんから、お姉さんが机の下から取り出した用紙を受け取り  
この間も営業スマイルはくずれない　言われたとおりに机の上  
で内容を記入していく。

依頼内容：　鉄クズ・鉄鉱石の採集　採掘場所問わず

報　　酬：50～100ギル

受諾場所：　ガーランド4丁目鍛冶屋にて

注意事項：　量が多ければ上乗せしますが、質にもよります。

「こんなもんかな？よし、お姉さんに見せに行こう。」

書き終えてペン　インクを使うタイプだった　を机に置き、紙  
なんと羊皮紙だった　をお姉さんへと手渡す。

「はい、たしかにお預かりしました。依頼内容は間違いありません  
ね？…では商工ギルドカードの提示をお願いします。」

確認されてうなずくと、エドガーより渡されていた商工ギルドカー  
ドを、持ってきたシヨルダーバッグから取り出しお姉さんに渡すと、

しばらくして確認が済んだのかギルドカードを返されたので、シヨルダーバッグの中に大切にしまい込んだ。

「御仕事のご依頼たしかに承りました。それではまたのご利用をお待ちしております。」

依頼が完了　最後まで営業スマイルは完璧だった　すると、冒険者ギルドにいても意味が無いので、カラッと晴れた気持ちのいい日差しの中を歩いて帰る。

何事もなく店まで帰ると工房に入り、残りの鉄クズを集めて練成するため工房の片隅にまとめて置く。

いざ練成開始！とばかりに首を回して骨をコキコキと鳴らし、手を重ねようとすると、店先から男のものだろう呼び声が聞こえてくる。

「うーん…出鼻をくじかれちゃったな…。まあいいや。今行きますー！ー！」

表に聞こえるようにすこし声を張り上げながら小走りで店先まで駆けっていく。

「依頼を受けにきた方ですかー……って、あれ！？あなた達は…。」



店の扉を開けながら言いつつ、目線を上へとあげるとソコにはこの世界に来てから初めて出会った冒険者らしき3人組が同じくビックリとした様子で立っていた。

003 工房と依頼 誤字修正&文章一部改定(後書き)

5419文字でございます。それにしてもビックリしました…。

既にお気に入り登録数が17件も…期待されてるようで嬉しいのですが、期待にそえるかどうか心配でございます。

総合評価も34PTと好評価？をしていただき恐縮しております。

…今回は本格的に武器を創ります。名前付きなどの剣はまだ登場してきませんが、架空上や、伝説上の金属といったものは数個ほどできます。

次回もお楽しみに！！

004 再会と鍛冶 誤字修正（前書き）

訂正… っ っていうかつけ加えました。

最後の『ベッドを2階まで運んでもらい』を『ベッドを2階の六畳の部屋まで運んでもらい』にしました。たびたび申し訳ないです…

004 再会と鍛冶 誤字修正

004 再開と鍛冶

「アンタ確か森の中でゴリイーと戦ってたときに会った奴か？」

「ねえジョージ？この人誰？知り合いなの？」

聡介の目の前に立つ3人は確かにあの森の中で出会った冒険者の3人組だった。

しかし、面識があるのは実際に顔を見た男3人同士だけで、そのとき重症を負って地面に倒れ臥していた女性と聡介の面識がないのは無理からぬことだった。

「あのあと、君も無事に森から出ることができたんだね。でも、驚いたなあ。君は鍛冶屋だったんだね。あのときは焦っていたから気づかなかったんだ、ゴメンね。」

「ちょっとジャック！アンタまで無視しないで！どういふことが説明してよ！」

女性はちよつと憤慨したように頬を膨らませながら、ジャックと呼ばれた青い髪の男のほうを向いて言った。

「ああ、そついやエミリーはぶっ倒れていたからわからないよな。えーっと、こつちの人はお前が倒れてたときに偶然出くわしたんだよ。いやあ、しかしアンタも無事で良かった！」

「へえー、そうなんだ…。まあこれから依頼を受けるんだし自己紹介でもしておくわね。私の名前はエミリー・エリスよ。武器は片手剣を基本的に使うけど、ナイフとかも使えるわよ。ああそうそう、下級だけど魔法も一応使えるわ、ヨロシクね。」

「んじゃ、次は俺だな。俺の名はジョージ・ジョージ・アルフレッドだ。武器はだいたい大剣しか使わないな。小さい武器はリーチが短くて使いづらいからな。それと、魔法は使わん。小難しいのは苦手だな。」

「僕はジャック・バロウズ。武器は…ん…基本的には片手剣かな…まあコレと決まった武器しかつかわないわけじゃないから何でも使えるよー。ヨロシクね。」

最初に自己紹介したエミリーは、身長160cmぐらいの背丈で、活発そうな顔立ちにオレンジ色のショートヘアがとてもよく似合う女の子で、冒険者の割には肌の色は白いほうで、女の子らしさを感じられる。余談だが聡介はこのとき、肌の手入れしてるのかな？と思っていた。キレイな装飾が施されている軽そうな防具を着ていた。

その次に自己紹介したジョージ・アルフレッドは、190cmほどの高身長を持ち、くすんだ茶髪の短髪。先頭に邪魔にならないように考えてだろう。がよく似合う男で、肌は浅黒く日焼けしていてその肌についたいくつもの傷が彼を冒険者なのだと物語っていた。

ジョージはエミリーとは違い実用性重視の無骨な防具を着込んでいたが彼にはソレがよく似合っていてカッコよく感じられた。

最後のジャック・バロウズは175cmほどの平均男性ぐらいの身長で、深い青色の髪を目の下あたりまで伸ばしていて、肌は滑らかな肌色だった。

ジャックの防具は動きやすさを重視したタイプのものなのだろうか、胸や急所をまもる以外は装甲の薄くなったものを着用していた。

3人の自己紹介を聞きながら格好をみていた聡介は自分が自己紹介をする順番になったことに気づき口を開く。

「えーっと、僕の名前はソウスケ・カミオです。遠くの田舎から出稼ぎにこの町に来ました。名前がちょっと変わっているのはそのせいです。しばらくしたらここのお店で商売するつもりなので何か御用があればその時はぜひ立ち寄ってくださいね。」

当たり障りのない自己紹介を返した聡介は、再度口を開く。

「それにしても驚きました。エミリーさんはもう怪我は大丈夫なんですか？かなりの大怪我に見えた気がしたんですが…。」

「ええ大丈夫よ。あたった範囲が広がって血が多く出てるように見えただけだから今は直してもらったし…ほら、このとおり！」

そう言ったエミリーは自分のわき腹の部分の服をまくりあげて負傷箇所だった部分を見せて聡介に無事を確認させる。

無論女性経験が少ない聡介がいきなり素肌をみせられて赤面しないはずがなく、すぐにその赤くなった顔を背ける。

しかし、そんなことを気にしなかったエミリーはさっさと服を元に戻っていて、タイミングを見計らったジョージが聡介に話しかける。

「まあ話がひと段落ついたところで、この依頼の話にうつりたいんだが いいか？」

「あ、うん、依頼の話だね。」

いい具合に話を変えてくれたジョージに心の中で感謝しつつ表情を元に戻して返答する。

「依頼は鉄くずや、鉄鉱石の採取でよかったよな？」

「うん、何か鍛冶に使えるようなものがあつたらそれも買い取るけど、とりあえずはそれらを持ってきて。」

依頼の確認を終えたジョージは荷物を抱えなおす。

「了解。んじゃいくぞー、ジャック、ミリアー。」

「はい、じゃあソウスケは待っててね。」

「では、いってきます。」

と言いつつ、背を向けて町の外のほうへと歩き始める3人組を見送りながら聡介は、商売する…と自分で言った店を見上げる。

「あつ…看板が無いや…。」

聡介は、店の片隅に放られていた剣とハンマーが交差した板を錬金術でキレイにしてから持ってきて吊るし、店の扉に開店準備中と書いた木の板を引っ掛けておいた。

工房へと戻ってきた聡介は炉の中にある黒い木炭を見て、錬金術でコレをダイヤモンドに変えられないだろうか考える。

どちらも同じ炭素から出来ているものなので無理ではないだろうが、簡単に出来るのだろうかと不安に思いながらも一欠けらの木炭を指で摘みあげる。

指を炭で黒くさせる木炭を3秒ほど見つめてから、目をつむり頭の



中でダイヤをイメージしながら指先に力をこめる。

バチバチという音は直ぐに止み、その静けさが練成が終わったことを聡介へと伝える。

目を開けた聡介の前にあるのは、この世界に来る前に見た親が嵌めていた指輪のダイヤと同じ形、同じ輝き、同じ大きさで聡介の目に光を照り返していた。

握れば硬く、とがった先端部分が指にめり込み…少し痛い。

その痛みはもしかしたら、異世界に来て初めて家族のことを思い出した聡介の心の痛みと同じだったのかもしれない。

いつまでも感傷に浸っていてもしょうがないと気持ちを切り替えた聡介は目の前のダイヤから、その奥へと転がる木炭へと視線を移す。目に映った木炭を数本つかんだ聡介は先ほどと同じようにして、先ほどよりもはるかに大きな光輝くダイヤの塊を作り出す。

出来上がったダイヤの塊をつかむと再度練成するために力を込める。バチバチという音と電気を発しながら姿を変えるダイヤはその姿を次第に細長く変えていく。

光が止むと、剣先から柄までもがすべてダイヤで作られた光り輝く透明なダイヤモンドの短剣が聡介の手に握られていた。

「よし！ダイヤの短剣ができたぞ！」

喜ぶ聡介がダイヤの短剣を試しに1度振ってみると、柄に何も巻かれていない短剣は聡介の手から滑り落ちて硬い工房の床へと一直線に落下する。

空中でつかみ直すこともできずに床へと勢いよくたたき付けられたダイヤの短剣は粉々に砕け散ってしまった。

「ああ…しまった…。そういえばダイヤは硬いけど衝撃には弱いんだっけ…。」

聡介は、そういえば中学の科学のときに先生がそんなことを言っていたという事を割ってしまってから気づいた。

それでも、このままダイヤの使用を諦めるというのは何故か悔しい気がしたので今度からは剣の装飾用として使うことに決めた。

工房の中の片づけをしてから店に出てしばらく窓を開けて空気の入れ替えをしていると大きな袋を背負ったジョージを見つけた。

遠くだと人が邪魔になって見えなかったが、ある程度まで近づくとジャックもエミリーも大きい袋を持って歩いていることがわかる。

だがやはりジョージは力があるのだろう、ほかの二人とは確実に大ききの違う大きな袋を背負っていた。

だが、顔は笑ってはいるが汗をかいてるため多少は無理をしているのだろう。

そんなジョージは聡介の姿を見つけると足早にやってきて店内の力ウンター前で荷物を降ろすと、疲れたー！と言って床に座り込んだ。すぐにジャックもエミリーも入ってきて、手に持っていた荷物をジョージが置いた荷物の横にそれぞれ置いた。

「おつかれさま。ちょっと見るから待っててね。」

そついうと聡介は袋を一つずつ順番に開けていき、中の大量の黒光りする鉄鉱石や、穴が空いたりして使えなくなっただろう鎧や、剣、盾などの鉄くずの様子を見ていく。

「その鉄鉱石は町から少し行っただころの洞窟の中で当たりの場所を見つけて一気に大量に掘ってとったんだ。んで、そっちの鉄クズはだいぶ前の遺跡の前に大量に投げ捨てられていたからもってきたんだ。なんであんな所にこれだけの量の鎧や剣とかがあったのかは分からんが呪いとかそんなのは無いみたいだから持ってきたぞ。」

と、床に座り込んで休憩をとっていたジョージが取ってきた話をした。

「へえ……。それにしても洞窟でそんなに取れるところがあつたんだ。鎧とかもわざわざありがとね。」

「いやいや、俺らも仕事だからな。仕事分はしてくるさ。」

ジョージと軽く笑ってからしばらく無言で袋の中を覗き込んでいた聡介だが、3つ目の袋を見終わると顔を上げた。

「質もいいみたいだし、量も予想よりもだいぶあるから上限から50ギル上乘せしておくね。……………はい、報酬の150ギルだよ。」

上乘せすることを告げた聡介はカウンターのところに置いてある鉄製の箱をあけて中から100ギル硬貨1枚と10ギル硬貨5枚を取り出して近くにいたエミリーに手渡す。

思っていたよりも多くの報酬を得られたことに満足した顔のエミリーは花のような笑顔。全くの無自覚である。を浮かべた。

「こんなにもありがとう！実は私の復帰も兼ねていたから報酬が安くて楽な仕事にしてたの。ありがとね、ソウスケ！」

礼を言うと聡介は真っ赤。決して恋ではない。になったがエミリーは気にせずに、後ろを振り返ると、ジャックとジョージにお金を3分の1ずつ手渡した。

予想よりも多くの金額を受け取った2人はそれぞれに聡介へとお礼を言つと、今日はちよつと疲れたからと言ひ店を出ていくことにした。

「今日はありがとうー！時間が空いていたらまたお願いするねー！」

出ていく3人に手を振りながら見送つた聡介は、気持ちのイイ人達だったなあ、またお願いできたらいいなあ、と思いながら店へと戻るのだった。

ジョージ達が帰って行くのを見送つたあと、聡介は一人で工房へとゴツゴツとした大量の鉄鉱石と鉄クズを運び込んでいた。

ここでもやはり驚異的な力で持ち上げてすぐに運び終えてしまったが、本来なら この世界の人間、或いはこの世界にくるまえの聡介なら 先ほどかけた時間のさらに何倍もかかつていたことだろう。

うーん、いくらなんでも補正がすごすぎる…と思う聡介だが不都合なことが起きるわけではないのでほうっておくことにした。

「よし、今日は自分専用の武器と防具を創ってみよう。」

そういう聡介が考え付いたのは元の世界のゲームや小説、漫画などの中に出てきた架空の、または伝説上の金属で自分の装備を創るということだった。

存在がしているかどうか分からないものを創れるのか？という疑問はあったが、魔法が存在していたぐらいなのだからそういうモノが有ってもおかしくはないと考えることにした。

「えーっと、なにが有ったかな…。…オリハルコンは…語源が確か *orochalkos*…*oros* が山で、*chalkos* が銅だから訳すと山の銅のはずだから、材料は銅をなんとかすればいいはず…有るかどうかわからないけど今度エドガーさんのところに行ってみるかな…。」

オリハルコンは様々な説が有り、真鍮、青銅、赤銅、黄銅、青銅、あるいは銅そのものと解釈されることがあり真意は定かではない。

しかし、そのどれにも銅が関係することは間違い無いので銅を研究すればたどり着くだろう、或いは魔法を組み合わせることで出来上がるのかもしれない。

オリハルコンの武器が出来上がれば、物理的にも魔法的にも絶対に傷つくことのない世界最強の武器となることは間違い無いだろうと思われる。

「ん…あとは何があったっけ？ アダマンタイトならすぐに作れるかも…もし、盗まれてもオリハルコンなら壊せるし…うん、販売用としてはコレを最高級のモノにしよう。武器として量産しても問題ないのはダマスカス鋼ぐらいかな？アレって製法は失われてるけど一応作れるレベルのだしたぶん大丈夫だよな…。ああ…でも、刀もつくらなくちゃ…日本人として生まれたからには刀は創るべきだよな…。ん…あとはまた思いついた時でいいかな。一気に作ってもつまらないし…」

とりあえずの方針を決めた聡介は創り方が分かっている日本刀をはじめに創ることにした。

運び込んだ鉄鉱石を2組に分けて置き、練成によって、片方を不純物を無くした玉鋼にし、もう片方を炭素の含有量が少ない軟鋼との2つを精製する。

次に練成によって玉鋼を軟鋼で挟み込み、出来上がった日本刀をイメージしながら刀身を作り上げていく。

最後に刃の表面の摩擦抵抗を減らし、波紋をイメージしながら仕上げる。

この時に、安い価格で売るために僅かに切れ味をおとしておく。

これで切れ味を操作することにより、安い価格で大量に売れる普通の刀と、生産数は少ないが高い価格で売れる最高の刀とに分けることができる。

今回は試作なので、銘を入れない普通の刀と、銘を入れる最高の刀

の2本だけをつくることにしておく。

銘入りの刀の方には 小烏丸 という名前をつけて黒い柄と黒い鍔、黒い鞘をつけて一種の美術品としても完成させる。

普通の刀のほうには適当に柄と鍔、鞘を合わせて完成させる。

見た目的にも値段の差を感じられる2つの刀を見てこれでお客も納得してくれるだろうと思って、完成した2つの刀を工房の壁に立て掛ける。

まあ変な剣って見られて最初は売れないだろうなあと思いつが、良さがつたわって人気商品になるといいなあと願う。

そして、工房の中央へと戻ってきた聡介は次にダマスカス鋼をつくるために大量の鉄を練成していく。

ダマスカス鋼は、古代インドで生み出されたもので、ソレはドロドロになるまでに溶けた鉄を長い時間をかけて、るつばでゆつくりと冷やすことによって凝固するとき内部結晶作用で出来るものである。

しかし、そんな時間は聡介にはないので錬金術で強引に作用を起こして、ダマスカス鋼の塊をつくりあげる。

出来上がったダマスカス鋼の模様を崩さないように慎重に錬金術によって成形しながら10本ほどダマスカス鋼の剣をつくり上げる。

剣が出来上がると半分を売り物として並べるために5本を残して、残りを倉庫へとしまい込む。



剣を倉庫へとしまいこみ、重い鉄製の扉を閉めると、汗が額を流れてくるのを感じて腕をもちあげて服で流れてくる汗をぬぐう。

「ちょっとやりすぎたかな……。今日はこの辺にしておこう……。アダムンタイトはまた今度でいいし……。」

そういうと聡介は疲れを感じる体をひっぱって、工房と店に施錠をし、2階の4畳の部屋へと入ると布団も何もないのを思い出したので、自分の服を練成して寝袋代わりにして死んだように眠りこけるのであった。

「あ、あれ？動けない！なんで!？」

朝起きた聡介はパニックになっていた。

というのも昨日自分の服で寝袋を作って寝たのを忘れていて、身動きを取れない状態にあることに気付いたからだ。

騒いだからか脳が刺激され、だんだんと鮮明になってくる記憶：聡介はようやく昨日自分が自分でこの状態にしたんだということに気づき安堵の息を吐きながら練成をして寝袋から脱出した。

「ああ…ビックリした…。誰かに襲われたのかと思った…。」

一人眩きながら1階におりると窓から眩しい太陽がサンサンと差し込んできていた。

太陽はすでに明るく、午前9時～10時ぐらいだろうと思われる位置に昇っていて、窓へと近づいた聡介の眠たそうな顔に眩しい光を当てた。

「うーん、それにしても今日はベッドを作ろう…。体の節々がいたいや…。」

裏庭に出て体を洗うために水浴びをして、服をバシャバシャと水で洗うと錬金術で濡れた服の水分を水蒸気にして服を一瞬にして乾燥させた。

身支度を整えた聡介は布と、綿、木材を買うために市場へと温かい日差しの中、歩いて出かけて行った。

市場は活気があり、商品をうるための声が常に飛び交っている。

人でごった返す市場の中を歩いて行くとたくさんの布を天井から吊り下げた店が左手に見えてくる。

店の中へと入るとベージュとワインレッドのきれいな布があり、ど

ちらも気に行つたので購入することにした。

その布屋から出ると左隣りに様々な綿を扱つ店があつたので、そのまま中へと入る。

名前もよくわからない動物や、植物の綿がたくさんあつたが、その中でも手触りがいいものを選んで買つとかなり荷物が膨れてしまった。

一旦帰るかなあ…と考えたが重さは特に感じられなかったので、そのまま木材を買つことにした。

市場から離れ、少し郊外に近づくとも木材屋と家具屋が一緒になつたような大きな店へとたどりつく。

なかに入ると色々なイスや、机、棚があつたので聡介がみていると店主らしき人が声をかけてきた。

「やあこの店を経営してるマイルズだよ。それだけの大荷物を抱えているという事は引越しか何かで最近ガーランドに来たクチかい？」

「ええ、そうなんですよ。昨晚寝ようとしたらベッドがなくて床で寝たんですが体が痛くて…。ほかに何かあれば買おうかとおもっているんですが。」

「そうか、それは災難だったね。ベッドなら型が古くなつたのが安くつれるけどそれにするかい？」

「それでおねがいします。あと、イスと机が小さいのが有れば欲しいのですが。」

「イスと机か。ちょっとまっついていてくれないかな？奥を見てくるよ。」

聡介にそう言ったマイルズは店の奥へと走り去って行った。

しばらくして戻ってきたマイルズの手には何もなかった。

「申し訳ない。あいにく売り切れだったみたいだ。今度作っておくから時間が空いた時にでも又来てください。ベッドの方は重いのでコチラで馬車で運びますよ。案内してもらったために馬車に乗ってもらいますが大丈夫ですか？」

おもいがけず樂をできることになった聡介は、このサービスをありがたく思いながら、馬車に揺られつつ店まで帰るのだった。

家に着いた聡介は、ベッドを2階の六畳の部屋まで運んでもらい組み立ててもらってから綿とシーツをかぶせ　今回のシーツの色はワインレッド　ベッドを完成させた。

その日の聡介は、完成したベッドで異世界についてから初めてベッドのふかふかに幸せを感じつつ寝るのであった。

## 004 再会と鍛冶 誤字修正（後書き）

7429文字です。ちょっと多くなりました@@；  
調節も大変ですね。

今は一気に更新していますが有る程度話数掛けるとゆっくり更新にかえるつもりです。

それまではなるべく早く更新していくので応援よろしくお願いします。

## 005 魔鉱石と魔剣

### 005 魔鉱石と魔剣

朝になりふかふかのベッドの中で朝の柔らかな太陽の光を感じた聡介の意識は夢の世界から現実の世界へと戻ってくる。

ふあゝっと大きな欠伸をすると未だ温かさの残るベッドから体を起して1階へと降りていく。

1階へ降りた聡介は工房を通り抜け、裏庭へやってくると水を浴びて身支度を整える。

水を浴びることでさっぱりとし、意識もしつかりと覚醒した聡介は、本日は何をしようかと思案する。

とりあえず工房へと戻った聡介が倉庫の中をみるとダマスカス鋼製の剣が10本と、刀が2本、だいぶ少なくなった鉄のインゴットが置かれている光景が目に入った。

昨日の練成で鉄を大量に消費したことに気付いた聡介は冒険者ギルドへ行き採集の依頼をすることに決めた。

商工ギルドカードを鞆へと放り込み店の戸締りをしっかりと確認してから冒険者ギルドがある方へと歩いていく。

まわりには買物や、商売の人で賑わっていて元の世界では感じられなかった、人々のいきいきとした様子がみてとれる。

そんな光景を見ながら歩いてた聡介に、まだ幼い女の子が走ってきて勢いよくぶつかってしまった。

「あつ、ごめんね。大丈夫だった？」

後ろへこけそうになる女の子の体を抱えて起こすと女の子は、おにいちちゃんありがとー、今度から気をつけるね！と言ってさっきと同じように聡介がきた方向へとかけていく。

素直な子供に少し癒されながら歩く聡介の目の前に、だんだんと冒険者ギルドの建物が見えてくる。

冒険者ギルドへたどり着いた聡介は扉を開け、多くの冒険者がたむろするギルド内へと足を踏み入れる。

真っ直ぐに商工関係の窓口へといくと前の時に受付にいた完璧な営業スマイルが眩しいお姉さんが今日も受付に立っていた。

「おはようございます。依頼にきたのですが、いいでしょうか？」

「はい、大丈夫ですよ。前回と同じ内容の依頼でしたらすぐに発行することができますが、内容が前回と異なる場合にはもう一度用紙に記入していただくことになります。いかがいたしますか？」

「前回と変わりはないので、お願いします。」

「承りました。では、張り出しておきますね。ありがとございますま

した。」

そついうとお姉さんは席を立ち、冒険者が数人いる掲示板のところへいき依頼所を張り出した。

途中で席にすわっていた男の冒険者数人組が下品な冗談をお姉さんに投げかけていたがお姉さんが営業スマイルを向けると男達は黙り込んでしまった。

完璧な営業スマイルだったが、氷のようなオーラが立ち上っていたのは幻覚か見間違いと信じたい…、怒らせるようなことはしまいと心に誓った聡介であった。

冒険者ギルドから出た聡介は特にすることが無かったので普段よりもゆっくりと店まで帰ったが、そうそうイベントが起ころこともなく無事に店へとたどり着いた。

帰った聡介が店の扉をあけて中へと入り、今日の予定を考えていると袋を抱えた2人組の冒険者が入ってきた。

依頼にしてはまだ承諾もしてないのに袋を抱えた2人組を見て、やけに早いなあと不審に思っていると片方の男が口をひらいた。

「すいません、まだ依頼の確認もしてなくて悪いのですが鉄鉱石を



持つてきました。これにはちょっと理由があつて、実は似たような依頼をしていたのですが突然キャンセルになつてしまつてこれらの鉱石が余つてしまつたんです。なので、依頼を見てきてここまできたんですが、買い取つてもらえませんか？」

そついうと冒険者二人組は袋を聡介の前へと差し出した。

「そつだつたんですか、それは大変でしたね。あの依頼はまだ誰もとつていなかったので買い取らせていただきます。」

二人の言い分になるほどそついうこともあるのか、と納得した聡介は袋の中を覗き込み鉄鉱石を確認していった。

2つ目の袋をあけた聡介の目に映つたのは、鉄鉱石の形をしているがボンヤリとした白い光を放つ謎の物体だつた。

「あの……こつちのはなんでしょう？鉄鉱石じゃないみたいなんですが……。」

「ああ、すいません。そつちのは魔鉱石です。もしよかつたら買い取つてもらえませんか？値段は普通より低くても構わないので。」

「魔鉱石？店を準備し始めたばかりで初めて見るので、すいませんがどういふものか説明していただけますか？」

聡介は魔鉱石ってなんだろう？魔法が何か関係しているのかなあ…  
と思いながら困った顔をしている冒険者へたずねるのであった。

「ああそうなんですか、わかりました。魔鉱石というのはですね。  
文字どおりに魔力が籠った鉱石なんです。基本的には魔力を抽出する  
と後に残るのはタダの石ころなんです。抽出した魔力自体はど  
の属性にも属さないの、どんな武器にも付与することができ、魔  
法武器をつくるときに必要とされるんです。ああもちろん魔力の属  
性は何にでも変化させることが出来るのでどんな属性の武器もつく  
ることができますよ。」

説明を聞いた聡介は自分に魔力を扱える能力が有ったことを思い出し、  
それなら活用しない手はないと考えて買い取することを決める。

「詳しい説明ありがとうございます。ぜひ買い取らせていただきます  
す。それで、報酬なのですがこれぐらいでどうでしょうか？」

買い取りを決めるとカウンターの裏に回り、箱を開けて硬貨を取り  
出し冒険者2人に150ギルを渡す。

2人組の冒険者は喜んで受け取るとそのまま上機嫌で帰って行った。

「よし！昨日はできなかったから今日こそアダマントライトを作ろう！」

2人から魔鉱石を買い取った聡介は昨日疲れて出来なかったアダマントライトの剣を創る、と意気込んでいた。

大量の鉄鉱石を目の前にもってきて練成をするためにそれらの上に手を重ねて置く。

イメージは薄緑色の大剣で、不要な装飾をつけない実用重視の無骨でありながらも力強さを感じさせる剣。

イメージを保ちつつ練成を開始する聡介。

音は既に聞きなれてきたバチバチという音が工房の中に響き渡る。

しばらくして目を開くと、そこには何も変わらないただの鉄塊しかなく、アダマントライトが精製された様子は微塵もない。

「あ、あれ！？……失敗！？なんで！？………そうか…アダマントライトは鉄に見えるけどアレは確か単一元素で構成されるものだった…。だから鉄じゃ反応しないのか…。でも、これじゃあどうやって作るのか分からないし…。困ったなあ…。」

この世界にない元素をどうしようかと困った聡介が、顔をあげると目の前でぼんやりと白い光を放つ魔鉱石が目に入る。

その様はまるで自分を使えと言っているようで、聡介の手は自然と魔鉱石へと延びていた。

「うーん…ただ、分解して配列を変えても意味ないだろうし…この魔鉱石の魔力を加えてみたら新しい元素が創りだせるかも…。可能性は低いかもしれないけど、やってみる価値はあるかも。」

魔鉱石を使うことに決めた聡介は魔鉱石を鉄鉱石の隣へと移動させる。

聡介は魔力を操るすべは知らないが、聡介の手が魔鉱石を直接掴むと掌から冷たい水が流れ込んでくるような感覚がした。

きつとコレが魔力なのだろうと思いつながら、魔鉱石を効率よく使うために魔鉱石の部分とただの石の部分とに分けて、魔鉱石を一つにまとめる。

一つにまとまり巨大になった魔石へと手をふれると先ほどとは比べ物にならないほどの魔力が一気に体の中へと流れ込んでくる。

体から溢れだす限界ギリギリまで魔力を取りこみ、素早く鉄鉱石へ手を重ねて置き練成を開始する。

頭の中では、鉄の原子の中に魔力をねじ込まれた薄緑色の傷つかず刃こばれしない最硬の金属をイメージし、体から溢れだしてしまいそうな魔力を鉄鉱石の上に重ねた掌から鉄鉱石へと放出する。

聡介の体からは余剰魔力があふれ出しその全身を神秘的な白い光で染め上げる。

光を発し続ける聡介はまるで聖書に出てくる聖人のように光り輝き、聡介を見るものがいたならばあまりの神々しさに目を奪われるだろうほどである。

溢れる魔力を体に押しとどめる聡介は歯をくいしばり、集中力をさらにあげて練成し続ける。

バチバチという音は既に変化して高圧電流のごとくバチンツバチンツと弾ける。

その音がようやく止み、練成がおわったことを感じると、聡介のひざがガクンと崩れて片膝をつくことになった。

「ハハハ…これは…疲れる…なあ…。もうちょっと…慣れなきゃ厳しいなあ…。」

荒くなった息を徐々に整え、溢れる汗を袖につかってぬぐうと予想外の疲労に、聡介は魔力を制御する技を身につけることを固く誓った。

「これで出来ていなかったら…考えたくもないなあ…。」

そういうと膝に力を込めて立ち上がり出来ているであろう剣へと目

を動かす。

そこには薄緑色の輝きを放つ、刃渡り95cm全長125cmの巨大な剣がその威容を誇っていた。

余計な装飾をつけないその剣は、使われる時を今や遅しと待ち構えて牙を剥きだす猛獣の姿を彷彿とさせる。

本物の剣だけが放つ迫力に聡介は一瞬気押されるが、その剣を両手にもつとすぐにざわざわと心がざわついた。

今すぐ斬りつけたい。

ふと疑問に思い、何を？と思った瞬間、聡介はあわててその剣を手放した。

聡介は知らずのうちに剣の持つ暴力性という魅力に引き込まれかけていたことを感じる。

剣としての本質までも完成させられた剣は人を魅了する魔剣となりうることを聡介が身を持って知った瞬間だった。

聡介はこの剣は扱う人によってはあまりにも危険すぎると思い、普段は飾るだけで、売る時にはその人の見極めをしなければならないと心に刻み込むとその剣を倉庫へしまうのだった。

「ふう…。ちょっと引き込まれそうだった…。剣を創る時は気をつけなくちゃいけないな…。ちょっと休むことにしようかな。」

倉庫へ剣を片づけ、工房から出てきた聡介はベッドへと戻り一休みするのだった。

1時間ほど休憩すると聡介はすっかり元気になっていた。

かといって、無理をするつもりはなかった聡介はそれからしばらくしてから工房へと戻ることにするのだった。

工房へ戻ると聡介はそろそろ開店にむけて品数を増やさなければいけないことに気づく。

売りが上がないとローンも返せないし、生活も出来なくなるというのは実に切実な問題だった。

手持ちのお金にはまだいくらか余裕があるが永遠にそれが有るわけではない。

そう決めた聡介は一番数を売ることが出来るだろう普通の鉄剣 もちろん不純物が少ないので鉄剣としては一級品 と、一般的な鉄製の防具 これも耐久力はかなり高い を製造することに決めた。

「うーん、これだけ有れば十分かな？」

そういつつ20本目となる鉄剣をつくり終わると聡介はふうつと一息ついた。

それらを含め全ての武器と防具を倉庫へと片づけ、商品の配置を考えるために店舗部分に移動する。

「…やっぱりちょっと少ないなあ…。」

店内の商品の配置を考えた聡介だが、どうしても一角が空いてしまうことに悩み、どうするべきか考え込んでいた。

「うーん…防具も武器も置く場所はきまつてるし、このスペースじやああまり置けないし…。」

キャツキヤと表の通りで話し合う女の子たちの声に、ふと顔をあげた聡介の目に映ったのは斜向かいに店を構える雑貨屋だった。

雑貨屋の前には木でつくられたアクセサリーを見ている女の子たちがいて、それをなんとなく眺めていた聡介の頭にうかんだのはアクセサリーをつくるということだった。

アクセサリーにしようと思った聡介は、店から出て　もちろん鍵はした　いき、染料屋と布屋にいった。

様々な色の塗料と布を買った聡介は、店へともどり工房に入ると、



鉄を錬金術で成形して様々なデザインをつくり、それに酸化しないように塗料をかぶせると、布から練成した紐にソレらを通して、ネックレスを20点ほど作り上げた。

それだけではあと少しスペースを埋めるのには多少たりなかったの。で今度は鉄製のバングルを10点ほど作り、染料を上からかぶせて様々な色のバングルを作っていた。

仕上げたネックレス20点と、バングル10点を飾り付けると、悩んでいたスペースがきれいに無くなり聡介は満足した様子だった。

それから工房へ戻り、魔鉱石から魔術師のための魔力回復の魔石の玉を5個ほどつくとカウンターのの上に置いた。

ぼんやりとした白い光を放つ魔石の玉を見て、見た目的にもインテリアっぽくていいと思った聡介はこれまた満足そうに笑顔をうかべるのだった。

これでやっと開店準備が整った聡介は商品を工房の倉庫の中へとしまいこみ、新装開店のために掃除を始めることにしようとおウキを手にした。

遮るものが無い店内で練成を行えば光が外にもれて錬金術をつかっているのがばれるため、大変だなあと汗を垂らして感じつつもオウキを手に掃除に集中する聡介であった。

掃除が終わると日が落ちてすっかり暗くなっていたので、聡介は前にエドガー達と食べた酒場らしきところで本日の晩御飯をとることに決めた。

酒場へと向かっているとエドガーが店の片づけをしていたので、声をかけて食事に誘うとエドガーは快い返事を返した。

2人が酒場につくと前回と同じ席へ　どうやらココはエドガーの定位置らしい　と案内され、適当に食事をたのんだ。

「ソウスケは今日は機嫌がよさそうだな、何かあったのか？」

そういえばまだ言っていなかったと思った聡介は明日新装開店をすることをエドガーへつけた。

「実は明日、やっと新装開店するんです。それで今日は気分がよくて…。これもエドガーさんが右も左もよく分らなかった僕を色々御世話してくれたおかげです。」

「いや、人生の先輩として少し手伝っただけだ。ここまで来れたのはソウスケ自身の力だ。俺はなんもしてねえよ。…それにしても、ついに新装開店か…。良かったな、ソウスケ！」

エドガーは頭をかきながらそうは言ったが照れていることは少し赤くなった顔を見ればすぐに分かった。

「おい、お前らぁ！聞いたか！？明日ソウスケの店が新装開店だよ！せっかくの新装開店だ、今日は全員で祝いの宴会にしよう！」

「おお、その坊主がお前が話してた新人か！よかったな、坊主！」

「ふふ、オープンおめでとう、ソウスケくん。お姉さん応援してるわよー。」

「ふおおふお、君がソウスケ君じゃったのか。わしも応援しとるからのう。」

「あらやだ！かつこいいわねー、おばさんのお店きたら安くしてあげるからねえ！」

「経営しつかりしろよー！」

「今日はせっかくのお祝いだ、金はいらねえから明日に備えてたらふく食っていきなあ！」

エドガーが突然声を張り上げるとソレに答えるようにして店内にいたほとんどの人が口ぐちにお祝いの言葉をかけてきた。

どうやらこの酒場にいるのはエドガーと深い仲の人ばかりらしく、エドガーとおなじように面倒見がよく温かみのある人ばかりだった。色々な人から祝いの言葉をかけられていると再度エドガーに話しかけられた。

「ワハハハハ！こころで商売する奴らはこんな奴らばかりだから安心して営業すりゃいい！それにこころの奴らは助け合ったりして商売してるからソウスケも困ったことがあつたら誰にでもいえ！きつとなんとかなる！だからガンバレ！」

エドガーさんの応援の言葉に胸が熱くなるがソレを抑え込み、周りの騒ぎに消えないように大声で返事をする。

「僕も！エドガーさんの店に負けないぐらいがんばるんで見ていてください！絶対追いつきますから！！！」

「ワツハツハツハ！その意気だ！！今日は飲むぞー！！！」

威勢のいい返事を返したソウスケに満足したエドガーは豪快に笑いながら酒を掲げて一気に飲み干した。

騒がしい晩餐はソウスケが明日のために…と言って途中で帰ってからも続き、笑い声が絶えることはなかった。

## 005 魔鉱石と魔剣（後書き）

6324字でございます。ついに累計PVが1万をこえました  
書き手としてはこれほど嬉しいことはないです。

ユニーク数ももうすぐ2000に到達しそうな感じなのでとても嬉  
しく思います。

でも、その分期待にこたえなきゃという重圧は強くなる一方で…。  
これからも皆様に満足していただける作品がかけられたらいいと思  
います。

次回から商売が始まります。お楽しみに！

新装開店当日の朝を迎えた聡介は、緊張のせいかもしれない。少し早い目覚めをベッドの上で感じていた。

いつもよりも早い目覚めになってしまった聡介はいつもどおり裏庭へ行くと、いつもよりは丁寧に身支度を整える。

身支度を整えた聡介がふと空を見上げると、朝もやがかかった太陽がやわらかな光をガーランドの町へ投げかけながら空の低い位置で顔をだしていた。

眠気が微妙に抜けない聡介だが、頬を手で軽く叩いて気合を入れると眠気は吹っ飛んで行った。

裏庭から工房へと戻った聡介は倉庫の中から商品を取り出してならべていく。

アダマントタイトの剣は名前を「ルシフェリオン」として棚の中でも一番見栄えのする場所に置いて、頑丈に鍵をかけたケースの中に入れて勝手に取りだせないようにしておく。

ちなみに値段は付けずに、鍛冶屋としての技量を見せる飾り剣のように見せかけて、一般の人では価値が分からないようにして価値が分かるか試すことを、この剣を人に売るための第一の条件にした。

黒尽くめの刀の「小烏丸」は、頑丈に鍵をかけてケースに入れるが

今度はちゃんと、5000ギルと小さな紙に書いて売り物であることをわかるようにしておく。

そのすぐ下に「刀シリーズ」1本1000ギル 順次生産予定と書いた紙を置いて、無銘の刀を設置するが、これは鍵をかけずに誰でも自分で触って見られるようにしておく。

隣の棚には、倉庫から5本だけ取りだしたダマスカス鋼の剣「ヴィリフィエラ」を10000ギルと書いた紙を傍に置いて、鍵はかけずにガラスケースに収める。

残りの普通の鉄剣はだれでも手に取れるようにビール瓶を入れるケースのような箱に1本ずつ分けて入れていき、その箱に1本700ギルと書いた紙を張り付けておく。

防具類は窓際にまとめて置いて、胸当てなどの軽鎧を600ギル、フルプレートなどの重装備のものを、800ギルと書いた紙を置いておく。

残ったアクセサリ類は、一律15ギルと書いた紙を机の上に置いて、更に机にブレスレットを置き、壁にはネックレスをつるす。

一応開店するだけの準備が整った聡介は最後に店内の点検をしている。

とくに問題がみつからなかった聡介は少しの緊張と大きな期待感を持って新装開店の札を店先にかかげるのであった。

しかし、開店の札を掲げる前から客が列を成すどころか30分しても客が一人も来ないので、聡介は失望と落胆を感じ始めていた。

よく考えなくてもわかることだが、この町には既にエドガーという大手の武器防具屋が店を構えていて今まで多くの客に愛されていることをようやく思い出した。

そのため、人が店内を外を歩きながら覗くということは有っても店内まで入ってくる客はいなかったのである。

カウンターに突っ伏して泣いてしまおうかと半ば本気で考えていた聡介は、唐突に響いた店の扉の開く音にバツと喜びを多分に混ぜた顔をあげた。

「なんだ、この店は新装開店というわりには少し汚れているじゃないか。ふん、あまり期待できそうにはないな……。おい、小僧。店主を呼んできて案内させろ。」

開口一番エラそうに言い放った金持ち風な年上の男は、ずんずんと歩いてきて聡介の目の前で腕を組んで見下しながら仁王立ちをした。絵に描いたような嫌味な金持ち風な男の態度に目を白黒させる聡介だが、すぐに気を取り直して対応をする。

「あ、はい。僕：いえ、私が店主のソウスケ・カミオでございます。」



本日はどのようなものをお探しでしょうか？」

まずまずの対応をできただろうと思う聡介だが、目の前の男はしかめっ面をしたまま口を開く。

「なに？小僧が店主だと……？…ふん、変な店だな。まあいいこの店で一番の剣を出せ。」

一番の剣…と聞き、一瞬だけルシフェリオンにちらりと目線を送るが、すぐにヴィリフィエラの方へと歩いていき、手に持つと男の方へ向き直る。

「当店で最も品質が良いのはこのヴィリフィエラでございます。この剣の独特の模様は、この剣に使用しているダマスカス鋼という金属が持つ独特の模様で、見た目にもデザイン性の高い武器となっております。強度も切れ味も一級品で実際に戦うことになっても高い性能を発揮してくれるだろうという自信があります。切れ味ですが…」

「おい、それよりもあそこにある剣はどうなんだ。値段すらついてないがあれは中々の業物だろう。」

気づいてしまったかとルシフェリオンに視線を送るが、見る目は有るみたいだがこんな自己中心的な男には渡すわけにいかないと思い直して誤魔化すことにする。

「いえ、あれは飾りのものでして売り物ではないのです。申し訳ありませんが、この剣を…」

「ふん…残念だがしかたあるまい。さつさと、さつきの説明の続きをしろ。」

話を再度遮った男はめんどくさそうに説明の続きを促した。

「では…この剣の切れ味ですが、ここに鉄の板がございます。これを今から切って見せるので少々お下がりいただけますか？」

そついいながら近くの棚から鉄の板を取りだしてきた聡介を胡散臭そうに見ながら、それでも男は2歩、3歩と下がって腕を組んで仁王立ちをした。

それでは…と言い、鉄の板を空中へと放りなげと素早くヴィリフィエラを振り上げ鉄の板へと真っ直ぐに振り下ろす。

空中でギンツという金属の擦れる音と共にヴィリフィエラに切り裂かれた鉄の板は、店の床へと落ちるとガインツという鋭い音を立てて床を削りながら数度はねた。

「…ありえん。こんな飾りのような剣が鉄の板を切ったと!? 小僧、貴様何をした!」

「いえ、普通に斬っただけでございます。この通り鉄の板もしつかりと本物を使っています。」

と言いつつ、床を跳ねて足元に転がってきていた鉄の板をもちあげるとコンコンと表面を叩き本物の鉄の板であることを確認させる。

「そうですね。納得できないようでしたらこの鉄の板で試し斬りを試してみますか？」

どうしても納得できないといった表情の男へヴィリフィエラと鉄の板を渡すと、男は本物であるかどうか確認するように鉄の板をさわり、次いで刀身をなでたり叩いたりしてから柄を握り締め、鉄の板を宙へ放り投げると聡介よりもきれいなフォームで軽々と鉄の板を斬り裂いた。

自分が斬った鉄の板の拾い上げ、その切り口と手に握られているヴィリフィエラをしばしの間驚いたように凝視した男はやっと口を開く。

「小僧…貴様、どこでこんなものを…。まあいい、これを買っぞ。いくらだ？」

「10000ギルでございます。」

「剣にしては高い方だが…確かにそれだけの価値はあるだろう。」

よし、銅色札1枚だな、受け取れ。」

一瞬渋ったが、すぐに支払うことを決めた男は懷から銅色札を1枚とりだすと聡介へと無造作に放り投げる。

あわてて銅色札を受け取った聡介は、10000ギルは流石に高すぎるかもと思っていた割にはあまりにあっさりと支払われたことにビックリするのであった。

受け取った銅色札から目線をすぐに上へとあげると既に男は扉を開けて出ていくところで、聡介はあわてて声をかけることになった。

「ありがとうございました！」

最後まで言う前に店外へと男はでてしまったが、初めての商売が一人とはいえ出来たことに興奮する聡介にはそんな些事はどうでもよく思えた。

「やったー！まだ一人だけど主力商品が売れた！これならこれからも売れていきそうだ！」

思わず小躍りしてしまいそんな自分を自覚しながらカウンターへと戻った聡介は、イイ気分のままカウンターへ肘をつき鼻歌を歌うのであった。

しかし営業時間はまだまだ始まったばかりだ。

その後も上機嫌でカウンターでお客を待っていた聡介だが、客が来ないのにその上機嫌が続くことは無く、男が去ってから1時間もするとまたも聡介の顔はくもっていった。

それから、さらに1時間過ぎたころに異変が起きた。

することもなくぼうつと外を眺めていた聡介の耳には、馬がカコツカコツと音を鳴らしながら近づいてくる音が聞こえていたが、どうせどこかの店にいくのだろうと気にもとめなかった。

しかし、聡介の店の前で唐突に止まった馬達から2人の男が下りてくると、足早に店の扉の前までくるとガランガランとベルをならしながら入ってきた。

馬を使ってまで来た2人に何の用事だろうといぶかしむ聡介の目の前まで、装飾のついた鎧をガシャガシャと鳴らしながらきた2人は、未だにぼうつとしている聡介に話しかける。

「君がこの店の店主かな？我らはカーティス殿から君のところで買った剣の話を聞いてきたガールランド守備隊長のものが、カーティス殿に売った剣をみせてくれないか？」

「あの、カーティス殿とは…一体どなたなのでしょう…？」

厳つい恰好をした2人へ恐る恐る質問を投げかける聡介。

「む、知らないのか？…カーティス殿とは、このガーランドを治めるカーティス・フォン・エルメロイ・アーチボルト殿のことだ。朝の早い時間に豪華な服装の人がきただろう？その人がカーティス殿だ。我らはカーティス殿の部屋に警備の報告へと赴いたところ、その剣の話をカーティス殿から聞いたのだ。」

「そうだったのですか。あの方が…。話に出てきていた剣を案内しますので少々お待ちください。」

金持ち風ではなく実際に金持ちだったんだ…と思いながらも、ヴィリフィエラを入れているケースの前まで行き、そこからヴィリフィエラを1本取りだすと2人の前に歩いていく。

「これが話に出てきていた剣…ヴィリフィエラでございます。この剣は…。」

「いや、話は既に聞いている。その切れ味を見せてくれ。」

話を遮られて 本日三度目である 少し残念な聡介だが、気を取り直すと鉄の板をカウンター下から取り出して斬って見せた。

「むう…話には聞いていたがこれほどの切れ味とは…。店主。その剣…ヴィリフィエラといったか…。我らに2本売ってくれ。」

「我らの武器は市販のものだが切れ味が悪くて最近買い換えようとおもっていたのだ。」

「承知いたしました。お買い上げ10000ギルになります。」

値段をつけると、カーティスから値段はきいていたのだろうか、2人は顔をしかめることもなく直ぐに懷から財布を出して開き、その中から銅色札1枚をそれぞれ聡介へと手渡した。

2人より合計銅色札2枚を受け取った聡介は、再度ヴィリフィエラを取りにケースへいくと中からもう1本取り出し、2人の前まで行きヴィリフィエラをそれぞれに手渡す。

「店主。試しに表で打ち合っても構わぬか？いや…疑うわけではないが、もし不都合があった場合に直してもらいたいのだ。」

「わかりました。ただし、通行人に被害が及ばないようにお気を付けを…。」

「その点は重々承知している。では…。」

そういうと2人は店から出て行った。

受け取った銅色札をしっかりと箱の中にしまい、打ち合いを見に外

にでると、既に2人は物珍しさに集まる見物人に円状に囲まれていた。

2人は、片方が今まで使っていた武器を身につけ、もう一方が、たった今聡介が売ったヴィリフィエラを身に着けていた。

二人は短く声を掛け合うとお互いへと走り込み剣を打ち合う。

上段からの斬り下ろし、斬り上げ…ギンツギンツと剣を打ち合う音を通りに高らかに響かせながら、一合、二合、三合…と数を重ねていく。

六合目で、ガンツと一際鈍い音を立てて剣同士がぶつかると、ヴィリフィエラが普通の剣を半ばから叩き斬ってしまった。

打ち合いが終わった2人は折れた剣のかけらを拾いあげると聡介の目の前まで来る。

目の前まできた2人に聡介は感想をきかせてもらおうと口を開く。

「どうでしたか？何か問題点はあったでしょうか？」

「いや、とてもイイ出来の武器だ。確かに10000ギルも払うだけの価値はある。問題点も見当たらないし、剣の模様も興味深い。気にいったよ。」

「ありがとうございます。今後ともよろしく願います。」



ベタ褒めされた聡介は2人が馬に乗って去って行くのを終始笑顔で見送ると、店へと戻った聡介に待っていたものは店内へと押し付けてきた冒険者達の、俺もヴィリフィエラを売ってくれという合唱だった。

というのも、先ほどの打ち合いをかなりの冒険者達が見ていたらしく、その切れ味のよさを見ていたからだ。

「いくらだ！？あの剣を俺にも売ってくれ！」

「あの剣は俺にこそふさわしい！」

「ふざけんな、こんな奴らじゃダメだ。俺に売れ！」

「僕も買いたいのですが……。」

「私に売rinaさいよ！」

「ねえ……お姉さんにうってくれなあい？」

冒険者達の言葉をまとめると、つまりは自分に売ってくれという自己アピールの嵐だった。

「あの剣はヴィリフィエラと言って、値段は10000ギルです！」

いきなりの盛況ぶりに混乱しつつも最初の質問に答えようと声を張り上げた聡介に返ってきたのは嵐は嵐でもブーイングの嵐だった。

「はぁ！？いくらなんでも高すぎるだろ！」

「もっと安くしろ！」

「ふざけんな！剣にそれだけ払えるか！金の亡者かよ！」

「高すぎると思います…。」

「ちょっと！そんなに高くちゃ買えないじゃない！」

「…安くしてくれるならお姉さん、抱かれてもいいわよお？」

一人妙なことを口走っていたが、収集がつかなくなってきた店内の様子に聡介は辟易とした。

「皆さん静かにしてください！あの剣は性能が良すぎる代わりに大量には生産できませんし、安い値段で多く出回るのは危険なんです！だから多少高いとは分かっていますがあの値段にするしかないんです！どうかご理解ください！」

そう店内にいる客達に言い放つとぶつぶつとは言いながらも納得してくれたのか静まってくれた。

ある人は外に出ていき、またある人はそのまま店内にとどまって他の品を眺め始める。

帰らずに口説いてくるお姉さんには丁重にお帰りいただいた。

興味が無いわけではないが、いくらなんでも理由が不純すぎる、そんなに安い男ではないのである。

「すみませーん。ここに置いてある剣もらえますかー？」

カウンターで店内の様子を見ていた聡介が、声の聞こえた方へと向くと、1本700ギルの鉄剣をそれぞれ1本ずつ持った4人組の冒険者達がカウンターにいる聡介の前に立っていた。

まともな冒険者達に安堵しつつ、営業用のスマイルを作りながら聡介は対応を取っていくのだった。

「1本700ギルになります。まとめてお支払いでしょうか？それとも別々の支払いでしょうか？」

「別々の支払いでお願いします。では…700ギルです。」

4人組からそれぞれ700ギルずつ受け取ると、聡介は店外へ出ていく4人組の冒険者へ、またのお越しをお待ちしておりますー、と声を投げかける。

「すみませーん。ちょっといいでしょうかー？」

「はい、今行きます。」

息をつく暇もなく次の客の対応へと移る聡介は大変そうで額にうっすらと汗をかいているが、心なしか喜んでいようだ。

「いかがいたしましたか？」

「この防具をちょっとつけてみてもいいですか？」

「ええ大丈夫ですよ。合わなければ横の紐で調整できますので…。」

窓際に10個ほど並べている防具の中から鉄製の胸当てと籠手のセツトを手取る女性客が試着を申し出てきたので許可を出すと服の上から付け始めた。

それを見ていると今度は後ろの方から男の声が聞こえる。

「ねえ、ちょっといいかな？この刀っていうのを見せてほしいんだけど…。」

「はい、少々お待ちください。」

そう言いつつ、女性客のもとを離れて刀を入れているケースの蓋を開けて刀を取りだすと刀身を引き出して説明を始める。

「この剣は刀といいまして、ここよりも東方の島国で使われているものです。これの使用方法は一風変わっておりまして、盾などの防具を手に持たずに両手で握って、この反りを利用して引きながら斬るのです。この反りのために、引きつけながら斬ることによって切れ味が格段に跳ね上がるのですが、防具を持たないスタイルになるので防御を刀でしなければなりません。かといってこの剣で受け止めると刀身の細さ故に叩き折られてしまうので、相手の攻撃は刀を使って受け流さなければいけません。ですが、使いこなせるようになれば、とても素早い攻撃を仕掛けられるので素早さを重視する方にはオススメしています。」

「へえ、面白い剣だね。刀身部分に入ってる模様もクールでカッコイイね。」

「ありがとうございます。この模様は刃紋と言いまして、焼き入れと呼ばれる作業の過程で、温度の違いをつけることによって出来る独特の模様です。この作業は見た目のためだけではなく、刀に柔らかさを出して折れにくくするという意味もあるのです。これのおかげで刀という武器に美術品的な美しさと実用品的な強さを加えられるんですよ。」

「確かにキレイだね。慣れるまで苦労しそうだけど、切れ味も良さそうだし使ってみることにするよ。」

自分の国が誇る刀を褒められて上機嫌になった聡介が説明をつづけ

た甲斐も有って、男が購入の意思を告げると聡介は更に上機嫌になった。

「ありがとうございます。通常は1000ギルなのですが、今回は刀シリーズの初めての購入者ということで850ギルにて販売いたします。」

「もつとするのかと思っていたけど意外に安くて安心したよ。これで安心してこれからもこの刀を使えるよ。」

自分の腰の袋の中から100ギル硬貨8枚と10ギル硬貨5枚を取りだしながら言った男性客に刀を渡すと男は去って行った。

「ありがとうございますー、といってから先ほどの女性客のもとへと戻ると、試着し終わったのか脱いでいるところだった。」

「試着してみてもいかがでしたでしょうか？」

「うん、悪くはないわね。何より着けやすくて外しやすいのがきにいったわ。これを一つお願い。」

「ありがとうございます。こちらはセットで600ギルになります。」

「わかったわ。はい、600ギルよ。傷ついた時は直してもらえるのかしら？」

「小さな傷なら無料で直しますが、大きな傷の場合にはそれに見合った分の金額は請求させていただきます。」

「そう、わかったわ。ありがとう。」

ありがとうございましたーと見送った聡介は多少疲れていたが、そんなに簡単に休むわけには行かないと思って気合をいれる。

そんな気合をいれる聡介にかかる声は若い女性の声だった。

「ねえお兄さん。このアクセサリーってなんでこんなに安いわけ？ 普通は魔術が掛かっているからもっと値段するんじゃないの？」

アクセサリーに興味を持ってくれた！と思った聡介は疲れを吹き飛ばして満面の笑みを浮かべて返事をする。

「そのアクセサリーは魔術が掛かって無いので安いんですよ。これは使用者をサポートする装備ではなく、誰もがオシャレを楽しめるようにと思って作ったものなんです。ですから誰もが気軽に買うことができますように値段を大幅に下げて販売しております。」

「へえ」。確かに色々なデザインやカラーのものがあるしオシャレするのにはちょうどいいかも…。このネックレスとバングルをもらえる？」

そう言つて握っている商品を見ると、その手の中にはクロスのネットと白色のバンゲルが握られていた。

「2つあわせて30ギルになります。他にもいるものが有れば声をおかけ下さい。」

支払いがすむとまた商品を長めに戻った女性客にそう声をかけながら、ようやく落ち着いてきた店内に聡介は一安心するのだった。

それからカウンターへ座った聡介のもとに支払いをしにきたのは、鉄剣を買つたために6人ほど来ただけで、あとの客はちらほらとかえつていった。

客もいなくなつて広くなつた店内を見回すと、初めての接客で疲れた聡介は今日の営業を終えることを決めて店の扉に閉店の札を出したあと、鍵をかけた。

疲れた聡介が空気を吸いに裏庭へでるとゴソツと何か固い物があたるような音が塀の向こうから響いてきた。

なんだろう、誰かいるのかな？と疑問に思つた聡介が裏通りへと出る扉をゆっくりと押し開けて、音の聞こえた方へと顔を向けた先にいるのはボロボロになつた服とたくさんの傷を負つた男だった。

それは、赤くなり始めた空に太陽が沈みはじめた時のことであつた。



今回も長めな7957文字です。眠気のあまり誤字があるかもです。次回はちよつとした事件が起きますが、その事件は重要な事件になるのでよく覚えていてほしく思います。

いわゆる伏線ですとも、しばらく出る予定はないですが記憶の片隅に残してもらえれば幸いです。

それでは、次回もお楽しみに！

## 007 重傷者と盗賊

### 007 重傷者と盗賊

目に映った男はみるからに重傷で今にも死んでしまいそうだった。

着ているマントはズタボロで、中に着ている服は所々破れていてそこから血がにじんでいる。

そのうえ、背中の中肩から左脇腹へと一際大きな切り傷が一筋走っている。

そこからにじみ出る血は中の服だけでは飽き足らず、マントさえも赤黒く染め上げていた。

このまま放っておけば間違いなく死ぬだろう男を見かけても、この世界の住人ならよくあることだと言って係わりあいになろうとせずに放っておいただろう。

しかし、この世界の人間ではない聡介にはそんなことは関係無く、助けなければいけないという責任感に駆られて男に話しかけるのだった。

「大丈夫ですか！？今運びますのでちょっと我慢してください！」

「ゴホッゴホッ……まで、動かすな……」

「ですが、そのままでは！」

内臓にまで届くほどの深い傷は見当たらなかったが、口から血を吐いてせき込む様子からすると打撃が何かで内臓も多少傷ついているのだろう。

しかし、動かすな……と言った男に対して聡介はつい声を大きくしてしまった。

「ゴホッ……魔力さえ有れば回復できる……あんだこの鍛冶師だろ……魔鉱石か魔石が……ないか？」

「！今持つてきます！待っていて下さい！」

男の言葉を聞くや否や聡介はその場から走り出して工房を通り抜けて店前のカウンター前まで行った。

今聡介の目の前には白色の光を放つ魔石の玉があり、5個すべてを引っ掴むと裏庭へとかけだしていく。

男のもとへ戻った聡介がみると男は先ほどよりも心なしか顔色が悪くなっている。

「魔石を持つてきました！これです！」

聡介が魔術師の手へ押しつけるように渡すと、3つほど手からこぼ

れ落ちたが、男は残り2つを握り締めると目をつむった。

魔石を握った男が目をつむって何やら小声で呟きだすと、傷を負っていた場所が傷を覆うように光り始める。

10数秒もすると次第に光が薄れていき、光がおさまった後の肌には血はついてしたが傷はキレイに無くなっていた。

「すまん……助かった……」

そついうと男は立ち上がりうとして、バランスを崩して堅い壁に肩をぶつけてしまった。

「なにしてるんですか！まだ治ったばかりじゃないですか！」

聡介は荒い息を吐く男に肩を貸しながらそついうと男を家の中へとつれていく。

なんとか二階へと連れて行きベッドへと寝かせると男はよほど体力が落ちていたのかすぐに眠りこんでしまった。

とりあえずの山場をなんとか乗り切った聡介は売れ残った商品を片づけ始めることにした。

ルシフェリオンとアクセサリー以外の全ての商品を倉庫へと片づけ終わったところで、二階からゴトツという音が聞こえてきた。

まさか……と思って急いで二階へ駆けあがり部屋の扉を開けると、男が立ち上がってこちらへ歩いてこようとしているところだった。

ふらつく男をベッドへと押しつけると、男はなおも立ち上がろうとしたので聡介はまた押さえつけた。

「こんなにフラフラなのにどこへ行こうって言うんですか！大人しくしていて下さい！」

「だが……俺がここにいと迷惑をかけちまう……もう俺は大丈夫だ……」

「全然大丈夫じゃないですよ！今は体力が落ちているんですから、安静にしておかないと……。それに治ったとはいえ怪我人なんですから迷惑をかけるなんて心配をせずに、体力の回復に努めて下さい」

聡介が言くと男はようやく動きを止めた。

「すまない、世話になる……今晚だけ一休みしたらすぐに出ていく。それまで休ませてもらおう」

「困った時はお互い様ですよ。それとこの魔石を握っていて下さい。あなたが使った魔力が回復すると思うので」

男が礼をいうと聡介は、ホッとした表情になって言葉を返しなが

裏庭から戻ってくるときに拾っておいた魔石の玉を1つ渡した。

男がその球を受け取って寝はじめると、聡介も日中の疲れがたまったのか眠たくなってきた。

男が夜中苦しむかも……と思った聡介は壁へよりかかると寝息を立て始めた。

外の太陽はほとんど沈み、空には深い群青色の空が東側から迫っていた。

日が完全に沈み、深い夜の帳が下りて数刻たったところのことだった。

「お頭……あの野郎が連れ込まれたって家がこらししいとのことです」

「ああ、あの野郎だけは生かしちゃおけねえ……情報がバラされる前に俺らが奴をバラすぞ。」

「へい、分かりやした」

不穏な言葉を漏らしたのは、全身を黒色の服で覆った数人の男たちだった。

黒装束の男達の目の前には聡介の家の裏口があり、そこを開けようと一人の男が細い工具と共に近寄った。

しかし、裏口に鍵穴は無くてドアノブしかなかったので男は顔をしかめて戻ってきた。

「すいやせん、お頭……。鍵穴がないんですが……。」

「くそ！内鍵かよ！さては古い家だな、ちくしょう！表にまわるぞ！」

お頭と呼ばれた男は悪態をつきながら表の通りへと回るのだった。

表へと回った黒装束の男達が通りに目を光らせるなか、さきほどの男が工具を持って店の部分の扉の前に立った。

扉についた鍵穴を見かけると男は素早く工具を差し込み、慣れた手つきで工具を動かして鍵をあけた。

ガチャツという音と共に開いた扉はスウツと内側へ開いていく。

「お頭開きやした。」

「でかした。中に入るぞ。」

店の中へと入った男達が店内を見回すと、壁際に置いてあるアクセ

サリーが目に入った。

「なんだ、こりゃあ？……魔力もねえし、ただのアクセサリーじゃねえか。こんなのが売れるのか？」

手にとってみたお頭は魔力が籠って無いバングルとネックレスをみると不思議そうに頭をかしげた。

「お頭。なんか凄そうな剣がありやすぜ！」

小声でそう叫んだ男の前には薄緑色の剣がケースに入ってたまま置いてあった。

それは聡介がしまい忘れたままだったルシフェリオンだった。

「これは……なかなか……。おい、これの鍵外せ。こりゃあ売れば結構な値段になりそうな業物だぜ」

「へい、今外しやす」

そういうと扉を開けた男は、ケースに掛かった鍵の鍵穴に工具を差し込むと素早く鍵を開けた。

中からルシフェリオンを取り出した男は、ルシフェリオンを運ぶた



めに自分の背中に掛けた。

それを見届けたお頭が目をカウンターに向けたところで暗闇にまぎれて動く1人の男を見つけた。

それは口封じに殺そうとしていた男の姿だった。

「みつけたぜえ。このネズミ野郎が……。大人しく俺らに殺されな  
」

お頭が見つけたその男は、聡介が助けたあの男だった。

ベッドで寝ていた男はガチャツという音に続いて階下から聞こえてきた微かな足音に耳をすませていた。

くそ、もう追手が来たのかと思った男は懷から短剣を取り出して右手に持つ。

暗くなった部屋に慣れた目でまわりを見渡すと壁によりかかるようにして眠る聡介の姿が目に入った。

これ以上迷惑はかけられないと思った男は足音を殺して部屋の外へとでる。

階下の音を探りながら階段を下りていくと敵はまだ物色しているだけでこちらには気づいてはいなかった。

気づくなよ……と思いながら身をかがめてカウンターの下まで近づいていくが、まだ気付かれない。

しかし、カウンターから出てしまったところで後ろを振り向いてきた男にみつかってしまった。

男はこちらを見て獰猛な笑みを浮かべると言葉を発した。

「みつけたぜえ。このネズミ野郎が……。大人しく俺らに殺されな  
！」

「くそ、やっぱりお前らか！しつこすぎるぞ！」

見つかったとなると、上に行けば聡介が…、出口に向かえば敵にかまると見た男は窓へと腕を交差させながら突っ込む。

ガシャーンツと音を立てて窓から飛び出した男はしばらく進むと、全員を聡介の店から引き離すために後ろへ振り返って敵がついてきているか確認をした。

男は、男達も店から出てきて追いかけてくるのを確認すると再び通りを全力で疾走する。

引き離すために何度か姿を見せた後に、男は全力で走って追手をまいた。

男はそのまま夜の街を走ってどこかへと消えていったのだった。

「おい、君！大丈夫か！おい、起きろ！」

突如大声で起こされた聡介の目の前には、銀色の光を放つ鎧を着た守備隊の騎士がいた。

家の中にいる騎士に不思議に思っただけなのかと尋ねると答えが返ってきた。

「覚えていないのか？……我々守備隊は早朝に君の店の窓が割れているとの報告を聞いて駆けつけたのだ。どうやら賊がはいったらしい。しかし、幸運だったな。ひとつのケースの中身が盗まれていたようだが、君は無事に眠っていたんだからな！」

ケース？と思った聡介は、昨日倉庫にしまう作業の途中で、男の看病をしてそのまま寝てしまったことを思い出した。

嫌な予感を感じた聡介は、部屋を飛び出して階段を駆け下りていく。階下に降りた聡介の目の前には何事かと集まった人たちが見えたが、

それらを通り抜けて、蓋が開いているケースの場所を発見する。

そこはルシフェリオンが収められていたケースの場所で、そのケースには、昨日聡介がしまうのを忘れたルシフェリオンが入っていたはずだった。

しかし、今や空気が入っているだけで、薄緑色の輝きを放っていた剣は影も形もなくなっていた。

嫌な予感が当たり、ルシフェリオンが盗まれたという事実気付いた聡介は茫然と立ち尽くした。

そこに二階から下りてきた騎士が声をかける。

「君、いきなり走って行くなんて驚くだろう……ん？そんな茫然と立ち尽くしてどうかしたのか？」

「剣が……ルシフェリオンが盗まれたんです……」

「ルシフェリオン？まあ商売には少々痛手かも知れんが命があっただけ良かったじゃないか」

ルシフェリオンの危険性をただ一人知っている聡介は気が気でなかったが、昨日看病をしていた男のことをふと思い出した。

「あの……もう一人男の人がいたと思うんですが、その人は今どこにいるか分かりませんか？」

「男？いや、みて無いが……。それが犯人か？」

「いえ、昨日裏通りで倒れていたなので助けたんです。それで、二階のベッドでやすませていたんですが……」

聡介がそういうと騎士が、その男について聞かせてくれと言ってきたので、傷を負っていたことや迷惑がかかるかかるといつていたことなどを全て話した。

「そうか、そんなことが……。我々でも調査はするがここ最近窃盗の被害が多発しているので犯人は捕まえられないかもしれないかもしれん。君は家の戸締りをしっかりしとくん、いいね？」

そういうと騎士は馬に乗ってかけていつてしまった。

「失礼。ソウスケ・カミオ様ですね？ご領主さまが呼びますのでお屋敷まで一緒にきてくださいますか？」

茫然とする聡介に後ろから声をかけたのは執事服を着て髭を生やした男性だった。

「え？あ、はい……」

茫然としていた聡介だが、返事をするやすぐに馬車へ乗せられてガタゴトと揺られながら道を進んでいった。

しばらくすると町の中でも一際大きくてキレイな屋敷へと連れてこられた。

朝焼けに輝く屋敷はとてもきれいで、町の中で一番美しい建物だった。

馬車から下ろされた聡介は屋敷の煌びやかな廊下を通して応接間へと連れてこられる。

「今お呼びしてきますので少々お待ち下さい」

そう言った執事服の男性は退出していき、豪華な部屋には聡介だけが残された。

部屋の隅には高級そうな壺や絵画などの調度品がおいてあり、床には毛足の長い絨毯、ソファはとてもフカフカで、机は一切の汚れがないし傷も見当たらない。

高級すぎる物が多すぎる部屋に、聡介は微妙に居心地を悪く感じていた。

しばらくすると先ほどの執事服の男性が、2人の男を連れて戻ってきた。

2人のうち1人は見たことが無かったが、見るからに高級そうな服を着ていたので恐らくはこの屋敷の主だろうとあたりをつける。

もう一方の男の方かというと、なんと昨晚聡介が助けたはずの男だった。

しかし、昨晚とは違って着ている服は、ボロボロだった物から真新しいキレイな服になっていて、顔色は昨日よりはだいぶ良くなっていた。

聡介が2人を見てみると、2人は聡介の前の椅子に腰かけてから口を開いた。

「君がソウスケ・カミオくんだね？私はこの屋敷の主のアームストロング・エドウィン・ハワードだ。昨晚は私の息子が迷惑をかけてしまったようだ、申し訳なかった」

「俺が息子のダンテだ。昨日はおかげで命拾いをした。しかし、そのせいで君に迷惑をかけてしまった。本当にすまなかった。」

「いや、そんなに謝らないで下さい。あれは僕が勝手にお節介を焼いただけですし、命にかかわるようなことは無かったんですから」

「そうはいってもそれではこちらの気が済まない。騎士に聞いたが剣が盗まれてしまったのだろう？お詫びと言ってはなんだがこれを受けとってもらいたい。」

そついうと執事服の男性をよんで、こちらに銀色札1枚を差し出し

てくる。

「いえ、そんなにもいただくわけには……」

聡介がそう返すが向こうはがんとして譲る気が無いみたいだ。

その様子を見ると結局聡介はそのお金を受け取することに決めた。

「ところで、昨日何が起こったんですか？」

何も知らない聡介は昨日の夜起こったことについて聞くことにした。

2人は一瞬渋った顔をしたが話すことにきめたようだった。

「実は私たちは、街道を通る時に出没する盗賊について調べていてね。これが中々手強くて全く尻尾を見せない盗賊だったんだ。一向に尻尾が掴めないことに業を煮やしたダンテがついに潜入することに決めてね。盗賊のアジトに数日間潜伏して情報集めと証拠集めをしていたんだ。しかし、脱出する時になって見つかってしまったらしくてね。多くの追手に追われながらもなんとか町へたどり着いたんだが、町へ入る前に斬りつけられた傷が原因で、途中で力尽きてしまったらしいんだ。そこが君の店の裏通りの場所だったというわけだね。」

「それからは君のところで数時間ほど眠っていたんだが、深夜遅く



に階下から物音が聞こえてきたんだ。不審に思って下に降りてみたんだが、予想通り盗賊の追手で、悪いとは思ってたんだが窓を破って逃げさせてもらった。剣のことは暗闇で分からなかったんだ、悪かった。思い入れのある大事な剣だったのか？」

「思い入れがあるってわけじゃなかったんですけど、あの剣は一番危険な剣だったんです。切れ味も頑丈さもそうなんですが、一番危険なのがあの剣を持つと凶暴な性格になりやすいんです。それこそ殺人狂になりかねないほど……。ですから、早く取り戻さないとい……」

途中で説明を変わって引き受けたダンテが聡介に剣のことを聞くと、聡介は苦虫をかみつぶしたような顔になって言葉をもらした。

そんな聡介の様子をみたダンテは一言、すまないと言っ言葉は切った。

「旦那様……そろそろ……」

執事服の男性が、アームストロングにヒソヒソと小声で話しかけるとアームストロングは小さく首を縦に振る。

「すまない、ソウスケ君。そろそろ仕事を始めなければならないのでこれで失礼することにするよ。その剣のことは私達でも調査はするが、見つかる可能性は低いと思う。もし、見つかったら届けさせるから待っていてくれ。では、失礼」

おもむろに立ち上がったアームストロングが聡介へそう告げると執事服の男性とともに豪華な絨毯を踏みしめながら足早に退出していった。

「俺も仕事があるから今日はこれにて失礼させてもらう。また今度いかせてもらうが、今度は客としていくからイイ武器を用意していてくれ。」

アームストロングを見送ったダンテも、ソファから立ち上がって扉を開けて外へ出て行ってしまった。

それからすぐにメイド服姿の 実用的なものでフリルは無駄についてない 女性が聡介を馬車まで案内して送って行った。

家へと送られた聡介は、御者に礼を言うと窓が割れた店内に戻っていく。

店内へと戻るとそこには心配そうな顔をしたエドガーが立っていた。帰ってきた聡介を見つけたエドガーは、心配そうな顔をしたままズンズンと近づいてくるのであった。

007 重傷者と盗賊（後書き）

6424文字です。ずっと座っているのでも腰がいたいです。話数も増えてきて7話となりました。

10話ごろからは更新スピードをおとそうかと思っています。さすがにこのスピードで更新し続けるのはきついです；w；それでも、読んでくれるという方は今後もよろしくです。それでは、次回もお楽しみに！

## 008 警護依頼と装備作り

### 008 警護と装備作り

「おい、ソウスケ。聞いたぞ、賊に入られたんだってな。ここ最近たまに盗賊みたいな奴等がいるようなことがあるってのは聞いてたんだが、まさかよりもよってソウスケのところに入るとは思ってた。スマン、このことはソウスケにも伝えておくべきだった。悪かった。今後も現れない保障は無いから家の鍵を変えておいたほうがいいと思うぞ。時間が出来たら鍵屋に行って変えてきてもらえ。ああそれと不安なようならギルドで警護依頼もできるからな。じゃあ店があるから俺は戻るぞ」

一気にそういうとエドガーは反対方向に走っていった。

この時間に店の前で待っていてくれたということは、自分の店を抜け出して様子を見に来てくれたのだろう。

ありがたく思いながらも店内を見回すと、割れた窓と、割れたガラスの破片が床に散らばっていた。

聡介は散乱したガラスの破片を片付けようと思って、外に散らばったガラスを集め、次に店内に散らばったガラスを片付け始めた。

散らばったガラスを手で一つ一つ拾っていく聡介は、あと少しというところで、右手の人差し指を浅く切ってしまった。

「いたっ……」

薄く切れた傷口から血が滲み出してきて、すぐに大きな血の玉となつて店内の床へと落ちていく。

なおも血が出てきそうになる人差し指を口に咥えて、舌で傷口を舐めて我慢をする。

こんなときに絆創膏があればなあと思いながら、残った破片を手早く片付けると工房の片隅にまとめて置いておく。

工房から出てきた聡介は、エドガーから言われたとおりに、鍵屋とガラス屋にいくことにした。

窓は割れているが、扉は一応施錠した聡介は、通りを北に向かって歩いていく。

しばらくするとガラス屋の工房が見えてきたので中へと入り、窓ガラスの修理を依頼する。

代金を渡すと今から行くと言ったので、行くところがあるから先にやっておいてほしいと返し、店をでた。

そこから数分ほど歩くと、さまざまな鍵を店先に置く店を見つけたので、狭い店内を進み店の主人のもとへとたどり着く。

「へい、らっしゃい。鍵のスペアかい？」

「いえ、昨晚盗みに入られたので扉の鍵を新しいのに変えてもらおうと思ってきたんです」

「へえ、若いのにあんたも災難だったねえ。まあ、安心しな。うちのこの最新の鍵、名づけて『安全守る君』にかければバッチリさ！なんてったって、ここらで最新の技術を使った鍵だからな。鍵と番号式の二重ロックで安全をまもるぜ！」

「は、はあ……それは……すごいですね」

聡介はネーミングセンスの無さに呆れながらも、とりあえず返事を返すのだった。

とはいえ、複雑な形をした鍵と5桁のダイヤル式の暗証番号で守られた鍵は、確かに開けるのは困難そうだった。

「んで、お客さん。今から換えにいけないのかい？」

「お願いします。案内しますので一緒についてきて下さい。」

聡介がそう返して先に代金を渡すと、奥に引っ込んだ店主は数分後に工具と安全守る君を持って通りにでた。

通りを雑談しながら歩いていくと、聡介の店の窓ガラスの修理を終えた業者が聡介を発見し、声をかけてきた。

「窓ガラスの修理おわかりましたよ。今後もうちのガラス屋をよろしくおねがいします。」

そういうと業者の方々はガラス屋のほうへと帰っていった。

店に着いた聡介は鍵の交換をもらうと、鍵屋の主人に別れを言っ  
て帰ってもらい一人になった。

それから一息ついた聡介は10分ほどしてから、今度は冒険者ギルドへと出かけた。

時間は太陽が真上に昇っていて、ちょうどお昼時だ。

聡介が冒険者ギルドへと入ると、酒場を兼ねているスペースで、例  
の3人組が昼食を食べているのが目に入った。

知り合いを見かけた聡介が、挨拶をしようと思って3人組に近づい  
ていくと、こちらに気づいたジョージが声をかけてくる。

「はれ？ほーふふえひゃん？ほーひはんは？」

口にたくさんの食べ物を含んだままで。

「ちよつとジョージ！口に食べ物いれたまましゃべらないの、行儀悪いでしょ！……あれ、ソウスケじゃない。こんなところでどうしたの？」

ジョージに注意をしたエミリーは、ジョージが向いているほうへと顔を向けたので、聡介に気が付いた。

「ちよつと警護依頼をしようかと思って……。実は……………」

事情を話すと3人組は黙って真剣に聞いていたが、話終わるとジャックが口を開いた。

「それ最近噂されてる『暗闇の狩人』って盗賊団じゃない？日中は活動してないらしくて夜だけ活動するからそういう名前らしいよ。」

「ああそれかあ……。私もたまに聞くね、その名前。……ねえ、私たちがソウスケの警護依頼引き受けない？最近依頼受けてないし、警護依頼なら安定した収入になるしさ。」

「ああそうだな。ちようどいいじゃないか。よし、その依頼俺たちが引き受けるぞ、ソウスケ！」

3人で話してすぐに決めると、ジョージが聡介に依頼を引き受ける



と言ってくる。

「ありがとう！……でも、危ないよ？大丈夫？」

「私たちは冒険者ギルドでも実力は高いほうなのよ？……そのせいで最近依頼受けてないんだけどね。ランクの低いのをうけちゃうと、実力がまだない冒険者が育たないからって自粛するのが暗黙のルールなのよ。それにここら辺じゃあランクが高い依頼も少なくなってきたしね。」

心配をした聡介がたずねると、エミリーは笑顔で言うてから、その後口を尖らせて愚痴るように言葉を続けた。

エミリー達もそれなりに苦勞はしているようだ。

「じゃあお願いするね。今依頼書かいてくるから待っててね。」

そういった聡介は、窓口で　今日は例のお姉さんではなかった依頼書の作成をすまずと、指名依頼でジョージ達に依頼すると、お姉さんに伝えた。

依頼書を持ってジョージ達のもとへと戻ると、昼食を食べ終えたジョージ達が立って待っている。

「報酬は一晩200ギルなんだけどいいかな……？」

「ああそれでいい。俺たちは日中は別の依頼受けてたりしてるからまた夜にな。」

そういつて酒場から出て行こうとするジョージ達に、聡介はそれから鉱石の採掘を依頼しようと思い、声をかける。

「あ、今日の依頼まだ決まっていなかったら鉱石の採掘をお願いしたいんだけどー！」

今日は先約があるからーと、言って去っていったジョージ達を見送った聡介は、とりあえずすぐに店にもどることにした。

冒険者ギルドの中はこわもての男ばかりで、騒がしくしていた聡介をジロリと睨んでいたからだ。

考え事をしていて、家を通り過ぎてエドガーの店の近くまで来てしまった聡介は、ついでにエドガーに銅があるかどうかを聞こうと思つて、店の中に入った。

エドガーの店の中には、両手剣・片手剣・双剣・短剣・ナイフ・槍・ハンマー・斧・棒・弓等の多種多様な武器が置いてある。

さすがに刀や銃などの飛び道具までは置いていないようだがそれでも聡介の店とは比べ物にならないほどの品数をそろえている。

しかし、高額な商品はいまいち数が少ないようだった。

魔法付きの武器や、呪いの武器、名剣などの特殊な武器は特に見当たらない。

防具のほうはというと、盾・軽鎧・重鎧などといった一般的なもので、品数は多いが種類は少なめなようだった。

エドガーを探すついでに店の中を見ていた聡介だが、エドガーの姿はまだ見当たらない。

しばらくエドガーを探してキョロキョロしていると、ついに従業員が話しかけてきた。

「お客様、何かお探しでしょうか？」

「いえ、エドガーさんに聞きたいことが会って来たのですが、今は居られませんか？」

「今は商談にいつているはずなので、しばらくは戻ってこないかと……。よろしければ用件をお聞きますが？」

「いえ、用件ってほどのことじゃないんです。このお店で銅を扱ってれば、少し買わせていただきたくて」

「たしかエドガーさんは扱ってなかったと思います。ですが、通り

を2本はさんだところの金属取り扱い屋でしたら銅を置いてあったはずですよ。」

「そうですか、どうもありがとうございました。」

またのお越しをくと、後ろから声をかけてくる従業員はとても丁寧に教えてくれた。

教えられたように通りを2本はさんだところまで行くと、目の前に金属取り扱い屋と書かれた看板を掲げた店を発見した。

店内にはさまざまな金属のインゴットが並べられて値札を貼られている。

名前もわからない金属がたくさんある中で、やっと銅を見つけると大量に抱えてカウンターまで持っていく。

「あつと、お客さん！それらは地面においてくれ！カウンターがつぶれちゃう！」

カウンターに載せようとしたところで、本を見ていた男性店主が顔を上げて焦った調子でいうので地面へとおろす。

「ふう……。お客さん力持ちだねえ。それだけの金属を持ち上げられるなんて、その細腕のどこにそれだけの力がつまってるんだい？……まあいいや。それにしても大量の銅だね。こんなもんどうする

「なんだい？武器にもならんだろう？」

「いえ、ちよつと研究するのに使いたいの……」

「へえゝ研究ねえ。まあいいよ。なかなか売れなくて困るんだよ、ソレ。安くしとくからもうちよつと買つていつてくれない？」

聡介が頷いて返すと、更にいくらかの銅のインゴットを積んでくれた。

「こんだけありやいいだろう……んゝ、そうさな……2000ギルでいいよ。研究がんびりな。」

店主から受け取った銅はかなりの量で、聡介は落とさないように気をつけながら家の工房の中まで運んで帰った。

工房の中へと下ろすと、銅の山が工房でかなりスペースをとってしまつたが気にしない。

「よし、今日はオリハルコンを作ろう！前回みたいに魔力を通したけれど、剣一本分であれだけ消耗してしまつたから気をつけないと……。そういえば、魔石の玉がまだ3個ほどあつたはず。あれを使えば出来るだろうけど……。まあ利益は考えなくてもいいかな。今日は銀色札ももらつたし！」

おもわぬ収入を思い出して利益のことを頭の中から吹き飛ばした聡介は、思わず笑顔になった。

どこの世界でもお金が有るに越したことはないなあと思う聡介だった。

気合を入れて腕まくりをした聡介は、3つの魔石の玉をポケットにいれて銅の山の前に立った。

手を重ねて、くすんだ色の銅の上におくと同時に練成が始まりだした。

そこに、ポケットから取り出した魔石から魔力を引き出して、練成中のイメージの中に魔力をねじ込む。

最初にバチバチとなっていた電気は、魔力が加わると途端にバチンッバチンッと雷のように強烈な勢いと光を持って弾け始めた。

耳へと入ってくる音を無視しつつ、銅の原子に魔力を無理やり結びつけて、それをひとつの物質とするためにつなぎ合わせていく。

それは無事に繋ぎ合わさり一つとなったが、魔力を吸って膨らんだそれらを小さく圧縮していく。

放出量の限界を超えてついには割れた魔石の玉を放り投げて、2個目の魔石の玉を握り締めてそこから更に魔力を搾り出し、オリハル

コンの原石に淹のような勢いで魔力を注いでいく。

魔力を注がれたオリハルコンの原石は、まるで灼熱の太陽にさらされた砂漠のように貪欲に魔力をその身の内へと吸い込んでいく。

2個目の魔石さえ使い果たしても砂漠は一向に満たされず、新たに3個目の魔石を握り締めて魔力を搾り出す。

3個目の魔石すら使い果たそうかという時になると、オリハルコンの原石は灼熱の太陽のように真っ赤な光を放ち始めた。

全ての魔力を注ぎ込んだ魔石の玉が真っ二つに割れると同時に、それは目を焼き尽くさんばかりの光を放って完成した。

思わず瞑ってしまった目を開くと、さきほどまで銅が山のように積みまっていた場所には防具1つと、剣1本をつくるのがやっとというほどの量しか残っていなかった。

しかし、先ほどまであった銅の山とは比べ物にならないほどの存在感を放っているのは確かだ。

地面に残るオリハルコンの表面は、まるでマグマのような紅蓮の色で、それは生きているかのようにユラユラと揺らめいている。

その神秘的に揺らめく紅い金属を見ると、聡介は安心したのか、ドサツという音とともに膝を付いて工房の固い床へと崩れ落ちた。

「う、うゝん……アイタタタ……頭をちょっと打ったみたいだ……。それに体が重くて……だるいなあ……」

オリハルコンを完成してから20分ほど気絶していた聡介は、ズキズキとする頭の痛みと共にやっと目を覚ました。

それでも聡介は不調を訴える体に檄を飛ばしながら、ゆっくりと立ち上がる。

立ち上がった聡介の前には、意識を失う前に見た紅く揺らめくオリハルコンが変わることなく鎮座していた。

「これが……オリハルコン……。伝説の……金属……。」

紅く揺らめく表面は、ともすれば引きずり込まれそうになるほどの深さを持っている。

静かに威圧感をはなつオリハルコンに、聡介はただただ圧倒されていた。

どれくらいの時間が経っただろうか、ようやく聡介はハッと我を取り戻した。

「そうだ、早く作らないとあの3人組がくる……。」



例の3人組が夜の警護にくることを思い出した聡介は、防具の成型をするために練成を始める。

バランスを崩さないように慎重に、ゆつくりと時間を掛けて成型していく作業はとても集中力を使った。

そうして出来上がった防具はプレートアーマーのようなものだった。

というのもプレートアーマーは全身をくまなく覆うものだが、聡介の作ったものはヘルメットと、肩の部分がなかったからだ。

ヘルメットは熱中症を防ぎ、広い視界を確保するために取り外して、肩は腕部の稼動領域を広げ、腕を動かしやすいするために肘より上は無くしたものにしている。

微調整をするために一旦鎧を着てみると、脚部と腕部がもたついたので調整してフィットさせておく。

それ以外は特に問題が無かったので、外して改めてみると、深紅の鎧はとても綺麗なのだが目立ちすぎるのでマントを後日買ってくることにした。

とりあえずは完成した防具を横に置いておき、今度は剣の作成に取り掛かる。

モデルとする武器は、ハイランダー達が好んで使用したと言われるクレイモア。

クレイモアは刃渡り100cm、180cmくらいのものが主流で、切れ味が鋭く、両手剣としてはツヴァイヘンダーやトゥーハンドドソードよりも小ぶりで、素早い剣の動きが可能なために多くの人たちに恐れられた剣だ。

出来上がった剣は刃渡り110cmのクレイモア型の両手剣だが、オリハルコンで出来ているために重量は驚くほどに軽い。

聡介がその剣の切れ味を見ようと思い、鉄片を取り出すと、警護の依頼の時間になったためかエミリーの声が外から聞こえてきた。

「ソウスケーきたわよー？どこにいるの？」

「ちょっとまってー！」

そう返すと大急ぎでオリハルコン製の剣と鎧を倉庫に押し込み、箱を練成してその中へいれてから厳重に鍵を掛けると、聡介は工房の扉を開けた。

工房の扉を開けた聡介の目に映ったのは、日が暮れ始めて赤い光に染まり始めた通りと、ちょうど店内へ入ってくる3人組の姿だった。

008 警護依頼と装備作り（後書き）

6049文字です。さて、今日は文章改定やら誤字修正もしました。ですが、話自体の流れに変化は無いのでご心配なく！

まだ、直しきれない部分があるかと思いますが、順次修正していくのでお許しを…。

…アナタ様の感想が作者のやる気に直結します。

やっぱり、誤字指摘だけじゃあ泣きそうになります！

誤字指摘自体はうれしいので感想も一緒に入れてくだされば……。

あ、ただの誹謗中傷はやめてくださいね！作者のHPがふつとびますから！

## 009 エミリーと照明作り

009 警備と照明作り

「いらつしゃい。今日からしばらくの間お願いします。」

店内に入ってきたジョージ達を招きながら、薄暗くなってきた店内に明かりをつける。

つけると言っても、まさか電氣が有るわけではないので、当然ロウソクに火を灯す。

ロウソクが放つ火の光に電氣のような明るさは無いが、そのぶん柔らかに優しい光なので、その光につつまれていると癒されるようだ。

最も、そう思うのは明るい電氣の恩恵を受けてきた聡介だけであつて、ジョージ達は、癒されるなんてことは思っていないみたいだ。

「夜ってイヤよねえ……。こんなロウソク程度の光じゃ人影なんてそんなに見えないし、暗くて分かりづらいから『暗闇の狩人』なんてコソ泥がはびこるんだもの。」

「それに、夜行性の魔物もうつとおしいぜ。影からいきなり飛び出してくるし、獲物に気付かれないために足音とか消してるしな。夜行性の魔物の討伐依頼はきつついぜ……。」

エミリーとジョージが、ロウソクの僅かな灯りに照らされた店内を見回して愚痴る。

しかし、黙っていたジャックは意見が違ったようだ。

「そうかな？夜って月の光がすごくキレイだし、満天の星空なんて最高じゃないか。月明かりのもとで一人飲むお酒は格別だよ？」

……どうやら、ジャックはロマンチストらしい……と聡介は思った。

「ジャックってロマンチストなんだね……。……好きな人には月明かりの下で告白をする、とかって思ってそうだよね。」

「あ、確かにそんな感じするかも！ねえねえ、ジャックってどんな告白するの？気になるんだけど！」

聡介が、ふと思いついて口に出した言葉に、すぐさまエミリーが食いついて言葉をつなげる。

エミリーはすでに恋バナモードに入ってるのかジャックから聞く気満々だ。

やはり、古今東西……異世界であっても、女の子は恋バナが好きなんだ、ということを変更して実感した聡介だった。

「な！？なんで君達にそんなこと言わなくちゃいけないんだよ！」

焦って顔を赤くしたジャックだが、それは、この場においては絶対にやっではイケナイタブー。

なぜなら、それは好きな相手がいるということと、同じ意味に取られかねないからだ。

「え！？いるの？誰誰？もしかして、酒場の看板娘のシャーリーちゃん？それとも、この間PT組んでたアンジェリカ？」

エミリーが言った中で、フローレンスは分からなかったが、酒場の看板娘のシャーリーちゃんとは、シャーリー・エリオットという19歳ほどの女性だ。

酒場のオーナーの娘さんで、よく店を手伝っている上にカワイイということ、看板娘と呼ばれて親しまれている。

酒場のおじさん達のアイドルであり、冒険者の出入りが多いために、若い男性冒険者に一目惚れされやすい人だ。

もちろん告白しようものなら、おじさん達が黙っちゃいないが、そうと知らない冒険者は後で裏に連れて行かれるらしい。

もしかしたら、ジャックも裏に連れて行かれるのかも知れない……。

「いやいや、もしかしたら冒険者ギルドの受付の『鉄壁のスマイル』のお姉さんかもしれんぞ!」

「んな!そ、そんなわけないだろ!なんで、そうなるんだよ!」

突然会話に参加したジョージだが、その答えは的を得ていたらしい。

ジョージの言葉に反応してゆでダコのように真っ赤になっているジャックをみればだれの目にも明らかだ。

ちなみに『鉄壁のスマイル』とは、いつも営業スマイルを崩さないことから、冒険者達の間で勝手に決められたらしい。

「え!?ジャックつてばあのお姉さんが好きだったの!?まあ確かにキレイではあるけど……壁は相当高いわよ。だって、あの『鉄壁のスマイル』さんだもの……。」

「あゝもう!そうだよ!あの人が好きなんだ!そんなことよりジョージはどうなんだよ!」

からかわれ過ぎて諦めがついたのか、叫ぶようにして認めると、話を変えるためにジョージの方へと話をふった。

「ん?俺か?……俺はエミリーのことが、「いやよ……うう……。」

ジョージ号は、エミリーの大砲によって穴を空けられて沈没した。

「私は……そうねえ……。秘密」

「人のことだけ根掘り葉掘り聞いてずるいぞ！」

「うるさいわね、女の子に秘密はつきものの。ソウスケもそう思うでしょ？」

傍観に徹していた聡介にここにきてのまさかのキラーパス、聡介はただ頷くことしかできなかった。

「やっぱりそうよね」 ほら、ソウスケもああ言ってるんだから、ジャックもきにしないの！」

ジャックは、理不尽だ……と言って崩れ落ちた。

その後聡介も加わり、4人はロウソクの光が満ちる店内でしばらく雑談に興じていた。



「そろそろ警備の準備をしとくか。」

夜も遅くなり、ジョージの一言で雑談もほどにして、部屋を割り当てることになった。

3人は、聡介に連れられて階段を上っていく。

2階へと先についた聡介は、まずはジョージとジャックの部屋を先に紹介することにした。

「えーっと、ジョージとジャックはこの大きい方の部屋だよ。表通りに面した窓が一つと、扉が2つ。扉が2つあるのは、もともこの部屋は展示スペースに使うものだったらしいからだよ。」

「ああ分かった。……この間取りなら何か有った時もすぐに逃げ道を確認できるな。」

そういつて、部屋の中に入って行ったジョージとジャックは、部屋の中に自分達の荷物をおろして寝る場所を確保した。

「ねえ、ソウスケ。私の部屋はこっちかしら？」

隣の部屋を指さしたエミリーは聡介に自分の部屋の場所を聞いてきたので、エミリーのもとへと歩いていく。

「この部屋だよ。」

そこは、昨日まで聡介が寝ていた部屋だが、3人に警備の依頼をしたあと、ベッドは既に工房の中へと移しておいた。

今工房の中には、綿をシーツ　ベッドを作る時に買ったベージュ色の方　でくるんだ簡易ベッドがあるだけだ。

「あれ？これってソウスケが用意してくれたの？」

簡易ベッドのところまで歩いて、感触を確かめているエミリーが聞いてくる。

「やっぱり、女の子だし……堅い床で寝るよりは、ゆっくり休めるかなあと思って……」

「ん〜久しぶりに女の子扱いされたなあ……。冒険者なんてやつてると、女の子だからって特別視してくれることなんてないからね。わざわざありがとね、ソウスケ！」

頬をうつすら赤く染めながら、はにかんだ笑顔を浮かべたエミリーが聡介にお礼をいうと、聡介は自分の顔が赤くなっていくのを自覚した。

「そつえば、ソウスケはどこで寝るの？二階はこれ以上部屋無いみたいだし、一階も奥にあったのは工房でしょ？」

「僕は工房で寝るよ。工房の扉は分厚いから、破られることはまずないだろうしね。それに工房の中に倉庫があつて、その中に商品や鉄鉱石を置いてるから盗まれないように監視することもできるからね」

「そつか……。一応言つとくけど、ソウスケが私達に遠慮する必要はないのよ？ソウスケが依頼人なんだからね」

「うん、わかつてるよ。大丈夫。……じゃあ下に降りるね」

「あ、私も一緒に降りるわ。2時間ごとの当番制に決めてて、私が一番最初に警備することになってるから」

聡介が一階に降りることを伝えると、エミリーも一緒についてくると言つたので、火を掲げながら階段を下りていく。

その際に、ジョージとジャックに就寝の挨拶を掛けておくことは忘れない。

ジョージは既に寝たのか、グウトイビキを返したただけだったが、ジャックの方は、おやすみと短く返してきた。

ちなみに下の図は二階の間取りである。

> i 9 4 1 7 — 1 4 0 1 <

「あ、僕はもう工房の中に入るけど、灯りいる？」

「今日は月明かりも結構あるし、いいわ。それに暗いのには目を慣らしておかないと、いざというときに動けないもの」

そういえば、エミリーの分の灯りが無かったと気づき、灯りをエミリーの方へ渡そうとする。

しかし、エミリーは受け取らずにそう言葉を返すと、店内の窓辺の方に歩いて行った。

窓辺に腰かけたエミリーの鎧に、月の光が当たって輝きを与える。

外をじっと見つめるエミリーは、昼間の明るい印象の時には感じられなかった魅力を持っていて、それを見た聡介は一瞬目を奪われた。ぼうつとしている自分に気づき、いつまでもいるのは不自然だろうと思って工房の扉の方へと足を向けた。

工房の扉を開けた聡介は、エミリーに一言おやすみなさいと言って中へと入って行った。

柔らかな月明かりが差し込んでくる店内に一人残されたエミリー。

「いつまで冒険者をやってられるのかしらね……」

憂いを帯びた表情のエミリーは、呟くと視線を店内にむけた。

「でも……もうしばらくは、縛られない自由な猫のほうがいいな……」

そう言つて、顔を月へと向けたエミリーに月の光が当たって、神秘的な雰囲気を作り出していた。

空に浮かぶ月は、強い輝きを放つ満月だった……。

工房の中へと入った聡介が倉庫の中を覗いてみると、頑丈に鍵をかけた箱が目の前に鎮座している。

それは3人組が来たために急いで作ったものであり、鍵さえ壊されれば、呆気なく中の装備を取りださねない代物だった。

それを見ると、頑丈に鍵を掛けても盗まれてしまったルシフェリオンのことが頭によぎる。

あれを盗まれただけでもかなり致命的なミスだったが、もしオリハ

ルコンの装備さえも盗まれてしまえば、いずれ確実に甚大な被害をもたらすことになるだろう。

剣を持って暴れまわる賊の姿を想像した聡介は、背中に冷たい物が流れるのを感じた。

今度は確実に盗まれないようにする。

そのためには、この時代にはない技術、または誰にも真似できない技術が必要になる。

それをしばしの間工房の中のベッドに腰かけて考えた聡介は、一つの考えを思いついた。

その考えとはこういうものである。

まず、倉庫の中の全体を鉄の板で覆い、継ぎ目のない一つの大きな箱にする。

床には、これまた鉄製の箱で作った床下収納を、剣用と防具用、予備用、その他と、一つ一つに分けて作って行く。

その床下収納の上に、継ぎ目の無い鉄の板が載っているのだから、中の装備を取り出すときには、錬金術を使って一枚の鉄板に穴をつくりあげてから取りだすほかない。

鉄の板を溶かすのは相当な温度が必要になるうえ、これほどの巨大な鉄の塊を溶かすのはまず無理だろう。

これは、確実に聡介にしか取りだせない特製の金庫のようなもので

ある。

そもそも、継ぎ目すらないのだから、この床下に伝説の金属を使った装備があるなどとは夢にも思わだろう。

とはいえ、倉庫の中の壁を見られたときに、全て金属では怪しまれかねないので、木の板を上から被せてカモフラージュしておく。

そうして出来上がった倉庫という名の『金庫』は、聡介の目から見ても分らないほどのものだった。

「よし、これで大丈夫……。あとは……。ああそうだ、ランプを作ろう。ランプは灯油ランプでいいかな。……たしか石油や、天然ガスの主成分は鎖式飽和炭化水素で、中でも灯油は炭素数が9～15の混合物だったはず。ってことは、 $C_9H_{20}$ ～ $C_{15}H_{32}$ を適当に組み合わせればできるはずだね……。炭素は……。木炭を使おう。水素は外の井戸から水を汲んでこようかな。」

そういうと聡介は裏庭へ繋がる扉を押し開けて、井戸から水を大量に組んでくると、木炭の前に置いた。

置いた聡介だが、大量の水素や酸素が精製されることを思い出した聡介は、それらを再び外へと運び出した。

「引火なんかしたら目も当てられないや……。」「

外にでた聡介は目の前に置かれた水と、木炭の上に手を重ねておく。練成を開始すると、まず木炭から炭素だけを切り取りつつ、水からは水素のみを、酸素から切り離す。

余ったものは空気中へと放しつつ、炭素と水素だけを結合させていく。

頭の中で考えた構造をいくつもコピーして、その一つ一つを繋げていく。

練成がようやく止まって、最初に聡介が感じたのは、灯油独特の匂いだった。

水の入っていた入れ物には、既に無色透明の灯油がなみなみと入っている。

そのままでは、灯油が少しずつ揮発していくので、地面から大型の甕を練成して作りだす。

灯油を甕の中へと移し終わっても、まだまだ木炭は余っているし、甕の中も空いている。

灯油をつくる工程をなんども繰り返していくと、ついには甕いっぱいになり灯油がたまった。

工房へと戻り部屋の隅に目を向けると割れた窓ガラスの破片が、まだ大量に残っていた。



「そういえば、あのガラスを使えばランプのガラス部分が楽に作れる……。」

それらを手元にとってきて練成し、キレイな形をした灯油ランプを数個ほど作り上げる。

作りあげたランプの一つを、甕のところまでもっていき、ランプの中に灯油を少量いれてから、芯系もいれていく。

芯系に灯油がしみ込むのを数分間まってから糸に火をつけると、ロウソクよりもかなり強い光をランプが発した。

「やった！これで明るい照明を確保できたぞ！これで夜に作業する時も楽になる。」

灯油ランプ作りが成功したのを確信すると、聡介は喜びの声をあげた。

しかし、練成をするために長い時間集中していたために、すぐに火を消して寝ることにした。

その寝顔は、とても幸せそうに微笑んでいるように見えたのだった。

009 エミリーと照明作り（後書き）

5288字です。灯油の部分は十分調べたので、そこまで大きな間違いは無いはず…。

まあ間違っていたとしても、あまり気にしないで下さい（汗  
今回は夜だけのお話でした。

でも、この話は縁の下の力持的な感じで役立てていく予定なので、一応おぼえというほしいかもです。

それでは、次回もお楽しみに！（感想待ってます！…誹謗中傷以外でね！

朝早く目覚めた聡介が、商品を補充しようと思って倉庫の扉を開けると、中にある鉄のインゴットの数はかなり減っていた。

これでは作ることが出来ない……と考える聡介は、この前ジョージ達が鉄クズを大量に拾ってきた遺跡のことを思い出した。

また何かが捨てられているかも知れないと考えた聡介は、この遺跡にいつてみようと考え付いた。

そこには、ただ単に鉄クズを拾いにいく……というだけでは無く、この世界の遺跡をいうものを見てみたいと思ったからでもある。

しかし、いくら思ったところで、場所も道も分からないのでは行きようがない。

そこで、聡介は鉄クズの採集をジョージ達に依頼することにした。

もちろん自分もついて行くのだからということ、料金は上乘せるつもりではある。

その旨をジョージ達に伝えようと思い、二階へと上がると、一階に降りてこようとするジャックと目があった。

「あれ？ジャックどこか行くの？」

「ん？ああ適当に依頼を受けにいいかなと思ってね。あの2人は面倒くさいからって僕に押しつけたんだ。まったくぐうたらだよね。」

「あははは……それは大変だね……。」

ジャックの、パシリという悲しい理由に苦笑いを浮かべる聡介だった。

「ところでソウスケはどうかしたの？」

「ああそのことなんだけど、依頼をしようかなって思ってね。この前採取に行ってきたときに、遺跡で大量に鉄クズを拾ったって言うってたよね？それで、その遺跡に採取と観光も兼ねて行こうかなって思ってた。報酬だけ……300ギルくらいでどうかな？」

「分かった、いいよ。道案内と採取ってことだね。じゃあジョージ達に伝えてくるよ。これくらいの簡単な依頼ならお安い御用だよ！」

そう言って、軽い足取りでジョージのいる部屋に戻って行ったジャックだが、聡介はこのとき少し不安に思っていた。

なぜ、遺跡なんかに大量の鎧や、剣といった鉄クズがあったのか

少し前に聞いたことだが、その遺跡の近くで戦場になるような戦いはここ数年無いらしく、遺跡自体も簡単な構造ながらも雰囲気を楽しめるということで、初心者レベルでも無理なく通える遺跡だったからだ。

そこに大量の鎧や、剣が捨てられていたのはおかしいと普通なら考えらるだろう。

このとき、そんなことよりも遺跡に行く準備をしなくてはいけないと思い直した聡介は、ジョージ達と同様に、誰かに捨てられたのだらうと、深く考えることなく結論を出した。

出してしまったのだ。

後に、聡介はこの不自然さに気付くべきだったと、とても後悔することになる。

しかし、準備に追われる今の聡介は未だ気付かぬままだった。

ジャックと別れて一階へと戻った聡介は、準備をするために倉庫の中へと戻っていた。

木で偽装された床板をはがして、冷たい光沢を放つ鉄の板を露出させる。

鉄の板に手を重ねて練成し、鉄の板に鉄の扉をつくると、その扉をゆっくりと開いた。

扉の先に見えてきたのは先日練成したオリハルコン製の鎧と、同じくオリハルコン製の刃渡り110cmのクレイモア。

工房の中に誰もいないことを一応確認し終わると、表面揺らめく深紅の鎧をとりだしてしっかりと体に装着していく。

鎧をつけ終えた聡介は工房の中を適当に歩き、または激しく体を動かしてみても不具合がないことを確認する。

特に問題無かった聡介は倉庫の中へと戻り、クレイモアを取り出して腰に差す。

扉を閉じ、そのついでに再び練成して継ぎ目をなくすと擬装用の木の床板を張る。

再び工房の中へと戻った聡介は、クレイモアを鞘から抜いて一通り振り回すと、満足した顔で鞘へと剣を収める。

「よし、この防具と剣も問題はない。……流石に銘ぐらいは付けとこうかな……。何にしよう?」

剣にも防具にも銘がないことによようやく気づき、いまいち締まら

ないなと思った聡介は、急遽銘を考えることにした。

しばらく考えていた聡介だが、オリハルコンの別名『オーリキヤルク』を防具の名前にし、剣の銘を『クラウ・ソラス』にすることにした。

『オーリキヤルク』は、オリハルコンそのままの名前だが、『クラウ・ソラス』の方は、その名の通りの伝説を持っている訳ではないので、完璧に聡介の趣味によるものだ。

名前を決めて満足した聡介は、未だに準備の途中であることを思い出して、あわてて準備を再開した。

工房の分厚い鉄の扉を押して現れた聡介の姿を、準備を終えて先に工房の前で待っていたジョージ達は見えて驚いた。

なぜなら今の聡介の恰好は、深紅の鎧の上に、真っ白な外套を纏った姿だったからだ。

たしかに、燃えるような深紅に真っ白な外套は良く似合っていたが、ただそれはかなり目立つ物だった。

この国周辺では、鎧に調金や、装飾をする以外に色をつけるという習慣が無かったからだ。

結果として聡介の深紅の鎧は目立ちやすい物となってしまうた。

「ソウスケのその鎧って結構目立つね。鎧に色をつけるなんてことはこら辺じゃしないから、それはソウスケの住んでた地方特有の装飾法なのかしら？」

「んー、そうじゃなくて、この金属自体が色を持ってるんだ。ほら、この鎧見てくれたら分かるんだけど、表面が揺らいで見えるでしょ？」

不思議に思ったのか、エミリーが聞いてくると、聡介は外套から腕を出してガントレット部分をエミリーの目の前に出した。

すると、話を聞いていたのかジョージとジャックも、エミリーの横から覗くようにしてガントレットを見てきた。

3人が見ている間も、鎧の表面はゆらりと紅く揺らめいている。

「へえ……キレイだね……魔力でもかかっているのかな？」

「実は結構強力な魔力が込められてて強度もすごいんだよ？」

ジョージとジャックは少しの間みていただけだったが、エミリーは女の子だからだろうか、しばらくの間、揺らぐ鎧の表面を見つめていた。



「まあそれもいいが、さつさと遺跡に行っちゃおう。この時間ならまだ他の奴らは来て無いだろうからな」

ジョージがそう言ったので、エミリーも聡介の鎧を見るのをやめて自分の荷物をもった。

各々が荷物を持ったのを確認したあと、聡介が店の戸締りをして店の外へとでる。

遺跡はガーランドの街より北東に1時間ほど歩いた先にあるらしく、今回は馬をつかわずに歩いて行くことにした。

飲み物と食べ物を用意した一行は楽しそうに談笑しながら遺跡へと歩いていく。

そのとき太陽には少し雲がかかり、太陽の放つ光をいくらか遮っていた。

山の斜面に築かれた遺跡の入口が見え、入口まであと少しとなったころ、雲行きが怪しくなっていた空から大粒の雫が落ちてきて、それは瞬く間に大量の雨となっていた。

遺跡の入口に飛び込んだ4人は、体に僅かに着いた水滴をはたいて落とし、外の光景に目をやった。

外では強い雨がザアザアと降っていて、止むのはいつごろになるか分からない。

そんな光景を面倒くさそうに見ていたジョージが、松明に火を灯しながら口を開いた。

「この雨の中鉄クズ探すのも面倒だし、先に遺跡の中をみてまわるか……。遺跡の中の通路は多少薄暗いがまあこの松明で我慢するしかないだろう。」

ジョージの言葉を聞いた聡介は、松明よりも明るくできる灯油ランプのことを思い出し、鞆の中へ手をつ込んで灯油ランプを取り出すと、ジョージの松明から火をもらって灯油ランプに灯りをつけた。それを、先頭に行くジョージに渡すとジョージは驚いた顔をした。

「明るいな、松明なんか比べ物にならねえ……。これもソウスケのいた地方のものなのか？」

興味津津と言った顔をして灯油ランプを見ていたジョージが、聡介に尋ねると、聡介は話を合わすことにして練成したことを誤魔化すことにした。

その返事を聞いて満足したのか、ジョージは機嫌がよさそうにしながらランプを掲げ、ズンズンと奥へと進んでいく。

途中で大型のコウモリや、狼らしき魔獣に出会ったが、3人にとつては敵では無いらしく、すぐさま切り捨てていったので実にスムーズに進むことが出来た。

途中にある彫像や壁画を説明してもらっていると、ついに最奥の部屋へとたどり着いた。

その部屋は、他の部屋や通路とちがって天井が高く、広い聖堂のような場所だった。

更に特徴的なのが、山の中にも関わらず白い光がどこからか差し込んできていて室内を満たしていることだった。

部屋の奥には、黒いつるりとした大きな石壁があり、その左右を守るようにして大きな石像が立っている。

その光景はとても荘厳で神聖な空気を感じ取ることが出来た。

奥へと歩いていき、石壁の前までいくと、その石壁には文字が書いてあることが分かり、それを誰かに読んでもらおうと思うと、隣に来ていたエミリーが説明を始めてくれた。

「この文字を訳すと『王の証持たざる者何人も入るべからず。……

ココは削れている　　は死の制裁を心得るべし。王の証持つ者道を進み、精霊を従え、清浄なる光を持って闇統べる腐敗の王を滅すべし。』ってなるのよ。これは古代文字でね、3000年前に滅んだ王国の文字だって言われてるの。でもそれも不確かな物で、有るかどうかも分からない伝説の中の王国なのよ。それに王の証っていうのも、収める場所すら無いから形も分からないし、大きさも分

からないの。だから、調べることを誰もが諦めた遺跡ってわけね。」

そう言っただけとコンコンと石壁を叩いたエミリーは微妙に不機嫌そうな顔をしていた。

なぜだろうと思っているとエミリーが口を開く。

「この煤……誰かがここで石壁を爆破しようとしたみたいね……」

エミリーが見ている場所を見ると、たしかにうつすらと煤がついていた。

自分も錬金術でいつか壊してみようと思い、材質をたしかめようと考えた聡介も石壁に近づいていく。

ガントレットを嵌めたままの手で石壁を叩く聡介。

響いた音が甲高く、聖堂のような室内にひびきわたる。

そして

ピキッと何かがひび割れる音が大きく室内に響いた。

聡介達4人がギョっとして大きな音を立てた方向を見ると、石壁が縦に真っ直ぐに割れて内側に開いて行った。

石壁があつた空間の奥には地下へと続く階段が真っ黒な口を開けて待ち構えている。

聡介達4人はしばらく動けないでいた。

そして初めに口をひらいたのはジョージだった。

「ソウスケは王様だったのか……？」

「いやいや、そんな訳ないから！」

ジョージの素のボケに全力で突っ込む聡介。

「……理由は分らんが開いたなら俺達が最初の発見者だ。どうする？ソウスケ。さっきの石壁を見る限り、なにかしら戦闘があるのは確かだと思う。行くなら俺たちも追加料金を貰う形にはなるが付いていくぞ」

「ん、ちょっと不安だけど自分が触って開いたんだから行かなきゃいけない気がする……。悪いけどお願いするよ」

「ああ分かった。ただ、何があるか分からないから細心の注意を払

っていくぞ。俺が先頭で次がジャック、ソウスケ、エミリーの順番だ。離れるなよ。」

ただならぬ雰囲気は階段より感じ取ったジョージは、気を引き締めると隊列を整えた。

プロに従うしかない聡介は、不安半分期待半分という気持ちでいた。

長く、暗い階段を下りていく聡介達。

異様な雰囲気は大きくなるばかりで、聡介達はだんだんと不安になってくる。

長い階段が終わり、突如として開けた場所に出たと思うと、そこは真っ暗なドーム状と思われる広大な空間だった。

その空間の中心で、強い光を放つ円柱が一本だけポツンと立っている。

誘蛾灯に集まる虫達のように、強く明るい光に魅せられて引き寄せられていく聡介達。

しかし、聡介だけを残して他の3人は突如として進めなくなる。

まるでそこに見えない壁が存在するように、3人は行く手を阻まれた。

一人進んでいく聡介は3人がついてきていないことに気づかない。

今の聡介の目には光り輝く円柱しかみえていないのかもしれない。

光に魅せられていたということに、ようやく気付いた3人は聡介をとめようと口ぐちに叫ぶ。

それすらも聞こえていないような聡介はどんどんと円柱へ歩みを進める。

円柱まで、あと3mとなった時、変化は訪れた。

光り輝く円柱が暗闇の中で一際大きく光を放つと、円柱は消え去り、そこには光り輝く一人の美しい女性が立っていた。

4778文字です。ついに話数が2ケタになりましたよ！  
自分……がんばってます！

ただ…未熟なので表現しにくい部分もあるのは事実……。  
気を引き締めていきたいと思います。

さて、今回は伏線回収しました。伏線はあの話にありますよ！

…さて、次回はでかい山場です。時間がかかると思います。

でも、次の回はすごく重要なので楽しみにしてください！

私は感想がなくてもめげない！（嘘です、すいません

では、次回をお楽しみに！



## 011 光と腐敗

011 光と腐敗

暗闇をかき消すかのように、全身から眩い光を放つ女性は、この世のものとは思えないほどの整った美貌の持ち主だった。

光の中で波打つように揺れる髪は輝き放つブロンド、鼻筋はスツと通り、開いた瞳は金色で、瞳の中は星を散らしたかのような輝きをはなっている。

出るべきところは出て、締まるべきところは締まった美しくきめ細やかな肌を持つ肢体。

その肌の上には、まっさらな白地に金糸で複雑な刺繍をあしらった法衣の上に、キラキラと光を反射させる薄くサラサラとした布を何枚も纏っている。

聡介があまりの神々しさに我を忘れていると、後ろから絞り出すようなエミリーの声が聞こえてきた。

「嘘……でしょ……？……大精霊レイルス……こんな遺跡にいるなんて……。信じられない……。なんでこんなところに……」

呟いたエミリーは大精霊の姿に目をうばわれていた。

それもそのはずで、目の前にいる姿は世界創生の神話によく語られる光の大精霊レイルースの姿であったからだ。

この世界パラノーシスは、6柱の大精霊によって成り立っていると  
言われている。

光のレイルースは世界を照らし、生きとし生けるモノの目に光を与え、活力を与える。

闇のスキアノクスは世界を闇で覆い、生きとし生けるモノの活動を止まらせ、安らぎを与える。

風のウエントウスは世界を駆け回り、生きとし生けるモノの背中を押し、勇気を与える。

炎のプロクスは世界を燃やし尽くし、生きとし生けるモノの全てを滅し、再生を与える。

土のテトラスは世界を持ち上げ、生きとし生けるモノの足元を支え、誕生を与える

水のアクアスは世界を潤し、生きとし生けるモノの体内を廻り、成長を与える。

6柱の大精霊によって世界が創生され、大精霊より分かれた精霊達  
の加護により生き物は魔法を扱える。

今もどこかで世界を支え続けていると言われている大精霊達だが、  
発見出来たものはいなかった。

そんな大精霊の1柱が、今や聡介の眼前に光を放ちながら立っているのだ。

聡介は、いつまでも眩いばかりの光を放つレイルースに目を奪われていた。

「我は光の精霊レイルース。ここは腐敗の王を封ずる処なり。汝、腐敗の王を越え、我が光を己が内に求むるならば、王の証たる神の加護を授けし聖銅を見せよ。」

レイルースの口から発せられた言葉に、聡介はぼうつとしながらも自分の腰に下げられている剣を見た。

聡介が持っている剣は、オリハルコンで創られた『クラウ・ソラス』だ。

オリハルコンは、『山の銅』とも言われる銅の頂点に存在する金属……いや、全ての金属の頂点に君臨する金属だ。

他に銅製の物を身につけて無い聡介だけが、聖銅と言われて分かった。

聖なる銅……それはつまり、オリハルコンのことだったのだ。

視線を腰に差した剣へと向ける聡介は、鞘口から紅い光がうつすらと漏れ出していることに気がつく

否、それだけでは無く、全身に身に付けたオリハルコンの鎧すらも、

深紅の光を察していた。

オリハルコン達がレイルースの力に反応して共鳴しているのだ。

「ソウスケの全身が真っ赤に燃えあがっている……」

眩いたジャックが見た先の聡介の体は、燃えあがるように揺らめく  
紅い光の中にあつた。

遠くから見ることにしか出来ないジャック達は、その姿に茫然として  
いた。

剣を鞘から抜き、両手で握った剣を何かに突き動かされるように体  
の前へと掲げた。

「王を継ぐ者。我は汝に、永久の光と守護を。汝は我に、不浄を打ち  
崩し光の導き手となることを。契約は光の精霊レイルースの名に  
おいて。契約を交わすならば、我が試練を受けよ。打ち勝ちし時、  
我は汝に光を与えよう。」

レイルースは言い終わるとその体を光に変え、円柱の中へと吸い込  
まれていった。

完全に吸い込まれ、光を一際強く輝かせた後、円柱はひび割れる。

不吉な光景と感じた4人は知らずのうちに1歩後退した。

円柱のひび割れた個所からは、黒い霧が蛇の吐息のようにシューシューと立ち昇る。

黒い霧はゆつくりと、確実に広がって行く。

ついに聡介のところまで迫ったが、聡介はゾクツとした悪寒を感じて3人の居る場所まで戻る。

「ねえ……あれって何だと思う……？」

「知らん。……体に良いものとは到底思えないがな」

「あんなに黒い霧なんて見たことがないわ……」

聡介が冷や汗を流しながら尋ねるが、ジョージとエミリーから帰ってきた答えは期待したものではない。

「瘴気……」

振り返り見たジャックの顔は青褪めていて、恐怖の感情が張り付いていた。

「……昔本で見たことがある……。あれはたぶん瘴気だよ。死の空気が、魔界の空気色々言われているけど、共通しているのは『死』っ

てこと。死んでからも動き続けるモノは、瘴気を出し続けて、生きて居るモノを皆殺そうとするらしいよ。瘴気を生物が吸い込みすぎると、衰弱して死ぬらしいから気をつけて。」

ジャックの注意に、3人は冷や汗を流しながらゆっくりと頷いた。

広がる瘴気は濃度を増し、中心部分は真っ黒に染まり何も見えなくなってくる。

そして、次第に意思を持ったかの様に流動し始めた瘴気は一つの形を作り上げる。

ある一定の形まで達した瘴気は、質量をもった物質へと変化していく。

それを見続けるジョージは何かに気付いたようだ。

「オイオイオイ……。冗談じゃねえぞ……。なんでこんな遺跡に出てくんだよ。クソッ、ふざけんな！」

「ちょっとジョージ!? 一体あれは何なのよ!？」

一人気付いたジョージが悪態をついたが、すぐにエミリーが叫ぶように説明を求める。

その間も固まっていく瘴気は、とある生き物の形になっていった・

「クソツ！ありやあ、ドラゴンゾンビだ！耳ふさげ！でかいのがくるぞお！！」

ジョージが叫んだ瞬間ジャックとエミリーは直ぐに耳を塞いだ。だが、聡介はなんのこともわからずに立ち尽くしているだけだった。

聡介がそうしている間に完全に形を成したドラゴンゾビは、血のように赤く輝く目を聡介たちへと向ける。

そして、獲物を視界に捕らえたドラゴンソんびはわずかに首を反らし、巨大な顎を<sup>アギト</sup>開け放つと、黒い口腔の奥から腐った体液を撒き散らしながら咆哮をあげた。

才才才才才才才才才才才才才才才才！！！！！！！！！！

巨大な顎から発せられた咆哮は地下の空気を震わせ、衝撃波の爆風アキトとなつて聡介たちを襲つた。

ドラゴンが獲物を見つけると獲物を怯ませるために咆哮を發すると知っていたジョージ達は、耳を塞ぐことでなんとか気絶をすることは免れたが、耳を塞がずに立っていた聡介は衝撃波の爆風をもろにうけた。

160デシベル以上の爆音　飛行機のエンジン近くで120デシベル　の衝撃波を受けた聡介は内耳の聴覚細胞を傷つけられ、平衡感覚を失ったことでついには気絶してしまった。

気絶する直前で聡介の目に映ったのは、腐液を流しながらも体中から黒い瘴気を立ち上らせ、こちらを赤く輝く眼で睨みつけてくるドラゴンゾンビの姿だった。

なんて毒々しく、憎しみに彩られた目なんだろうと思いつながら、聡介の意識は遠のいていった。

聡介が倒れてしまってからしばらく、戦況はおよそ良いと言えるものではなかった。

聡介を襲わないようにドラゴンゾンビを挑発したりしているジョージ達は十数分で疲弊し始めていた。

というのも、ジョージ達の武器ではドラゴンゾンビに致命傷を与えるどころか、かすり傷を与える程度しかできなかったからだ。

腐ってもドラゴン種……骨と腐った肉体だけになったといっても強靱な防御力は変わりはないなかったのだ。

そのうえにドラゴンゾンビの放つ一撃は、掠るだけでも致命傷になるほどに殺傷力を持った巨大な爪の一振り。

完全に避けきるしかない一方的な戦い……そして相手は無尽蔵の体力を持つドラゴンゾンビ。



ジョージ達が疲弊するのは仕方ないことだった。

そして、よけ続けられて痺れを切らしたのか、ドラゴンゾンビの次の一撃で状況は最悪の状態へと変化した。

今まではジョージ達3人を一掃するために、死神の鎌のように左右から振られていた一撃が縦へと振り下ろす一撃に変化したのだ。

これがただの魔獣の一撃なら避けるだけで事足りたが、ドラゴンゾンビの一撃は地下の空間を激しく揺らした。

よほど頑丈に作られているのか地下の天井が崩れ落ちてくるということは無かったが、地面を揺らしたためにジャックの体勢が崩れた。

ほんの少し、それもヨロツとする程度のもだった。

それでも、一撃必殺をほこるドラゴンゾンビの一撃を辛うじて避けていたジャックにとって、それは致命的過ぎるほどの隙だった。

当然、ドラゴンゾンビがそれを見逃すはずもなく、ジャックに向けて鋭く巨大な爪を振るった。

体勢が崩れるのもかまわずにバックステップを踏んだジャックは、なんとか一撃目をよけることが出来た。

そつ……一撃目は避けられたのだ。

無理を承知でバックステップを踏んだジャックは、さらに体勢を崩した。

ドラゴンゾンビが無情にも巨大な腕を振りかぶる。

体勢を崩したジャックは、まだよろけている。

そしてついに、ジャックを確実に死に至らしめる一撃が振るわれた。

「ジャアアアアアアアアアアアアアアアアック！！！！！！」

ジャックを助けようとして、叫びながら走りこんでいったジョージは、眼前を通り過ぎた一撃が起こした突風によって吹き飛ばされた。

「イヤアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

ジャックへと迫るドラゴンゾンビの一撃を目にし、エミリーが悲痛な悲鳴を上げる。

そして

ドラゴンゾンビの一撃は狙いたがわずにジャックを吹き飛ばした。

まるで大砲で打ち出されたように猛烈なスピードで吹き飛ばされていったジャックは、何度もバウンドして、地下の硬くゴツゴツとした地面に叩きつけられた。

ジャックは、すらりと伸びていた手足を不自然な方向に折り曲げ、大量の血を流してピクリとも動かなかった。

再度、エミリーの悲鳴が広大な地下空間に空しく響きわたった。

聡介は、とてつもなく大きな揺れを感じて、ようやく目を覚ました。いまだに耳鳴りがして、頭痛がするのをなんとか気合で押さえ込み、状況を把握しようとする。

聡介が体を起こして最初に見た先にはジャックがよろめいて体勢を崩したのが見えた。

その次に奥で鋭い爪を振り上げる巨大なドラゴンゾンビ。

助けなければ……そう思った聡介の体は動かない。

怖い……そんな感情が頭の中を支配していた。

意識を失う直前に見た、憎しみに彩られた血の様に赤く輝く眼が脳裏に蘇る。

そうしている間にもジャックには鋭く巨大な爪が迫る。

それをなんとかバックステップをして避けたジャックを見て、聡介は安堵に胸を撫で下ろす。

やはり、自分が出て行かなくてもジャック達はプロの冒険者だ、任せれば良いと思ってしまった。

目を上げた聡介の目の前では体勢を立て直そうとしているジャックがいる。

それをなんとなしに見ている聡介の目に、奥で爪を振りかぶるドラゴンゾンビが映った。

未だジャックは体勢を整えられていない。

今度こそ助けなければ……そう思ったが、やはり足がすくんでしまった。

そして、ジャックを殺そうとする一撃がドラゴンゾンビによって放たれた。

その一撃は助けに入ろうとしたジョージを突風で吹き飛ばし、ついにはジャックを吹き飛ばした。

え？

そう思う間も無く自分の数メートル横を吹き飛んでいったジャック。

後ろを振り返ると、手足を不自然な方向に曲げて血を流して動かないジャックがいた。

ジョージは吹き飛ばされて遠くで動かないまま、エミリーは涙を流して膝を突いている。

短い間ながらも本当に仲良くしてくれた3人。

その瞬間に聡介の中で、なにかが弾け飛んだ気がした。

殺してやる

ふらりと立ち上がった聡介の目は、垂れ下がってきた髪で隠れて見えない。

腰に差さったクラウ・ソラスをゆっくりとした動作で引き抜く聡介。

「殺してやるッ！……！！……！！……！！」

憎しみを込めて叫んだ聡介は、全力でドラゴンゾンビのもとへと矢のように駆けていく。

聡介を迎え撃とうと再び爪を振り上げて、ゴウゴウと風を巻き込みながらドラゴンゾンビは腕を振るう。

「邪魔だ！！！！」

腕を振るおうとする聡介の手の先で、バチバチと練成が始まりだす。

そして、振り切る聡介の手の動きに合わせるかのように巨大な紅い槍が精製されて、ドラゴンゾンビの腕を串刺して動きを止めた。

初めて傷を負ったドラゴンゾンビが鋭く悲鳴を上げるが、それさえも途中でやめることになった。

まわりの空気ごと瘴気を切り裂いて飛来した巨大な槍が、ドラゴンゾンビの喉を貫くことになったからだ。

自分を守ろうとして残った腕を我武者羅に振り回すドラゴンゾンビ。

しかし、それが聡介にあたることは無かった。

聡介が走りを緩めることなくクラウ・ソラスを振り抜き、その腕を切り飛ばしたからだ。

手首ごと斬り飛ばされた腕は一度空中を静かに舞った後、ズズウンと音と粉塵を立てて地下の地面に落ちる。

再度腕をふるって紅い槍を練成した聡介は、それを投げ飛ばして手首の無くなった腕を地面に縫いとめる。

両腕と喉を串刺しにされたドラゴンゾンビは、その場から動くことも咆哮をあげることも出来ずにただ立っているだけだ。

しかし、いくら聡介の身体能力が強化されていようとドラゴンゾンビの頭まではジャンプしても届かない。

腕を振るう聡介は再度練成をする。

そして、今度は地下空間の天井から真っ赤な太い柱が伸びてきてドラゴンゾンビの頭を地面へと押さえつけた。

それを確認した聡介は更に走るスピードを上げ、クラウ・ソラスを大上段に振りかぶった。

いまや聡介は戦場を駆け抜ける軍馬の如く速い。

ドラゴンゾンビは頭を押さえつけられたまま、巨大な顎アギトを開くことも出来ずに動けずにいる。

最後の一步で地面を踏み切り空中から振り下ろされたクラウ・ソラスは、柱ごとドラゴンゾンビの頭を一刀両断した。

そして、ドラゴンゾンビは悲鳴を上げることなく動かなくなり、灰になると消え去っていった。

いま、立っているのは聡介とジョージだけだ。

どうやらジョージはあれから直ぐに立ち上がってこの戦いをみていたらしい。

エミリーはというと、呆然とした面持ちでドラゴンゾンビの消えたあたりを見ている。

「終わったの……？」

エミリーがつぶやくようにいうと、聡介もジョージもやっと武器を下ろした。

やっと、終わった……

そう思うと聡介の膝から力が抜けそうになったが、なんとか踏みとどまる。

すると、またもや目を焼くような眩いばかりの光が目の前を覆いくす。

そして光が止み、目をようやく開けると目の前には光の大精霊レイルースが再び姿を現していた。

「見事。我は契約を交わそう。我が光を汝に。光の加護を、光の導きを汝に。我が光は永久に汝と共に歩み、永久に汝の道を照らす。汝が望むならば、どんな障害であろうと切り裂き、道を示そう。今ここに光の精霊レイルースが誓おう」

そついうとレイルースの体から真っ白な光の珠が生み出され、クラ



ウ・ソラスの中へと吸い込まれていった。

光の珠を吸い込んだクラウ・ソラスは次第に輝きを増してくる。

ついにオリハルコンの紅い刀身は眩く光り輝く刀身へと生まれ変わった。

それはレイルースと同じ光を発していて、まるで伝説の中に登場した本物のクラウ・ソラスと同じような神々しさだった。

ケルト神話の中でダーナ神族を率いていた王ヌアザが所持していた光の剣。

一度鞘から抜かれれば、その一撃から逃れられる者はいない不敗の剣。

誰一人逃れることも隠れることも出来ず、どんな敵も探し出して必ず打ち倒すヌアザの剣。

まさにその剣がここに出来上がっていた。

そして、それを見届けたレイルースは輝き始め、去ろうとしていた。

「待ってください！ジャックを……ジャックを助けてください！」

そう叫んだ聡介の言葉に動きを止めてゆっくりと聡介のほうに向き直るレイルース。

「契約を。汝は不死になり、永劫を生きること。我はその者を生き返らせることを。契約を望むならば、誓いの言葉を述べよ」

生き返らせることが出来る。

その言葉に聡介はすぐさま飛びついた。

代償に永劫を生きることが条件に。

そうしてジャックは生き返り、聡介は不死を手にした。

このときの聡介は、永劫を生きるという意味を勘違いしていた。

そして、聡介の長い長い人生がこの時より始まったのだった。

011 光と腐敗（後書き）

6595文字です。

難産！すごい難産！死ぬほど難産！

もうね、皆さんが納得できるかどうか不安でございます……。

この話を読んで時間があるならば、この話の感想をもらえると嬉しいです。

今回ばかりは誹謗中傷も覚悟しております。

では、この話を読んでも次を見てくれるのならば！

次回をお楽しみに！

012

帰還と覚悟

一部修正（前書き）

ラスターは間違いでした  
正しくはクラウです

一向は生き返ったものの体力が戻らないジャックと、怪我を負ったジョージを支えながら遺跡から出て街へと戻っていた。

遺跡の地下空間につながる扉は、聡介たちが出ると独りでに閉じていったので問題は特に無いだろうと思いきそのままだ。

街へと戻ってきた聡介は、ジョージとジャックを回復させるために病院　治療師が魔法を掛けて直す場所　へと送り届けると言ったエミリーと別れ、一人店へと帰ってきた。

店へと帰ってきた聡介は『安全守る君』に暗証番号と鍵を入れ、店内へもどってきた。

遺跡ではあんなことが起こったのに、店内は朝店を出たときと何も変わっていない。

そのことに安堵すると急に力が抜けていく気がした。

おそらくは張っていた緊張の糸が、変わらない日常の風景を見ることでプツンと切れたのだろう。

ふらふらとカウンターまで歩いた聡介はカウンター裏に置いてある椅子にドサッと座った。

「疲れた……。……僕が行くなんて言わなかったら、皆が怪我することなかったのに……。生き返ったって言ってもジャックは一度死んだんだ。明日、謝らなきゃ……。」

今日のことを思い出した聡介は、もしジャックがあのまま死んでいたらと思うと急に怖くなってきた。

椅子に座る聡介は、まるで自分を守るように体育座りをして身を縮ませた。

自分が殺した……。そんな自責の念にとらわれ始めた聡介を現実引き戻したのは、腰に指していたクラウ・ソラスだった。

光り輝くクラウ・ソラスは、罪というものを知らないかのように真っ白に輝いている。

罪を感じ暗く落ち込む自分と、罪を知らないように輝くクラウ・ソラス。

聡介は知らず知らずのうちに腰にさしたクラウ・ソラスを抜き、カウンターの上にゴトリという音と共に置いた。

カウンターの上へと置かれたクラウ・ソラスは相も変わらず光り輝いている。

そんなクラウ・ソラスを見つめていると罪が許されていくような気がして、聡介は見入っていた。

《いつまでも暗くしていても何も始まりませんよ?》

突然頭の中に響いてきた声にビクツとして周りを見渡す聡介だが、店内にはもちろん誰もいない。

《私です、私。目の前の輝いている剣ですよ》

鬱になりすぎて幻聴まで聞こえてきたと頭を抱え始める聡介だが、そんなことは無視して剣は話しかけてくる。

《レイルス様に命じられてこの剣に住み着くことになりました。これから先アナタが悪の道にそれない限りは、私がアナタの力になります。ですが私の力が必要になさそうなほどイイモノは持つてるみたいですけどね》

「え〜っと……。光の精霊だって? 本当に?」

《本当ですよ、なんなら実体化してみせましょうか?》

聡介は一瞬で、光り輝く小さな裸の『女』の妖精を想像してしまい、顔が赤くなりそうだったので即座に断った。

《ずいぶん悩んでいたみたいですが、この世界で生きていくためには植物も、動物も、人でさえも殺さなければいけないことがあります。慣れるとは言いませんが、それがこの世界の現実です》

「でも！そんなのが殺してもいい理由になるわけがない！」

《よく考えて下さい。アナタが考えるべきは、殺しても許される言い訳ではありません。殺した後にアナタ自身がどうすべきかです。殺したならばソレに感謝して、ソレを糧に成長すればいいですし、今度は殺しをしないように気をつければいいのです。一番ダメなのは、その『死』を無駄にすることです。》

正論を言われて反論することが出来なくなった聡介は、黙っている間に言葉を何度も頭の中で繰り返す。

やがて、その通りだと思えるようになった聡介は重い口を開いた。

「そうだよな。……間違ってたよ。ありがと……え〜っと」

《ああそういえば自己紹介まだでしたね。私は光の精霊。名前自体はありませんので、この剣の銘と同じでかまいませんので、クラウドと呼んでください。これから先よろしくおねがいしますね。》

「僕は神尾聡介。名前はソウスケだよ。これからよろしくね、クラウド」



そうして、聡介はクラウと始めて出会い、そして、ジャックを殺してしまったという自責の念から抜け出すことができたのだった。

その後、特に何もする気が起きなくてカウンターに座って寝ていた聡介が目を覚ますと既に外は暗くなっていた。

暗くなった店内に明かりを付けようと思い、灯油ランプを取ってきて灯りをともす。

ランプの明るい光はすぐさま暗い店内を照らし、闇を蜘蛛の子を散らすように退治していく。

明るくなった店内からは窓を通して灯りが通りにもれ出ていたのでカーテンを閉めておくことを忘れない。

明るくなった店内では聡介が一人座っているだけで、音は何もしない。

暇ではあるが昼寝をしたせいもあって寝ることが出来ない聡介は、何をしようかとしばし悩んでいたが、やはり何もすることが無かったのとおりあえずクラウ・ソラスを抜いて見た。

相変わらずクラウ・ソラスの刀身は眩く光り輝いている。

《……あの、そんなに舐め回す様に見ないで下さい……恥ずかしい

です……」

「ちょっと待ったああ！僕はただ剣を見てただけで、そんな変な目で見てたわけじゃないよ！ていうか、そもそもクラウはそんなキヤラだったの!？」

《アハハ、細かいことは気にしないで下さい。少しぐらいはこういうキャラの人がいたほうがいいんじゃないですか?》

ダメだコイツ、早くなんとかしなきゃ……と頭を抱える聡介は、ダメな部下を持つ中間管理職の人もこんな感じなのかなと思っていた。しかし、そんなことはさておきといった感じでクラウは話しかてくる。

《そういえばソウスケは変な力もってましたよね？あれは生まれつきの特異な能力が何かなんですか?》

話すべきかどうか考えた聡介だが、話しても特に害はないだろうと判断して、この世界に來たいきさつも含め、全ての事情をクラウに話した。

《……けっこう、大変な人生送ってるんですね、ソウスケって。まあ私が全ての敵を一撃で倒してあげますので安心して下さい!》

「……非常に不安です……」

《あらあら、私の力分かってないようですね？待っていて下さい、今見せますので》

そういったクラウドはクラウド・ソラスの刀身を真っ白に輝かすと、ゆっくりと宙に浮いた。

クラウド・ソラスの刀身には見たことも無い文字が刻まれていてそれが強く発光しているのが見て取れる。

独りでに浮かび上がったクラウド・ソラスは部屋の中を縦横無尽に飛び回っていた。

聡介がその光景に唖然としているがそれもそのはずで、『本物のクラウド・ソラス』はひとりでに動き、隠れた敵まで探し出して倒すという自動追尾機能までそなえた剣だったからだ。

聡介が作った『クラウド・ソラス』は形こそクレイモアだが、機能と輝きは本物のクラウド・ソラスと何一つ変わらない。

《見ましたか、ソウスケ。これが私の…ちか……ら……です……あれ？》

そついいながら目の前に飛んできたクラウドだが、なぜかいきなり高度を落としてカウンターの上に転がった。

落ちたさいに、カウンターの端っこがごっそり切り落とされたのを

さりげなく錬金術で修復しておくのを忘れない。

「あれ？どうしたの？」

そう聞いた聡介にクラウドは悔しそうに呟いた。

《ああ……。魔力切れです、コレ。私出来たばかりの精霊だからまだ魔力少ないの忘れてました。……いえ、時間さえたてば魔力は増えますし魔術も使えるようになるのでそんな目で見ないで下さい！》

聡介の微妙そうな視線に気づいたクラウドは　目も無いのにどうやって気づいたかは不明　慌てて言葉を足したが、実際に自立行動ができるようになるのはもう少し先らしいということが分かった。

それからもしばらく楽しそうに？会話をしていた聡介だが、ようやく眠くなってきたので寝ることにした。

ランプを消し輝くクラウド・ソラスを掲げながら工房を押し開けてベッドを置いてある場所まで歩いていく。

このときクラウドは、道を示すとは言ってましたけどこんな事に使うためじゃないです！と憤慨していたが聡介は華麗にスルーしていた。

ベッドへと戻った聡介はクラウド・ソラスを鞘の中へと納めて枕元に置いておく。

枕元に置いたのは、クラウが倉庫なんかにいれないで下さいと言ったからであり、着ていた防具は既に外して倉庫の床の鉄板の下にしまっている。

そしてクラウに、お休みと言った聡介は眠りに付いたのだった。

長く大変だった一日の終わりの夜空からは月が消え、その代わりにたくさん星が湧くように満天の星空が広がっていた。

太陽が山陰から顔を出し、町を朝焼けに染め始めたころ、聡介は目が覚めてしまったので起きることにした。

外に出て顔を洗い、身支度を整えるとサッパリとした気がする。

工房に戻った聡介は腰元にクラウ・ソラスを差し、冒険者ギルドで依頼を済ませた後にお見舞いに行くことにした。

冒険者ギルドについた聡介は受付のお姉さん　素晴らしい営業スマイルの持ち主の例の人　に鉄鉱石と鉄クズ、木炭の採取の依頼を出している。

朝早いためか周りには泊り込みの依頼を終わらせた冒険者の人達が仮眠を取っているか、ご飯を食べているだけだ。

いつもの賑やかな鳴りを潜めている冒険者ギルドというものはいく

らか新鮮な気もする。

そんなことを思いながらも依頼を出し終えた聡介は、今度はお見舞いへいくために冒険者ギルドの扉を開けて病院へと向かう。

活気が出てきた市場の前を通る途中でいくつかの果物を買っていくことは忘れない。

この世界ではどうかは知らないけれど、元の世界では見舞い時に果物を持っていくのは定番だね、などと思いつつ買い物をすませて病院に行く。

病院へとついた聡介は受付らしき女性に声をかけようと近づいていく。

「あのーすいません。昨日ココにジョージとジャックっていう二人がきたと思うんですけど、どこでしょうか？」

聡介に話しかけられて振り向いた女性は、ブロンドの髪に銀色の目をした可愛らしい顔立ちの人だった。

白い修道服みたいなものを着ている彼女は背中に白い羽をつけたらちょっとした天使に見えそうだ。

「あつ、その二人なら少し前に治ったって言って出て行きましたよ？体力事態はもどったみたいですけど、本当はもう少し休むべきなの……むう……。アナタのお連れさんならもうちょっと休むよう

に言っておいてくださいね！」

そう言った天使ちゃん　　適当に命名　　は、他の人に呼ばれて忙しそうにパタパタと　　羽ではなく足音である　　いわせて出ていった。

それはさておき、どうやらジョージとジャックは既に退院してどこかに行ってしまったらしい。

せっかく買ったんだけどなあ……と思いつつ袋の中を見ると、中ではリンゴとバナナ、それと桃の味でぶどうの形をしたフルーツがおいしそうに詰まっていた。

仕方なく店へと戻ることに決めた聡介は、通りを自分の店に向かってゆっくりと歩いていく。

角を曲がり、自分の店が見える通りに入ると、聡介は店の前にジョージやジャック、エミリーの３人の姿を視界にとらえた。

早めに退院してまでなんで店に来ているのだろっ、と疑問に思いつつも３人のもとへと歩調を早めて歩いていく。

やがて、３人も気付くと寄りかかっていた堅い石壁から背中を離す。

そして、果物の詰まった袋を抱えながら小走りになって３人のもとに着いた聡介は、ジョージとジャックに話しかける。

「二人とももう体は大丈夫なの？病院の人はまだ安静にしてなきゃ

ダメだつて言つてたよ？」

「ああ、俺たちなら大丈夫だ。それよりも聡介、話があるんだが……」

「……まあ立ち話もなんだし、とりあえず中に入ろうか。」

ジョージの表情から真面目な話をする雰囲気を感じ取った聡介は、落ち着いて話をできるように店内へ案内する。

『安全守る君』を開けた聡介は店内を進み、カウンターの前に椅子を3つ並べると、自分はカウンター裏に回って紅茶　日本茶は無い　を簡単に入れてカウンターの上に並べる。

紅茶を入れている間に席についていた3人は聡介に短くありがとうと言うと、聡介が席に座るのを待っていた。

聡介が果物の詰まった袋を下ろして席に座ると、ジョージがしゃべり始めた。

「で、話なんだが……。ソウスケ。俺たちは今回の戦いで全く歯が立たなかった……。剣技はともかく、俺達の武器なんかじゃ掠り傷を少しつけるだけしか出来なかった……。……悔しかった……。俺はジャックがやられるのを見ていただけだった！もう仲間は失わせない！タダ働きでコキ使ってくれてもいい！俺に最高の剣を打ってくれ！」



ジョージは悔しそうに表情を歪ませ、歯を食いしばり拳を握りしめていた。

仲間を大切にするジョージにとっては、一時的とはいえジャックを死なせたのが悔やんでも悔やみきれないものだったのだろう。

剣を打ってくれ！と言ったジョージの目には、仲間を失わせないと  
いう固い決意の炎が静かに揺らめいていた。

「僕も今回のことで力不足を悟ったよ。相手がドラゴンゾンビだったとはいえ、防戦一方でやられるのを待つしかなかった。……死ぬ瞬間は恐怖で泣きそうだったよ。僕は誰にもあの恐怖を味あわせたくない。だから……僕にも剣を打ってくれ、ソウスケ」

ジャックは実際に死ぬ瞬間に感じた恐怖を思い出したのだろうか、一瞬だけ体を震わせた。

しかし、顔をあげてソウスケへと頼んだジャックの顔からは恐怖の色は消えていて、その代わりに、覚悟を決めた戦士の顔が浮かんでいる。

「私なんて何も出来なかったわ……。ただ……泣いていただけ……。ジョージとジャックが頑張っていてくれなきゃ私なんて直ぐに死んでいた……。お願いソウスケ……。私にも力を頂戴……！」

そういったエミリーは泣きだしてしまいそうな表情で、今にも崩れ

てしまいそうだった。

俯いて、拳を膝の上でキュツと握り閉めている様子は、年相応のか弱い女の子にしか見えない。

しかし、最後に呟くように口にした言葉には、確かに力が籠っていた。

それぞれに決意を固めた3人を見た聡介は、この3人になら強力な武器を作ってもいいかもしれないと思い始める。

それはすぐに、自分が巻き込んだという負い目も重なり、3人に武器をつくろうという決意に変わった。

「うん、分かった。今僕が出来る範囲で最高の武器をつくるよ。」

そう告げた聡介の言葉を聞いた3人はありがとうと感謝の言葉を口にした。

「でも、鉄鉱石も魔鉱石も残りが少なすぎるんだ。このままじゃ3人分は作れない……。悪いんだけど、鉄鉱石と魔鉱石を取ってきてもらえないかな?」

「ああそれぐらいお安い御用だ!すぐに取ってくる。待っていてくれ。」

聡介の言葉を聞いたジョージはすぐさま取りに行くことを決めてジャックとエミリーを促して直ぐに店を出ていった。

3人が出ていった後、聡介は3人の武器をどうするのかという課題に頭を悩ませていた。

うーん……と悩んでいる聡介の横顔は、それでも少し楽しそうに見えた。

その腰元ではクラウ・ソラスが淡く輝いている。

眩しく照りつける太陽はそろそろ南中に至ろうとしている。

6067文字！疲れた…。

自分土日バイトをいれることになったので更新は今までよりも遅れます。

なるべく一週間に最低でも1回は更新したいなあとはおもっているのですが…。

今回はジョージ、ジャック、エミリー達の武器作りと、御店再開のための商品作りです。

それでは、もうすでに恒例となってきた閉め言葉ですが…

次回をお楽しみに！

013 アドルフと銀（前書き）

先に謝らせてもらいます……。

武器作り今回入りませんでした！

入れる予定なかったアドルフさんいれちゃったので……

楽しみにされてた方には申し訳ない。

では、ドゾドゾ……

## 013 アドルフと銀

013 アドルフと銀

《……ソウスケ？ちょっと疑問に思っていたんですけど、法則が無視できるのなら鉄鉱石を持ってきてもらわなくてもいいんじゃないんですか？》

3人がいなくなったのを見計らってだろう、腰元に差したままクラウが話しかけてきた。

通りを見ていた聡介はクラウ・ソラスへと視線を落とす。

「ん、まだイメージが出来ないのもあるんだけど……。やっぱり一番大きいのは、周りの人に不信感を与えないためかな。いくらなんでも、材料を補充してないように見えるのにたくさんの武器をつくってたら変に思うでしょ？だから、定期的に補充する必要があるんだ。……この力がバレて、誰かが利用しようとしなとは思えないから……。」

《そうですね。そういうことなら納得です》

「まあこの店が大きくなって、色々な材料を扱えるようになって大丈夫そうだったらするよ。それまでは、我慢するしかないなあ……。」

「

どうするかなあとボンヤリ考えていると、チリンチリンと来客を告げるドアチャイムの軽やかな音が店に響く。

ドアの所を見ると、そこには鎧を纏った冒険者風の男が二人 片方は右目に眼帯を、もう一方は右頬に大きな切り傷がある いた。

眼帯をした方の男はガシャガシャと鎧を揺らし、大股で聡介のいるカウンターまで歩いてくる。

「依頼を受けに来た。俺がニコラスで、アッチのがジェフリーだ。」

眼帯男はギルドから持ってきたのであろう依頼書を木のカウンターの上に置きつつ、聡介に簡潔に告げた。

一方、切り傷男のほうはというと、話は眼帯男にまかせているのか店の中をうろついて もっとも営業中では無いので商品はほとんど無く、直ぐにコチラに来た いる。

「ああ、はい。ニコラスさんとジェフリーさんですね。では、採集をお願いしますね。」

眼帯男改めニコラスは短く了承の返事をする、ジェフリーを連れて店の外へと出ていった。

店内に一人となった聡介は、とくにすることが無いのでひと眠りし

ようかとも思ってたが、珍しい材料を探しに市場を散策することに決めた。

荷物を纏め、『安全守る君』でしっかりと鍵を掛けて外に出ると、外は昼時のために結構人があふれていた。

市場に向かうために通りを歩いていこうと思っていた聡介は、その光景を見て行くのをやめようかと思い、首を回した先で少し狭い路地を見つけた。

暗すぎるわけでもなく、別段危険そうな雰囲気を感じ出しているわけでは無かったので、現に何人かだが歩いている。その路地を通っていくことにした。

両脇の建物によって影になっている路地は涼しく、人もまばらなので意外に進みやすく聡介はこれ幸いとばかりに歩いていく。

ふと横に目をやれば、建物脇に無造作に積み上げられている木箱の上には子供の黒猫が3匹集まってじゃれあっている。

ミャアミャアミューミュー鳴く子猫達の愛らしい姿に癒しをもらい、和やかな気分になっていると、木箱の脇に小さな一人やつと通れるぐらいの小ささのドアを見つける。

その小さなドアの上には乱雑な文字で『アドルフの店』とだけ書かれていて、どんな店かも分からない。

普段なら怪しんで入ろうとは思わないだろう聡介も、この時は子猫の癒しで気分が良くなっていたために入ってみようと思った。



ドアを開けてみると地下に通じる階段があつたが、薄暗くはなく、火では無いだろう白い光が階段を明るく照らしていた。

その明るさに警戒感を一気にそがれた聡介はコツコツと足音を響かせて降りていく。

階段を降りきつたところで現れた黒塗りの扉を開けると、部屋の中は様々な物が棚に置かれた割と広い空間だった。

なにが置いてあるんだろうと思い、一歩足を踏み出したところで声が掛かる。

「んん？お客かいな。……お前さん初めて見る顔じゃのう。なんかあつかい？」

声が掛かった方を見ると、白髪で短髪の強面の老人をゴチャゴチャしたカウンターの奥に見つけた。

老人と言っても、ヤクザの親分のような雰囲気を出しているために真つ当な、いわゆる堅気ではなさそうに見える。

声を掛けられた聡介は一瞬気押されるが、何故か引いてはダメだと思つて言葉を返す。

「いえ、路地を歩いていたらたまたまこのお店を見つけたので、寄らせていただきました。このお店は何を扱っているんですか？」

「なんでもじゃあのう。ココは何でも扱うけえのう。まあ、とりあえず自己紹介ぐらいしようかい。僕はアドルフじゃあ。お前さんの名前は？」

老いてなお鋭い視線は、嘘があれば直ぐに見つけ出そうかとするようにキラリと光る。

特に嘘を吐く必要性も感じられない聡介はそのままを離すことに決めた。

「名前はソウスケ・カミオです。職業はこの町で鍛冶屋をしています。まだ、始めたばかりなので知らないかもしれませんが……」

「おお！あの店の店主かい！たしかあ盗賊団に剣盗まれたんじゃないのう。」

「あの剣について何か知ってるんですか！？」

「知つとるも何も、あの剣はうちで捌いたばかりじゃけえのう」

「！？そ、それでその剣は今どこにあるんですか！？」

店主のイキナリの告白によって、驚きながらも店主の方に近づくも続く店主の言葉で聡介は落ち込むことになる。

「さあ のう。盗品に関しちやあ詳しく聞くのはご法度じゃけえ。今

はどこにあるかは分からのう。」

「そうですね……」

盗った訳でもなく、ただ商売しただけの店主を責めるわけにもいかず、聡介はただ落ち込むしかできない。

そんな聡介の様子を見て、少し気の毒に思ったのか店主がまたも話しかけてくる。

「残念じゃったのう。代わりと言っちゃあ何じゃが、鍛冶屋ならコレもってけえ」

そう言って、乱雑に積んであった場所から何かを取りだすと聡介の手を握って、その何かを握らせた。

固く、ツルツルとした感触のソレに目をやると、ソレは灯りに照らされて銀色の光沢返している。

ソレはまぎれもなく『銀』のインゴットだった。

元の世界では一般的に、それも若者向けのアクセサリーなどとして使われるぐらいに身近な貴金属だったが、この世界ではポンと渡されるほど安価なものではない。

年数が経ち、空気中の硫黄と反応して硫化膜で黒ずんで見える  
これが俗に言う銀の錆、実は空気中ではほとんど酸化しない　と

はいえ、これさえ取れば立派な銀だ。

「こ、こんな高価な物はいただけませんよ!」

「男ならあ黙って受け取らんかい。所詮は偽善じゃあ。罪滅ぼしじや思つて受け取ってくれえや」

視線を微妙に反らして聡介に話しかけるアドルフは、堅気には見えないが、それでも悪人には見えなかった。

何も言わずに銀をシヨルダーバッグに仕舞い込み、バッグのボタンをとめる。

さよならと言いながら店をでていく聡介に、もう来るなよと、後ろから声が追ってくる。

店を出て階段を上り、路地に戻ってくると木箱の上に親猫に寄るようにして子猫達がいた。

親猫の耳がピクピクツと動き、伏せたまま片目を開けてコチラを見えたので邪魔をしないようにサツサと離れることにする。

路地を抜けて市場にたどり着いた聡介だが、結局めばしい物は見つからなかった。

そして聡介は再度路地に戻り、自分の店に少し足早に戻っていった。

戻った路地には既に親猫と子猫達の姿は無かった。

店へと帰った聡介が市場で買った果物　桃味のサクランボやイチジク味のあけびなど　をおいしく頬張っていると依頼を終えたのだろうニコラスと、ジェフリーが店へと入ってきた。

「依頼の品だ、集めてきたぞ」

「今量りますので少々お待ち下さい」

2人の前に木で出来たイスを置き、自分は渡された袋の中から黒光りする鉄鉱石を取り出して　今回は鉄クズが無かった　計量していく。

鉄はある程度予想した量だったので、100ギル渡すことにして、木炭の方は量があるとはいえ簡単に手に入るものだったので50ギル渡すことにする。

「鉄と木炭合わせて150ギルになります。……はい、150ギルをどうぞ」

「……確かに受け取った。では」

100ギル硬貨と、50ギル硬貨を、御馴染となってきたカウンタ―裏の箱の中から取り出して渡す。

受け取ったニコラスが金額の確認をするとジェフリーと共に出ていった。

木炭は倉庫の中の一角に運び込み、鉄鉱石は石と分けるために工房で精製してから鉄のインゴットを倉庫の中に仕舞い込む。

ついでに、アドルフから貰った銀も大切に倉庫にしまっておくことにする。

その前に表面が硫化してしまっているために、外へ出たのは、室内に毒性を持つ硫化水素を発生させないためから錬金術で銀と硫化水素に分解し、硫化水素は大気中に逃がして、銀はビニール袋死ぬときに有ったコンビニの袋で空気に触れないようにピッチリと密閉状態にして倉庫に仕舞い込む。

整理が終わった聡介が店に戻ると、少し日が傾きかけている。

「そろそろ灯り付けようかな……。」

裏に灯油を取りに行くと思っていたので、薄暗くなっていたので、クラウ・ソラスの光で辺りを照らしながらランプに灯油を入れて火をつけた。

店の中にランプを置いて灯りを確保した聡介は、通りに面したカーテンを閉め始める。

最後の一つを閉め終えるのと、ドアチャイムがチリンチリンと鳴るのは、ほぼ同時ぐらいだった。

カーテンから手を離して店のドアの方に振り向くと、そこには土埃などで汚れたジョージ達3人組がそれぞれ大きな袋を抱えて立っていた。

やはり、一番大きな袋を抱えたジョージはカウンターまで足早に歩いて行き、荷物をゴドツと下ろすと、疲れたー！と言って床に座り込んだ。

あれ、デジャブ……？と感じた聡介がカウンターまでいくと、ジャックもエミリーも荷物をジョージの袋横に下ろした。

「ハア……ハア……ソウスケ……取ってきたぞ。これで頼む……」

「一回でこれだけ採ったのは初めてだよ……。キツイ……」

「もうダメ……重くて死ぬかと思ったわ……」

既に床に座り込んでいるジョージは別にして、ジャックとエミリーには木の椅子をすすめて座らせておく。

一瞬ジョージに、俺の分は？と言う目で見られたが、見なかったことにして袋の方に顔を向ける。

「大丈夫だと思うけど、鉄鉱石の確認をするね」

鉄鉱石の計量と質の確認をし終えた聡介は、思い思いに休んでいる3人組に声を掛ける。

「これなら作れるよ、ありがとう。仕上がるまでには多少時間がかかるから、待っていてね。その間は工房から出ないから、警備とかは頼むね。」

「おう、楽しみにまつてるぞ！その間は任せろ！」

「あまり無理しないでね？ソウスケの体調が崩れたら元も子も無いんだし……」

エミリーの忠告に適当に返事を返しつつ、聡介はテキパキと鉄鉱石を工房へ運び込んでいく。

全ての鉄鉱石を工房へと運び込んだ聡介は、ジャックに鍵を渡し、しばらく好きに使っててと言いついて工房の中へと引っ込んだ。

引っ込んだ聡介だが、もちろん錬金術で直ぐに作れるだろうもののために夜更かしをすることはせず、しばらく構想を練った末にベッドに潜り込んで寝てしまった。

店舗部分にいた3人も疲れていたのだろうか、今日はすぐに寝ることに決めた。



ジョージとジャックは疲れたなあと言いつつ自分たちにあてがわれた二階の部屋へと上がっていったが、エミリーだけは一階で警備のために起きて無ければならない。

エミリーが疲れた体を休められることになったのは、それから2時間後にジャックが交代に来てからだった。

013 アドルフと銀（後書き）

4581字です。はあ、武器作りまで行かなかった。申し訳ない。

それと、これからは更新が遅れます……。

ラーメン屋でバイト始めました。

まだ、研修中なので大変……。

これからはがんばらなきゃ！

次回をお楽しみに！ 武器作りの意味で（泣

## 014 錬金術と魔法

### 014 錬金術と魔法

朝起きた聡介は未だ覚醒しない頭を左右に振るが、それでも頭の中に靄がかかったままのような気がして冷水で顔を洗うことにする。

裏の井戸からくみ上げたばかりの水はとても冷たく、顔を洗うとすっかりと意識は覚醒した。

昨日、工房にこもると言ったので外に出ることも出来ないのも、当初の予定通りに3人の武器を作り上げることにする。

「まずはジョージの分の剣から創ろうかな。」

190? 近くの高身長を持ち、冒険者生活で引き締まったガツシリとした体格のジョージには大剣を創ることにする。

元の時代での使用方法は、主に『槍を構えた敵の隊列を攻撃するために使う』ものであり、斬るというよりは、重量でもって叩き斬る、または押し潰すといったものだ。

大剣と言えば、その重量のために長時間の戦闘をするのに相当な体力が必要とされ、剣自体の長さによって発生する遠心力で振り回されやすいというのが欠点に挙げられる。

そのために接近戦を主とするこの時代の決闘には用いられないが、

魔物を狩る時などには一定の距離を取りつつ戦うので力に自信がある人には好まれている。

その点ではジョージは問題無いだろう。

しかし、かといって欠点である重量の問題を残したままでは、最高の武器とはいいがたいのではないだろうか？

重量の問題を克服するためには、重さを持たない魔力と金属とを結合させることで重さはかなり軽減されるだろう。

斬り方についてはそのままでも良い気がするが、防御力の高い相手の場合に備えて、刃こぼれしない金属で鋭い刃先を削っておくほうがいいかもしれない。

刃こぼれしない金属は『ルシフェリオン』を削った時に使ったアダマントイトでいいだろうが、今回はあの時以上に魔力を結合させる必要がある。

何回か練成して慣れたとはいえ、多くの魔力が必要なのは変わり無い。

魔力の伝導効率が上がった今では、体の中にある魔力と少量の魔鉱石でなんとかできるだろう。

倉庫から鉄のインゴット数個と魔鉱石を取りだしてみると、それらを纏めた上に手を翳す。

そして鉄を分解して行きつつ、魔力が体内を通るための路をイメージして、そこに魔力を通していく。

聞きなれて来たバチンバチンと弾ける練成音は既にBGMのように  
さえ感じられる。

前回アダマントタイトを創った時のイメージよりも多めの魔力を鉄の  
周りに展開し、結合させると、前回よりの濃い目の色の金属に仕上  
がった。

前回の『ルシフェリオン』を翡翠色とするならば、今回はエメラ  
ルドグリーンと言ったところだろうか。

出来上がった金属を大剣の形に成型し、鰐とグリップを取りつけて  
から鞘に納めると完成なのだが、大剣を入れるような鞘は無いため、  
自分で皮を巻きつけるなどをしてもらおう。

とりあえずは出来上がったジョージの剣の重さは1・4㍻1・7k  
gほどだろうか。

通常のツーハンドソードほどの大剣の重さは2・5㍻3・0k  
g程度なのでこれで重さに関しては問題無さそうだ。

切れ味は既に分かっているので問題無い。

今回の剣は持つても引き込まれるようなことも無く、少し気分が高  
揚するぐらいなので大丈夫だろう。

完成したジョージの剣は工房の隅に立て掛けて置き、次はジャック  
の剣に取り掛かる。

ジャックは特に扱う武器も決まっていないため、1mの長さのロン

グソートと、ダガーを渡すことにした。

ジャックの剣の素材については、ジョージの大剣の時に使ったアダマタイトをそのまま流用してロングソードとダガーを仕上げる。

ロングソードは普通に鍔とグリップを付けて仕上げたが、ダガーの方は握りやすいようにグリップ部分に窪みをつけておく。

ジョージの時と違い、考えるほどのことも無くあっさりとジャックの剣が出来てしまい、寂しい感じもするが、それは仕方が無いことだと割り切るしかない。

剣としては一流だし、まあいいかな……と考え直した聡介は、次にエミリーの武器を考えることにした。

エミリーの武器の形自体はジャックのと同じく、1mほどのロングソードで構わないのだが、エミリーは魔法を使うので魔法の術式を補助する機能を付けたい。

アダマタイトは確かに魔力も込められていて、刃こぼれもしない金属だが、魔法的な補助機能は無いからエミリーの武器には合わない。

となると、新しく金属を考えなければならないのだが、聡介は既にアドルフから貰った銀を使うことに決めていた。

銀と魔力と考えて聡介の頭の中で閃く金属は一つしかなく、その金属とは聖銀と名高く、元の世界でも様々なゲームに登場してきた『聖なる銀ミスリル』だ。

特徴としては、とても軽く、不浄　アンデッド系の魔物や汚染された地域など　を退ける神聖な力が宿ると言われる。

神聖な力と言っても聡介にそのような力はないので、そこはクラウドに光系統の加護が何かを入れてもらうしかないだろう。

しかし、銀と魔力で『ミスリル』を創ると言っても、銀というものの性質はとても柔らかく、圧縮したとしても時間が経つと『自然軟化』という変化を起こして元の柔らかさに戻ってしまう。

この性質があるため、銀の高度を上げるためには別の金属を入れて硬さを調節しなくてはならない。

元の世界では、この調節に銅を用いるのが常識となっている。

例えば、ジュエリーやアクセサリに使うには、有る程度の柔らかさを残すために銀95・0%銅5・0%の割合　これを950銀という　で、銀食器などには硬さを出すために銀92・5%銅7・5%の割合　これは925銀という　で銅を混ぜる。

しかし、ミスリルでは銀の輝きを残すためにはコレ以上銅を混ぜるわけにはいかないし、銅を7%以上加えても硬度にあまり変化は見られないらしいので銅は無理だ。

それならば別の金属を混ぜるしかない。

通常の金属の中で硬いとされ、手元に有る金属から精製できるのは鋼ぐらいしかない。

鋼ならば通常の剣として使っても問題はないぐらいだし、硬さは出

せるだろう。

しかし、鋼にくわえ魔力までも混ぜるので切れ味・耐久力共に一級品では有るだろうが、刃こぼれしないとまでは行かないかもしれない。

それだけ銀と言う金属は柔らかく、本来は戦闘用の武器に使用するものではないのだ。

それでも、エミリーの武器にする材料の中で思いつく最高の材料は『ミスリル』しかないというのも事実。

聡介はゴチャゴチャと考えるのをやめ、『ミスリル』を創ってみることにした。

思い立って倉庫から銀を取り出してきた聡介だが、銀はあまりにも量が少なかった。

魔力や鋼を混ぜるにしても1mのロングソードを創るには圧倒的に量が足りない。

また貰いに行くということも出来ないので、工房の中のベッドに腰かけて手の中で銀塊を転がしつつ思案する。

しばらく考えても中々名案が思い浮かばない聡介だったが、それは腰元で光を放つクラウドが話しかけたことによって解決することになった。

《あの……『法則の無視』って能力を使って無理やり量を増やせば



いいんじゃないでしょうか？聞かれても合金だからって答えれば済むでしょうし……」

「それだよ、クラウ！」

あまりにつかって無くて、直ぐに思いつかなかった聡介だが、聡介には『錬金術の使用に関する全ての法則の無視』という能力があったのだ。

合金という、言い逃れるための嘘の情報を手に入れた聡介はさっそく銀を練成して量を増やすことにした。

手に握っている銀塊を増やすイメージが湧かないため、今回ばかりは無理を承知で『練成後に大きくなった銀塊』をイメージするだけだ。

どのようにして大きくなるかの過程はすっ飛ばして、つまりは質量保存の法則を無視して練成するわけだ。

難しいイメージは無く、ただ完成した大きい銀塊を想像するだけ・

バチバチという練成音を、出来るかどうかの幾ばくかの不安と緊張を持って聞いていたが、終わってみるとあっさりと、大きくなった銀塊が手の上に乗っていた。

あまりにもあっさりと出来たので一瞬聡介は拍子抜けするが、まあ出来たならいいかと思っただのか次の工程にとりかかる。

腰元ではクラウが、本当に出来ちゃった……みたいな雰囲気を出し

ていたが気にしない。

まずは量が増えた銀塊に対して8%の鋼を混ぜて、均一に仕上げていく。

スチールグレーが混ざることによって銀色の輝きは少し薄れてしまったが、ミスリルの色は銀灰色らしいのでちょうどいいだろう。

出来上がった『ミスリルの原石』は鈍い輝きを放って出来上がるのを今や遅しとまっているようだ。

聡介は意を決すると、手を重ねて、自分の内から湧きでてくる魔力を自身の体の中の路にゆつくりと通していく。

路を介して湧きでた魔力はどんどんと『ミスリルの原石』に纏わりつき、結合していく。

ドンドンと吸い込まれ、結合していくごとにキラキラと宝石を散らした様に細かな光を放つ光景は、妖精たちが剣に祝福を授けている儀式のようだ。

次第にキラキラとした光はおさまっていき、代わりにボンヤリとした光を纏ったのを見ると練成は成功したようだ。

出来上がった『ミスリル』を成形し、1mほどのロングソードに仕上げて鐔と握りを付けて振ることが出来るようにする。

試しに振ってみると、ボンヤリとした光が軌跡をなぞる様に後を追ったが、いまいち締まらない。

「うん……まだ完成じゃないから何とも言えないけど、ちゃんと出来るかな……？」

今のとこいまいちな仕上がりのままの『ミスリル』の剣を見ながら一人呟いた聡介は、腰元に差したクラウ・ソラスを引き抜いた。

金属が擦れる音すら発さずに引き抜かれたクラウ・ソラスは、相変わらず神々しいまでの光を放っている。

《そろそろ私の出番ですか？》

自分の出番がようやく回ってきたクラウは、口調こそ普通だが心なしか嬉しそうな雰囲気だ。

「うん、願いますよ。自分で出来る範囲のことは精いっぱいしたから、あとは願いますよ、クラウ」

《分かりました。掛ける魔法は、術式補助と身体強化の魔法の2つだけでいいですか？》

「そうだね。あまり強力過ぎても変だしね。その2つで大丈夫だよ」

《では、今から始めます》

そう言うところから発する光を強めていき、やがて大気に存在する魔力さえも渦巻く光の中に取り込んでいく。

魔力が光の渦に飲み込まれていく過程で、魔力自体が白銀の光を発し始め、工房の中は渦巻く白銀の光で溢れていた。

光の渦の中心で言葉を紡ぐ　言語は違うらしく理解できないクラウの声は、工房の中で反響することも無く頭の中に染み込んでくるようだ。

五月蠅くなく、心地いいとすら感じられる言葉の旋律は心の奥まで入り込んできて、心を震わせる。

そして、クラウの声が止むと、白銀に渦巻いていた光もおさまっていく。

やっと正視できるほどの光量になり、目の前に置いていた剣を見ると、刀身に白銀の輝きを持つ『ミスリル』の剣が在った。

聡介がクラウ・ソラスを鞘に収め、その剣を手にとって軽く縦、横と2回振ると剣の軌跡を追うようにキラキラと白銀の粒子が舞った。

「ありがと、クラウ！クラウのおかげだよ！」

会心の出来に満足した聡介は剣を手を持ったまま、クラウの方へ向いて感謝の言葉を述べた。

《え？ああいえ……こちらこそどういたしまして……？そ、それよりもこの剣の名前を早く決めましょうよ！》

何故か戸惑ったような返事を返し、その次に焦ったような感じで声を発したクラウに、可愛いなあとほんわり癒されつつも 恋愛的な感情では無い クラウの言葉通りに剣の銘を付けることにする。

「うーん、何にしようかな……？そうだ！クラウがしてくれなきゃ完成しなかったわけだし、クラウに決めてもらおうかな」

《わ、私ですか！？……うう……そうですね……『オートクレール』でどうでしょうか？》

「……うん、分かった。『オートクレール』だね」

確か『高潔』『高く清らか』という意味を持つオリヴィエ卿の愛剣だっけ……と思いだす一方で、なんでクラウが元の世界の剣の名前を知っているんだろうかと思ったが、声に出して聞くまではしなかった。

ちなみにオリヴィエ卿とは、カール大帝ことシャルルマーニユの家臣で十二臣将の一人オリヴィエ卿のことで、聖剣デュランダルを持つローランの一の親友だった人物である。

完成した3つの剣達の銘は、ジョージの大剣『デュランダル』、ジヤックの片手剣『ジュワイユーズ』、エミリーの片手剣『オートクレール』。

『デュランダル』と『ジュワイユーズ』と『オートクレール』は、オリジナルと同じほどの効果などが備わっている訳ではないが、3人の結びつきを考えて付けたものだ。

とは言っても、『デュランダル』のローランと『オートクレール』のオリヴィエの様に、『ジュワイユーズ』の持ち主のシャルルマーニュに仕えるように……ということでは無く、あくまでもこの3つの剣が一つの伝承に出てきていて関係が深いということから考えて名付けたものだ。

ちなみに、ジャックのダガーも業物ではあるけれど、気軽に使えるように銘は付けないことにした。

何故銘をつけないかというと、銘が入った物を気にいつてしまつていざというときに使い捨てられなかったり、サバイバル用の汎用道具として使うのを躊躇ったりするのを避けるためだ。

ダガーという武器は汎用性が高く、戦闘以外でも使用することが多いのでこうする方がいいたろうと聡介は考えたのだ。

聡介は出来上がった3本の剣とダガーを、壁際に置いてある長方形の木の箱に纏めていれると、体の筋肉を伸ばすために大きく伸びをした。

体を伸ばすことで一つの工程の終了として集中力を切ると、自分の体がつつすらと汗ばんでいることに気がつく。

「む……少し水を浴びてこよう……」

裏に出て、手早く水を浴びて汗を落としてスッキリして工房の中に戻った聡介は、時間が余りすぎていることに気が付いて、何をしようか悩むことになる。

工房から出て行つてどこかで時間を潰すのは、ジョージ達に『籠る』といった手前するわけにはいかない。

かといって、工房の中ですることは限られている。

しばらく悩んだが結局名案が浮かばなかった聡介は、ベッドにダイブして昼寝を敢行することにした。

集中力を使つてほどよく疲れた聡介の頭は、ベッドにうつ伏せになつて目を閉じていると次第にまどろみの中に沈んでいき、ついには完全に意識を手放した。

工房の中でくうくうと眠りこける聡介は知る由も無かったのだが、工房の外では3人がそれぞれどんな武器ができるのだろうと期待していた。

ジョージは待ち時間を潰すために酒場でお酒を軽く飲みながら期待している。

ジャックは古書店で様々な本を見ながらも頭の片隅では常に考えている。

エミリーは喫茶店で紅茶やスイーツを楽しみつつ、聡介が無理しないか心配しながらも待っている。

そんな中で眠りこけている聡介は夢の中にいた。

「……キキ……ニシンのパイ盗み食いしちゃダメ……ZZZZZZ」



014 錬金術と魔法（後書き）

5954文字です。

バイトが楽しいです！疲れるけど！

最後の寝ごとに関しては某ジブリ監督の某宅急便少女の物語の一シーンです。

……笑っていただけたなら嬉しいです。

笑ってもらえなかったのであれば、感想にて何かネタを振って下さればいつか使用させていただきますので！

ではでは！

次回もお楽しみに！

## 015 受け渡しと試し切り（前書き）

向こうの作者様とも話し合いをし、無事解決することが出来ました。  
詳しいことは後書きにて。

## 015 受け渡しと試し切り

015 受け渡しと試し切り

雲一つない青い空に日が高く上ったところようやく聡介は夢から覚めた。

よく寝たことでスッキリと目が覚めた聡介は、ベッドから身而起してストレッチをするとそろそろ工房から出ることに決めた。

壁際に立て掛けているそれぞれのために創った剣を腕に抱えると、工房の分厚い扉の内鍵を開け、扉を開け放った。

店内にはエミリーが一人だけカウンターで肘を付きながら足をブラブラさせていた。

工房の扉を開けるギイという音に反応したのか、エミリーは足を止め、工房の扉の方へ顔を向けた。

「ソウスケ！今終わったの？」

「うん、待たせたかな？」

実はさっさと終わらせてずっと寝てたなんて言えないと思いつつ、笑顔を向けてくるエミリーに返事を返した。

「待つてて、今ジョージ達を呼んでくるから！」

そう言つて二階へ駆けあがつていったエミリーを見送り、剣をカウンターに置くと聡介はカウンターの椅子に座った。

カウンターに座ると同時ぐらいに二階からドタバタと音を立てながらジョージ達が降りてくる。

「ソウスケ！剣が出来たつてホントか！？」

そして、階段から顔を覗かせたジョージは聡介を見つけるなり声を掛けた。

「出来たよ。今渡すから皆来てくれる？」

カウンターの上で剣をキレイに並べ直しながら返事をする聡介。

その様子を見つつ近づいてきたジョージ達に椅子をすすめて座らせる。

3人が席についたことを横眼で確認すると、こほんと息を吐いてからジョージの大剣を持ち上げて渡す。

「この剣が新しい剣か……。だいぶ軽いな、これで威力でるのか？」

「確かに重量がないから遠心力で威力を上げるとは難しいけど、この剣は切れ味が高いから、今まで重い大剣を振っていた速度と併せると切れ味は最高だよ。それは補償するよ。でも、軽いから今までに重さで叩き潰すような斬り方をしていたなら、今度からはちゃんと斬る方に重点を置くようにしてね」

「分かった。気を付けておくことにする。ところでこの剣の名前を教えてくださいませんか？自分の剣の名前ぐらい覚えとかなきゃかわるいからな」

「そうだね。この剣の名前は『デュランダル』。意味は『不滅の刃』。大切に使ってあげてね」

「不滅の刃『デュランダル』か……。よし、大切に使用してもらおうぞ！」

と言ったジョージはソレを背負い、聡介に礼を述べた。

それを嬉しそうに笑いながら受け取った聡介は、次にジャックの分の剣を渡すためにカウンターの上から一振りの剣を持ち上げた。

「ジャックは決まった武器が無いって前に言ってたよね？だから、今回は一般的なロングソードの形状にしたよ。材質はジョージの剣と一緒にのモノを使用しているから、もちろん通常の剣よりも軽いから扱いやすいと思うし、切れ味も頑丈さも併せ持つ剣だよ。それとコッチのダガーは武器のサブとしても、サバイバルでも使えるように創っておいたから自由に使ってね」

ジャックにロングソードを渡してから説明をし、説明の終わりに手元に置いていたダガーを取り出してジャックに渡した。

「うん、軽いし扱いやすそうだね。切れ味は実際に試し切りしなきゃ分からないけど聡介が創ってくれたのなら心配し無くても大丈夫だね」

「でも一応試し切りはしてどれほどのものは把握しておいてね。あ、それとその剣の名前は『ジュワイユーズ』で、『喜びに溢れた』っていう意味だよ」

「『喜びに溢れた』かあ。良い名前だね。大切にするよ。……それでコッチのダガーはなんていう名前なんだい？」

『ジュワイユーズ』を腰元に差したジャックは、渡されたダガーを観察しながら聡介に聞いた。

「うーん、そっちのダガーには名前は無いんだ」

「へえ……。これも業物に見えるけどなあ……。何でなのか理由を聞いてもいい？」

ダガーの刀身を見ていたジャックが顔をあげて聡介に理由を求める。

「なんで名前をつけないかは、名前が入った物を気に入って、いざというときに使い捨てられなかったり、サバイバル用の汎用道具として使うのを躊躇ったりするのを避けるためだよ。戦闘以外でも使用することが多いと思ったから名前を付けなかったんだ」

「……なるほど。確かに名前が有ったら愛着が湧いてそうなるかも……。使用者のことよく考えてるね、全然気付かなかったよ」

一度立ってダガーと剣を腰に差したジャックは、最後に置かれている白銀の剣を見た。

そして、ジャックのその横では、エミリーが自分の番を今や遅しといったふうに待っているのだった。

それにしてもエミリーは最初からこの白銀の剣しか見ていない。

やはり女の子だから綺麗な輝きを放つこの剣を見つめていたのだろうか。

いくら冒険者をしていても、こういう女の子らしい一面はもとの世界の女性たちとあまり変わらないあと、聡介は思っていた。

そんなことはさておき、自分の番を待っているエミリーを待たすのも悪いので考えるのを止めて白銀の剣『オートクレール』を左手に握る。

左手に握った剣を水平にし、右手の上に刀身を寝かせて置いてエミリーの方へゆっくり差し出す。

「はい、これがエミリーの分の剣『オートクレール』だよ。この剣は、二人の剣とは材質が違って『ミスリル』っていう金属を使っているんだ。この金属は魔法と相性が良くて、魔法を付与することができるのが特徴だよ。……ああそれと、エミリーは魔法を使うつて言つてたから術式補助と身体強化の魔法を掛けておいたよ。」

「魔法剣！？……どうりでこれだけキレイに輝いてるわけね。最初は磨いて輝かせてるのかと思つたけど……。でも、本当にいいの？魔法剣なんて超高級品よ？」

「うん、そのかわり大切に使つてあげてね。あ、注意点を言つておきたいんだけどいいかな？」

魔法剣という言葉に反応したジョージとジャックも加わつて、共に『オートクレール』を観察しているエミリーに声を掛ける。

「あ、ゴメンゴメン。何かな？」

「この剣を扱う時の注意なんだけど、この剣は切れ味は確かにいいんだけど、ジョージ達の剣みたいに刃こぼれしないってことはないし、普通の剣よりは頑丈だけど無茶な使い方をしたら壊れちゃうから気を付けてね。もし、刃こぼれしたり切れ味が悪くなつてきたら修理するから持つてきてね」

「分かつたわ。その時はお願いするね」



返事を返したエミリーは『オートクレール』を鞘に収めると腰元に差した。

カウンターの上を見て、3人の武器を全て渡し終えたのを確認した聡介は、御茶を入れてくると言って奥に引っ込んだ。

棚から小さな手鍋を引き出し、錬金術で火を出して熱湯を作り、火を止めてから4人分の茶葉を入れて蓋をし、蒸らしたら茶漉しを通してそれおれのカップに注ぎ分けていく。

本当ならティーポットを使いたところだが、今回はお茶をするわけでもないので時間短縮のために手鍋で入れる方法を選った。

入れるときは、プロを意識して少し高めの位置から注いだが、最初のカップは周りに少しこぼしてしまったし、結構跳ねてしまった。

その次からのカップは、さきほどよりも位置を下げて、飛び散らないようにきれいに入れた。

跳ねて少し汚れたカップは自分用のモノとして、のこりの3つのカップはジョージ達なのでお盆に載せて溢さないように運んでいく。

カウンターに戻ってくると3人は顔を上げ 話をしていたらしい、礼を言いつつ聡介から紅茶を受け取った。

ミルクや砂糖といった気がきいた物はもちろん存在しないのでストレートティーだ。

旨味と表裏一体の渋味が口の中に広がり、紅茶から立ち昇るダージリンの香りが鼻の中をスツと通り抜けていく。

会心の出来に満足しながらカップをソーサーに置き、3人を見るとジョージは早々と飲みきってしまったようだが、ジャックとエミリーは紅茶をゆっくりと味わって飲んでいた。

ジョージはしなかったようだが、あとの二人の味わって飲んでもらえている様子に聡介は多少嬉しくなった。

やがてお茶も飲みきり、今日はこれで終わりかな？と思った時、3人は試し切りをしてくると言って出て行ってしまった。

一人残った聡介は、長い間放置していた店内の掃除にとりかかることにしたのだった。

「それにしても不思議だな。これほど腕前がいいならどんな田舎にいても名前は噂に乗って広がるだろうになあ。今までソウスケの鍛冶の腕前の噂が無かったのが不思議だ」

聡介が紅茶を入れに奥へと入ると、自分の剣の感触を確かめていたジョージが唐突に口を開いた。

「たしかに不思議だよね。いくら田舎っていても外界と完全に交流を立ってる村なんてそうないはずだし、これだけの一流の腕前を

持つてるなら風の噂に乗って誰かの耳に入るとおもっただけだねえ。どの冒険者も騎士もいい武器を求めてるからそういう情報には敏感なはずだし……」

「うーん……確かに何か隠しているのかもしれないけど、それでも私たちにここまでしてくれるソウスケを疑うのは失礼よ。もうこんな話はやめましょう！」

「そうだな、悪かったからそう頬を膨らますなって」

難しい顔をして考え込むとするジャックに、エミリーがちょっと憤慨したように声を発し、それをいさめるようにしてジョージがおどけてエミリーに言う。

そのあとにちょっとした小話をして話に一区切りつくと、まるでタイミングを見計らっていたかのように聡介が紅茶を持ってきた。

3人は聡介から紅茶を受け取り、ジョージは喉を潤すかのようにさつさと飲み、ジャックとエミリーは香りを楽しみながら飲んでいった。

さつさと飲み終え、2人が飲み終えるのを待つジョージはすることが無くてヒマそうだ。

元の世界ならこういう時は音楽を聴いて時間をつぶしていたなあと思いだした聡介はクスツと軽く笑っている。

「ソウスケ、俺らは今からこの武器を使って試し切りしてくるから

しばらくの間出ていくぞ」

そして、全員が紅茶を飲み終え一息をついたところでジョージが口を開き、外出する旨を聡介に伝えたと席を立った。

続くようにエミリーとジャックも席を立ち、それぞれに自分の新しい得物を携えて店の外へと出ていく。

店のドアをカランカランと鳴らして外に出たジョージ達は、冒険者ギルドの近くの演習場まで歩いていく。

演習場につくと、既に何組かの冒険者達がいて、それぞれに得物を使って鍛錬をしているようだった。

中には安全面に配慮して木剣を使って、子供達に技を教えている人たちもいる。

そうした中で3人は演習場の丸太で試し切りが出来るスペースに歩を進め、各々が案山子《かかし》に似せた丸太の前で武器を取り出して構える。

ジョージは大剣使用用の太い丸太の案山子の前へ、ジャックとエミリーはロングソードクラス用の少し細めの丸太の案山子の前へと剣を構えて立つ。

演習場の至る所から聞こえる気合の声に負けぬように声を発しつつ、丸太を一刀両断にせんと大剣を大上段から勢いよく振るジョージ。大上段から勢いよく振られたデュランダルは、ジョージが思ってい

たほどの抵抗感を感じさせること無く丸太を真つ二つにし、それでも勢いが弱まらなかったデュランダルは更に地面も僅かに切り裂いた。

普通の大剣の切れ味を参考にしてデュランダルの切れ味を予想していたジョージは、予想以上の切れ味に内心驚きつつも剣を背中に収めた。

真つ二つになった丸太へと近づいて切断面を見ると、潰れたような個所は見受けられず、スッパリとキレイに斬られていることが見て取れる。

今までと少々使い勝手が変わるかも知れないと思いつつも、ジョージは剣の仕上がりぐあいに満足した。

ジャックの方はというと丸太に対して数回斬りつけて、振るうスピードを確かめた後にジュワイユーズを真一文字に素早く振るい、案山子の頭にあたる丸太部分のテッペンを輪切りにした。

振るう時のスピードを考えてから再度一通りの技の確認をしたあと、ジャックはようやくジュワイユーズを収めた。

エミリーはジャックと同様に一通り技を型どおりにこなすと、次に丸太の2歩前まで歩いていき、そこで立ち止まった。

オートクレールを正眼に構えたまま詠唱を始めると、剣の周りにはヒュンヒュンと風が空気を切り裂きながら渦巻いている。

短めな詠唱を唱え終えたエミリーが、両手でオートクレールを軽く握り、左足で一步踏み出しつつオートクレールを右肩に担ぐように

して振り上げる。

一瞬体を弓なりに反らせ、その反動で力強く右足を踏み出し、足から得た力を腰を回しながら増幅させつつ剣を振り、直撃の瞬間にグリップをグツと握り締めて一息に振り切る。

流れるような一連の動作によって力を無駄にすること無く綺麗に振り切られた一撃は、案山子を袈裟斬りにするだけにとどまらず、オートクレールに纏わせていた風の刃が案山子の右腕を斬り落とし、胴体をズタズタに切り裂いた。

普段であればありえないほどの案山子の惨状にエミリーが咄然とすると、その様子を見ていたジャックとジョージが近寄ってきて声を掛けた。

「すげえな……。エミリーいつの間にそんなバカヂカ「ゴフツ」！」

「ち、違っわよ！失礼なこといわないで！！」

口よりも先に手が      綺麗なストレート      出てしまったエミリーがジョージに対して怒っている。

「まあまあ……。それよりもどうしたのさ？普通は付与魔法ってこんなに威力が出るような魔法じゃないでしょ？」

「それなんだけど、たぶんソウスケの言ってた術式補助と身体強化の効果だと思う……。それに付与したときもやり安かったし……。」

うーん、感覚で言うと普段は無理やり押し込んでる感じだけど、今回のこの武器から吸い込んだような感じかなあ……。」

「へえ。あ、ちょっとこの武器にもその付与魔法してみてくださいよ！」

そう言ったジャックのジュワイユーズに付与をして、ジャックがエミリーと同じように丸太に切りつけたが、綺麗に斬れたのは袈裟斬りにした部分だけで他の部分は風が丸太に深く傷をつけただけだった。

「うーん、前よりは威力上がってるけど、さっきエミリーがしたほどじゃないなあ。やっぱりその剣だからなのかもね」

結果に少しだけ不満そうにしながら戻ってきたジャックはエミリーにそういった。

その後、攻撃魔法や防御魔法、回復魔法、付与魔法を練習して全体的な力の向上を感じることが出来たエミリーは上機嫌だった。

もちろん、ジャックやジョージも満足はしていたわけだが、魔法を使っているとは言えあれほどのエミリーの力を見せられてはそれにもかすむというわけだ。

それでも3人全員は武器の出来栄に上機嫌になって演習場から帰っていったのだった。

5848字です！長い間のブランク申し訳ありませんでした。

盗作疑惑とのことで向こうの作者様と話し合いを設け、話してきました。

向こうの作者様からもこれからの展開に期待することと事で事なきを得ました。

とはいえ、このままでいいというわけではないので少しずつ流れを修正して行こうと思います。

いきなり変えて皆様の期待を裏切るということはしないつもりなのでご安心を！

これからどうぞよろしくお願いします。

さて、話が変わりますが……作者初めて救急車乗りましたヨ！

熱中症ということでしたよ……。

今夏は死者も多数いたようで自分は本当に運が良かった方なのでしようね。

熱中症の恐ろしさを身を持って知った次第であります。

だんだんと涼しくなってきたとはいえ、皆様もお気を付け下さいませ！

さてさて、またまた話は変わりますが、何か出してほしい物とかは有るでしょうか？

錬金術を使った何か、魔法を使った何か、私たちが住む現代での知識を利用した何か（なるべく便利な物で、構造が複雑で無い物）

すぐに出せるかどうかは物にもありますが、なるべく早く出せれるようにしますので、案があれば何でもお寄せ下さい。

それでは、大変長い後書きとなりましたが！



次回をお楽しみに！

## 016 音楽と脅迫 誤字修正

### 016 音楽と脅迫

聡介は今朝買つて来たばかりの石灰とコークスの目の前に立っている。

というのも、昨日のジョージが暇そうにしていた時のことを思い出したのがことの発端だった。

この世界でも何とか手軽に音楽を楽しむことはできないだろうか？と考えると、まず最初にMP3プレーヤーが浮かび、CD、MD、カセットテープと浮かんできたが、それら全てが電気を使うという点で不可能だった。

そして、しばらく悩んでいると、昔近所のおじさんがレコードを聞かせてくれた時のことを思い出した。

「これはのうゝ、ぼりえんかーびにーるっちゅうので出来とるんじや」

当時、そのおじさんは自慢げにそう言っていたが、十中八九『ポリ塩化ビニル』のことだろう。

そう判断した聡介はさっそく市場へと買い出しに出かけたが、当然そんなものがこの時代の市場に置いているはずは無く、原料の原料であるカーバイドを生成することにした。

そして帰ってきて今に至るというわけだ。

通常カーバイドの合成には、普通では容易に達することのできない2000度もの高温を必要とし、もとの世界ならば電気炉を使用して合成するのが一般的だ

それらの過程を錬金術という便利な術で一息にふっ飛ばし、空色を少し濁らせたような色のカーバイドを創る。

ここからはカーバイドからアセチレンを生成する過程に入るわけだが、アセチレンの製法は実に簡単な物で、水を作用させるカーバイド法を用いて行う。

反応させる前に急造のミニガスタンクもどきをつくり、傍に置いておくことを忘れない。

それからカーバイドと水を反応させて出来たアセチレンをミニガスタンクに貯めていく。

次の過程は毒を伴う危険な作業になるために細心の注意を払いつつ、水から精製した水素と食塩から精製した塩素を結合させて塩化水素を得ると、これもまたミニガスタンクに移してアセチレンと反応させてポリ塩化ビニルを得る。

そうして出来たポリ塩化ビニルを加工し、直径30cmほどの円盤型レコードを創ると、その表面に細い音溝を施す。

やっと出来た自作レコードは多少脆いが、昔見せてもらったレコードと同じように見えた。

さて、次はレコードを再生するために蓄音機創りに取り掛かる工程に入ることになる。

再生するにはレコードの表面に施された音溝をたどり、それで得た振動を空气中に振動として発してやる必要がある。

その仕組みは単純な物で、録音時に蛇行して刻まれた溝を針で辿り、その針の振動を増幅し、スピーカーに相当する振動板に伝えて音を再生するというものだ。

しかし、ここで再生された音はまだまだ綺麗な音では無いので、パイプで出来たトーンアームという場所を通してホーンへと導く必要がある。

聡介はそのホーンを、落ち着いた柔らかい音を出すために金属製のホーンでは無く、木製の長めのホーンをそこらに置いてあった薪で創った。

そして、最後にゼンマイ式のモーターを取りつけると、ようやく蓄音機は完成した。

聡介が早速録音をしようとレコードを一枚セットし、ゼンマイを巻いてレコードが回りだすのを確認してから福山雅の歌を歌う。

とりあえずサビだけを歌いきった聡介はレコードをセットし直してからハンドルを回し、再生を始める。

再生が始まるとCDとはまた違う深みのある、そしてどこか温かみのある声になった福山 治の歌 正確には聡介が歌った福山雅

の歌　　が流れてきた。

それに満足し、これからはどんな歌を録音していこうかと思いを馳せる聡介はあることに気がついた。

どこにその録音できる歌があるかということだ。

自分の歌を録音すると言ってもレパートリーに限界がある上に、そんな恥ずかしいことは論外である。

といって酒場などに行ってもそうそう歌が上手い子がいるわけじゃない。

ああ言うのはその場のノリというか、酒の勢いや、または相手の服装によって場が盛り上がっているだけだ。

ガーランドの街には音楽家と自称している者もいるにはいるが片手で数えるほどしかない上に楽器またはその本人自体がお粗末だったりすることのほうが多い。

そんな理由から聡介はせっかく作った蓄音機とレコードを泣く泣く店内の片隅で埃をかぶせることになったのだった。

しかし、コレが数年後にとある貴族の目にとまり、音楽の録音という目的だけでなく、スパイの情報伝達手段としても使用されることになるとは聡介でさえ思いもよらなかった。蓄音機が広まるとこの方法は廃止された

「オラア！店主いるかぁ！店主う！」

蓄音機を部屋の片隅に片づけ、聡介がカウンターの上で意気消沈としているときにその男はやってきた。

ドアをバンツと乱暴に蹴り開けて入ってきた男はズカズカと大股でカウンターの前まで歩いていき、イスに右足を上げ、その膝に腕を乗せると身を乗り出して威嚇するように声を発した。

「テメエがここの店主か？ああ？」

「えと、そうですが……。どうかしましたか？」

イキナリのその態度に気圧され、タジタジとしながらなんとか言葉を返す聡介。

「最近段々と調子に乗ってきてるみてえじゃねえか？ああ？ウチの頭《かしら》の縄張りで好き勝手してんじゃねえよ。まだ常連もついてねえみてえだし、いてえ目見る前にとつとこの街から出ていけ。いいか？コレは注意じゃねえ警告だ。1日だ。1日で出ていくか、どうか決める。出ていかねえならどうなるかは分かるよなあ？」

「ちょ、ちょっと待って下さい！いきなりそんなこと言われても…

…！」

「ああ？事前に言つとけば出て行くんでもいうつもりか、テメエは？明日日が落ちてからまた来るぜ。よく考えろよお？」

そういつた男は足を乗つけていたイスを蹴倒し、店の武器陳列台を蹴飛ばしながら進み、扉をまたも蹴破る様にして出ていった。

「一体なんなんだ……。……。せつかく、ジョージやジャック、エミリー達とも仲良くなってこれから営業をしつかりやっていくって時に……。」

突然現れて退去勧告を一方的に告げて去っていった男のことを思い出しながら、聡介は腹立たしくも思いながらどうするかということを考え始めた。

部屋の中の雰囲気は一気に悪くなり、聡介自身も暗い気持ちになっ  
てしまった。

しかしそんな聡介とは対照的に、店の外では何事も無かったのよう  
にいつも通りの活気のある昼下がりの光景が広がっていた。

「はあ！？何よその男！ふざけんじゃないわよ！」

男が去ってから数時間後、依頼から帰ってきて 聡介にお金を払うためにしている、事の顛末を聞いたエミリーが最初に声を張り上げた。

「まあまあ、エミリー……。落ち着きなつて、今憤慨しても仕方ないでしょ。」

「いいえ！落ち付いてられないわよ！ソウスケは一生懸命やってるのに！許せないわよ！」

「おい、落ち着けつて。今大事なのは憤慨することじゃなくて、これからどうするかについていうことだろ？」

珍しくジョージによつてたしなめられたエミリーは不承不承といった感じで用意されたイスに腰を下ろしたが、その頬はまだ膨れている。

「で、ソウスケはどうするつもりなんだ？」

「どうもこうも……。何が何やら分かんないよ……。出て行きたくは無い。だけど……。どうしようもないよ……。」

「あんな奴らなんてバシツととつちめてやればいいのよ！あのドラゴンと戦ったソウスケならそんなの簡単よ！」



「無理だよ……。あの時は自分でも無我夢中だったし、何より今度のは相手が人間なんだよ？いくら相手が悪くてもそんなのできるわけないじゃないか……！」

聡介がこれまで生きてきたのは日本という法治国家で、一部の例外を除きどのようなものであれ『人を傷つけること』が法によって大きな罪とされてきた社会だ。

『人を傷つけてはいけない』そう言われて長年をかけて培われた倫理観というものは、いくら異世界にきてそこまで法にしばられないと言ってもそう簡単に変わるものではない。

そんなに気が強くない聡介の心の内から『自分が犯罪者になる』という意識が拭えないのは仕方のないことと言えるだろう。

「ソウスケがやりたくないというのならやる意味はないだろう。」

「でもそれじゃあ！」

「エミリー！そこまでにしとけ。ソウスケだって悩んでるんだ。俺達が口を出す問題じゃない」

ジョージの言葉に反応して思わず声を上げたエミリーだが、先の言葉は続くことはなく、ジョージに遮られてしまった。

正論ゆえにこれ以上いうことが出来ないエミリーは、仕方なく黙っ

て口をへの字に結ぶ。

「ゴメン。今日は色々考えたいから……」

聡介はそう言葉を残すと、ガタツと椅子を引いて立ち上がり工房のほうへと暗い雰囲気のまま去っていく。

「ソウスケ！手が必要な時は言ってよ！僕達も手伝うから！」

工房の扉を開けたソウスケにジャックが声をかけると、こちらを振り返り「ありがとう」と言って工房の中に入り、扉を閉めた。

ボタンという音と共に締まった鉄の扉は、まるで今の聡介の拒絶の意思をしめすようだった。

「さて……ソウスケにはああ言ったが、納得できるわけがねえ……。ソウスケには恩義もある。」

「うん、俺も許せないよ」

「私だって許せないわ。ソイツを見つけたらギタギタにしてやるん

だから！」

ソウスケが工房に籠ったあと、戸締りをして酒場で早めの晩御飯をとっていたジョージ達は酒場の隅のテーブルで話し合いをしていた。酒場の隅は他人に聞かれるとまずい話をしやすく、他の客も店員もそれとなく距離を話すのが暗黙の了解となっているので、早い時間帯も手伝ってか周りには人が少ない。

「たぶん今晚ぐらいに本気ということを示すために嫌がらせか何かをしてくる可能性が高い。見つけ次第潰すのが定石だが、生憎俺たちは相手のボスが誰か分からない。何をするかは分からないが、工作が終わって油断して帰るところを尾行するぞ。今回ばかりは何があっても我慢だ、いいな？」

「うん、それがいいと思う。それで、ボスを見つけた後はどうする？」

「潰す……っと言いたいところだが、相手の組織の規模にもよる。まあ戻ってソウスケに報告するのがいいだろうな」

「わかったわ。じゃあ早く準備しなきゃ……！」

そついうやいなやエミリーは自分が頼んでいた料理を急いで片づけた。

が、ジョージとジャックがそれほど急いで食べようとしなかったた

め結局エミリーは待たされるハメになり、待てなくなったエミリーによってジョージとジャックの料理はだいぶ食べられてしまう。

ジョージとジャックは恨みがましい目でエミリーを見たがエミリー自身はどこ吹く風と言った感じで、諦めた2人は会計を済ませて酒場の外に出ていった。

4256文字です。

今回はちよつと短めですねえ。

話をつなげようと思ったのですが予想以上に長くなりそうだったので短く切らせていただきました。

前話でアイディアの募集をしたところ予想以上に多くのアイディアを頂き、とても驚いております。

まさかこれほど反応していただけとは思わなかった><；

なるべく出すようにはしますが、無理なモノはこちらの判断で除外させていただきます、申し訳ない。

出来そうなモノは出す予定ですが、だいぶ後になるかもしれないのでソコはご了承を……。

さて、気づけばPVが446、951アクセス・ユニークが66、573人 となっていてこれもまた驚いております。

これから精進していきますのでよろしく願いますm（| |  
メ）m

それでは、

次回もお楽しみに！（次は結構重要な展開がッ！

## 017 話し合いと黒幕

### 017 話し合いと黒幕

酒場から戻り、防具と武器を身に付けた3人はほのかに輝く月明かりのもとそれぞれが『敵』にそなえて隠れていた。

エミリーは裏庭隅の木箱横の影に小柄な体を屈めて隠れている、さつきまで息巻いていたのがウソのように静かに無感情に隠れているのは、あふれ出る気配によって見つからないようにするためだ。

ジャックはというと屋根の上に上がり伏せた体勢で、夜になって人氣が無くなつた通りと路地を監視する。

最後に表通りの斜向かいの店横の路地の暗がりには身を隠すのはジョージだが、普段の明るく豪快なジョージはなりを潜め、真剣な表情で静かに『敵』が現れるのを待っていた。

夜の闇にまぎれて隠れること数十分、聡介の店の2軒隣りの路地からそいつは姿を現した。

服装はいかにも街のチンピラですと言わんばかりに着崩した服装に、赤いペンキと大きなハケを携えている。

しかし、それ以上に不可解だったのはその隙の無さと気配の無さだった。

恰好こそありふれた街のチンピラではあるが、その身のこなしを見る者が見れば一目でプロの道のものだと分かるだろう。

服装をありふれたチンピラの恰好にすることで、たとえ一般人が目にしたとしても「ああ、チンピラがいるなあ」程度に抑え、プロの犯行ということを悟らせないための措置だろう。

プロが動くということはただの寄せ集めの組織と言うことは無く、洗練された、強力な組織ということでもある。

斜向かいの路地に隠れながら様子を見ていたジョージはこめかみから顎にかけて冷や汗が一筋流れるのを感じた。

裏庭にいるエミリーはもちろん、ジャックでさえ眼下の建物が死角となつてこのチンピラ風の男のことを把握できてはいないだろう。

そのチンピラ風な男は聡介の店の前まで来るとハケを赤いペンキにどつぷりとつけ、過剰に着いたペンキを落とすことなく辺りにペンキを巻き散らせながら大きくなんらかの文字を書き始めた。

出来あがつたその文字は何かは良く分からないが、おそらく嫌がらせのための落書きということ間違いない。

チンピラ風の男は書き終わるとハケをペンキに入れている缶の中に放り込み、その場を去り始める。

有る程度距離が離れたのを確認したジャックは路地の暗がりから出てその男を追いかける。

薄暗い裏路地を通り抜け、いくつもの角を曲がり、その後ろ姿を見失わないように懸命に追いかける。

裏路地を抜け、ついに郊外へと飛び出した男はそのまま森近くの小屋へと駆けていく。

障害物が少ないため、男が小屋の中へと消えるのを確認してから小屋の方へと走っていく。

小屋自体は放置されている風に汚れ、壊れているところがあるのに対し、中に入ってみると柱はしっかりと立てられ、要所要所はしっかりと補強されている。

デュランダルを引き抜き、小屋の中を一通り見てまわるが男の姿は無く、裏口なども無かったため小屋から出ていったとは考えにくい。

隠し部屋に注意しながら小屋の中を見ていると、床の板が少し盛り上がっているところが一か所だけあった。

デュランダルの剣先を板の切れ目に差しこみ、てこの要領で跳ねあげると地下へと通じる階段が現れる。

階段を下りていくが、所々に薄暗い灯りが設けられ、ひっそりとだが使われていることが分かる。

通路は狭く、ジョージの大剣では振り回せずに苦戦することは必至のため、リーチを活かした突きの構えで通路をソロソロと足音を立てずに進んでいく。

通路の横にドアは無いいきなり強襲されるということはないが、その分前後で挟み撃ちを受けた場合は逃げる場所が無くあつという間に殺されてしまう。



嫌な予感を頭の中から振り払って進んで角を曲がるとようやく通路の終わりにたどり着く。

目の前の鉄製の扉に耳を押しあて、そこから伝わる声の振動をキャッチする。

最初は何か話し声がすると思うぐらいだが、さらに集中して耳を澄ますとようやく聞こえるぐらいまでになった。

「ボス………を………して………した………」

「………った。………明日………だろう。もし………今………いるかも………な」

心臓を鷲掴みにされるような嫌な予感を感じ取り、即座に扉から離れて反転し、足音を立てない中で最速のスピードを出して角を曲がる。

「いや、やっぱり誰もいませんよ」

角を曲がり切ったところでガチャッと扉が開く音がし、そんな男の声が聞こえた。

扉は直ぐにガチャリという音と共に締まり、静寂が通路に戻ってくるが、ジョージの心臓は周りに聞こえるんじゃないかと思うほどにドクドクと鼓動を強めていた。

（あつぶねえ……。もう少しで見つかるところだったぜ……）

一先ず危機を脱したジョージはここに留まるのは下策と思い、通路を元来た方向へと取って返す。

そして、小屋まで戻って安全を確認したジョージは尾行されていないか注意しながら聡介の店へと戻っていった。

聡介の店へとジョージが戻ると、ジャックとエミリーがペンキが乾かないうちにと洗い流している途中だった。

木材の奥へと染み込んだペンキの赤色は落ちておらず、うつすらと赤色が残っていたが、幸い早く対処したおかげでそこまで目立つほどの後にはなっていないかった。

ジョージが戻ってきたことに気付いたジャックはエミリーを呼び、ジョージのところに歩いていく。

「どうだった？」

「ああ、奴は郊外のボロ小屋に入っていたよ。一見ただのボロ小屋だったんだが、上手く隠されてたが床に扉があってそこから地下に入れるようになってた。通路の奥に扉があってその中で誰かが話

してたんだが、うまく聞き取れ無かったよ。そのあとは見つかりそうになったんでここまで戻ってきたってわけだ」

「なるほど……。他には何かなかった？」

ジャックがさらなる情報を求めてジョージに質問をすると、ジョージは腕を組んで苦々しい表情をしながら相手のことを思い出した。

「それを書いてた奴の事だ。街のチンピラ風の恰好をしていたがあれは間違いなくプロだな。気配も足音もそこらにいるチンピラが消せるレベルじゃなかった。もしかしたら相手は大規模な組織かもしれないな」

「……うーん、困ったね。流石に僕たちじゃどうしようもないかも。」

「ちょっと厳しそうね……。」

2人に報告し終えたジョージは片づけを手伝い、その後は店内に戻り、二階に上がって休息をとる。

短い時間だったとはいえ、極度の緊張状態に晒されたジャックの体はすぐにその意識を夢の中へといざなっていた。

翌日目が覚めてジョージ達から昨晚の出来ことを聞くと、しばらく悩んだ末にそこへ行くことに決めた。

今はそこへ行くための準備の最中だ。

と言っても、聡介自体は話し合いの席に武装して立つのは相手に警戒心を与えて纏まる話も纏まらなくなると考えたため非武装で行くことに決めたので、今実際に準備をしているのはジョージ達3人だ。3人が武装したら元も子も無いじゃないかと聡介は訴えたが、丸腰で向かって脅されては目も当てられないというジョージの言い分も正しかったので、渋々承諾したというわけだ。

3人の武器はそれぞれ『デュランダル』『ジュワイユーズ』『オートクレール』だが、防具はと言うと極めて一般的な物を使用している。

ジョージはその大柄な体格を生かし、重量があるが防御力の高い鉄製のアーマーを着こんでいるために普段よりも迫力がある。

ジャックは細身の体を生かして速度を出すために革製のアーマーの上に要所要所を守る様に鉄板を付けられたモノを。

エミリーは女性なので重いアーマーを着こんで動くのは難しいために、全て革で（といっても強度は高い）出来たアーマーを着こんでいるが、その表面には幾らか幾何学模様が描かれていたり、文字が書かれている。

恐らくは魔術的な補助を組み込んだタイプの防具だろうが、その効

果までは魔術を良く知らない聡介は分からない。

3人の装備の点検が終わり、さあこれから行くぞ！と言う時になると、店の扉がバンツと開き、昨日のチンピラが入ってきた。

「……へえ今ここで俺とやるってか？ああん？」

聡介の後ろの3人の武装している姿を見て判断したのかチンピラは睨みをきかせてくる。

それにあわてた聡介は直ぐに誤解を解くために声をあげた。

「ち、違います！自分は話し合いをしただけです！待って下さい！」

「……それにしては随分な武装じゃねえか。本当に話す気があるのかてめえらは。………まあいい。話をするってえならついてこい。ただし、向こうについたら武器は預からせてもらっぜ」

途端にスツと目が細まり、嘘を見抜くように眼光鋭くこちらを見てくるのに対して聡介が真っ直ぐに視線を返すと、少しの沈黙のあとチンピラは条件付きで許可を出した。

「ちょっと！そんなの……」

「エミリー。いいから……。分かりました。案内お願いします」

反論をあげかけたエミリーを手で制し、聡介がチンピラに頭を下げるとチンピラは店の外へと歩き出した。

店を出るときに『安全守る君』でしっかりと鍵をし、安全を確認するとチンピラの後ろをついて歩き、裏路地を通り郊外へと抜ける。

チンピラに促されるままに小屋に入り、地下へと通じる階段を下りていく。

薄暗い明りの灯った通路を抜け、角を曲がると鉄製の扉が目の前に現れる。

見かけによらず意外に分厚い鉄の扉をくぐると応接室のようにテーブルとソファが備え付けられた部屋が視界に広がった。

「ちょっと待つてろ、今呼んでくる」

そういうと男は部屋の奥へと通じる扉を開けて向こうに入っていた。

どんな奴が出てくるんだろうと緊張していると、入ってきた扉がガチャリという音と共に開いた。

あれ？と思い後ろを振り向くと、そこには何度もお世話になっているエドガーの姿があった。

「あれ？もしかしてエドガーさんも嫌がらせを受けてきたんですか？」

不思議に思いつつ、エドガーに尋ねても否定するように横に首を振るだけだ。

その様子を変に思っていると、ようやくエドガーが口を開いた。

「……まだ分からないか？しゃーねえから教えてやる、俺がここのボスだ」

言い終わるや否や、影に潜んでいたのだろう男達3人が聡介以外の3人の背後に回り込みあつと言う間に拘束すると同時にその首元に短いナイフを突きつける。

気が緩んだ一瞬のすきを突いて飛び出してきた男達になす術も無く拘束されてしまった3人はもう動くことは出来ない。

「安心しろ。後ろの奴らは暴れられたら困るから動きを封じたただけだ。害を加えるつもりは無い」

「え、そんな……。エドガーさんが……。なんで？」

突然の事態にいまだ頭が混乱している聡介はショックをつけたまま

だ。

「あの店は隠れ蓑だ。普通に成功している店なら、裏でこんな商売をしているとは思われないからな。経営自体は何も黒いところは無  
いから怪しまれることはねえ。こことは全く別物だからな。ああそ  
れと素人に手を貸しているあれもそうだ。周りからの評判は上がる  
し、多少怪しまれるようなことがあってもそれが覆い隠してくれる  
からな。仕事もしやすくなるってもんだ」

「……それじゃあ、あれは演技……？」

「ああそうだ」

その言葉を聞いた途端急に力が抜けたように聡介は柔らかいソファ  
ーへと沈みこんだ。

それも当然で、今まで親しくしていた人にいきなり裏切られれば誰  
だって茫然とするだろうことは想像に難くない。

「わかったか？さて、本題だが話は聞いているな？今ならまだ何も  
しない。早くでていくんだ」

「何故ですか……？」

「予想以上にお前が売り上げを伸ばしているってことだ。これ以上  
成長しないうちに芽は摘んでおくに限る。これ以上成長すると表の  
店の経営に影響が出るからな。幸いまだ常連とかもついてないだろ



う。分かったか？」

消え入る様に声を発した聡介に対してエドガーは無表情のままに言葉並べる。

「でも……！」

「くどいぞ、ソウスケ。これは最後通告だ。俺だってお前を憎んで殺したいわけじゃない。引くんだ」

言葉の刃と共に、喉元に鈍い光を放つ鉄の刃を突きつけられた聡介は黙って引き下がるほかない。

しばらくボウツとしていた聡介だが、今まで色々してもらったことは事実だ、たとえ利用するためだったとしてもっと自分に言い聞かせるについに聡介は口を開いた。

「分かりました。エドガーさんには色々教えてもらったりお世話になったので出ていきます」

「それでいい。1日待つ、明日までに荷物を纏めて出ていけるようにしろ。移動用の馬車は俺が話を通しておく」

ジョージは声を上げようと動いたが、喉にヒヤリとした鉄の刃を無言で押しあてられ、生温かい血が流れるのを意識すると動きを止め

た。

隣のエミリーやジャックは血こそ流れてはいないが、先ほどよりも刃と喉の距離は近い。

どちらにしても動くのは愚か、声を発することもできないだろう。

そうしてついに聡介とエドガーの話は終わってしまった。

ジョージ達はドラゴンゾンビ戦の時に加え、またもや自分達の実力の低さを痛感し、苦汁を舐めることとなるのだった。

## 017 話し合いと黒幕（後書き）

5200字です。

今回もちよつと更新に時間が……><;

学校も始まつてしまい、親にPCする時間も制限されてしまったので申し訳ない！

イイ訳ですよ！本当に申し訳ない！

皆さんが読んでいて「まさか！」と思っていればいいなあと思いつつ書きました。

そう思っていたただけでしょうか？もしかして予想済み；w；？  
予想済みなら自分はもう本格的に落ち込みますがね！

……さて、活動報告でも書いてあったとは思いますが、タイトルを変更しようと思ひ悩んでいます。

ちよつと内容と合わなくなってしまったので……。

これは自分の見通しが甘かったとしか言えません。

弁明の余地なしです、頭が上がりません。

まだ新タイトルを決めたわけではないので、変更が確定事項ではありません。

なので、感想と共にタイトル変更の是非を問いたいと思います。

なにとぞご協力お願いいたしますm（――メ）m

それでは！

次回もお楽しみに！（次は出発ですよ！

## 018 馬車旅と盗賊達

018 馬車旅と盗賊達

翌日、聡介の店の中では慌ただしく4人が動きまわっていた。

ジョージ達3人は自分達の防具や生活用品などの荷物をまとめるだけで済むのだが、聡介はそうにも行かない。

この前創ったレコードや蓄音機、ランプ、灯油、食糧、道中の水に武器・防具、阿克セサリーに更にはその他もろもろの生活必需品をまとめなければならぬのだ。

当然旅をするつもりで揃えたものではないのでかさ張る上に重いものばかりだ。

それらの雑多な物を聡介が工房の扉前に置き、ジャックとエミリーが店の扉前の通りへ置き、最後にジョージが商人用の大型の馬車へと積み込む。

金庫兼倉庫の中で錬金術を使って取りだすのを見られないようにするために、全力で全ての荷物を運び終えた聡介は今倉庫の中に佇んでいる。

とりあえずさっさと自分用の防具などを取り出した聡介だが、部屋の中の鉄板を置いて行くのもつたいない気がして、全ての鉄板を鉄のインゴットに変えている。

インゴットに変え終えた聡介は、次に床に敷いてあった擬装用の木

の板を使つて、インゴットを入れる木箱と木の繊維を利用した袋を練成した。

木箱にはもちろん鉄のインゴットを次々と放り込んでいき、袋の中には自分用の防具を丁寧に入れていく。

「おい、ソウスケー！工房の前にあつたのは全部積み終えたよー！他には無いかー？」

「待つてー。今持つていく〜」

工房の扉の隙間から聞こえてきたジャックの声に返事をしながら木箱を抱えて持つていく。

ゴンツと鈍い音を響かせて床に置かれた木箱に背を向けて工房の中に戻つていく聡介。

「！？重ッ！」

重そうな音がしたが聡介が持っていたのだから大丈夫だろうと高にくくっていたジャックは、自身が全力を込めてもなかなか持ち上げられず、持ちあがってもフラフラとするということにショックをうけていた。

（俺そんなに力なかったっけ……？）

しかし、そんなショックもジョージに木箱を渡した時点で霞んでいた。

ジョージでさえも受け取った瞬間に一瞬バランスを崩しかけたほどだったからだ。

とはいえ、そこは怪力の持ち主のジョージで、すぐに持ち直して馬車の中に積み込んでいった。

自分用の防具を取りに戻った聡介もすぐにエミリーと共に店から出ていき、ジャックやエミリーを先に馬車に乗せると店の扉に付けてあった『安全守る君』を取り外してから最後に馬車に乗り込んだ。

「じゃあ首都までおねがいします！」

馬車の先頭の御者台にのっていた御者の方に指示を出すと、4人を乗せた馬車はどんどんと『元』聡介の店から離れていった。

滅多に訪れない裏路地を横目に見ながら通い慣れた表通りを通り過ぎ、色々な材料を買った市場を横切って馬車は街の南門へと向かう。見送られるほど親しくなった人も居らず、馬車はただただ通りを進んでいく。

門を通り抜ける寸前、聡介達が乗る幌をかぶせた荷台の中にパサッ

という音と共にカードが放り込まれた。

荷台から体を持ち出して周囲を確認するも門の近くでこった返す人ごみに紛れてしまったのか相手は分からない。

この人込みでは見つかりそうにないと判断した聡介はカードに書かれている内容を見る。

『餞別代りつてわけじゃねえが、一つ忠告をしておいてやる。王と宰相には気を付ける。あとは自分で考える。』

P S . 誰にもバラすなよ』

差出人も名前も無かったがこれを書いたのは恐らくエドガーなのだろう。

どういう意図かは不明だが、王と宰相に気をつけろと言うことでエドガーに益があるとは思えないので心の片隅に留めておくぐらいはしてもいいかもしれない。

追伸の方は一見『王と宰相に気をつけろと書いたことに対する不敬罪を黙れ』とも取れるが、本当のところは『エドガーが率いていた組織のことについて黙れ』ということなのだろう。

一般の人が見ても組織のことが分からないようによく考えて書かれているなあなどと場違いなことを思いつつ、聡介はそれを懷に仕舞うのであった

馬車による旅路は荷台に惹かれていた商人用の質の高いクッションのおかげでそれほど苦にならず　とはいえ振動はそれなりにあったが　、一行は予定の行程通りに進んで1日目の野営場所でありと一泊した後、2日目の行程を消化している最中だった。

時々用を足したり、昼食をとるために停まることはあったが、それ以外は何事も無くガタゴトと揺られながら進んでいた。

かっぱかっぱと蹄で地面を叩く音が軽快なリズムを生み、その上に車輪の地面を転がるガラガラと言う音が重なるのを聞くと、自分は今馬車に揺られているんだなあと感慨深く感じてしまう。

元の世界では馬車はおるか、乗馬さえしたことのない聡介にとっては新鮮に感じるのは当然のことだろう。

舗装されていない道を走る馬車は凹凸に引っかかって揺れることもしばしば有るがそれさえ気にならない。

ときおり風に乗って運ばれてくる土や草の匂いでさえもとても芳しい天然の香水の様に感じられてくる。

体を反らし深呼吸して胸一杯にその香りを吸い込むと今度は雲一つない真つ青な空が目の前一面に広がる。

キラキラと照りつける太陽は現代にいたころであれば、建物の陰に隠れクーラーで涼をとっていたが今は全く気にならない。



風景というものがこれほどまでに影響を与えるものだということも驚きであった。

そして、夕暮れ時に峠に差し掛かり、予定の場所まで達していないこともあり、峠を進むことを決めた4人は幾分か遅くなったペースで進む馬車の中で雑談に興じている。

しかし、その楽しい雑談も突然夕焼けにそまつた空に響く馬のいななきで中断させられてしまった。

それだけでは無く、周りからはドドドドドと言つ複数の馬が地面を踏みならして駆ける音が馬車を取り囲むように響いてくる。

「と、盗賊だあ!!?」

御者の悲鳴に近い叫び声が聞こえた。

そう……つまりは盗賊の集団に囲まれてしまったのだった。

「ようう！商人様あ！哀れな我ら盗賊団に身包み全てめぐんでくれよあー！」

その言葉のどこがおもしろかったのか仲間の奴らはギャハハハワヒヤヒヤヒヤ笑いまくっている。

「……オラア！無視してんじゃねえ！さつさと出てこいやゴラア！この状況わかってんのかてめえら！ああ！？」

馬車の中でキョトンと顔を見合わせているとそれが無視されたのかと思っただのかボスらしき男が怒鳴ってくる。

さあどうしようかと思いはじめたところでジョージが無言で立ち上がって荷台から下りていった。

それに続くようにジャックも口を閉ざしたまま降りる。

「ちょっとまってね」

エミリーだけがそう短く言葉を残して、これまた荷台から下りていった。

今や荷台の中にいるのは大量の荷物と聡介だけだ。

「ヒューッ！こりゃ活きの良さそうな女じゃねえか！あとでたぐっぶり可愛がつてやるからなあ」

下卑た視線がまるでヌメヌメとした触手のように無遠慮にエミリーの体をなで回していくが対してエミリーは涼しい顔のままだ。

女性冒険者として過ごしていると少なからずそういった目で見られ

と、そこへ後ろから拘束でもしようと思ったのか近づいた男の首から上が鮮血を撒き散らしながら宙を舞った。

耐性はできてはいるが、不快感はどうしようもないためにイライラとした感情も合わさっていたのだらう、その様は流麗なというよりは荒々しさが勝っていた。

ドサツという音と共に地面に赤黒い血だまりが出来始めたところにや  
つと時間は元の速さを取り戻した。

そして、最初に叫んだのは盗賊達のボスだった。

相手の人数は14人  
エミリーが殺したのを入れるなら15人

で、だいたい1人が4人を殺せばいい計算だ。

相手もそれがわかっていのかバラバラに攻撃してくることは無く、1人に対して4人が取り囲んで一斉に攻撃してくる。

前後左右から同時に襲い来る刃の1つだけに集中すれば他の3つの刃がその無防備な体を切り裂くことになる。

かといって、同時に対処すると言うのもかなり厳しい話だ。

ジョージは4人がどうしたと言わんばかりに背中に携えていたデュランドルを取り出し、その場で体ごと一回転させる形でデュランドルを振りぬき取り囲んできた全ての敵の胴体を上下に分断した。

ジャックはと言えば、右斜め前方へ体を投げ出し前転しつつ刃の交錯点から抜け出した次の瞬間、起き上がるついでに体を右回りに回転させて右手に持ったジュワイユーズで右手にいた敵の左脇腹を深々と切り裂く。

その後も切り裂いた勢いを利用して初めに正面にいた敵に素早く斬りかかると、対処しきれなかった盗賊は自前の斧を振り上げる間もなく逆袈裟に切り裂かれた。

それからあとの二人の獲物である鎌と斧の木製の持ち手を斬り飛ばすと軽くジュワイユーズを振るいトドメを指した。

エミリーの方は、前方で相手が斧を振り上げた瞬間にそのガラ空きの胴体へ体ごと突撃する形で相手をオートクレールの剣先で貫き、勢いのままに相手ごとたおれこむことで残りの3つの刃を回避する。

運よく心臓を突き刺さったオートクレールを引き抜き、後ろを振り返って構えると、敵はあわてて構えなおした所で追撃などは来いていない。

3人の中で最も弱いのか、お前が行けよとばかりに押し出された相手はバランスを崩してこけかけた隙を狙って無防備な背中にオートクレールを突き立てる。

背中を刺された相手は、あまりの痛みを持っていたナイフを空中に放ってしまい、それを空中で見事にキャッチしたエミリーが狙いを付けて次の相手の顔面に投げつける。

仲間の眼球に深々と突き刺さったソレを見て恐怖の色を浮かべ始めた盗賊は、近寄ってきて剣を振るったエミリーに殺された。

「クソがッ！！撤退だ、奪えるもんだけ奪っていけ！！」

盗賊達のボスがやけくそ気味に叫ぶのを聞き、ジョージは何を言っているのか意味が分からなかった。

相手は4人ずつ倒せば住むぐらいの計算で、自分もジャックもエミリーも自分の周りの敵は倒して、残りは目の前のボス一人だけだと思っただけだ。

しかし、冷静になって考えてみると何が間違っていたのかようやく気付く。

相手は何人で攻めてきていたか

答えは15人

エミリーが最初に殺したのが1人と、その後にエミリーとジャックと自分が倒したのが4人ずつ、目の前で逃走を始めるボスを入れても14人だ。

では、残りの1人はどこにいる？

「ワアアアアアアアアアアア！！」

ハッとして振り返った馬車から聡介の叫び声が響いてきて

ザシュ

と、剣が肉を切り裂く音が時間がとまったように静まり返るこの場に響き、次いでゴトリと何か重い物が馬車の硬い床に落ちる音が聞こえた。

「ソウスケーーーーーーッ！！！」

そんなジョージの叫び声は、血で真っ赤に染まる峠の上に広がる深

い夕暮れの空に吸い込まれていった。

018 馬車旅と盗賊達（後書き）

4566文字です。

んゝなんか微妙にしっくりこない出来ながらもあげてしまった気がする。

これでよかったのだろうか@@？

まあ……いいか……。

それではゝ

次回をお楽しみにゝ（モチベあがらない……）



## 019 殺人と殺人（前書き）

注意！！

作者の性格上、グロイ所が書かれています！

読んでいて気分が悪くなった方は飛ばしてください。でも問題ありません。

本格的にグロく書いたつもりはないのでそこまで気にしなくてもいいかもしれませんが……。

……十分グロいって！って言う方は感想で愚痴ってください。直しませんが……。

## 019 殺人と殺人

### 019 殺人と殺人

ポチャンと、夜の暗闇の中で月の光を反射してキラキラと光る川面に小さな石が投げ込まれた。

それを投げ込んだのはいささか暗い雰囲気を放つ聡介だった。

今、聡介達はあの戦闘があつた峠からさらに進み、峠を下つた先の河原で野営している。

さきほどまではジョージ、ジャック、エミリーの3人は盗賊達を切ることによつてついた血脂を川の水で綺麗に洗い流していたが、今はその3人も明日のことを考えて早めに睡眠をとるらしく、川べりに座り込んでいるのは聡介ただ一人だ。

そうは言つたが、実際のところは聡介を一人にさせてやろうと考えてのことだろう。

聡介は傍らにクラウ・ソラスを置いて川べりの一際大きな岩に腰かけて川の流れをじつと見つめているだけで身じろぎ一つしていない。

なぜ、聡介がこのような状態になっているのか。

それは少し時間をさかのぼらなければいけないだろう、数時間前までの盗賊達との戦闘の場面へと。

聡介は荷台の奥の荷物の片隅に隠れる様にしてじつと動かずに潜んでいた。

荷台の入口の方では、こっそりと近づいてきていた盗賊の一人が荷台の入口付近の荷物を物色している最中だった。

ガタンと言う音と共に盗賊の一人が乗り込んで来た時はヒヤリとしたものだが、盗賊は目の前に積まれている荷物 剣や、鉄板などに目がいつてるのかこちらへ近づいてくる気配は無い。

できればコチラにきませんようにと、なるべく息を殺し、身を固くして一切の動きを止めていた聡介だがその願いも叶うことは無かった。

「クソがッ！！撤退だ、奪えるもんだけ奪っていけ！！」

という言葉に反応して盗賊が顔をあげたからだ。

じっくりと見るのを止めた盗賊は手元に置いてあった数本の剣を左で纏めて掴みとり、そして奥の方へ何かをとりに来た。

「あん？」

と、盗賊が声を出したことで何だろうと思った聡介が少し視線をずらすと物陰から少しだけ飛び出した衣服の端っこが見えた。

やばい……顔を青くした聡介だがもう遅い。

ハッとして顔をあげた聡介の目の前には既に上から覗きこんできた盗賊の無精髭の生えた顔が映る。

「テツメエ……！」

盗賊が声を上げ、右手を腰に差した剣へと持っていた瞬間、聡介の脳裏にはそれで斬られる自分の姿が幻視された。

いくら契約によって死ぬことがないと言っても、死と言う純粋な本能的恐怖を叩きつけられた聡介は半分パニックに陥った。

「ワアアアアアアアアアアア！！？」

一応……と剣の柄へと手を触れさせていた聡介の右手は、それを握り締めると恐怖自体を振り払おうかとする様に剣を振るった。

相手も見ずに無造作に振るわれた剣は、盗賊が剣を振り上げてから空きになった胴体を逆袈裟に斬り上げ、心臓へと達するほどに深々と切り裂いた。

ザシュ

と剣が肉を切り裂く音が耳に入り、ついでゴトリという音が床と空気を通してつたわってしばらくしてようやく聡介は目を開けた。

目を開けると目の前には胴体を深々と切り裂かれ斬り口から血を溢れさせ始める斬死体。

映画などのグロテスクなシーンではこういう物も見ただことはあるが、それはスクリーンを通しての単なる映像でしかない。

実物は違う、目の前でピクピクと痙攣する筋肉に、むせ返るほどに濃厚な血の匂いと生々しく光を照り返す血液。

それら全てを含めた情報は聡介の脳を激しく揺さぶる。

「ソウスケ！大丈夫か！！」

そう言つて飛び込んできたジョージの横を通り過ぎ、一刻も早くここから離れようと外に飛び出すと外にも凄惨な死体がいくつも転がっていた。

心臓を突き刺されて胴体に血の滝を流す死体、頭と胴体を切り離されて夥しい量の血の海を広げる死体、眼球にナイフが突き刺さつて絶命している死体、極めつけは胴体を真っ二つにされたことで血にまみれた小腸や大腸などの臓物がボトリと地面へと散乱している死体。

始めて実物の惨殺された死体を見てしまった聡介は思わずその場に両膝について胃の中のを吐いた。

地面へと吐きだされた吐瀉物からはすっぱい匂いが立ち上ってきてそれが更に吐き気を増していく。

全て吐きだした聡介はその現場から目を反らし、山の向こうへと沈みゆく太陽へと目を向けた。

後ろでは凄惨な光景が広がっているのに、眼前には山に沈みゆく美しい太陽があるのがひどく奇妙に思える。

これほど見るも絶えないことが起こったのに、世界は何事も無かったかのように回り続ける。

それは当たり前のことだが、今の聡介にはとても奇妙なことにように思えた。

日常となんら変わらぬ太陽を見ることで段々と落ち着きを取り戻してきた聡介は深呼吸を一度する。

「ソースケ……わりい、また守れなかった……。警護なら一番に護衛対象者を優先しなけりゃいけねえのに倒すことに集中しちまった。……すまん……」

馬車の中の死体を片づけているジャック達のところから歩いてきたジョージは聡介の後ろに立ち、頭を下げた。

「うん……いいよ。ジョージ達は精いっぱいやってくれたんだから……。こっちこそ取り乱してゴメン。……もういこっか」

死体を見ないようにジョージに話しかけた聡介の顔には作り笑いが張り付けられていた。

それを見たジョージは無理しているとすぐに感づいたが自分がそれを言えるはずも無く、ああ……とだけ短く答えるだけにとどまった。やはり馬車の中に戻るのとは出来なかった聡介は、御者台の空いているスペースのところへ座らせてもらっている。

御者は多少気の毒そうな目で聡介を見ていたが、何も言わない方がいいと思ったのかすぐに前を向いた。

キレイに有る程度血を拭き取ったジョージ達が馬車の荷台に乗り込むのを確認すると馬車はそろそろとゆっくり動き始める。

当初の目的地である河原までは誰一人としてしゃべらなかった。

それゆえに葉が風に揺られてざわざわと言う音だけがいやに耳に付いた。

《ソウスケ…… あれは仕方が無いというものです。 抜かなければソウスケ、あなたが切られていたのですよ?》

「そうはいつでも…… 殺し…… ちゃったんだよね。 初めての人殺し……」

《確かに人殺しではありますが、正当な理由による殺人ですよ。 今のぐらいのことで凹んでいてはこの先が大変ですよ?》

「……うん。 ……ごめん、ちょっと一人で考えるよ」

そういった聡介は、夜空というスクリーンに爛々と輝く星々の瞬きを見上げる様に岩の上で仰向けになり、頭の下で腕を組むとゆっくりと目を閉じた。

そして、何かを考えているのか数分間険しい表情で目をつむっていたが、しだいに力が抜けていくように表情が柔らかなものとなってきた。

どうやら目をつむって考えている内にねむってしまったらしい。

《……しかたないですね……。 風邪を引かないように暖かい空気の膜で包んでおきますか……》

一人? 残されたクラウドはソウスケに向かって優しく魔法をかけたのだった。



「ああ久しぶりだね。どうだい？初めての人殺しをしてみた感触は？」

目を開けると、そこにはいつぞやの真っ黒い球体がホワイトアウトのように距離感が分らなくなるほどにどこまでも真っ白な空間に浮かんでいた。

きつと『コレ』が出てくると言うことは夢であって夢ではない場所なのだろう。

「お久しぶりです。そうですね……やっぱり怖いですよ。殺したことでその罪が生きていく中でずっと付いて回って、新しく出来た関係でさえ、殺人をしたことが知られたらそこから周りの全てが崩れていく気がして……」

「なるほど……。実に平凡かつ解決しやすい悩みだな。この世界は殺人が当たり前の世界な上に、そのような小さなことで追及してくる人間などいない。ここは君のいた世界ではないのだから、君の心配は杞憂というものだ」

バツサリと斬って捨てる『ソレ』は確かに正しいが、それでも釈然としないのは仕方のないことではある。

「……それでも、相手に怨まれているなんて思うと……。重圧で押しつぶされそうで……」

「……君は存外に面倒くさいな。それならば直接会って話すといい」  
「ちょ、ちょっと待って下さい！そんなの出来るわけが！」

「私が出来るといったら出来るのだ。君の悩みを解決できるし、これからこの世界で生きていく上で死者からの話を聞くのは良い経験になるだろう。そら、話してみろ」

そういつて『ソレ』の手前が一瞬真つ黒なインクで塗りつぶされたかと思うと、目の前には自分が殺したはずの盗賊団の男が立っていた。

殺した時の違いといえば、バツサリと切ったはずの傷が無くなっていただけで、それ以外はあの時と全く同じ格好だった。

「……よお。久しぶりだな……」

「……あの……久しぶりと言っても半日ぶりなんですが……」

「ああ？……くそっそうか、ここじゃあ時間の流れが違っただったな、くそっ。俺はもうここで10年過ごしてんだ！」

どういうことだろう？と思うているとその説明を『ソレ』がした。

「まあこの男が住むのは別の部屋ではあるが……ここは私の管理する空間でな。一般には天国や地獄などとよばれるとこだ、いわば魂の行きつく先だよ。私はここで様々な世界を監視・管理しなければならんのだ。そのためには膨大な時間が必要だ。たとえば1日といつても、1つの世界でも情報は膨大で、その世界自体がいくつもあるのだから、とてもじゃないが同じ時間の進み方では追いつかないのだ。半日に対してのこちら側の時間の進み方が10年と言っわけだ。分かったか？分かったなら話を続けたまえ」

あいかわらず傍若無人な態度で一方的に話す人だな……と思うが、そちらにばかり気を取られるわけにはいかない。

「あ……話がそれたな、どこまで話したっけな……。……ああ、思い出した。どうやらお前は俺がお前のことを恨んでいるんじゃないかと思っっているらしいな。……まあ殺されたばかりの時は、そりゃあ腹は立つたし、お前を殺して復讐してやりたいと思ったが。それも最初だけだ、今はもう何も考えてねえよ。よくよく考えてみりゃ、俺だって盗賊で何人も殺してきたんだからな。お前を責めることなんて出来ねえよな。……それにこの方がよかったのかも知れねえ。盗賊続けて人殺しまくって人から獣に堕ちるよりはな。……だから、俺はお前を恨んじやいねえ。そもそもこの世界……いや、あの世界か、あの世界じゃ人殺しなんて日常茶飯事にされてることだ。生きるために殺し、楽しむために殺し、命令されて嫌々殺すことだってある。だから、俺を殺したことに執着するな。殺した相手の全てを自分の力にしていぐぐらいの気概をもて。そうしなければ……お前もまた無残に殺されるだけだ」

途中で口を挟もうとする聡介を手で制し、そうして名前も知らない盗賊は言いきった。

それは全て背負っていくという、救いのない残酷な事実であるが、真実的を射ていることでもある。

死人を思つてうじうじと悩むことは結局は現実逃避であり、自己満足でしかないのだろう。

厳しい現実を叩きつけられた21歳の聡介にとって、その言葉はとも重く受け止めがたいものだったが、同時に受け止めねばこの先生きてはいけなかった。

「……殺した本人からこう言われるなんてなんだか不思議な感じがすね。想像していませんでした。……でも、ありがとうございます。少し楽になった気がします。あなたの人生の分もこの世界でしっかりと生きぬいていきます。本当にありがとうございました。」

スッと腰を折り曲げ、頭を下げる聡介。

「……どうやら話は終わったようだな。もう戻すぞ、こう見えて私は忙しいのだ。もうこれ以上手間をかけさせるなよ」

「……では、どうして呼んだんですか？」

「……………。無責任に異世界に送って人殺しごときで潰させては私が納得せんだろう。……勘違いするなよ、お前の為などでは無い」

最後のそれを言うのは逆効果、むしろツンデレって思われるだけなんだけどなあ……と思いつつも聡介はそちらにも頭を下げる。

『ソレ』も本当にこれで終わりのつもりなのだろう、聡介の足元からいつぞや光が渦を巻いて湧きあがってきていた。

あの時と同じ、眩しくて荒々しい光だが、どこか温かみのある光がゆっくりと聡介の全身を覆っていた。

ただ違うのは聡介が『異世界に行く』ではなく、『異世界に戻る』という事実だけだ。

「あの！最後にあなたの名前を教えてくださいませんか？」

光に包まれつつあるなかで聡介は叫んだが、それに返ってきたのは簡単な答えだった。

「今更知ってどうすんだ。お前が生きるのは……未来だろう？」

その言葉と共に聡介の意識は温かな光の中にゆっくりと溶けていった。

## 019 殺人と殺人（後書き）

5025文字です。

ちよつとグロイ部分書きちゃったかも……。

反省も後悔もしてませんが。自分的にはこれでいいので……

あ、苦情だけじゃなくいつも通りの感想も求めていますので。

それでは次回をお楽しみに。 （次話こそ王都に！）

020

移動と王都

地図は□□に載っています！

020

移動と王都

> i 1 2 6 4 9 — 1 4 0 1 <

「ん・・・・・・・・ふわああ・・・・・・・・朝・・・・・・・・か・・・・・・・・」

目を開けて飛び込んできた朝日の眩しさに目を細めつつ、体を起こそうと力を入れる。

「アイタタタ・・・・・・・・」

体を起こそうとして力を入れたが全身が痛くて、眩しさとは別の意味で目を細めることになったが、それも当然の話でいくらクラウが温度を調整してくれたとはいえ、堅い岩の上に寝ていたのである程度の痛みは仕方ない。

上半身だけ起こして正面を向くと、ちょうど朝日が昇ってきているところだった。

確かに体は痛かったが、心の方はと言えば軽やかな気分だった。

新たな覚悟を決めて迎えた朝日のなんと綺麗なことだろう。

昨日までと何ら変わらない風景すらキラキラと朝日を反射してとても美しいし、川辺の朝のスッキリと澄んだ空気もまた格別だ。

深呼吸をして爽やかな空気を目いっぱい吸い込んだ後は、川の水を両手で掬い顔を洗う。

ヒヤリと冷たい水で眠気もすっかりと吹き飛んだ聡介は体を伸ばすと馬車の方へとゆっくりと歩いていく。

途中で小さな子供の狐が目の前を駆けていったと思うと、その後ろから更に小さな子供の狐が転がる様に追いかけていった。

かわいいなあ……と小さな癒しを貰った聡介の顔には自然に笑みがこぼれる。

馬車を停めてある場所まで行くと、既に起きだして朝食 といっても水とサンドウィッチだが 準備をしていたジョージ達と目があつた。

ジョージ達は一瞬固まったが、聡介の顔を見ると何かあつたことを悟って、心配は杞憂だったと分かり、いつも通りに接しようと決めた。

「おはよう、皆。今日はどこまで進む予定だっけ？」

「えーっと……ああ、昼過ぎには王都につくと思うよー」



聡介が聞くと、丁度地図を傍らに置いてサンドウィッチをつまんでいたジャックが返事をする。

地図を見ようとジャックの隣に腰かけると、ジャックが見やすいように少しずらしてくれたので地図を覗きこむ。

「今がこの川の曲がっているここだから、ここから真っ直ぐ街道沿いに進むと王都だよ」

ジャックが道程を指でなぞりながら教えてくれる先を辿ると、確かに指の先に城らしきマークが見えた。

地図を確認し終えた後は、エミリーに勧められるままにサンドウィッチを頬張り、しばらく休憩した後に馬車の荷台の中に乗り込んだ。

その後は何事も無く、鳥の囀りを聞きながら王都への道を辿っていた。

「なんか緑が減ってきたけど、本当に道あっているの?」

王都に近づくにつれて緑が段々と減っていつていることに気付いた  
聡介は少し不安そうに尋ねた。

「知らないのかい？ここは土の国だからね、基本的には緑が少ない  
んだよ。あの街は水の国と直ぐ近くだからそのおかげで緑があるん  
だ。あそこは本当に例外だね。でも道はちゃんと合ってるから大丈  
夫だよ。」

「なるほど……。じゃあ王都の近くだと作物があまり育たないんじ  
ゃない？」

現実世界で日本と言う国が外国からの輸入に頼る国だということを  
思い出した聡介はそのことについて聞いてみる。

すると、御者からはすぐにそのことに対する答えが返ってくる。

「んゝまあそうなんだけど、この国は鉱物資源が豊富だからね。そ  
れを使って他国……まあ水の国が主だね、野菜とか果実とかを仕入  
れているんだよ。」

「そうなんだ。……あつ、でもそれだと水の国が野菜とかの輸出を  
止めたら、食糧が少なくなつて簡単に国を乗っ取られない？」

「いや、この国は鉱物資源が豊富なだけじゃなくて、それらを扱う  
鍛冶師自体のレベルが高いから質の良い武器を色々な国に輸出して  
いるんだ。向こうにとつてもそれらを戦争で失つて輸入できなくな

つたら軍の質が落ちるからそれはしないだろうし、それこそ止められたらこの荒野で鍛えられた強靱な踏破力を持つ軍が動くだろうさ。まあ、持ちつ持たれつでバランスが取れてるから戦争はないよ」

技術を持つことで、手出しをさせないというのは日本と同じだなあと聡介は感じる。

「ふむふむ……なるほど。どこの国もそんな感じなの？」

「ああそうだな。それこそ大昔は全部の国を巻き込んだ大戦があったらしいけど、今は大体のところが平和だなあ………そういえば、闇の国は政治が上手くいっていないらしくて内乱寸前だそうだよ。もし商売で行くことがあるなら気を付けた方がいいかもよ」

「ありがとうございます。」

御者の忠告に感謝の言葉を返した聡介は考える。

土の国でなら自分の知識と錬金術を使って元の世界の物を再現したり、想像上の物を創ればそれが認められるかもしれない。

そうすれば安定した収入を得ることに繋がるし、有る程度の地位を築くことが出来るだろう。

それを使って国と繋がるようになれば、エドガーの時のようなことは起こらないかもしれない。

そう考えた聡介は、土の国で成功できるように頑張ろうと決意した。  
しかし、聡介はすっかり失念していた。

その頼るべき国自体が自分の技術を利用しようと企むかもしれない  
ということに……。

「おーい、王都が見えてきたぞー！」

荷台で昼寝を　　昼食前だが　　していた4人を起こすように声を  
張り上げた御者の声が聞こえてくる。

その声に反応して荷台の床に敷いた布の上から体を起こし、前方を  
御者の横から覗きこむと確かに王都が見えた。

聡介の目に最初に飛び込んできたのは巨大な鉄製の門だ。

コンスタンティヌスの凱旋門　　高さ25m　　を一回りほど小さ  
くしたぐらいの大きさの門は、流石に鉄鉱物を主な資源とする国に  
相応しく、要所要所にあしらわれた鉄の装飾が重厚な雰囲気放つ  
ている。

その巨大な門の扉は25?程の分厚さの鉄で出来ており、たとえ軍

隊が攻城兵器を持ってきて突破しようとしたところで徒労に終わるだろう。

かといってその門を避けて通ろうとしたところで、街全体を環状に取り巻く長大で分厚い石の壁がその行く手を遮っている上に、その壁の上では兵士が弓を構えて巡回しているので超えることすらできそうにない。

さすが、首都というだけはあると言った感じのある種の感動？  
上京した時にスゲー！と感じる時と同じ　　のようなものを感じつつ、馬車はどんどん進んでいき、門での審査を受ける。

門をくぐると巨大な門に邪魔されて見えなかった城や街並みが見えてくる。

すぐ目の前に広がる市場は、多くの露店でこった返していて、砂が舞い上がりつつも活気よく商売をしている。

目につく人々は強い日光を避けるためかゆったりとした長袖をつけ、アフガンストールのような布地を首に巻いているのが特徴的だ。

それらの奥へと視線を送ると中世の城とはまた違った高さがあり無く、実用性を重視した城が見えてくる。

こちらも門と同じで重厚な造りの城で、とても頑丈そうなのでちょっとやそつとの攻撃などではびくともしそうにない。

それらに見惚れていると審査を終えた御者が声をかける。

「このあとはどこに行けばいいんだい？もしまだ決まって無いなら、商工ギルドへ行って手続きをしてくるといいよ。ギルドカードがあるならそれを見せれば簡単に済むはずだよ」

「わざわざありがとございます。ちょっと時間かかるかも知れませんが、ここら辺で待っていてもらえますか？その分の料金は出しますので」

御者の親切に素直に従うことにして、荷物番をしてもらう代わりにある程度のお金を渡すと、聡介は教えてもらった右斜め前方にある商工ギルドへと向かおうとする。

「おい、ソースケ。俺たちはその間どうしておけばいい？」

「あつ、ごめんごめん。ちょっと時間かかるかも知れないから自由に行動していいよ。今からだいたい2時間後にまたここだね」

ジョージ達のことをすっかり忘れていた聡介は内心あわてつつ、表面上は平静を装って返事をする。

自由行動をもらった3人はちょっと話していたが、直ぐにそれぞれのしたいことをやりに散り散りになっていった。

商工ギルドへと入って行った聡介は手続きを済ませようとするが、登録をしようにも店舗が決まって無いことを受付で手続き中に指摘されて気付いた聡介は、受付のおじさんに苦笑されつつ店舗を紹介

してもらったことになった。

受付のおじさんから紹介された不動産屋に案内されたのは、表通り沿いの物件と表通りから一本入ったところの物件、郊外に建てられた物件の3つだった。

表通り沿いの物件は、もちろん表通りということもあり、集客率が多く見込めて売り上げも伸びるだろうが、賃金が高いのが難点である。

表取りから一本入ったところの物件は、表通りから一本外れているということで、集客率はまずまずにはなるが、賃金も普通の値段でバランスの取れた店舗なので名が売れているわけでないならオススメらしい。

最後の郊外の物件は、集客率はほとんど見込めないが、賃金がとても安いので、作って武器屋に収めるだけなら最適な場所かもしれないとは不動産屋の言葉だ。

3件の候補があるということで少し悩んだ聡介だったが、エドガーの時のようにまた面倒事に巻き込まれるのは勘弁してもらいたいのので表通りの店舗は一番に候補から外す。

とすると、残るのは自然と表通りから一本入った通りの店舗と郊外の店舗の2つになるが、作るだけ作って武器屋に卸して終わりでは、相手の反応を見る楽しみが無いため郊外の店舗も却下する。

バランスが取れているし、場所的にもそこまで面倒なことに巻き込まれないだろうと考えた聡介は、消去法で決まってしまった残る1つを新しい自分の店とすることにした。

一緒に回っていた不動産屋に話をつけ、家賃を1000ギルほど払って契約完了とする。

元の世界で引越しいええ、電力会社やガス会社、水道局、郵便局、電話回線etc…などの煩雑な手続きがたくさんあって大変だが、この世界はそこまで文明が発達していないのでそれらの手続きはほとんどしなくてもいい。

することと言えば、店舗兼住所も決まったことなので商業をする場所の登録と住所の登録ぐらいだろう。

その残った二つを早く終わらせてしまうために聡介は数十分前に訪れたばかりの商工ギルドへと再度入っていく。

中ではこれまた数十分前にいた受付のおじさんが座っていて、手続きの準備をしてくれていた。

手続きを終わらせた聡介は1軒隣の役所に入り、住所の登録をさつさと済ませて外に出た。

腕を持ち上げて腕時計　元の世界と時間の進み方はほぼ同じを見ると、約束していた時間を5分ほど過ぎていたので、慌てて集合場所へと向かう。

5分という僅かな遅れさえも気にしてしまうのは元の世界でも日本人ぐらいなもので、この世界の人々も気にしてはいないだろうがそれでも焦るのは日本人の性<sup>さが</sup>だろう。

聡介が集合場所へと向かうとそこには既にジョージ達3人が既に揃



っていた。

3人はそれぞれに自由行動をした成果をその手に掴んで持っている。ジョージは街の通りで開かれていた力自慢達による賭け腕相撲でその時のチャンピオンに勝つたらしく、賞金がたくさん入った袋を持ち、満足そうな顔だ。

ジャックの手には寂れた街の古書店で買ったという古書が2冊おさまっていて、その顔はジョージと同じで満足そうなものだ。

エミリーはというと、その手には……というか両手には屋台で買ったらしいケバブやタコスのような食べ物や、チュロスやドーナツなどの甘い食べ物握られている。

冒険者ということをしていると色気よりも食い気の方が勝ってくるのだろうか、食べている顔は幸せそうなので一向に構わないが……。

ともあれ満足そうな3人に新しい店が決まったことを伝えようと、荷物をそこに移しに行くことになった。

街の入り口付近で待機していた御者のところまで戻り、店が決まったので荷物を持っていく旨を伝えたと4人は馬車に乗り込んで店の前まで進んでいく。

店の外観は少々砂埃で汚れてしまっただけだが、洗い流せば問題なさそうな程度で、内装も備え付けの物が比較的キレイな状態で残っていた。

構造もガーランドの街の店とほぼ同じで、違いといえば倉庫がもう

一つついたぐらいだろうかというぐらいだ。

新しく出来た倉庫のおかげで、今度からは武器などの重要な品物を入れておく金庫と、材料などを入れておく倉庫とで分けておくことが出来るようになるだろう。

更に店の中を見ていくと蜘蛛の巣などもなく一見綺麗に見えるものの、床には隙間から入ってきた砂がうつすらと積もっているので掃き出してしまわなければいけない。

4人で協力して店の中に荷物を運び終え、ジョージ達から見えないように錬金術で一つの倉庫の中を金庫仕様にしあげると、『安全守る君』を店の扉に取り付けて鍵をしてから外に出る。

数日間とはいえ王都への旅を共にしてきた御者を見送るためだ。

御者はこれからガールランドへ向けて帰るらしく、既に冒険者風のお客を数人乗せている。

「初めは大変だとは思うが、この街でもしっかり商売していくんだぞ！」

と、励ましの言葉を聡介へと掛けた御者は、ピシッという音を立てて馬の尻を叩いて北門を通って出て行った。

随分あっさりとした別れ方だが御者とそのお客という関係はこういうものなのだろう。

御者と別れ、振り返った聡介の視界に広がるのは砂埃舞う土の国の首都『デザートランド荒野地帯』の街並みとその城塞。

今度こそは……と決意を新たにす聡介はこれからの予定を立て始める。

「そっだ、まずはあいさつ回りにしよう」

聡介の新たな日常はご近所さんへのあいさつ回りから始まるのであった。

020 移動と王都 地図はココに載ってます！（後書き）

5420文字です。

今テスト期間中つか明日もテストです。

マジ死ぬ。しかし、進路は決まってるのでおざなりだったり。

乙。ってなんかテンションおかしいです。ハイ。

さて、今回は満足いく話にならなかったので、ちょっと批判覚悟。

それでは、次回もお楽しみに。

P・S・ 745'977アクセスと、ユニーク114'603

人ありがとうございます

021

挨拶回りとマフィア

一部改定（前書き）

売上金に対し王都が3割、マフィアが1割、店側が6割と変更しました

021

挨拶回りとマフィア

門から店へと戻ってきた聡介は、ジョージ達にあいさつ回りに行ってくるから好きにしていよいよと言葉を残して工房の中へ入っていく。

この工房の扉は元の持ち主の防犯意識が高かったためか、少し薄いがしっかりとした鉄製の扉で、外に南京錠が、内側に門がかけられる作りになっていたので特に弄らなくても良さそうだ。

店の扉にも『安全守る君』を取りつけておいたので侵入される心配については大丈夫だろう。

もともと、相手が周囲にお構いなしで扉をぶっ飛ばしたり、ガラスをブチ破らなければ……の話だが……。

扉の話はさておき、工房に入った聡介は金庫 元は倉庫だが 中の木箱から鉄のインゴットを5本ほど取りだすと、その中の一本をアダマンタイトへと練成していく。

魔鉱石はほとんど残って無かったので、なけなしの魔鉱石と己の内に在る魔力だけを使って練成をする。

クラウドに頼んでも良さそうな気もしたが、あまり魔力を使わせてまた倒れる 力が抜けて浮かばなくなるだけだが ようなことをするのも忍びないため、今回は我慢。

体力だつて魔鉱石も使うからちよつと疲れるだけだろうし許容範囲内だろう。

よしつと体に喝を入れた聡介は、手を重ね合わせて鉄からアダマントイトへと連金していく。

以前創つた時の魔力の通道を思い出しながら腕から魔力を放出していくと、聡介の体は薄いヴェールを纏うように柔らかく光を放っている。

最初の練成の時の噴き出すように体から溢れていた余剰魔力とは違って、薄く纏うように漏れ出ているだけということはコントロールが上手くいってることのなによりの証だろう。

それから出来あがつたアダマントイトと鉄を1：4の比率で混ぜ、多少質を落としてから何本もの包丁の形に仕上げていく。

包丁の形に仕上げた理由は、料理で包丁を使う際にその切れ味を実際に体感してもらうことで評価を得ようという考えによるものだ。

一人暮らしの男性に配っても料理をするなら気づくだろつし、奥さんがいる家庭ならその奥さんが旦那に包丁のことを話すことも一応は期待できる。

一応アダマントイトを入れてはいるが、鉄の比率が大きいので研ぐことが必要になるだろうからその辺も商売に組み込めるだろう。

しかし、冒険者に関してはタダで配るわけにもいかないのだから辺は開店してからのことということできとりあえずはコレで良いだろう。

あとの作業は持ち手をつけることと、それを入れる箱を創ることだが、これは薪を使ってササツと仕上げてしまう。

持ち手をつけた包丁を箱の中に収めて蓋を閉じた後に、その蓋に漢字で『聡介』と名前をいれたらコレで出来上がりだ。

もちろん、『聡介』という文字が分かるはずはないのでコレはただの製作者の印というだけのものである。

全部仕上げた聡介はそれらをバッグに入れると工房の扉を開けて外に出た。

店の中はシーンと静まり返っていて人の気配がしないのでジョージ達はきつと外にでかけていつてるのだろう。

工房の扉に鍵を掛けた聡介は外に出て『安全守る君』でしっかりと戸締り ジョージ達には合いカギを持たせている をしたのを確認して歩き出す。

挨拶の回り方などをくわしく知らない聡介はとりあえず左隣りの魔法具を扱う店に向かった。

(…………黒魔術でも扱っているんだろうか…………。)



店の中に入った聡介の最初の感想はそんなものだった。

店の中には干からびた手のようなもの　人間の手そっくりである

や、まだ神経や血管が付いたまま目玉がホルマリン漬けのように置かれていたし、極めつけには骸骨　どう見ても人間のモノ  
や、血液が置かれていた。

そのほかにもなんらかの内臓らしきものなどの非常に目によろしくない代物が置かれていたがここでは割愛させてもらう。

床などに直接おかれているナニかをひっくり返さないように気をつけながら進んでいくと、奥には妙齢のお姉さんが黒い皮表紙の本を片手にカウンター横の本棚に寄りかかる様にして立っている。

恰好はというと、モデル並の八頭身の持ち主で、背中と胸元が大きく開いたホルターネックタイプの黒のロングドレスからは瑞々しく張りのある豊かな胸と引き締まったウエストが見て取れる。

ロングドレスに阻まれて直接見ることは叶わないが、その下にある足もスラッとした美しい脚であることは間違いない。

肌の色はというと、普段日の光を浴びてないのではないだろうかと思うほど雪のように真っ白で、黒のロングドレスがよく生える。

「あら？珍しいわねえ、お客様かしら？」

こちらの気配に反応して本を下げると、その奥には本に隠れて見え

なかった顔が現れる。

鴉の濡れ羽色のように真っ黒でサラサラと零れ落ちそうなほど柔らかな髪は、後頭部でひとくりにされていわゆるポニーテールになっ  
ていて、側頭部からの遅れ毛は先が軽くウェーブが掛けられてい  
る。

髪をあげることによって見えるうなじからはなんとも言えない大人  
の色香が漂って来て、思わずドキリとしてしまう。

「あつ、いえ。隣に越してきたのでご挨拶にきたのですが」

「あら、そお。良い子なのねえ君。こちら辺だとあいさつ回りなん  
てするような殊勝な商人は少ないから……お姉さん、君の事気にい  
っちゃったわあ。こまったことがあったらお姉さんにいいなさいね  
？」

キリッとした目を少し細め、流し眼を送るお姉さんは筆舌に尽くし  
がたいほどに色っぽい。

健全な青年男子としては反応に困ることこの上無いが、これがお姉  
さんの素なのか、止める気配はない。

つい赤面してしまうのはどうしようも無いというものだった。

「ふふふ、初心な反応ねえ。そういうかわいいのって好きよ、食べ  
ちやいたいくらいに……。うふふふ」

ぷっくりとした唇から放たれた言葉に更に顔をあからめつつ、このままではいけないと思い立ち、包丁を渡すことで話題転換を図る聡介。

「あ、あの！これウチで創った包丁なんですけど良かったらお使いください」

「あら、ありがとう。創ったっていうことは鍛冶屋なのかしら？」

「あ、はい。鍛冶屋兼武器屋……というよりは創ったものを売るっていう感じですかね、そういう店を開いてます」

「ふうん。お姉さんも何か必要になったら頼むわねえ」

「ありがとうございます。まだ他の人のところが残っているのそろそろ失礼しますね」

軽く一礼した聡介は回れ右をすると、不自然にならないように気をつけながら足早にお姉さんのお店から出て行った。

「なんか、すごい色っぽい人だったなあ……。まだときどきしてるよ……」

未だに赤い顔のままをしている聡介はそう呟きながらあいさつ回り

を再開するのだった。

（鍛冶屋にしては魔力を使って何かしていたみたいだし、ただの鍛冶屋の坊やって感じじゃなさそうね。……ふふふ、おもしろい子……。）

それを見ていたお姉さんは、聡介が来る数分前に聡介の店から感じた魔力を思い出して楽しそうに笑っていた。

「あつ、ちよつと待ちな！」

近隣の店や民家へのあいさつ回りを終えて聡介が最後に挨拶をした店を出ると、思い出した様に後ろから引きとめる声が掛かった。

「なんでしょうか？」

「いや、この街にはあまりくわしくなさそうだからちよつとね。ここら辺を縄張りにしてる<sup>テンベスタ</sup>Tempestaって知ってるかい？」

縄張りになっているという単語に嫌な予想が浮かんでくるが、その名前自体にはなじみがないので首を傾げる。

「あゝやつぱり知らなかったか。まあ一口に言えばマフィアだな。んで、ここら一帯の店なんかはチンピラや賊とかから守ってもらって代わりにみかじめ料を収めてるってわけだ。マフィアと言っても T e m p e s t a は無法者の集まりじゃなくてしつかりとした力ボを頭に据えている組織だから安心していいぞ。まあもちろん、マフィアってだけあって麻薬取引、暗殺、密輸、密造、共謀、恐喝って具合に法に触れることはしているがな。これらは口には出すなよ?」

「はい、気をつけます」

「それと売春と賭博のことは間違っても口に出しちゃだめだぞ。向こういわく『名誉ある男』がするビジネスじゃないそうだからな。良くて半殺し、最悪殺されかねないから注意しろよ」

「殺し……ですか。穏やかじゃないですね」

殺されるということを聞いて聡介の背中に冷たい汗が流れるが、目の前で注意をしてくれる人はお構いなしに話を続ける。

「言わなければ大丈夫だよ。んで、ここらで商売するんなら挨拶とかを先に済ませとかないと厄介なことになるから、早く会いにいくといい。」

今の時間帯なら、この通りを真っ直ぐ行っただけで突き当たりのところの右手の酒場に行くと、酒場の隅でポーカーをしている黒服の男がいるからそいつらに話しかける。その後はそいつらが案内するはずだから、何も逆らわずにしていれば連れて行ってもらえるさ」

「わざわざありがとうございます。あとで行ってみますね」

また面倒に巻き込まれなければいいけど……と内心思う聡介だが、一方では、街の人がそれほど恐れていない様子を見て大丈夫だろうと楽観視する自分もいる。

前回のことを思い出してそんな自分に呆れるが、こればかりは時間をかけて矯正していくしかないだろう。

一旦家　正確には工房の中　に戻った聡介はあいさつ回り用に用意していて余った包丁をしまつて、急遽練成した小さなナイフを服の内側に忍ばせてから、また通りに出た。

挨拶に行つて帰るだけなのでトラブルに巻き込まれるとは思いがたいが、それも今までのことから考えると怪しいため、用心するほうがいいだろうと思つてのナイフである。

そして通りに再び出てきた聡介は、先ほどのおじさんに聞いた通りの道を進んでいき、突き当たりに位置する酒場の前に立った。

つきあたりの店にしては割と小奇麗な二階建ての酒場は、マフィアがいるというわりには意外に盛況しているらしく活気がある。

店内からは軽やかな音楽が響いてくるし、酒によった人の笑い声や話し声などがガヤガヤと聞こえる。

店内に入るために建てつけの良い扉を押し開けると、その騒音が一層大きくなった。

聡介は気付かないが、実は聡介が入った瞬間に店主やテーブルに  
いている何人かの客、従業員達から一瞬だけ鋭い視線が飛んだ。

もちろんそれはただの客や従業員ではなく、れっきとしたマフィア  
の構成員である『ソルジャー』達だ。

彼らはこの酒場にくる客を『役人（警備隊など）』『客（酒場とし  
て）』<sup>マフィアとして</sup>『客』の3つに見分けるのが仕事である。

もちろん『客』は酒場側であれ、マフィア側であれ、どちらにして  
も利益を得ることが出来るので彼らにしてみれば歓迎すべき対象だ  
が、もしそれが『役人』だとすればすぐにお帰りいただくための準  
備もしてある。

しかし、マフィア側もそれをするのはまずいことだと分かっている  
ので、普段から高官にお金を渡して黙らせているのだが……。

マフィア達の話はさておき、話を聡介にもどすと聡介は今、言わ  
れたとおりに酒場の隅でポーカーに興じている黒服の男達のテーブ  
ルへ着いたところだった。

「あの、すみません。ちょっと話があるのですが、いいでしょうか  
？」

「ん？ああそういえば商談の約束だったな。奥に部屋を用意してる  
からそこで話そうぜ。こつちだ」

まさかこんな酒場で、『マフィアの頭と会わせて下さい』というわ

けにはいかないので、なんとか話をばかしながら尋ねると3人の男達は立ちあがって、聡介を連れて酒場の奥の部屋に入って行った。

酒場の奥の部屋に入ると、最後に扉をくぐった一人が扉に頑丈そうな鉄製の鍵をしめる。

「んで？俺らに用ってなんだ？」

「この街に越してきたのでその挨拶をしにきました」

「ああそんなところだろうな。この麻袋をかぶってる。俺らがその場所まで案内する」

質の悪い麻袋を渡された聡介はそれに逆らうことなく頭からすっぱりと被った。

被ってからしばらくすると何か重い物を動かす振動音が聞こえて、それから体を引っ張られた。

鉄製の鍵を外す硬質な音は聞こえなかったので、恐らくは隠し通路でも進んでいるだろうと考える聡介を連れて、男達は折れまがった通路を歩いていく。

何分か経ち、まだかな？と思い始めたころ、扉の開くカチャリという音が聞こえ、再度カチャリという扉の閉まる音が聞こえてから麻袋を取られた。

急に取られたために麻袋で擦られた鼻を押さえながら正面を見ると、



高級そうな机で手を組んで座っている男が目映る。

「あなたがT e m p e s t aの力ポの方ですか？」

「いや、俺は力ポ・レジーム 幹部 だ。俺がここの管理を任されている。君は確か鍛冶屋を始めるそうだな？さっそく挨拶に来るとは良い心がけだ。それと料金の相談といったところかな？」

「ん、ああそう不思議そうな顔をするな。部下に情報を集めさせただけだよ」

既に話が回っているとは思わなかった聡介が目を丸くしているのに気付いたらしくソレを簡単に言っただけのけるが、文化レベル的に情報伝達手段があまり整っていないはずのこの世界では驚くべき速度だ。

「そうですか。いや、まさかも情報回っているとは思っていませんでした。では改めまして……。ソウスケ・カミオと申します。このたびこそ『<sup>デザートランド</sup>荒野地帯』で鍛冶屋を始めることになりました。今後ともよろしく願います」

「ああよろしく。で、金のことだが、王都の税が3だから、売上金に対してお前の取り分が6、俺らが1だ。だが、まだ開店すらしていない上に最初は何かと必要だろうから、土の月の前半までは0.5ぐらいでいい。それでいいな？」

「はい、ありがとうございます」

土の月と出てきたが、これはこの世界での暦の表し方の一つだ。

この世界では、もとの世界での2カ月を1カ月とするらしく、月の初めから月の中盤までを『前半』とし、月の中盤から終わりまでを『後半』としている。

もとの世界と比較して考えるなら、1月と2月を併せて『光の月』、3月と4月を『風の月』、5月と6月を『水の月』、7月と8月を『炎の月』、9月と10月を『土の月』、11月と12月を『闇の月』とできる。

この『光・風・水・炎・土・闇の月』というのは6柱の大精霊がそれぞれ支配するという意味があり、月ごとにそれに該当する属性の力は大きくなる。

例えば、炎の月では同じ呪文、同じ魔力量を込めたとしても、他の月で弱火だったのが、中火レベルになったりといった具合にだ。

他にも月ごとにその精霊を表す特徴があり、『風の月』では強い風が吹いたり 春一番など 、『水の月』では、長く雨が降ったり 梅雨など と分かりやすい。

ちなみに、今は『土の月（前半）』の1日目なので、もとの世界でいえば夏休みがちょうどおわったぐらいだろう。

「よし。金はその時が来たら部下に取りに行かせる。……おい、酒もってこい！」

目の前の男が後ろに控えていた男の方に振り向くと酒をもってくるように言った。

「酒……ですか？」

意味が良く分からない聡介はなにをするのだろうと興味を引かれて聞いてみる。

「ああ……まあ儀式の様なもんだな。これから仲良くしていこうやって意味で酒を酌み交わすのがここでの習わしなんだよ。俺は酒が苦手なんだが……。こればかりは昔からの決めごとだから仕方ない。俺に次ぐのは少なくしろよ」

少しして部課らしき男が持ってきたのはウォッカとショットグラスだった。

他には氷も水もなく、このことから察するに『ストレート』。

量が少ないとはいえ、ウォッカなどというアルコール度数が40もあるキツイ酒をストレートで飲むにはいささか抵抗がある聡介だが、相手はマフィア……そうもいつてられない。

覚悟を決めて、ウォッカが注がれたショットグラスを右手に持ち、胸の高さまで持ち上げる。

一気に口の中に流し込み、飲み干すとキュツと喉が焼けつく感じがした。

なんとか我慢して飲み干した後、正面を見るとそこには眉間にしわをよせて俯きながら低く唸る男がいた。

どうやら本当に苦手らしい。

それにしても、自分が酒に耐性があると知らなかった聡介は 未成年なので飲んだことは無い 、直ぐに酔うだろうと思っていたので意外と拍子抜けしていた。

再度正面を見ると額に手をやり、俯きながら手を振る様子が見て取れる。

つまりはもう行ってもいいぞということだろう。

最後に一礼をして踵を返して後ろの扉の前まで歩いていくと、麻袋を持った男が傍に立つ。

そういえば麻袋をかぶらなければいけないんだったと思いだした聡介は、男から麻袋を受け取るとスッポリと被った。

そして男達に案内されるままに歩いた聡介は、ようやく酒場の奥の部屋へと戻ってきた。

そして、麻袋を取られる際にまたもや鼻頭を擦って赤くしたのは言うまでも無い。

6703文字です。

更新遅くなって申し訳ない><;

高校3年生だもの！忙しいんだもの！

テストや勉強や恋（片思い）や遊びや……

あつ、受験はAO入試でうかりましたので問題なし！

なるべく1 2週間で更新するように心がけますので許して下さいな……。

では、次回もお楽しみに！

## 022 夕日と採掘場

022 夕日と採掘場

聡介が酒場から店へと帰ってくると既に太陽は西方へと沈み掛かり、今日という命を終えようとしているところだった。

今日という命の燃えるような赤に照らされた積雲はまるで炎で創られた津波の様に空を覆いつくしている。

もといた世界となんら変わりの無い空だが、この空は元の世界の空とは繋がっていない。

『どこにいたって空は繋がっている』と誰かが言ったが、この空とは繋がっていない。

その事実が、無性に悲しくて聡介の望郷の気持ちをかきたてるが、聡介はどうしようもないことだと首を振り忘れ去る。

結局のところ慣れるしかないのだ、この世界に。

店の扉のノブを回すと、ゆっくりとドアが開いて聡介を迎え入れる。

どうやら先にジョージ達が帰ってきているようだ。

そして聡介は夕日に背を向けて、店の中に入ってしまった。

「ああ、聡介か。俺らも今さっき帰って来たばかりなんだ。まだ灯りも付けて無くてわりいな」

「いいよいいよ。今灯りつけるね」

本当に帰って来たばかりらしく、市場かどこかですわってきたものが入っているだろう袋の横を通り抜けて工房の中の灯油をいれた甕の倉庫まで歩いていく。

倉庫の扉を開け、甕の蓋をずらして、横に置いておいた灯油式ランプの中に灯油を零れないようにゆっくりと注いでから、蓋を閉めて火をつける。

もちろん、火をつけたのは倉庫から出てからであるのはいうまでもないことである。

それから火のついたランプを部屋の中に置くと、流石に昼間ほどの明るさはないが店内は明るくなった。

「で、3人は今日何を買ったの？」

カウンター　剣等を置くので4人掛けのテーブル並に広い　の  
前の椅子に座った聡介は、3人が傍に置いている袋を見て言う。

「ん、まあとりあえずジュースでも飲もうぜ。本当なら俺は酒の方がいいんだが、安い酒店に行ったせいか良いのが無くてな。それでイファナのジュースにしたんだ。そこそこ人気があるみたいだぜ」

イファナというのは桃の形をしたブドウ味の果物で、ここら一帯で重宝されている果物だ。

水も無い様な砂漠地帯にジュースにできるほどの水分をもった植物ができるのかと思う人も多いのだが、実はこのイファナは地中深くに根を伸ばして地下水を大量に吸い上げることで成長する種類のものなので瑞々しく、ここらでは水代わりに飲むことも多いほどらしい。

ジョージがイファナのジュースを取り出して全員分のカップに注ぎ終わると、それぞれが飲んで『おいしい』『飲みやすい』など感想を呟く。

それから一呼吸分置いてジョージが真剣な眼差しで聡介と向かい合った。

「ソウスケ、今回の王都までの護衛では守りきれなくてすまなかった。俺達のミスだ。許してほしい」

「あ、いや、まあ結局無事だったんだしもう気にしてないよ。だから3人共顔をあげてよ」



いきなり謝罪の言葉と共に頭を下げた3人に驚いて、焦りつつ顔をあげてと言う聡介。

「ありがとう。それでな、ソウスケ。今からいうことは自分たちのことを棚にあげるように気が進まないんだが……。ソウスケ、お前は相手の命を奪うことに憶病になりすぎだ。これから先、いざとなった時にそれじゃ絶対に自分の命を守れない。なぜだか分かるか？……。それは迷いのある剣ではどんな相手も倒せないからだ」

聡介が横に首を振ったのを目で確認したジョージは更に話を続けていく。

「迷えば迷った分だけ剣はぶれる。そうなれば急所は外すし、最悪の場合は反撃を受けて殺されるかもしれない。戦う場において迷うことは死に繋がるんだ。俺達だってそうだ。俺が冒険者をしていて初めて人を斬ることになったとき、俺は一瞬迷ったんだ。本当に殺してもいいのかと。その結果俺はここに大怪我を負わされた。出血が酷くて死ぬかと思ったよ」

そういつたジョージは服をたくし上げて、腹を見せた。

そこには鍛え上がられた腹筋の上を一筋の傷が痕になってハッキリと分かるほどに残っていた。

「相手がその隙を見て、剣を振るつたんだ。その結果がこれだ。幸いPTに腕のいい治療師がいたから助かったが、放っておいたら間違いなく死んでいただろうな。ソウスケ、俺はお前にそうなってほしいとは思わない。この物騒な世の中だ、商人だからって何があるかわかったもんじゃない。だから、ソウスケが望むなら俺達に手伝いをさせてほしいんだ」

終始黙って聞いている聡介だったが、実は聡介もそれは思っていることだった。

向こうで死んでこちらへ来た以上、この世界に慣れることは必須の事であり、そうしなければ、今までの常識を変えていかなければ、生きていくことは難しいとは思っていた。

しかし、その機会も無くずるずるとここまで引つ張ってしまい、そのせいであの盗賊を殺した時に落ち込んだ聡介はこの申し出を受けることにする。

「そうだよな、やっぱり慣れなきゃ生きていけないよね……………  
うん、わかった。お願いするよ」

「そうか。よし！少し辛い経験になるが頑張れよ！日にちだが、いつなら空いている？」

「うん……………。店もまだ開店していないし、別に明日からでもいいかな……………？」

「そうかそうか！善は急げというし、さっそく明日いくぞ！」

「あつそういえば、相手は何なの？」

肝心な相手のことを聞くのを忘れかけていた聡介は、ジョージに気軽に聞いてみた。

「ああゾンビだ」

瞬間、聡介の顔から血の気が引いた。

あれから数時間たって翌日。

聡介は3人にこれも慣れるためだという説得を受けてなんとか復帰していた。

聡介を含めた4人は、道中で猛スピードで走っていく馬車とすれ違いつつもデザートランドから馬車を飛ばして2時間ほどいった所の採掘場に来ていた。

採掘場といっても今は機能しておらず、人一人いないので元がつく採掘場である。

ここは土の国でも有数の大鉱山だったが、数年前に地震によって大きな崩落事故が突然起こり、それによって地下深くで働いていた工

夫が百数十人生き埋めにされたままになり、その無念が負の感情となることで多くの魔物を生み出すことになった場所だ。

怨念などの強い負の感情ではなかったので、出没する魔物は比較的弱い部類の物ばかりだが、地下にいくほど段々と魔物が強くなり、さらに無念の元となっている工夫達が死んだ場所は崩落によって塞がれているままなので浄化することも出来ず、魔物が途絶えることは無い。

昔、土の国有数の鉱山だったここを取り戻そうと思った国王が軍を派遣したが、崩落した区間が長く、掘っていく間もまるで命を求める様に次々と魔物が現れるのであえなく撤退した。

それ以来、この鉱山は閉山となっていて、鉱物が未だに多く取れるのでギルドに採掘の依頼がでることもしばしばある。

ギルドの方も初心者が通いやすく、小遣い稼ぎが楽に出来る場所なのでということで、その依頼は普通に張り出されている。

出没する魔物はスケルトン・グール・ゾンビ・リッチ・運悪くリッチに捕まって操り人形になった冒険者などが主だ。

リッチは比較的下層にいる強力な魔物で滅多に表に出てくることは無いが、たまに出てきたところで初心者が被害にあうことがあるらしい。

それ以外はどれも楽な魔物なので、ここが聡介を鍛える場所として選ばれたというわけだ。

ちなみに今の装備は武器に『クラウ・ソラス』、鎧に『オールキャ

リク』といった具合なので、初心者が通うダンジョンにしては過剰すぎるとよべるぐらいの装備である。

ゲームの終盤で使うような装備をこんな初心者用のダンジョンで使うとはまさにチート装備と呼ばれることだろう。

そして、今立っているのは採掘した鉱石などを荷馬車などに積み込むために設けられていた広場で、まわりには採掘終了とともに打ち捨てられた道具がちらほらと見える。

そこから視線をあげると目の前には坑道の入口がぼつかりと黒々とした闇を見せて生者が入るのを手をこまねいている。

これから自分はおそこに入っていく中の魔物と戦うのだと思うと聡介はぶるりと振るえた。

興奮や恐怖、興味、不安がないまぜになった微妙な感情が駆け抜けていったのだ。

新たに気を引き締めた聡介はギュツとクラウ・ソラスの柄を握り締め、気持ち切り替える。

それでも、切り替えるといっても戦士のソレではないので、「よし、やるぞ!」といった気合の入れ方ぐらいのものではあるが……。

「よし、入るぞ。最初のうちは俺らが相手をして手本を見せるが、そのあとは俺達はお前のサポートに回る。危険な時は間にはいるがそれ以外はよつぼどのが起きない限りは手を出さないからその

つもりでいるよ?」

「分かった」

返事を返した聡介に満足そうに頷いたジョージはジャック達を伴って先にダンジョンの中に入って行った。

見失わないようにと少し駆け足で追う聡介もダンジョンの中に入っ  
た。

残ったのは黒々とした闇を渦巻く坑道の入口だけになったのだった。

坑道を黙々と進んでいると前方の曲がり角からザリッザリッという音が聞こえてきた。

曲がり角が邪魔して敵がどの程度の距離にいるのかわからないため、先頭に行くジョージの指示に従って一旦立ち止まる。

実力的に言えばジョージ達なら飛び出していつて即座に殲滅すること  
もできるはずなので、この行動はひとえに聡介の為のものなの  
だろう。

「まず何か音が聞こえたら立ち止まってその音を確認めろ。音つて  
のは、こう先が見えないダンジョンだと敵をみつけるのに重要なフ

アクターだ。地面をするザリツという音が断続的に聞こえたら地上を歩くタイプ、バサツという音が聞こえたら飛行タイプ、ズルズルという音なら地面を這うタイプって感じで分かる。それに加えて聞こえる方向から相手の場所を察知できるし、音の数で相手の数も、聞こえる速さで行動スピードも推測できる。慣れてくると聞いただけで魔物の特徴と照合して対策が打てるようになるから絶対に聞くんだ。慎重すぎるくらいが生き残るには一番いい」

背中を坑道の埃っぽい壁に付けて曲がり角の向こうから響く音を聞いているジョージが小声で聡介にダンジョンでの注意点を話す。

「……うん、これはたぶんスケルトンだろうね。数は1体。骨だけだから軽い音ってことと、緩慢だけど規則的に響く足音が特徴だね」

こちらは口を閉ざして音を聞いていたジャックの言葉だ。

「スケルトンはゆっくりとした動きで、特殊な能力もないから普通に出ていくだけで大丈夫だ。まあ魔物の特徴についてはおいおい覚えていけばいいさ。……さて、講義も終了したことだしさつさと倒すか！コイツは俺が倒すから見とくんだぞ」

そういったジョージは曲がり角から姿を現すと、ちょうど引き返そうと向きを変えたところのスケルトンに向かって、壁に引っかかっていた小石を投げ付けた。

頭蓋骨にカッンという音と共に小石をぶつけられたスケルトンはこちらへと引き返してくる。

眼窩の奥に赤い炎を滾らせたスケルトンが片手を振り上げつつこちらへ向かってくるのはなんとも言えない迫力がある。

惜しむべきは、その振り上げた手に何も握られていないことでその姿が一瞬間抜けな姿に見えたことだろうか……。

そう考えつつも見ていると、スケルトンはジョージの目の前まで来ていて振り上げた手をジョージの脳天に振り下ろしたが、それを見きっていたジョージが軽くバックステップを踏みながらデュランダルを横一閃に振りぬいたので、スケルトンの頭蓋骨はあっさりと首から切り落とされた。

「つとまあこんな感じだ。本来は小石なんて投げなくても後ろから奇襲かけてさつさどぶつ倒せばいいんだが、まあ奇襲なんかを見せるよりはこつちを見せた方がタメになるからな。さて、これも潰さなきゃなッ！」

そして、ジョージは足を振り上げ、足元に転がっていた頭蓋骨をガシャッという音を立てて勢いよく踏み砕く。

そうすると眼窩の奥に宿っていた赤く燃える炎は、風に揺られた口ウソクの火が消える様に掻き消えた。



「こいつらは頭の中に魂が込められていてね。これを破壊しないとこいつらは何度でも骨を吸い寄せて起き上がるんだ。だからめんどくさくてもしつかり潰そうね。いくら弱いからって無視して先に行つてたら後ろから大量のスケルトンに襲われたって話も聞くしね」

「たまにあるわね、そういうドジを踏んじやう初心者の話も。アハハ。まあ笑い事じゃないんだけどね。極稀に何体か合体して巨大スケルトンになるって噂もあるみたいだしね」

ジャックが聡介に気を付ける様にと忠告をいうと、エミリーがギルドでたまに笑い話にされている初心者のことと噂話のことを思い出しておかしそうに笑う。

実際にそんなことになったら笑い話にならないような気がするが、こうして笑っていると言うことはめったに起きないこと何だろう。

エミリーが笑うことで少し緊張感が薄れた聡介はもう少しリラックスして肩の力をぬいてみようと思うのだった。

聡介達が坑道に入ったところ、別のルートを通って鉱山を脱出した初心者冒険者PTの4人組がデザートランドの冒険者ギルドに駆けこんでいた。

ボロボロの装備で駆けこんできた4人組に何事かとギルドの人が様子を見にでてくる。

「あんたら確かあの鉾山に潜りに行ってたんじゃなかったのか？」

「ハア．．．．．ハア．．．．．そうだ．．．．．鉾山についた時に．．．．．ズズンという音が微かに聞こえていたんだが．．．．．大したこと無いと思ってそのまんま入った．．．．．んだ．．．．．途中まで順調だったんだが、埃が舞っている広場みたいなのがあって．．．．．そこに興味本位で入ったら．．．．．クソツ！馬鹿みたいにかいスケルトンの怪物がいやがつたんだ！おかげでこのザマだ！クソツ！」

ギルドの人に聞かれた4人組の内の一人が荒い息をさせたまま語り始めたが、最後の方になるとほとんど怒声に近い様な感じのものになった。

しかし、何かに気付いたギルドの人はその初心者の方を掴んで揺さぶりながら聞き始める。

「おい！そこはどんな場所だった！？どんなことでもいいから覚えておくことを話せ！」

「ああ！？木造の小さな小屋とレールが敷かれていたぐらいしかおぼえてねえよ！」

「おいおいおい．．．．．なんてこった．．．．．そりや避難シェルターのある場所じゃねえか．．．．．あの崩落事故の場所がさらなる崩落で出てきたってことかよ．．．．．クソツ

！被害が大きくなならないうちに聖水持つて浄化しにいくぞ！今まで塞がれてたんだ、でかいスケルトンだけとは思えん！」

広場の特徴を初心者から聞いたギルドの人は思わず額に手をやって上に顔を向けるが、すぐに我に返るとテキパキとギルドの人に指示を出し始める。

大急ぎで用意を始めた一行は聖水や騎士団の人達を伴って、数十分後にデザートランドを出発した。

022 夕日と採掘場（後書き）

5984文字です。

ふうやつと書き上げた・・・・・・・・。

お疲れですw

タイトル変えました！やっぱりどうしても内容と合わない判断したので・・・・・・・・。

では、次回もお楽しみに！

023

聡介とスケルトン

一部改定（前書き）

聖水を500mlで50ギル 500ギルに修正しました

## 023 聡介とスケルトン 一部改定

### 023 聡介とスケルトン

あれから緊張がほどよくほぐれた一行は、スケルトン以外の魔物に合うことも無く順調に坑道を下っているところだ。

あれからしばらくして1体のスケルトンにまたもや出会った一行だったが、今度はそれを聡介がきつちりと葬った。

人間の骨格ではあるが生の人間では無かったから普通に躊躇せずに切れたのかな？というのが聡介の内心である。

一方ジョージ達かというと、骨だけとはいえ人間と姿が似ているスケルトンは少し躊躇するんじゃないかな？と思っていただけに、聡介が簡単に斬ったのを見ると拍子抜けした。

そして、実はそれ以外にも驚いたことがある……というよりもこちらの方の驚きが強いぐらいなのだが……。

それはなんと聡介の剣がスケルトンの首を斬り飛ばした時に起こったものだっただ。

通常ならば斬り飛ばしたならばそのまま頭蓋骨が地面に叩きつけられるのだが、聡介がクラウ・ソラスで斬り飛ばして頭蓋骨が宙に舞った瞬間、頭蓋骨は灰色の霧となってそのまま空中に霧散した。

今まで見たことが無い突然の光景に目を見張る3人が聡介の剣を見たが、黄金色に輝く以外は呪文を彫った跡も何もない。

《私には不浄を浄化する力があるんです。アンデッド系などの敵ならば、剣先が触れる程度で相手は触れられた箇所が吹き飛ぶぐらいの威力ですよ。直撃すれば言わずもがな……ですね まあ正確にいうならば、触れた場所を起点に私の光の精霊としての力を爆発させて吹き飛ばしているって感じですね》

剣に視線を落とした聡介に、聡介だけに分かるような小声で教えてくれたのはクラウだった。

一人この現象がなぜ起こったのか理解して、なるほどと言わんばかりに納得の表情をうかべた聡介に、後ろから近づいた3人が声をかける。

「ソウスケ、今何やったの!？」

真っ先に口を開いたのは、はたして好奇心旺盛なエミリーである。

といっても、その横に並ぶジョージもジャックもいかにも興味津津と言ったかんじに剣を見つめている。

「……えーっと、この剣に浄化作用があるのを忘れてた……」

「」「浄化作用ですって!?(だと!?) (だって!?)」「」

クラウドに今教えてもらったことを簡潔にまとめていうと3人は予想以上に驚いて返事を返してきた。

狭い坑道に響いたほどだったので聡介も少々驚いた。

そんなに大声だしてもいいのだろうか？とは思ったが場の空氣的にも聡介はその疑問はスルーした。

「……おいおい、浄化作用なんていったら超一級品じゃねえか」

ふ……所詮俺達には手の届かない武器さ……などと言いつつ、この狭い坑道で明後日を見るような遠い目をするジョージの目には一体何が映っているのだろう。

冒険者とは本当にトップレベルにならないと贅沢な暮らしはできない意外と世知辛い職業なのだ。

その分、財宝や高額懸賞金などの一攫千金、夢一杯、希望一杯なのが売りなので冒険者に憧れる若者は後を絶たない。

話を戻して、その背中に本格的に哀愁が漂い始めたところでジャックが話を変えようと聡介に話しかける。

「あゝ、でもそれだとソウスケの訓練にならないなあ……。うゝん、エミリー。エミリーの剣を聡介に貸してあげれる？」



このアンドッドひしめくダンジョンではあまりに反則装備なので訓練になりそうにないと判断したジャックは、聡介にその剣を貸すようにエミリーに言うが、そこに聡介の爆弾が落とされた。

「あ。エミリーの剣にもその効果あるかも……」

……

……

……

「謀ったなあああ！！エミリーイイイイイイイイイイ！！！」

「し、知らないわよ、そんなことお！！」

血涙を流しながら、エミリーの方に振り返るジョージはもういつそ哀れにしか見えない。

エミリーはそんなジョージにたじろいでいて、ジャックといえば、あちゃゝ……といいながら呆れた表情をしている。

数分後、ジャックになぐさめられたジョージは見事に復帰して先頭を歩いて坑道を進んでいく。

だがしかし、その背中からは次に出会った魔物に憂さ晴らしをしてやるといわんばかりの気迫がゆらゆらと揺らめいている。

しかし哀れにも敵は後方からやってきて、それはエミリーが早々に退治してしまった。

斬り飛ばしたスケルトンが灰色の霧に変わって霧散するのを見たエミリーは、本当に自分の剣に浄化作用があると知って大喜びだ。

対するジョージは敵を視界に捉えて憂さ晴らしをしてやると意気込んだにもかかわらず、剣を抜く間もなく戦闘は終了してしまったので沈んでいる。

そして、口を尖らせて更に拗ねてしまったジョージを先頭に進んでいくと今度は前方の曲がり角からスケルトンが出てきたが、もうヤル気が無くなったのか無造作に剣を振るって倒してしまった。

無造作といっても、スッパリと頭蓋骨を一刀両断にしたのは流石といたところだろうか。

その後も、何度かスケルトンが出てきたが、あとは聡介の訓練ということで、聡介が全部倒していった。

無論ジャックと剣を一時的に交換してやっているので、ちゃんと聡介の力にはなっている。

そうして進んでいくと、一行はそこそこ広い大きさの部屋にたどり着いた。

そこには既にリッチという先客が部屋の中央付近に陣取っていて、

その脇には操られてしまったのだろう元冒険者が2人立っている。

何故ゾンビではなく直ぐに操られている冒険者だと分かったのか。

それは皮膚表面が全く腐敗していないのと、向かって右側のリッチの脇に立つ元冒険者の口元から漏れる『助けて』という小さな声がかすかに聞こえてきたからだ。

リッチのほうも4人が部屋に入ってきたのが分かったのか、ゆつくりと右腕を胸の高さまであげると元冒険者を操って突っ込ませてきた。

死ぬこともできず僅かに残った精神が、人を襲う化け物になってしまったことを嘆いているのだろうか、名前も知らぬ冒険者の頬には一筋の涙が流れている。

リッチの魔力で強化された元冒険者達の動きはさきほどまでのスケルトン達と比べると何倍も速く、操られていてもう助からないけれどまだ命がある存在なんだと思って動きがとまっていた聡介の目の前に現れる。

敵が目の前まで来て剣を振り上げようとしていることにハッとして我に返った聡介は、水平に剣を掲げて、剣の腹に手を添えることで相手の剣を受けきった。

「ボーツとするな、ソウスケ！リッチともう一体はこっちで相手してやるから、お前はそいつを自力で倒せ！」

ジョージの叱咤を受けた聡介は、目の前で再度剣を振る敵を正面に見据えた。

操られている関係で細かな動きの出来ない敵の動きは直線的で単純なものだが、魔力で強化されているので一撃は重い。

今度は胴体に薙ぎに来た一撃をバックステップで後ろに避ける。

今までに剣を使った実戦経験がほとんど無いのにここまでできるのは、一重に身体能力が大幅に向上したからだろう。

追撃を掛けてくる敵を横にかわして、すれ違う際に斬りつけるが……浅い。

これはやはり命を持つ者に対して剣を振るということに抵抗があるためだ。

その証拠に今の聡介は敵の顔を見ないようにしながら戦っている。

おそらくは表情を見ないことで平静をたもとうという無意識の行動によるものだろう。

しかし、聡介もこのまま倒してしまっても『殺人』という罪の意識を克服することはできないと決意を決めたのか、顔をあげて文字通り正面を見た。

敵の顔は無表情でありながら、その頬には涙が何度も流れて乾いた痕が残っていて、口からは『助けて』というか細く枯れた声が聞こえてくる。

「ゴメン！！」

これ以上聞いて怖くなってしまううちにと聡介の振った剣は、剣を振り上げていた相手の腕を斬り落として、その下にあった右肩を捉える。

そのまま進む剣は僧帽筋を断ち、鎖骨や胸骨、肋骨を次々と切断して、心臓や肺などの様々な臓器を裂いて左脇腹から姿を現す。

現れた剣には、様々な内臓を傷つけたからだろうか、大量の血と様々な体液が混ざり合っててらと光を反射している。

斬られた体は切断面からずるりという音と共に、固い土の地面に滑り落ちて夥しい量の血と臓物を晒している。

それをハッキリと見てしまい、吐き気がこみ上げてくるが、今は戦闘中だと自分に言い聞かせて、せり上がってきていた胃液などを飲み下す。

「オラアアアアアアアアアア！！」

前方から聞こえた声に反応して聡介が目をあげると、もうひとりの元冒険者はちょうどジョージが相手の剣ごと首を切り落としたところだった。

残ったリッチの方はジャックが動きまわって魔術を交わしながら翻

弄していたところを、後ろから忍び寄ったエミリーが斬りつけて灰色の霧に変えたところだった。

「ふう、それにしても久しぶりにリッチとやったら意外と緊張したなあ。目標地点を指しながら魔術を唱えるから避けるのは簡単だけど、その分魔術が強力だから厄介だよ」

「そうよね。おまけに呪いや毒とかのバッドステータスなんかもついちゃうから回復薬を持っていないと自然に治るのをまつことになるし……。まあ薬はあるから問題ないんだけどね」

リッチを倒した二人が明るく雑談しているのを見ると、さっきまで命がけの戦闘を 聡介以外は楽勝だが していたのが嘘だったかのように思えるが、背後からは血の匂いが漂って来てその存在を主張している。

「それにしてもこの冒険者達も運がなかったなあ。……まあこのまま放っておいても魔物の餌になるし、せめて供養してやるか」

自分が倒した元冒険者と聡介が倒した元冒険者を見たジョージは、腰につけていた袋から白色の陶器の瓶にいれられた『聖水』を取り出して死体に振りかけた。

聖水を掛けられた死体は、まるで雪が解けて地面に染み込むようにして消えていった。

ちなみに『聖水』とは、教会が水を清めて作られるもので、死んだ人に振りかけた場合、死体は母なる大地に還るとされ、アンデッドなどに振りかけると、量によるが浄化作用が働いて灰色の霧に変えるという作用がある。

そして、500mlで500ギル　50000円相当　と非常に高いので大量に購入することは個人では難しく、PT内で死んだ者が出た時用に少し持っておくのが冒険者の間でのマナーである。

聖水をかけたおかげで、血の匂いを振りまいていた元冒険者の二人の死体はすっかり綺麗に消えてしまい、リッチが浄化されて灰になっ  
て消えたこともあって、この場に残っているのは聡介達4人だけだ。

「さて、ソウスケ。操られているとはいえ生きている人間を斬ったわけだが、今はどんな気分だ？」

「……気持ちのいいものじゃないけど、前みたいに塞ぎこむほどじゃないよ。一度乗り越えたからかな、死体をみて吐きそうにはなっ  
たけど、今はもう落ちついてる……。ありふれた言葉だけど、その人の分まで精いっぱい生きようって思ってる……。かな」

「そうか……。よし！多少の戸惑いはあるだろうが、あとは慣れるしかないだろう。これぐらいで聡介の特訓も終わりにしよう！」

さあ帰るぞ！と言ったジョージが、剣を背中に掛けるためのベルトを取るために、手に持っていた大剣を地面に突き刺した途端

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

という音と共に広場に入ってきた方の通路が崩落して通れなくなっていました。

どうやらリッチの魔術によって限界ギリギリで保たれていた均衡が、ジョージにトドメを指されたことで傾いてしまったらしい。

じとつとした視線を送る3人に、いや、俺のせいか！？俺のせいなのか！？と必死に弁明するジョージに、さきほどもでのリーダーシップはない。

仕方なく、少し進んでから地上へ戻るルートを探すことになった4人は、埃っぽい坑道を再び進んでいく。

雑談をし、時に襲いかかってくるスケルトンや、グールなどを蹴散らして進んで15分たったぐらいだろうか、聡介達はY字になった場所にでた。

ああこれで地上へ戻れるな、などと呟いた4人は、Y字のVのころを鋭角に曲がって地上を目指して歩いていく。

しばらく進んでいると、さきほどリッチが出現した場所よりもかなり広い広場にたどり着いた。

右手に木造の小屋らしきものがあるということは元は工夫達の休憩所兼避難所といったところだろう。



他にもトロツコやスコップ、ツルハシがそのまま放置されたままなので採掘が行われていたことを想像しながら広場を進んでいった。

放置されてボロボロになったその小屋をちょうど通り過ぎた時、ドズンツという音が後ろから響いてきた。

ゆっくりと振り返った聡介の目に映るのは巨大なスケルトン。

巨大なスケルトンといっても単体が大きくなったわけではなく、大量のスケルトンがひつつきあうことで一つのスケルトンを構成しているのです、形は所々ボコボコとして歪だが、間違いなくスケルトンではある。

そんな単体として存在する群生するスケルトンを見ていた時だった。

「……………ねえジョージ……………。アレ……………勝てる？」

「あれだけくつついてたら一つ一つの力が弱くても相乗効果でかなり強いだろうなあ……………。ランクでいうとCランクぐらいのレベルなんじゃないか？」

話し合うジョージもジャックもお互いに冷や汗を浮かべているが、目の前の巨大スケルトンはそれから動かない。

「……………つまり……………どうするのよ……………?」

巨大スケルトンに視線が固定されたままのエミリーがジョージに答えを求める。

「あ……そりゃ……うん、うん、うん。」

見上げる聡介の視線の先で、合体したスケルトンの目が何も無いが、  
 らんどうの闇から真つ赤な炎にかわって全身を彩り始める。

「逃げるに決まってるだろおおおおおおおおおおおお  
おおおおお!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

最後に巨大な眼窩に燃えあがる炎が灯った瞬間、ジョージの叫びで全員はありったけの力を込めて全速力で走り始めた。

後ろからはドズンドズンと言う音が広場に断続して響いてきていた。

5546文字です。

たぶん次で採掘場編は終わります。

それにしても最初に下書きした時は巨大スケルトンなんて出ない予定だったのに書いてる内になぜか登場。

自分にもわけがわからない（・・）

.....まぁいいや<>

そういえば、ランキングだんだんと上がってきているようで嬉しい限りです。

さぁ皆さんがんばって評価点をつけるのです！

.....1点でも.....泣いたりしないんだからね.....;..!!

.....

次回も...お楽しみにッ！

## 024 脱出と銭湯

### 024 脱出と銭湯

聡介達はあの広場で巨大スケルトンと出会ってから10分弱、薄暗い坑道を全速力で地上目指して走っていた。

地上を目指すというだけあって、坑道内は緩やかな傾斜がずっと続いている。

しかも坑道と言う特性上、通路は何本も分かれていて暗闇で先が見えにくいので更に性質が悪い。

それでも、地上を目指していけるのは全速力で走りながらも、僅かな傾斜を感じ取りつつ先導するジャックがいるからこそだろう。

ちなみに、なぜドラゴンゾンビを倒せたのに逃げているのかというと、巨大スケルトンは単体としての群体なので、倒そうとするならば巨大スケルトンを構成する全てのスケルトンを倒さなければならぬからだ。

当然、狭い地下空間では逃げ回りつつちまちまと倒すなんて出来ない上、数が多すぎたので逃げているというわけだ

そして、走り続けること凡そ20分。

暗闇のせいで先の見えない道が無限に続くように思える絶望感と、後ろから追いかけてくる『巨大スケルトンだったもの』の存在という生命の危機に晒され続けて極度のプレッシャー状態が何分間も続

いたためか、ついにエミリーの足の回転が落ちてきた。

冒険者として鍛えているとはいえ、男性と比べて体力に差がつくのは仕方のないことだし、これほどの緊張下に置かれれば体力の消耗も激しいことだろう。

その証拠に広場ではジャックに続いて2番目に走り出していたエミリーが、今では最後尾を走っていた聡介の後ろまで下がってきてしまっている上に、呼吸も乱れてあらくなっている。

その更に後ろでは巨大スケルトンだったものが、狭い坑道内で溢れだした水のように無数の骨の濁流となつて追いかけてきている。

巨大な人型だったスケルトンがなぜそうなっているかというと実に単純なことで、広い広場から狭い坑道へと場面が映つた際に巨大スケルトンが自らの体を構成する無数のスケルトン達をバラバラに分解させて骨の濁流とすることで追いかけてきたのだ。

当然追いかける側としてはたまつたものではない。

あの中はスケルトンが持っていた様々な武器等も混ざっているのに加え、骨と言う硬質な物質が高速でかきまわされる巨大なミキサー状態となっている。

あんなところに人体が放り込まれれば正視に堪えない人肉ミンチが早々に出来あがってしまうだろう。

今だとエミリーがその最有力候補だ。

助けると言っても、ジャックは先導するという立場上身軽に動けて

速度を維持しなければならぬし、ジョージは軽くなったとはいえ動きの邪魔になる大剣を背負ったの全力疾走に加えてエネルギーを大量に消費する大柄な体型だ。

いくら鍛えていると言っても流石に、これほどの長さの全力疾走は体に堪えるらしく汗が噴出している。

その二人の様子を後ろから見る事が出来ていた聡介はエミリーを助けるのは自分しかないとは決断したところだった。

幸いにも聡介は身体能力が大幅に強化されていたおかげで、すこし汗がでていくくらいで体力はまだかなり余裕がある。

刻一刻とペースが落ちるエミリーの様子を振り返って確かめてからの聡介の行動は早かった。

「エミリー！今から抱えあげるからしっかりと捕まってくれ！！！」

直ぐ後ろでガラガラガラと轟音をたてる骨の濁流の音に負けなように声を張り上げた聡介はエミリーの返事をまたずにその体を抱えあげる。

「ハアハア……ありが……と………」

ぜえぜえと荒い息を吐き出しながらありがとうと呟いたエミリーをお姫様だっこで抱えあげた聡介は、すぐにペースをあげてジョージ

の横に並ぶ。

ジョージもしゃべるのが億劫なのだろう、目線で大丈夫なのか？と聞いてきたので聡介は力強い眼差しでそれにこたえた。

それから5分間走り続けた時、先頭を走っていたジャックが灯りを見つけた。

「おいおい、ウソだろう……！こんなときに他の冒険者なんて……クソ、あんたらさっさと逃げろ！後ろから亡者の大群が押し寄せてきてるんだ！今すぐに引き返せ！」

「我々はデザートランドの騎士団である！それを討伐しにやってきたところだ！聖水も持ってきている安心しろ！」

ジャックの警告に反応して返ってきた声に希望を見出した4人だったが、騎士団達を目視できる距離に近づいて、その持ってきたという聖水の量を見て絶句した。

それは騎士が小さな台車に乗っているたった樽2つ分ほどの量の聖水だった。

確かに初心者レベルのダンジョンなら普通はそれぐらいで足りると無意識に思ってしまうのも無理はないが、とてもじゃないが後ろの亡者共の大群をまとめて浄化するには量が足りなすぎる。

騎士団の連中も後ろから追いかけてくるの亡者の大群がようやく視界に入ったのか、目に見えて顔が青褪めていった。

「て、撤退いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！！！！！」

先頭に立っていた指揮官らしき人物が発した言葉を聞いた他の騎士たちは、撤退するために邪魔になる荷物などを捨て置き迅速に全力で後退していった。

そして後退する時に、まだ騎士団に入りたてで練度が低い騎士のひとりがこちらの様子を伺おうと後ろを振り向いてしまった。

眼に映るのは坑道を埋め尽くす大量の骨と暗い眼窩に真つ赤な炎を宿した髑髏の……負の感情で彩られた亡者の群れ。

「うわああああああああああああああ！！！」

それからがひどかった。

パニックを起こしたその騎士が叫びながら、逃げようと必死に他の騎士を押しつけて進もうとして他の騎士の誰かが坑道の固い地面に押し倒された。

一人の騎士が起こしたパニックは感染爆発のように瞬く間に騎士たち



もちろん、そんな惨劇を目の当たりにしても聡介達とはとまることは出来ない、いくら助けたくても立ち止まったら最後、亡者の群れに呑みこまれて一巻の終わりだ。

「エミリー、ちょっと揺れるけど我慢してよ！あと舌嚙まないようにちゃんと口閉じて！」

聡介の言葉に何か返事をしようとしたエミリーだったが、すぐそこに倒れた騎士が転がっていたのを見た聡介は飛び越える時に舌をかまないように注意する。

「ジョージ、まだ生きてる！？」

「ぜえぜえ…あつたりまえだろツ！……勝手に……殺すな！！」

ジョージがずっと黙っていたので、声をかけると荒い息ながらも威勢のいい返事が返ってきたので、反論するだけの元気はあると分かっただけで安心する聡介。

それから倒れて呻き、助けを求めている騎士達の頭上を飛び越え、必死に走って走って亡者共に呑みこまれないように逃げる。

後ろから迫る亡者の群れに呑まれる騎士達の断末魔が絶え間なく追いかけては聡介の耳に飛び込んでくるのが更に恐怖心を煽るがそれでも走る。

「外だッ！！！」

戦闘を走っていた騎士団のうちの一人が指さした方向には確かに四角く切り取られたような形の、太陽の明りがあった。

ラストスパートとばかりに速度をあげた騎士団は、出口が見えたことで余裕がでたのか、お互いに声を掛けつつ速度を合わせて走り出した。

聡介達もやつと長かった逃走劇のゴールが見えたことで緊張が少しばかりやわらぎ、それで生まれた心の余裕が更に速度をあげた。

「みんな！ついてきてる！？」

「「「もちろん！！！」」」」

先を気にしなくてもよくなったジャックが振り返って心配そうに叫ぶが、それに向かって揃って答えるのは聡介、エミリー、ジョージの全員だ。

そして、騎士団に続いて外に飛び出した聡介達はそのままの勢いを保って坑道入口から距離をとってから振り返った。

坑道の入口からはずっと追いかけてきた勢いに押された大量の骨がガラガラガラという音と共に空中に骨のアーチを築くかのごとく飛び出してきている。

まだついてくるのか！？と一瞬身構えた聡介達と騎士団だったが、  
髑髏と骨が創りだすアーチは地面につくまえに太陽の光によってこ  
とごとくが灰となって風に攫われて消え去っていった。

しかし、追いかけてきていた全部が飛び出たというわけではないら  
しく、残った骨はゾゾゾゾと言う音を伴って坑道の闇に引き返し  
て行った。

その様子を見届けた聡介は大きくふう……と息を吐いて、太陽がま  
ぶしい空を見上げた。

聡介も流石に人間一人を抱えて走るのはきつかったらしく息もけっ  
こう乱れている。

「えーっと……そろそろ降ろしてもらえる……？」

自分の胸元から聞こえてきた声で、やっと聡介は未だにエミリーを  
お姫様だっこしていることに気づいて、慌ててエミリーを地面に降  
ろした。

「ありがとう、聡介。本当に助かったわ。あのままだと流石に飲み  
込まれていたわ……。無理させてごめんね」

「気にしないで。それと大丈夫？かなり辛そうだったけど……」

「体が熱くて喉が渴いているぐらいでもう大丈夫よ。とりあえず皆

全力疾走したんだし、ちょっと休憩しましょ」

そういつてその場に腰を下ろしたエミリーに水筒を渡した聡介は、ありがとという言葉聞きながらジョージ達と共に地面に座り込んだ。

「あゝ……死ぬかと思った……。まさかあんなのがいるとはな……。この鉱山はもうほとんど調べられていてあんな奴が出るっていうことは聞いたことなかったんだが……」

水筒を持つて中の水を一気にガブガブと飲み干したジョージは、額に浮かんだ大粒の汗を手の甲でぬぐいながら愚痴る。

「……そうだよねえ。今回は運がよかったから逃げきれたけど、退路が分かっていない状況であれだけの全力疾走してたら判断間違えて行き止まりに行つてたかもしれないし……。……今思うと奇跡だよ……こわっ……」

ハンカチを取り出して汗を拭き取っているジャックも、先ほどの逃走劇がいかに危険なものだったかを再確認して改めて恐怖を覚えたようだ。

そうこうしていると、まだ坑道から魔物が出てくるかどうか警戒していた騎士団の中から一人の騎士が近寄ってきた。

「土の国首都デザートランド防衛騎士団所属のスタンリー・マツケイだ。この隊の指揮官をしている。少し話を聞いていいかね？」

それから、巨大スケルトンが出現した場所の特徴や、だいたいの位置、気付いたことなどを話してほしいとのこと、しばらくの間話しつづけていたが、聖水の補給のために一旦もどるとのこと、騎士団は街に引き返して行った。

聡介達もまさかもう一度鉾山に入っていくようなことはせず、鉾山入口の札が掛かっている木のところに繋げていた馬にのって、街へと帰って行った。

帰りの馬上で、エミリーを抱えるときに口調が変わっていたぞと、ジョージにからかわれて顔を赤くしたのは実にどうでもいい話である。

街に帰った聡介は、埃っぽい坑道内を歩き回って汗や土などで汚れた体を洗うために近くで開かれている銭湯にきていた。

銭湯と言っても、日本のように桶が置かれていたり、富士山の絵が描かれていたりするわけではなく、シャワーと風呂が設置されているだけなのでそれほど銭湯らしさを感じない。

前の街なら裏庭のところに簡単なシャワー　　といっても温水では

ない　　のようなものがあつたが、この都会にそんなスペースがあるはずもなく、困っていたところでエミリーがこの銭湯を紹介してくれたのである。

入口でバスタオルとボディソープ　安物だが　を買った聡介は、番台らしき場所に座って頬杖ついて暇そうにしているお姉さんに料金５ギルを渡して、ロッカーの力ギを貰う。

脱衣場にはいると、奇妙なことに縦に細長いロッカーがかなり並んでいる。

もちろん、普通のサイズのロッカーもあるのだが、それでも細長いロッカーの方が多数を占めている。

不思議に思っていると、後ろから来た冒険者らしき２人組がそのロッカーを開けて、その中に自分の武器と服を仕舞って風呂場に入ってしまった。

つまり、あのロッカーは自分たちの武器を仕舞っておくために細長くなっているのだ。

武器と言うものが総じて高価な物であることは、自分の商売からして分かっていた聡介は、なるほどなあと一人頷いた。

自分の武器や鎧は、既に店に帰った時にちゃんと金庫に仕舞っていた聡介は、小さなロッカーの方に脱いだ服と替えの服を放り込んでタオルを片手に風呂場に入って行った。

中はとてつもなく広いというものでは無かったが、そこそこ広く、天井も高かったので解放感があり、中々にリラックスできそうな感

じだった。

そして、体に付着した砂や埃などの汚れを落として、ゆっくりと時間を掛けて体を温めた聡介は、体に火照りを感じ始めたので風呂から上がった。

サツと替えの服に着替えた聡介は、番台の横で売っていた牛乳を一ついぎルで買い、その場で腰に手を当て勢いよく飲む……ということはせず、近くに置かれていた長椅子に座ってゴクゴクと牛乳を飲んだ。

牛乳を飲み終わった聡介は空きビンを番台に返し、建物の外へと出て行った。

日が沈みかけた空は夕焼けに染まり、それに照らされてオレンジ色に染まる建物にとまっている真っ黒な鳥が、カァーッと鳴く通りの下を歩く聡介の姿は、建物と同じ様に夕焼けに照らされてオレンジ色に染まっていた。

024 脱出と銭湯（後書き）

5257文字です。

うーん、これ続けていてもいいのかなあ……。

自信無くなってきた。

プロットも一応完成して、完結させるための道筋もあらかた書いたんですが、やはり批判も多くて、この作品は支持されてないんじゃないかと……。

このまま終わらせると何のひねりも無いただの無意味な作品になるのは分かってますが、どうも……。

このまま続けるべきか……それとも一旦凍結して他のを進めつつ、また気が向きしだい書くか……。

色々考えさせてもらいます。

ああちなみに他人の反応がどうこうというよりも、自分自身の色々な事情も含めて考えてますので、批判が嫌なら書くなという感想はおやめ下さい><；

では、また次話で……。



## 025 パーフェクト営業スマイルと開店準備

025 パーフェクト営業スマイルと開店準備

チユンチユンという小鳥のさえずりを聞きつつ日の出と共に朝早く起きた聡介は、まだ二階で寝ているであろうジョージ達を起こさないように極力気をつけながら、自分の家である店を出た。

早朝特有のスウツと澄んだ空気を胸一杯に吸いこんだあとは、聡介はこの街にある冒険者ギルドの方へ歩みを進めていった。

ちなみに冒険者ギルドや、商業ギルド、役所などの生活に必要なところ場所は、自分の店を決める案内の時に聞いておいたから問題はない。

砂漠地帯特有の朝の温度の低さを肌感じながらもテクテクと通りを歩いていくと、視界に入ってきた冒険者ギルドには既に何人かの冒険者が出入りしているのが見えた。

屈強な冒険者達に混じって冒険者ギルド内へと入っていくと、中のテーブルでは温かい飲み物を片手に魔道書を読んでいる人や、暖炉の前でギルド印の付いた貸出用毛布を被って椅子で眠りこけている人たちがいた。

寝ている人を起こしてしまうにはまだ少しばかり早い時間帯なので、聡介はその人たちを起こさないようにしてゆっくりとギルドのカウンターまで歩いていく。

「すみません、ちょっと採取の依頼をしに来たんですが、今大丈夫ですか？」

「はい、少々お待ちを……」

周りに配慮したのと、後ろを向いて書類整理をしている女性職員が忙しそうだったために聡介が少々声を落として話しかけると、その女性職員はいったん手を止めてコチラへ振り返った。

「「あ」」

その女性職員はガーランドの冒険者ギルドにいた例の完璧営業スマイルのお姉さんだった。パーフェクト

ただし、驚いたために営業スマイルが崩れて一瞬素の表情が現われたので、聡介は一瞬とはいえ初めて営業スマイル以外の表情を見ることが出来た。

「ソウスケさんおはようございます。こちらへは材料の仕入れにきたのですか？」

それから0.5秒以下の早さで営業スマイルを完全に取り戻したお姉さんは何事も無かったかのように聡介に話しかけた。

「いえ、ちょっと所用でこちらへ店を移すことになったんです。材料はこれから依頼するところです」

「そうですか。大変ですね。私もこちらへ異動することになったのでまたよろしくお願いしますね」

「あつ、こちらこそよろしくお願いします」

お姉さんにお辞儀をされた聡介は、慌ててお辞儀を返した。

その後はお姉さんに依頼用の用紙を渡された聡介は、それに必要事項を記入していき、書きあげたソレをお姉さんに渡した。

お姉さんに用紙を渡してギルドから出た後は、聡介は市場の準備をしている人達の前を通り過ぎて店へと戻っていく。

朝の陽光を受けてキラキラと輝く店に対してわずかばかりの期待を感じずにいらなかった聡介は、少しばかり良くなった気分のまま店の扉を開けた。

すると本来なら来客を告げるベルが、カランコロンツと店内に軽やかに響き渡った。

ついやってしまった……と思った聡介だが、時すでに遅しとはこのことで、階上からはゴトツという物音が響いてきた。

ちょうど音が聞こえた位置が入口の所の真上だったことからして、おそらくはジョージがジャックのどちらかが起きたのだろう。

朝早くに起こしてしまったなあ……と後悔する聡介は、せめて気分良く起きてこれるようにしようとお茶を入れ始めた。

結論から言えばジョージ達は二度寝という怠惰な方向へ向かったのだ、聡介がせっかく用意したお茶は冷めてしまったのだが……。

あれからしばらくして起きてきたジョージ達に温めなおしたお茶を渡した後、聡介は3人に断りを入れてからすぐに工房の中に入って鍵を閉めた。

色々とバタバタしていて出来なかった新装開店の準備をするためである。

まずは、新装開店の目玉商品として安く売り出す包丁を大量に造る必要があるので、今日一日は工房にこもらなければならぬ。

とはいえ、実際は錬金術を使って一瞬で大量に造ることが出来るのだが、これもカモフラージュのためである。

最近では、包丁は鍛造よりも鑄造で大量に造られているらしいので、一日で大量に出来ていてもそこまで不自然ということにはならない。

もちろん聡介が錬金術で創った物ならば、性能は鍛造となんら引けを取らないし、耐久性もあるので、鑄造のモノとは比べ物にはならないのは明白なのでなかなか良い広告の材料となってくれるだろう。

刀剣などの武器は冒険者でもたまたま手入れにすることはあっても、そう頻繁に買いに来るようなものではないので、こういった地味ながらもコンスタントに続けられる商売も必要である。

錬金術という自由度の高い能力があるのだからそれを使えば更に幅も広がるので、地元に根付いた商売というのもこれから次第だろう。

今回創る包丁は商売として長く続けていくことが目的なので、下手に『折れず・錆びず・切れ味が落ちない』というものにすることはできない。

よって今回のコンセプトは『ある程度の性能』となってくるので、そのあたりのさじ加減を上手くしていかなければならないのが難しいところだろう。

使用用途に合わせて、いくつかの種類の包丁に創ることを既に決めている聡介は、まずは見本となる型を鉄のインゴットから創りだす。

まずは、主に魚などを捌く時に使われる、刃渡り20?程の出刃包丁。

これは元々が魚の骨を切るための物なので、他の包丁よりも重くなっており、最近では小骨程度のもが入っている肉などを切る時にも使われている意外に使う機会がある包丁だ。

次は、野菜を切る時に使われる、刃渡り17?程の菜切り包丁。

まさに『名は体を表す』とはこのことで、野菜を切るためとして造られているこの包丁は、地 包丁の幅 が薄くなっており、固い野菜も砕くことなく切れる反面、肉を切ることにはまったく向い

ていない包丁だ。

そして、メインとなるのが肉や、野菜などのほとんどの材料を切れる万能包丁として使われる、刃渡り20?程の牛刀。

元々は塊の肉を小さく切るのに都合がいいように設計されており、反りが大きいため押して切ること、硬い物を切るのに便利で、筋などの切りにくい物を切るによりすぐれている包丁だ。

他にもセットとしても売られるように、ペティナイフ、パン切り包丁などを加えて5点セットというのも考えているし、1本あれば万能で何にでも使える三徳包丁も単品で売ろうかとも考えている。

この街ではまだ広まっていないが聡介の剣の評判が広まれば、良作を創る店の一品というブランド的な価値に加え、包丁自体の値段の安さも加わるとじわじわと広まっていくことだろう。

肝心の創り方だが、この包丁は魔力を使わずに聡介が前の世界にいた時に見たことがある特殊な合金を使ったもので作り上げる予定だ。

それは『V金10号』と呼ばれるもので、炭素1・0%、クローム15・0%、モリブデン1・0%、バナジウム0・2%、コバルト1・5%を高純度の鉄に加えたもので、これを使つと研ぎやすく、切れ味がとてもいい刃物が出来上がる。

高純度の鉄は錬金術を使用して不純物が全くないように出来る上に、他の材料はイメージさえすれば創ることも可能なので問題は無い。

そして、包丁の見通しが立った聡介はそのほかに補充しておかなければならない商品を考えるが、それは持ってきた分の武器を店頭に

並べれば十分なので、今日は包丁を創ることだけにする。

そうと決まった聡介は、初めての試みとして必要な各種金属を『空中』から生み出すことにした。

目をつむって心を落着かせ、目の前の空中で細かな塵が集まって出来ていくイメージで金属を作り上げていく。

イメージが出来上がると同時にゴツという音が目の前から響いてきたので目を開けると、そこには1?角程の大きさのクロームが銀白色の光を放ちながら工房の固い床に転がっていた。

その出来を見た聡介の顔は、成功であるはずなのにどこか不満げなものになっている。

それもそのはずで、聡介が想像したのは3?角程の大きさのクロームだったのだ。

「うーん……やっぱり出来くはないけどイメージするのが難しいなあ。無から有を生み出せないっていう固定観念が邪魔してるのかな……?」

むう……と唸った聡介はしゃがみ込んで、床に転がったクロームの塊を拾い上げた。

鉄よりもいくらか軽いクロームは銀白色に輝いてとてもキレイだが、今は見惚れているよりも材料を作り上げてしまうことの方が重要だ。

失敗作記念ということで、トランプのダイヤの形に簡単に整えた聡介は、それをネックレスに通して首にかけると、今度は目を開いたまま練成する体制に入った。

イメージの仕方自体はさっきのでも問題無かったので、その方法で練成をしていくと、どこからともなくキラキラとした光の粒子が集まっていき、立方体の形に固まり始める。

凝縮していくイメージを加速させるとその分だけ、目の前の光の粒子の動きも加速していくのを見てみると、この練成方法は目視しながらの方が簡単にできるということも分かる。

そして、それと同時に思いついたのが、この練成方法を使つての攻撃方法だ。

それは、標的の真上に巨大な物質を創りだして、落下させて押しつぶすと言う至極単純な方法で、この攻撃方法はある程度開けた空間でなければいけないという欠点もあるがかなり有用な攻撃方法かも知れない。

この練成方法の技術が上がつて一瞬で練成できるほどになれば、応用技として空から流星のごとく降り注ぐ槍のシャワーも、空から巨大な島を落とすことも理論上は可能となる。

そのようなことをしなければならぬ事態に陥るはずは無いのだが、つい考えてしまうのは男のロマンなのかもしれないと思った聡介は一人クスリと笑った。



あれからしばらくして全ての材料を創り終えた聡介は、練成する速さが最初と比べ格段に早くなったことに満足そうにしていた。

良い機嫌のままに起こったその後の練成もつまずくことなく、しっかりと描いた通りに出来あがり、今聡介の目の前には『V金10号』がデントと鎮座している。

完璧にできたその仕上がりにはペタペタと表面を触る聡介は楽しそうだった。

そして残る工程はそれぞれの種類の包丁の型に成型していく作業だ。

しかし、ただ成形するだけでは芸が無いので、持ち手に滑り止めを兼ねた溝を掘っていき、刃には刀と同じ様な波紋をかざりとしていれておく。

これでデザイン性も上がって少しはかつこよくなったと自画自賛した聡介は、次々と包丁を創っていき、出来あがったそれらを単体で飾るか、セットとしてキレイな木の箱に入れて店内の一角に飾った。

これらと、挨拶回りで配った包丁では性能が違うが、挨拶回りで配ったのはオープン前の前評判を上げるためなので、もしアレと同じものをくれと言われても非売品ということではかわせばなんとかなるだろう。

店内に飾られた包丁が光を返すのを見て満足そうに頷いた聡介だが、次の瞬間固まった。

包丁が光を反射しているということは、外はまだかなり明るいという事で。

聡介は包丁作りのために今日は一日ほとんどずっと工房にこもっていないと不味くて。

今の自分を見られたら疑いが湧くと言うかなりマズイ自体になるということだった。

幸い店内部分にはジョージ達の姿は無く、聡介は大慌てで全ての包丁を工房の中に戻していき、自分も工房の中に飛び込んだ。

包丁を工房に運ぶ際に最後の一本を取り落としてしまい、腕をスパッと切ってしまった聡介は、その後クラウに回復魔法を掛けてもらうのだった。

《ソウスケって結構ドジなんですねぇ》

「…………返す言葉もございません…………」

## 025 パーフェクト営業スマイルと開店準備（後書き）

4637文字です。

皆さんお久しぶりです。感想を見て気付かされました。

もうこの物語は自分だけのものではないのですね……。

読まれた以上はこの物語だって、その人の中で息づいていくわけですし、それを私の身勝手な理由で閉ざしてしまっただけじゃありませんよね。

本当に申し訳ございませんでした。

しかし、これからはやはり不定期更新になりそうです。

というのも、今年の春に進学予定で住所を変更したり、卒業式をむかえたりなどで色々することが山積みなのです。

また落ちついたらゆつくりと進めていきたいと思います。

そして、最後になりましたが、qweap様……すごく嬉しかったです。

ここまで思われるというのは想定外でしたので、本当に涙が出るかと……。

他にも、

バカス様、リトラ様、皇 翠輝様、akitō様、DDG-17

3様、苑怜様、ruru05様、針山様、ゆう様、弘人様、男爵様、

安積様、和樹様、なんでもやさん様、（@。@ノ）ノ様。

感想は書いていませんが感謝しています。これからよろしく願っています。

それでは皆様、次回でまた

大慌てで再び工房に戻って、次の朝までなにをすることもなくゆるゆるとひきこもり生活をして過ごしていた聡介は工房の中で目を覚ました。

前日にやることが無さ過ぎて昼寝をしていた聡介はその分だけ目覚めが早くなってしまい、工房の裏路地に通じるドアの鍵を開けて出ると、家と家とで挟まれた狭い空はまだ白み始めたばかりだった。

デザートランドの裏路地はその言葉のイメージ通りにジメジメしているということはなく、乾いた砂埃が積もっていて埃っぽいような場所だ。

しかし、やはり建物に挟まれた狭い通路なので暗いし、稀にどこかの食堂がすてた残飯のすえた様な匂いもただよってくる。

砂漠という暑い環境なので普通は捨てた物が腐って匂いを放たないようにキッチリ処理をするはずなのだが、どこかのだれかがそれを忘れたようで今日はその匂いが裏路地に漂っていた。

外の明るさがわかった聡介は、腐った匂いに顔をしかめながら早くドアを締め切った。

さて、話は変わるが聡介の本日の予定としては、この店の新装開店である。

そのための準備をしなくてはいけないと思った聡介は、動きまわるには多少早い時間ではあるが、時間ギリギリになるよりはましだと判断して店の準備を始めることにした。

まずは商品の代金のお釣りの用意のために売上金を入れるためのボックスの中の硬貨を取り出しやすいように並べ替えておき、そのボックスの横に売れた商品を書いておくためのメモ用紙　コレは元々聡介のバッグにあったものを置く。

それが終わった後はメインの商品となる武器を倉庫の中から取り出していく。

店内の棚にかざるとゴトゴトと音が鳴るので店内には出せないが、工房の壁は厚く音を通さない造りなので工房の床にどんどんと並べていく。

刀8本、片手剣25本、両手剣20本、短剣10本、ナイフ15本、盾5個、鎧4個

数だけ見れば小さな武器屋としては一見十分そうに見えるが、これでは少し客層が限られてしまう。

というのも、これでは飛び道具、主に弓矢などの遠距離から攻撃出来る武器がなく、槍などのリーチが長い武器がないのだ。

他にも武器の種類をあげていけばきりがないのだが、これでは少し心もとないというのは事実である。

そこで考えた聡介は、あまり複雑な成型などをしなくても済む打撃系の武器をレパートリーにいれることにした。

まずは棒の形にするだけでことたりる棒の制作に取り掛かることにした聡介は、炉の傍に積んでおいた木を取ると、錬金術で黒檀ほどの重さと硬さになるまで圧縮をし、そこに炉の中に残っていた炭に必要なのは黒色となる炭素　を加えて見た目も黒檀と同じに仕上げる。

圧縮したおかげでかなり小さくなった物をそこから圧縮率を変えな  
いまま１８０？ほど縦に細長く引き伸ばしていき、打撃部に鋼をコーティングして完成させた。

黒檀を意識して造ったため表面は重厚感溢れる黒一色で染まっていたとてもきれいな仕上がりとなり、いかにも高級ですといった感じだ。

だが、これは品数を増やして売るための物なのであまり値段をつけられないため、普通の鉄剣よりちよつと安い５００ギルほどの値段設定にするつもりだ。

それと同時に、聡介もあまりにもネタに走りすぎていて誰も買わないだろうとは思ったのだが、アダマントイト製金属バットにアダマントイト製の釘を張り付けた所謂『釘バット』。

通常の釘バットと違い、アダマントイト製のため錆びず、折れないため半永久的に使い回せる逸品ではあるが、流石にこんなものに値段は付けられないため、聡介はアダマントイトの色を隠すために黒色を混ぜて誤魔化して店の隅の棚にでも飾っておくことにした。

そのほかにもハンマー部分に鉛を入れた鉄製のハンマーや、大きさがバラバラの偽黒檀製の棒を創った聡介が、工房の床にそれらを並

べると少しは見栄えが良くなった。

槍や、弓矢などの武器はこの街に来る時に馬車に積んでいなかった  
ので、今度創ることに決めた聡介はとりあえずそれらのラインナッ  
プで満足することにした。

そのほかにも開店の為にする準備などで聡介が悩んだり動きまわっ  
ていると、太陽がようやく地平線の彼方からゆっくりと眩く輝くそ  
の身を現し始めた。

「おはよう、ソウスケ。今日からお店開店だっけ？」

「うん、そろそろ店を開けなきゃ支出ばかりで赤字になっちゃう  
からね。今日開店するつもりだよ」

既に着替えをして髪を整えてから下りてきたエミリーは、慌ただし  
そうに開店の準備で商品を棚に陳列している聡介を見ると、簡易に  
造られているキッチンスペースに立った。

エミリーは冒険で役に立つようにと覚えた簡単な火の呪文を唱えて、  
火をおこすと近くに置いてあったフライパンをその上に載せて温め  
始める。

その間にパンをその横で焦げない程度に温めつつ、ザクザクと野菜

のシャキシヤキ感を損なわない程度に切っていく。

温まったフライパンにアリーバと呼ばれる実からとれる油を引いて、長めのソーセージを2本並べて焼いていく。

そしてパンが温まったところでパンの真ん中にナイフを入れて切り開き、そこに先ほど切った野菜を詰めておく。

最後に、ソーセージを直火にあててバツツと皮を弾けさせてから、肉汁溢れるソーセージをパンの中の野菜の上に載せてピリ辛のソースを掛けると出来上がりだ。

パンはほんのり温かく、ジューシーなソーセージからは肉汁が溢れて光輝き、野菜は瑞々しそうで、そしてそれらの上では赤色のソースが鮮やかな彩りとなってパンの上で存在感を放っている。

出来たてのホットドッグは簡素なカウンターの上で、窓から差し込む太陽の光を受けてまさに宝石のような輝きを放ち、市場で安く売られているクタツとしたモノとは一線を画している。

そしてそれは冒険者でありながらもキレイに手入れされた滑らかな指先でソツと優しく包み込まれ、プルンとした瑞々しい唇の上を滑り口の中へと迎え入れられた。

「ソースケの分もつくったからいったん休憩して食べなよ」

「ありがとう！わあ、すごくおいしそうだね！」

「ふふふ、簡単だけど出来たてってすごくおいしいのよねえ」。さ



さっ、早く食べちゃいなよ！」

「いただきますっ！」

作業を一時中断して、エミリーから出来たてのホットドッグを受け取った聡介はガブリと大きく口を開けて食べた。

「うん、やっぱり出来たてはおいしいなあ。わざわざありがとね、エミリー」

「そう言ってもらえるとつくったほうとしては嬉しい限りだね」

そしてホットドッグを食べ終えた二人は、聡介がお礼にと用意したコーヒーを飲んで雑談をしてしばらく朝食のあとの優雅な一時を楽しんでいた。

「えーっと、俺らの朝食は……？」

それから少しして起きてきたジョージとジャックは朝食を買いに二人で寂しく市場の方へ出かけていった。

聡介が開店をすると、まず最初に入ってきたのは明らかに冒険者らしくない主婦といった感じの3人ほどのグループだった。

その奥様3人組は、剣や防具等があちこちに飾られて光を放っている店内を物珍しそうに見回しながらカウンターまでやってきた。

「すみません。包丁を買いにきたのですがありますか？」

「はい、こちらです」

「……えっと、これら以外の包丁ってないんですか？」

聡介が包丁の置いてある棚の場所まで案内すると、お客の女性の口から出た言葉はお目当てのモノが無いことに対する落胆だった。

「私達、斜向かいの食堂のアイラさんがここのお店でもらった包丁がすごくいいって聞いてきたんだけど、もうそれはないの？」

「えっと、すみませんが。あれは非売品でして、どうしてもっていう方には特注という形でお売りするつもりなんです。ここにある包丁も流石にあれほどではないのですが、これもモノはいいのでどうでしょうか？」

「んー、どうするー？」

「私は切れ味を見てみないことにはなんともいえないかなー」

「あの～すいませんけど、ちょっと試し切りしてもいいですかー？」

3人は少しだけ話しあうと、どうやら切れ味を見てみるために試し切りをすることに決めたようだ。

こちらとしても、切れ味を直接見てもらってそれで納得してもらって買ってもらうのがベストなので、どうぞという感じで聡介はそれを承諾した。

その3人組はどうやら市場からの帰りだったらしく、一番後ろにいた人が袋の中から玉葱　オーニオンと呼ばれているが、玉葱を取りだしたので、聡介は店のキッチンスペースからまな板を持ってきた。

まな板をうけとった人はカウンターの上にまな板を置き、その上に玉葱を置くと、聡介が棚から出した包丁を受け取って薄くスライスし始めた。

トントントンと軽快でリズムカルな音が昼さがりの店内に響いていく。

「……………あれ？マリー、これっていつもと同じ玉葱？全然涙でないんだけど……………」

「えー、本当？このあと、マリネのサラダにするつもりだったから普通の玉葱のはずだよ？」

「……………実は玉葱は、切れ味が良いと目が痛くならないんです。これ

はあまり知られていないのですが……。おそらくその玉葱は普通のものだと思いますので、かじってみると辛いと思いますよ」

その言葉に半信半疑といった感じながらも、切りかけの玉葱をちよつとかじってみた3人は辛そうな表情を浮かべた。

そんな3人にお茶を入れて持ってきた聡介は、飲んでいる途中で説明した。

「自分もなんでそうなのかは詳しくはしらないのですが、切れ味がいい包丁だと玉葱を切っても目が痛くならないようなんです」

成分などの話をするわけにもいかないことで誤魔化していった聡介の言葉を身を持ってしまった3人はそれぞれ、へえ〜といった感じに頷いた。

「じゃあそれをおうかしら。いくらぐらいですか？」

「この包丁は60ギルになります。ちなみに、この小さいナイフ等のセットになりますと、5本で200ギルになります」

「それじゃあ1本もらうわ」

「私も1本お願い」

「ん〜……私はセットで買わせてもらうわ〜」

鑄造の技術があるとはいえ、まだ大量生産が出来ないこの世界ではまだ包丁は長く使い続けるものという考えがあるために少し高めのこの値段設定でも奥様3人組は快く受け入れたようだ。

元の世界なら100円均一ショップのせいで売れなかっただろう値段設定なので、聡介は内心でこの値段が適切なのだろうか、僅かに不安を持っていたがそれは杞憂に終わったようだ。

カウンターで3人からそれぞれ合わせて320ギルを受け取った聡介は、それを売上金を入れる箱にいれつつ、包丁単品×2包丁セット×1とサツとメモ用紙に書きつけた。

それからカウンターの下から包装用の黒の無地の布を取り出し、包丁をとりにもう一度見た聡介は2本の包丁にそれを巻きつけ、セットの包丁の方は置いてあった箱ごと抱えてカウンターに戻った。

ちなみに、黒の無地の布は市場で安く買ったもので、なぜ布かというと、木の箱は一般的にそこそこ造るのに値段が掛かるので安く済む布にしたというわけだ。

3人にそれぞれの商品を渡した聡介は、お取り扱いに気を付けてください、切れが悪くなれば持ってきて下さればお安く研ぎますと言って、3人を店の外に送り出した。

それからしばらく冒険者風の人達や、包丁の噂を聞いた奥様方や料理人といった方が来て包丁や鉄剣などを買っていたが、さすがに高額の商品が開店当日に売れるということは無く、その日の売り上げは、包丁単品×5＝300、包丁セット×2＝400、鉄剣×

5本＝3000、ナイフ×3＝900の計4600ギルとなった。

もとの世界の値段に換算するとおよそ460000円。

一日の売り上げが46万円。

武器屋の商人が死の商人と呼ばれて蔑まれていても無くならない訳が聡介はようやく分かった。

特にこの世界では恒常的に魔物という敵対存在がいるおかげで需要は無くならないために廃れるということも無く、安定した職業となっている。

もちろん技術がともなっていない、または工房に武器を注文してソレを売るタイプの武器屋は、買われなかったり、工房に渡す代金があるために利益がでにくいだろうが、聡介のような全て自分でするタイプの武器屋は大きな利益が出やすい。

とはいえもちろんデメリットはあり、無名の武器屋なので人が入りにくいというのがある。

それはこれから聡介の創る武器の優秀さが有名になれば解決されるので、そこまで気にしないでいいことかもしれない。

これから自分の創るものが認められれば更に多くの売り上げが期待できると分かった聡介は、そんな期待に胸を膨らみますのであった。

026 商品作りと新装開店 誤字修正（後書き）

5019文字です。

今回は気分がよかったので、調子に乗って今までより早い更新を試みました。

……くれぐれも次もこのペースでの更新だと期待はされないようにお願いします（汗

それではまた次回でお会いしましょう

## 027 ランチと報酬

### 027 ランチと報酬

「ふう……それにしても、こんな創造れるなんてソウスケは本当に何ものだ？鍛冶の事はよくしらんが、剣を3本つくるにしても制作スピードが速すぎる気もするし……」

「案外普通じゃないのかも……。これだけ早いつてことはもしかしたら魔法を使つて何かをしているのかもしれないわね。あまり気にしなかつたから言わなかつたけど、前の街にいたときにうつすら魔力っぽいのが漂っていたようなこともあつたし」

目の前から迫ってきた全長4mほどの芋虫のようなサンドワームを横に避けながら、相手の突っ込む勢いに任せて剣を水平に構えるとサンドワームは、竹を縦に割ったようにきれいに真っ二つになった。

これでジョージが倒したサンドワームの数は5体で、ジャックはサンドワームとジャイアントスコピオンを2体ずつ、エミリーはマミーを8体倒していた。

「おいおい、エミリーそりや本当かよ!？」

「本当のことよ。多少習得するのが難しいけど、才能があるなら魔法は使えないことも無いし、魔法使いにならずに生活の足しにするだけの人もいるから、聡介もそういうタイプなのかな。ってなんとかわかんないけど……。もしかしたら新しい魔術でも自分で



開発してそれを使って鍛冶をしてるのかもね。ほら、工房なんて前の街にいたときだって、引越す時に扉の隙間から中がちょっと見えただけで、後は全部見えないようにしてたし」

「そうかあ……ん？自分で魔術創れるくらい才能があるのなら、魔法使いとして大成できるんじゃないかな？なんでわざわざそんな回りくどいことをしてるんだろ？」

エミリーの言葉を聞いて、少し引つかかったジャックはその疑問をエミリーに尋ねてみた。

「そういえばそうだけど……。まあ、何か理由があるのかもね」

「そうだな。けど、あんまり詮索しない方がいいぞ。秘密なんて知られて気持ちのいいもんじゃないからな」

そういったジョージは、切られてからもしばらく暴れていたサンドワームが大人しくなるのを確認すると、サンドワームの腹の真ん中あたりにズブリと剣を差し込むと梃子テコの要領で腹の中から一つの臓器を取り出した。

剣の腹からズルリと滑り落ちたその臓器を剣で切り開くと、太陽に照らされてテラテラと光る胃酸と共に、今回受けた依頼達成のための鉱石が入っていた。

ガランダイトと呼ばれるその鉱石は、サンドワームに飲み込まれた魔物の体の一部が長い時間を掛けて、魔物を食べて魔力を帯びた酸

と結びつくことでようやくできる代物だ。

大抵の場合はそのまま溶けて無くなってしまいうので、非常に珍しく、通常2 mほどのサンドフォームが4 m級に育ってようやくみつかるというたぐらいのものだ。

使用方法としては、魔法で不純物を無くして創りだした純水で丸一日煮込むことで強力な溶解剤として精製し、通常の溶解剤では溶けない魔法用の触媒を溶かす時に用いられるのが一般的で、魔法を研究する人達の間では結構な値段で取引されている。

4 m級のサンドフォームが5体目で出て、そこからガラナイトが発で見つかったジョージは、こりゃ運がいいなと思いつつ、砂の上でガラナイトを転がして胃酸を十分に落としてから、腰元のぶら下げた袋にそれをいれた。

「よし！依頼物もこれでゲット出来たことだし、帰るとするか！」

ジョージが上機嫌でクルツと後ろを振り返ると、そこではエミリーとジャックが美味しそうなサンドイッチを頬張っていた。

「…………え？ちょ…………。俺の分は？」

「鉱石取りに夢中で、呼んでも返事なかったからいらないのかと思っ  
て食べたよ、ジョージ」

「とりあえず死ね！ジャック！」

「ちょ！？まってまって！冗談だから！！」

ジョージはうがああああああと叫びながら剣を振りまわしてしばらくの間、ジャックを追い回していた。

「……まあいつか。お腹減ってるし食べちゃおう」

そんな時エミリーはというと、ジョージとジャックの追いかけてここを座り込んで観戦しながら、ジャックがジョージのために本当は残して置いたサンドイッチに齧りついていた。

「……俺……朝もあまり食べてないんだけど……」

朝のホットドックも昼のサンドイッチも食べ損ねてしまったジョージは、街まで帰ると空腹でふらふらとしながら市場の屋台の方へと歩いていった。

「すみません。ギルドの依頼書を見てきたんですが今いいですかー？」

聡介がちょうどお昼ごはんのカルボナーラを作っていると、軽やかな音を立てて扉があく音と同時にそんな声が聞こえてきた。

聡介はちょうど出来あがったソースにサツと絡めてブラックペッパーをふりかけると皿に移してから、近くにあった鍋の蓋を上から被せて冷めないようにしてカウンターに向かった。

カウンターの向こうでは小奇麗な鎧に身を包んだ人の良さそうな青年風の冒険者が薄く頬笑みを携えている。

「うーん、いい匂いですね。これからランチといったところですか？」

「ええ、ちょうどカルボナーラを作っていたところなんですよー」

ただの世間話に聡介がちょうど作っていた料理名を挙げてにこやかに応えると、そこでその好青年は眉をひそめた。

「うん……？カルボナーラなんて料理あったかな……？」

「えーっと……実は私は最近王都にやってきた者でして、カルボナーラって言うのは私の住んでいた場所の料理なんです。牛乳や生クリーム、チーズを使った濃厚でおいしいパスタ料理なんですよー」

あつやば……と思った聡介は内心焦りながらも、表面上はうろたえ

ずになんとかスムーズに話を進める。

ちなみに食材自体の名前は、前の世界のモノと同じモノはそのままの名前で、前の世界に存在していなかったモノは、当然この世界での名前が付けられている。

料理名も一致するのがほとんどだが、カルボナーラはたまたまこちらにそういう文化が無かったからなのかもしれない。

とはいえ世間に広く知られていないだけで、実は地方料理として存在している可能性もあるので、聡介はソコを利用して地方料理としてありふれた料理だと説明したのだった。

「なるほど。これは美味しそうだ。ふむ……チーズの良い香りが食欲をそそりますね」

相手の好青年もそれで納得すると、店内に漂っていたチーズの良い香りをかぐと顔をほころばせた。

「私もお腹が減ってきましたね。早く話を済ませてランチを取るとしましょう。……さて、話が半分でしたが確か依頼内容は金属鉱物などの採集でしたね？」

「はい、間違いありません。」

「実は既に依頼の品物を持ってきているのですが、もしよろしければ買い取っていただけないでしょうか？たまたま安くいただくこと

が出来たのですが、かさ張るものですから困りまして……」

「もちろん大丈夫ですよ。では、それらを見させてもらってもいいでしょうか？」

「ああ良かった。これで重い荷物ともオサラバできます」

話していた好青年は聡介の返答を聞くと、困ったという表情を一転させてホッとした表情を作ると、店の外に待機させていた馬車の荷台に向かう。

聡介がその後ろについていき、馬車の荷台に入るとそこには大量の鉄鉱石や、魔鉱石などが入った木箱が合わせて4つほど置いてあった。

これほどの量があるならば、しばらくは依頼の心配をしなくてよさそうだと思った聡介は、一応木箱の蓋を一つずつ開けていき中身の確認をしていく。

当然木箱の中には黒光りする鉄鉱石や、魔鉱石がギッシリと詰まっており、試しに持ち上げてみるとその重さから底上げをしてないことが分かるぐらいの手ごたえがあった。

想定していた量を大幅に超えていたために依頼報酬の額で悩んだ聡介は、最初に話しかけてきた好青年と話し合った後、報酬の額を当初の倍にすることで交渉を終えた。

満足そうな笑顔を浮かべた好青年は聡介に対して、気持ちの良い交渉をありがとうございましたと感謝の意を示して仲間を引き連れて

店を出ていった。

それを見送った聡介はとりあえず馬車から降りして店先に置いていた木箱を店内奥の工房へと運び始めるのだった。

「へへっ、ニールちゃんよお。おめえも大した詐欺師だよなあ？いくら俺達に脅迫されているといつてもあんな笑顔を浮かべて、人の良さそうな新米店主に俺らの盗品を押し付けれるんだもんなあ。ええ？おめえは生まれつきの詐欺師だぜ、全くよお」

「……………うるさい、黙れ……………」

ニールと呼ばれた青年は、先ほど聡介に依頼の鉾石を渡していた好青年だが、今はその表情は悔しさに歪みきっていて先ほどまでの朗らかな雰囲気の面影は全くと言っていいほどにない。

「おおこええこええ。でもいいのかあ？大事なだゝいじな妹が怪我しちゃうかもしれないぜえ？」

「っ！妹には手を出さない約束だろっ！」

「そうだなあ、そういう約束だなあ。でもよ、事故ばかりはどう

しょうもないんだよなあ？事故ってこわいよなあ？」

「つく……」

ニールは物心ついた時には既に両親はおらず、自分が捨てられていた町はずれの場所の近くに住んでいたお爺さんによって拾われて育てられていた。

そこにはもう一人サーシャという2つ年下の女の子が育てられていて、一緒に暮らしていくうちに二人は次第に仲良くなり、すぐに兄妹と呼べるほどに仲良くなった。

ニール達三人は何年間も町はずれで自給自足の生活をしてゆつくりと過ごしていたが、おじいさんはついに寿命を迎えてしまい、あとにはおじいさんの持っていた土地と家、そしてニールとサーシャだけが残った。

それでも二人は協力し合って仲良く暮らしていたが、1ヶ月前に突然やってきた盗賊達にそれは跡かたも無いほどに壊されてしまった。家は焼き払われ、畑は走り回る馬によってメチャクチャにあらされてしまい、果てには妹を攫われてしまった。

妹だけは取り返そうと思ったニールは馬で走り去る盗賊達に、途中で何度もこけてボロボロになっても必死でついていき、盗賊達のアジトまでたどり着くことができた。

ボロボロで辿りついたニールに山賊のアジトから妹を助け出す体力は既に無く、それでも無謀にも向かっていったニールはあっさりと



捕らえられてしまうが、盗賊団の頭かしらにその根性と整った顔立ちを気にいられ、妹の安全と引き換えにニールは盗賊団に引き入れられることになった。

それからは盗品を捌く時などに街での交渉役として使われるようになり、何度も笑顔を浮かべては商人達を騙して盗品を売りつけた。

当然のごとくニールは生来の人の良さから、今の仕事に嫌悪感を示してはいるが、妹を人質に取られていてはどうしようもなく、仕方なく仕事をこなしているという具合だ。

そうした背景を持つニールは、街の外に出ると仕事仲間兼見張りのための盗賊団の数人に小突かれたり、なじられたりしながらいつものように盗賊団のアジトまで帰っていった。

## 027 ランチと報酬（後書き）

4333文字です。

いやぁ今回は大分待たせてしまったのに短くて申し訳ないです（汗キリのいいところで切ったらこれだけになってしまいました。

それと前回の朝食ネタを引きずったのも人によつては不快に感じたかもしれませんね……

自分としてはこの作品にあまり無いギャグ成分をちよつと入れたかっただけなんです、すみません。m（―――；）m

今回はちよつと話が大きく動きそうな流れで終わってしまいました。が、次は番外編として、聡介の過去話でも書こうかと思っています。これまでにリクエスト……というよりも、不自然だから書いた方がいいとのご指摘があったので書いてみようと思います。

ぶつちやけると、ストーリーを考えるのに手いっぱい過去とかそういうのが未だに確定していない現状です。

ちよつと自分でも書き挙げられるのが不安ですが、がんばってみますね。

それでは次話（予定：番外編）でお会いしましょう

## 番外前編

## 学校とカフェ

## 誤字修正

### 番外前編

### 学校とカフェ

ある夜、聡介はいつもどおりに店を閉めてしつかりと戸締りを確認した後に自らのベッドの中へと潜り込んでいた。

元の世界にいたころなら未だにネットゲームをしたり、友人たちとしゃべっていたりするような時間帯だが、この世界にそれほど夢中になれるような娯楽は無く、聡介は最近では早寝をするようになっていた。

その日もなんら変わりなく、ベッドにもぐりこんでからしばらく目を瞑っていると次第に眠気がやってきて、聡介をまどろみの淵へと誘っていった。

ただ今日だけはいつもと違い、心地いい黒い闇に包まれて眠る聡介の姿には一筋の涙が流れていた。

## 理学部化学科

「おい、神尾くん！ちょっとその機材あとで実験で使うから第二実験室に運んでおいてよ！それ運んでくれたら休憩してくれればいいからさー」

「わかりました、灰村教授。……って重いッ！この機材重すぎですよ教授！？」

「え？ああうん。それ高いからね。壊したら弁償だねっ！」

茶目つ気たつぷりに笑顔を浮かべてビシッと親指を立てる教授に、聡介はヒイツ！といいながら機材をゆつくりと持ち上げて、近くに置いておいた業務用の台車に乗せた。

そして教授の笑いながらの、落とすなよ！という声を聞きながら聡介はゆつくりと慎重に台車を押しながら実験室の中から出てきた。

理学部化学科に所属している聡介は今、教授の手伝いということで学校に来て機材運びなどの雑用をしている。

聡介は中学に入ってから科学の授業で、実験を重視する先生と出会ったことで科学の楽しさを知り、科学部に所属してその先生の下でなんども実験を重ねていくうちに科学という分野が好きになった。

その好きが高じて聡介は進学した高校でも理系を選び、夜遅くまで勉強を毎夜して国立の有名大学の理学部化学科に見事合格することが出来た。

進学ということで不安だった一人暮らしもすぐに友人ができたことで色々と助けてもらうことも出来たので、快適な生活を送れている。

もちろんバイトもしているので帰りが夜遅くになることもあるが、今の生活が充実している聡介にはさほど苦にはならない。

大学から帰ってから最近趣味となってきたネットゲームを数時間ほどしたり、課題をこなしたり、趣味の科学分野について調べ者をしたりしている。

大学に早く着いたときなどは教授が暇だと話をしたり、簡単な実験を試みたり、教授がいないと趣味の実験をこっそり試みたりしている。

本当は機材を私用で使うのはあまりよろしくないが、教授はその辺りは寛容で、好きに使わせてもらっている。

教授曰く『若者は若いうちに好きなことを何でもしなさい。それが後悔しない生き方だよ』らしく、時には教授の知り合いも紹介してくれるほどで聡介は教授に頭が上がらない。

ということで、聡介は教授が何かの実験で困っているときや、人手が足りないときなどは進んで手伝うようにしている。

今回は教授がこれから急用で出かけるらしいので、代わりに実験で使う機材を実験室へと運んでおいてほしいということで手伝いにきている。

一つ一つがとても高価な機材なので落として故障させないように慎重に運ぶ作業を、廊下を何往復もしてこなしていくのは疲れる筈なのだが、聡介はいやな顔一つせずになさっていく。

というのも、先日教授の知り合いの一人の刀匠のもとへ連れて行ってもらい、教授の科学的な解説付きで刀をうつ工程を見学させてもらったからだ。

通常は刀を打っているところを間近で見ることなど出来ない上に、科学的な解説を聞けることなどまず無いので、聡介はとても上機嫌なのだ。

「ふう、終わった終わった。……ん、もうこんな時間かあ。まだ時間に余裕はあるけどそろそろ行くかな」

作業がおわった聡介は、叔父に卒業祝いで買ってもらった腕時計を見て時間を確認すると、荷物をもって実験室に鍵をかけ、その鍵を教授の机の引き出しに入れて講義室へと歩を進めた。

しかし、途中の購買所で見かけた女友達と雑談をしすぎたせいで時間ぎりぎりとなった聡介は急いで講義室へと向かった。

開始時間1分前にギリギリ間に合った聡介が扉を開けて中に入るとちょうど真ん中の列の中段辺りで手を振る友人の姿がみえたのでそこへと歩いていく。

「よう！おそかったなあ。けど席はとっておいたぞ」

「サンキュー悠斗。でも、まわりはそこまで埋まってないからあまり意味がないけどな！」

「うるせーバカ！ちよつとぐらい感謝しろ！」

と軽いやり取りをしていると講義の担当の教授が現れたので、二人

はすぐに静かにしておく。

間もなくその教授による講義が開始され、その数分後、聡介の友人は机に撃沈した。

「おいおい、直ぐに寝るなよなあ。あとで授業内容聞いてきても教えないぞ」

講義がようやく終わって一息ついて聡介が横を見ると、友人がちょうど起きたところだったので泣きつかれないように聡介は先に釘をさした。

「ご心配なく。俺は毒系のことは得意だから問題ないもんね。あれぐらいの講義ならだいたい分かるさ。そんなにいうなら聡介は知っているのか？地球で最強の毒を持つ生物って」

「えー？んゝ……なんだったっけなあ……。……フグ？」

いつだったかのテレビ番組の特集で聞いたことがあるような問題に聡介は悩んだが、結局それらしい答えは出ず、一般的に有名な毒を持つ生き物の名前を挙げてみた。

「はつずれ」。正解は『キロネックス』クラゲの一種だ。立方クラゲの一種で、刺されると運が悪いと3分で死ぬほど強力な毒の持ち主。血清はあるけど、刺されたらほぼ死亡確定だな。なんせ3分で死んじゃうほどだからな、こわいこわい」

「へえ。そんなのがいるんだ……。それじゃあ安心して海も泳げないじゃないか」

「ああ心配すんな。日本の近くにはいないし、海外でもいるなら看板が出てるはずだから」

「ふーん……。それじゃあさ、構造式が判明している最大の天然有機化合物で、非タンパク質の天然物として最強の毒は知っている？」

今度はさきほどのお返しとばかりに、聡介は友人が分からないように細かい条件をつけてさきほどと同じような問題を出す。

「あ？あ……。え。つと……。なんだっけ……。？ん。……」

「はい、時間切れ！。正解は『マイトキシン』。毒性はフグ毒として有名な『テトロドキシン』の約200倍の強さで、サザナミハギから単離されたもの。構造が巨大でまだ全合成した人がいないから、今だとそれを目指してる人たちが多いよね。あんなに構造が巨大なのによくやと思うよ」

「あ。マイトキシンか。全然分からなかったわ。ってか、そんな条件つけて難しくするなんて卑怯だぞ！」



俺のはかなり優しい問題だっただろうー！とウガーー！といいながら怒る友人を尻目に聡介は涼しい顔でやり過ごしている。

やり返したという少しばかりの優越感を感じて少し気分がよくなった聡介は、今日のカリキュラムを思い出して他に講義が無いことを確認するとまだ講義が有る友人とは別れて、知り合いの経営するカフェへと向かった。

洋風の家が立ち並ぶ通りを抜けるとまず目に飛び込んでくるのが、地中海から吹く風を感じさせる手入れの行き届いた真っ白な白壁で、そこにはおしゃれなスカイブルーの小窓と、同じくスカイブルーの軽いゴシック調の扉がある。

周りに植えられている手入れの行き届いた観葉植物の緑も、白壁の美しさを際立たせるのに一役買っている。

扉の直ぐ脇には、草書体のような細い文字で『Cafe』と書かれた板が白壁に立てかけられていて、それがまた一層おしゃれに見える。

『Cafe』と書かれている以外には無粋なメニューや値段の表示などが無いのも好印象である。

それだけで一枚の絵のようになる扉を開けて店内に入ると、白壁に反射した光が店内を明るく照らして落ち着いた空間を演出している。

店内の各所には小窓や扉にあわせる様にスカイブルーの小物が配置されているので、落ち着いた空間というだけではなく、安らげるような優しい空間ともなっている。

聡介は小窓の近くの日の光の当たる明るいテーブルにつくと、かばんの中から愛読書を取り出した。

「いらつしゃい聡介さん。今日もいつもと同じコーヒーでいいのかな？」

「ん、いや、今日は紅茶をお願いします」

「あら、珍しいですね。今日はなにかあつたんですか？」

いつも頼んでいるコーヒーとは別の選択をしたことを珍しく思ったのか、このカフェの店長の妻である霧崎響香が聡介に尋ねる。

「いえ、今日は特に晴れていて気持ちがいいので香りがいいそちらにしようかと思ひまして」

「なるほど、確かに今日は雲ひとつ無い快晴で気持ちがいいですからね。分かりました、少々お待ちください」

白のシャツに黒のパンツというシンプルな服装を身に着けた響香がカウンターへ戻ろうとすると、腰元につけた白地に青いチェックが爽やかなカフェエプロンがゆれる。

響香がカウンターに戻ると、そこには聡介の知り合いである霧崎洋介がコーヒーや紅茶をいれるための準備をしていた。

響香が洋介に聡介のオーダーを伝えたと、コーヒーマルを引く手を一旦止めてこちらに軽く頭をさげる。

響香はスツと整った顔立ちでクールな印象を与える美人だが、洋介は見るからに優しくそんな顔立ちで柔和な印象を与える好青年といった感じだ。

この二人と聡介が出会ったのにはありきたりではあるが、あまり遭遇しないだろういきさつがある。

というのも、20代前半で若くしてこの店を立ち上げようとしていた時、洋介と響香が運転する車がたまたま見通しの悪い交差点で左方からきた車にぶつかられてしまったのが始まりである。

ぶつかった車はいわゆるチンピラが数人で乗っているような性質の悪い車で、見通しが悪いんだから止まらなかったソッチが悪いと、一方的に言いがかりをつけて全額賠償どころか、そのうえで法外な慰謝料をふんだくろうとしたのだ。

当然、すぐに警察を呼んで解決をしようとした二人だが、洋介が携帯を出した瞬間に洋介は突き飛ばされ、そのすぐ傍にいた響香が人質同然につかまえられてしまった。

洋介はどうしようもなく、ちかくの銀行で引き出せるだけの現金をもってこいと言われ、店の開店資金を苦渋の決断で手放すところだったのだが、たまたま近くを通った聡介が近くの交番に駆け込み、すぐに警官を連れて行ったおかげでそれを回避できたのだ。

そんないきさつがあり、とても感謝をされた聡介は店を開いた時に招待してもらい、それ以来このカフェが気に入って何度も来ている

常連となっている。

恩人ということでもタダにしてくれるような勢いではあったが、聡介は流石にそれは悪いということで、妥協点としてコーヒーや紅茶を頼むと一つデザートをタダでつけてもらおうということにおさまった。

これは自称スイーツ男子を語る聡介としては非常にうれしい事態で、このことも聡介がこの店の常連になった理由の一つでもある。

そしてしばらくしてから、洋介が厳選した茶葉で作られた出来立て紅茶が運ばれてくると、聡介は本を読む手を止めて栞を挟み、カップを手にとった。

香りをかけば、ダージリン特有のマスカットフレーバーと呼ばれる強く甘い香りが心地よく、紅茶を口に含むと、強めの渋みが口の中にひろがり、味に深みを与える。

「洋介さん、このダージリンすごく香りがいいですね。とっても美味しいですよ!」

「たまたま知り合いにいい茶葉をわけてもらえまして。気に入ってもらえたのならなによりです。」

紅茶を持ってきてくれた洋介に聡介がそういうと、洋介は笑みを浮かべる。

「それではごゆっくりしてってください。本日のデザートは響香が焼いたフォンダンショコラです。たしか聡介さんはチョコレートがお好きでしたよね？美味しく焼けているみたいなので楽しみに待っていてください」

「フォンダンショコラですか。美味しそうですね。あのチョコのトロけていく美味しさといったらもう……。楽しみに待たせていただきますね！」

聡介がそう返すと、洋介は微笑んだまま頭を下げ、カウンターのほうへと戻っていった。

それからすぐに響香が聡介のもとにデコレーションされた綺麗なフォンダンショコラを持っていき、聡介はとろける甘いチョコの味と、ダージリンの芳醇な香り、開かれた小窓から時折入り込んでくる風を感じながら午後のひと時を過ごした。

4996文字です。まさかの二部！？

書いてるときに前編後編に分かれるなんて想像もしてなかった……。調子にのってあれこれ書いた結果がこれだよ！

さて、実は何を隠そう聡介は実はスイーツ男子だったのです！スイーツ（笑）男子でもいいじゃない。美味しいんだもの……。作者も実はスイーツ男子だったり。だって美味しいんだもの。週2でスイーツ食べてるよ。だって美味しいんだもの。

まあそれはさておき、次回もちろん番外です。いらねえよ、バカ！本編進めろ、ノロマ！なんて言わないで……。

ちなみに作者3月1日に学校卒業です！進学で東京にいくよ！専門だけど！

ちなみにすむのは川崎多摩区あたり。そこら辺りに私は転がっています。

一人暮らしでも皆がいるから寂しくなんてないんだからああ！

番外後編 夢の終わりと疑問（前書き）

ちよつとグロイ表現あり・w・

## 番外後編 夢の終わりと疑問

### 番外後編 夢の終わりと疑問

体にあたる暖かな日光と髪をサラサラと揺らす風が吹く気持ちのいい午後に霧崎夫妻のカフェで過ごした聡介は、気分を切り替えて課題をこなすために自宅のPCの前でインスタントコーヒーを片手に画面に向かっていた。

眠くなるのを防ぐために買った安っぽいインスタントコーヒーをブラックで入れ、安っぽい苦味を感じながら聡介は片手でキーボードを打っていく。

しばらくしてコーヒーの入った白いマグカップをダークブラウンの机の隅に置くと、それからは両手の指を使ってキーボードをたたき、本格的に文字をうちこんでいく。

ただただひたすらに打っていくのだけではなく、時々内容を確認するように見返したり、ネットから参考となる様々な画像や論文を引っ張ってきながら課題を黙々と進めていく聡介。

カタツカタツカタツカタツと、指がキーボードを叩く小気味いい音が6畳ほどの静かな部屋の壁に小一時間ほど響いては消える。

「ふぁ……あぁぁ……やっと終わったー……」



あくびをしつつ、背もたれに体重を預けて大きく体を伸ばした聡介は、ギイツというイスのきしむ音を聞きながら、あくびのついでに出た涙を指先で軽くふき取って、マウスを動かして課題のウィンドウを閉じ、動画サイトのTOPページを開く。

右上に設置された検索ウィンドウにカーソルを持っていき、そこでクリックした聡介は最近ハマっている洋楽のアーティストの曲をスピーカーから流す。

マンションなので隣や上下の階の迷惑にならないように音量を絞ったテンポの速い音楽が室内を満たすと、聡介はキッチンに向かった。スピーカーから流れてくる音楽とあわせるように歌のサビの部分を口ずさみながら、IHのコンロの上にフライパンや鍋を用意し、他にも包丁やまな板を出していく。

冷蔵庫を開けて、玉ネギや、ジャガイモ、ニンジン、ニンニク、牛肉を取り出して、玉ネギを薄切りにし、ジャガイモとニンジンを一口大に、ニンニクを摩り下ろす。

フライパンにバターを溶かし、ニンニクを入れて香りが出てきたら玉ネギを入れてキャラメル色になるまで炒めつつ、鍋に油を引いて牛肉を塩コショウをかけて炒め、ニンジンやジャガイモ、炒めた玉ネギを入れて更に炒める。

ちょうど良くなってきたタイミングで鍋の中に水を投入し煮立たせ、アクをとってからローリエの葉を入れて30品ほど煮込む。

30分ほど煮込んだ後、一旦火をとめてカレールーを溶かして更に30分以上グツグツと煮込む。

おいしそうなカレーの匂いを嗅いで、早く食べたいといわんばかりグルグルルル……と唸りを上げるお腹をおさえつつ、更においしくさせるために空腹を我慢して30分近く煮込んでいく。

出来上がったばかりで、カレー独特のスパイシーな香りと湯気がゆらゆらと立ち上がる美味しそうなカレーに合わせるのは、このときのために買っておいたカレーライス用のお米『華麗舞』。

とある食品会社がカレーライスを更に美味しく食べるためにと開発したカレー用のお米で、表面はインド型品種の用に硬めで粘り気が少なく、内側は普通の日本型品種の柔らかさと弾力性を持ち、カレールーをかけると一粒一粒がルーと綺麗に絡み合いカレーが更に美味しく感じると言われている。

その『華麗舞』を大き目のカレー用のお皿に盛り付け、さきほど出来たばかりで未だに湯気を立ち上らせる美味しそうなカレーを『華麗舞』のそばにトロツと流し込む。

様々な食材の島が浮かぶ深い褐色のカレーの湖と、白銀に輝くご飯の丘の境界で混ざり合うカレーとご飯は、まるで恋人同士のようにしっとり絡みつき、カレーの湖に浮かぶ。

白銀の丘の向こうにそつと彩られた福神漬けも、単調な褐色と白の世界に鮮やかな赤色となつて彩を添えていて素晴らしい。

改心の出来に満足した聡介は、折りたたみ式の小さなガラステーブルの上にカレーの入った皿とスプーン、簡単なサラダ、それとレモン汁を少量加えて爽やかさを演出した水を乗せる。

テーブルの前に座り、このカレーのレシピを考えてくれた方や、このご飯を開発してくれた方々、食材を作ってくれた方々に感謝の意を示して手を合わせて「いただきます」と、聡介は声に出して言う。

「……………うまい……………」

ほろほろと解けてルウと絡み合うご飯をすくって口に入れた聡介は十分に味わった後、ため息をつくかのようにはうと息をついて、一言だけ口にした。

口の中で解けて完全にルウと絡まったご飯はしっかりとカレー本来の味を引き立てつつも、ちゃんと柔らかさと弾力があり、ご飯の存在を主張している。

カレーのために作られた『華麗舞』は、その名に恥じぬほどの役割をしっかりと果たしていた。

その後、夢中になって食べた聡介はおかわりに二杯目をつぎに行き、それをご飯の一粒も残さずに綺麗に完食した。

ご飯を完食した聡介は、直ぐにカレーの入っていた食器などを洗い、そのついでというわけではないが、シャワーを浴びて自分の体もすっかり綺麗に洗って、スウェット姿でPCの前に座っていた。

最近ハマってきたFPS First Person shooter系のゲームを立ち上げ、数十分間ほどゲームの中で出会った友人とともに熱中する。

しばらくして、ふと喉が渴いたことに気がついた聡介は、ハンドルネーム以外年齢も性別も知らぬ友人に敬語で飲み物を買いに仕かける旨を伝えると近くのコンビニへ向かうために家を出た。

少し大きな交差点を信号機に従って渡り、入ったコンビニでたまたま見かけた車や、バイク、ファッション、ミリタリー関連の雑誌を適当に流し読み、風呂に入っていたことも考えてスポーツドリンクと、小腹を満たすためにスナック菓子を掴んで会計を済ませる。

聡介は、歩くたびにカサカサと音を立てる白いコンビニ袋をぶら下げ、来た道を帰るために青になったばかりの横断歩道を渡り始める。そして、横断歩道の半分ほどまでにきた時に甲高いエンジンの音が聞こえてきた。

すぐに曲がり角から白煙を巻きながら慣性ドリフトをしてきた車は、カウンターを当てたままの凶暴なまでのスピードで、そのメタリックライトグリーンのボディを夜の闇に躍らせる。

カウンターを当てたままで減速も出来ずに交差点へ侵入した車は、横断歩道を3分の2ほど渡っていた聡介に逃げる余裕さえ与えずに体重62kg、年齢21歳の肉体を、軽々と上空へと吹き飛ばした。衝突した衝撃でバキバキになった体中の何十本の骨はいくつもの鋭い槍となって、柔らかな様々な内臓をその先端で抉り、切り裂き、貫いた。

その時点で上空に吹き飛ばされた自分の聡介の意識はブラックアウトしていたのだが、それでも容赦なく重力は聡介の体をその手に絡め取って地上へと引っ張り、ゴシヤツという鈍い音を立てて不時着し、更に体から骨が飛び出したり、脳を損傷させるなどして生命活動にトドメをさした。

聡介を跳ね飛ばした車は聡介を撥ね飛ばしたということからうまく曲がりきれず、歩道近くに植えられている植え込みや木、電話ボックスに衝突してようやく動きを止めた。

それからしばらくし、衝突の物音を聞いて住民が外に出てみて通報したのだろう警察が現場にやってきた。

「……………こりゃあ……………ひでえ……………。おい、もっと応援呼んでこい。こいつは即死だわ」

現場に駆けつけた二人組み警察官のうち、中年と呼んでいいぐらい年を重ねた警官のほうは苦い顔をし、もう一人の若い警官はすぐにその場から離れて近くの植え込みで膝を突いて胃の中の物を吐き出した。

それから聡介の死体はパトカーの中に積み重ねていたブルーシートで野次馬達の目から隠され、現場検証が始められた。

警察からの電話で聡介が事故に遭い、即死したと聞かされた両親はそんなことあるはずがないと、寝る寸前だったのにも関わらず、高速道路の制限速度を大幅に上回る勢いで聡介が担ぎ込まれた病院へと駆け込んだ。

見ないほうがいいですよという言葉も聞かずに、ところどころ血のシミがついた白い布を取ると、そこには聡介の顔は無かった。

聡介の顔は完全に潰れてしまい、もとの輪郭すらも崩れてすでに人の顔らしいものとはかけ離れていた。

それを見た瞬間に母親は悲鳴を上げ、あまりの光景に耐え切れなかったのかガクツと気を失った。

気を失った母親を支え、部屋の外の長いすに自分の上着をかけて横にさせた父親は、すぐに来た警察官からくわしい事情を聞いた。

警察官からの説明が終わり、どうしようもなく呆然とする父親の前に、加害者の父親が現れた。

加害者の父親が名乗りをあげる途中から煮えたぎるマグマのように怒りが噴出した聡介の父親は、胸倉を掴んで相手を殴り飛ばし、倒れた上に馬乗りになって怒鳴りながら殴り始めた。

相手の被害者も先に聡介の状態を聞いていたために殴られるのを覚悟していたのか、殴られて血が出ようと庇う素振りを全く見せなかった。

さきほどの呆然とした様子から一気に変わった聡介の父親の様子に

警察官は少しの間動けなかったが、すぐに我をとりもどすと聡介の父親に飛びついた。

警察官二人がかりで後ろから羽交い絞めにして、なおも相手を殴ろうと暴れる父親だったが、警察官が加害者の父親を急いで別の場所に連れて行くと、ようやく暴れるのを収めた。

警察も聡介の父親が気の毒に思えて何も言わないでいると、父親がふらふらと立ち上がったので身構えたが、加害者の父親が連れて行かれたほうとは別の方向に歩いていった。

「聡介……今頃お前は天国にでもいって、好きな化学の勉強でもしているのかな……？天国なら幸せな環境で何不自由なくできそうではないなあ。そういえば聡介が死んでから色々な人が来たよ。たしか南原悠斗君だったかな？あの子は色々な薬草だったかな……？とにかく色々な種類の薬草を持ってきてくれたよ。なんでも、天国で怪我したらこれで治せばいいんだってさ。今でもたまに線香をあげにきてくれるよ。いい友達を持ったな、聡介。」

聡介の父親が示す目線の先には少し日数がたってしなっとしている様々な薬草がおいてあった。

「次に来たのはどこだったかのカフェの夫婦だったよ。聞いたぞ、聡介。交通事故で困ってたその夫婦を助けたんだって？……その夫

婦が泣きながら言ってくれたよ。私たちは交通事故で聡介君に助けてもらったのに、聡介君が交通事故で殺されるなんて神様はひどすぎる。なんで聡介が……グッ……ッ……殺されなきゃいけなかったんだって……。本当に……。そう思うよ……。聡介が死ぬ必要なんて無かったんだ……。父さんが……。父さんができれば……。代わってやりたかったのに……。！」

霧崎夫妻の言葉を思い出している途中から溢れ出した涙はついに決壊して流れ出し、机に落ちた涙が弾けて飛び散り、霧崎夫妻が持ってきてくれた高級な紅茶と珈琲豆の箱にかかった。

しばらく涙が止まらなかった聡介の父親だったのか、ひとしきり涙を流すと落ち着いたのか、近くに置いておいたタオルで涙を拭いた。

そのタオルは、聡介の遺影の前で泣いてしまってもすぐに涙を拭けるようにと聡介の母親が用意したものだった。

「ああ……。みつともないとこをまた見せてしまったな……。聡介の前にきてから、父さんは最近泣いてばかりだ。親を泣かせやがって仕方の無い奴だな……。ああそういえば聡介のこの教授だったかな？灰村さんって方が刀を持ってきてくださったってなあ。魔除けとしてちゃんとお払いしてもらったものらしいぞ。本当はいれていいのか分からないけど、骨壺と一緒に墓の中に入れておいたよ。わざわざ急ぎで作ってもらったものらしいから大事にするんだぞ」

そういった聡介の父親は、遺影の前に写真に写した小刀をかざして、聡介によく見えるようになるのか何枚かの写真を順番に持ち替えてい



く。

「それでな。あれから暫くたってなあ。ようやく母さんも元の調子が戻ってきたよ。お前が死んでからしばらく母さんは何をやってまぼうつとして危なっかかったんだけど……ようやく元気になってきたよ。でも、夜中にお前の遺影の前で酒を飲んで泣きながら語りかけているのを見るとまだもう少しかかるみたいだ。そういえば、なんで元気になったのか聞いたんだけどな。お前の夢を見たんだってさ、なんだかどこかの田舎で鍛冶屋の真似事をしてたっていったよ。化学が好きな聡介がやるもんかなあ？って思ってたけど、刀をもってこられたぐらいだし、意外にそういうことも面白がってやってそうだと思うって母さんと久しぶりに笑えたかな」

「なあ聡介……。いったいお前はどこで何をしているんだ？元気にやっているか？辛かったら帰ってこい、霊だろうと何だろうと話をきいてやるうじゃないか」

砂漠の向こうから昇ってきた太陽の日差しで窓から差し込み目覚めた聡介は、自分の目元に違和感を覚えて指先を当ててみた。

「涙……？」

不思議そうにつぶやくと、さきほどまで見ていた夢の内容が一気に

鮮明に脳裏に蘇った。

最後のシーンを思い出した聡介の目からはまた新たな涙が頬を伝って落ち、落ちた涙は工房の硬い床の染みとなった。

締め切った工房の中の薄暗さに、聡介はまるで冷たく暗い監獄のような印象を覚え、自分がこの世界に閉じ込められてしまったように感じてふいに不安になった。

しかし、そんなことはない！と強く思って頭を横に振って目を開けると、そこは普通の、鍛冶で使う工房の面影を残している部屋だった。

不安が消えて安心した聡介だが、ふと違和感を感じてベッドの上で動きを止める。

違和感がなんだったか。

それをじっと考えているとふとあることに思いついた。

「なんで死んだあとのことを覚えているんだろう？」

それは聡介が死んだあとのことにも関わらず、聡介の中で夢としてハッキリとした映像として残っていたからだ。

普通に考えれば死んだ時に記憶は途切れて、そのあとの自分が死んでからの周りの反応などが分かるわけではないのだ。

それなのになぜそれが分かるのか？

無理やりに考えれば聡介が作り出した本当の意味で夢と考えられなくも無いが、それだと聡介の知らない警察官や加害者の父親が出てきたことに説明がつかない。

夢とは基本的に過去の記憶や体験などをもとにして構成される自分に都合のいいものというのがほとんどだからだ。

父親を泣かせるということや、悲しませるということが都合のいいものかと問われれば断じて否である。

聡介は何か変なものに触れたかのように思いながらも、自分の想像か何かなのだと納得してベッドから身を起こした。

## 番外後編 夢の終わりと疑問（後書き）

5863文字です。今回は前後編ということで早く更新してみました。

この後編では夢が覚めるまでとさめてからのちよつとですね。はい、つなげました。1話目の話とリンクさせましたよー。

ちよつと意外でしたよね！？意外じゃなかったらごめんなさい！でも書いたった！

んで、親父さんパートですん。これね。皆はそうじゃなかったかもしれませんが、書き手として思い入れがあるぶん、号泣しながら書いてました。

自分の作品で泣くなんて自意識過剰みたいですが、泣いちゃった；w；

（；；；）ブワッじゃなくてドバツて感じで……。家族物よわいのよ……。

んで、最後になりましたが、カレーの話です。

このカレーですがね。つくったことがあります、すごい美味しいです。

乗せていいのか分からないので削除依頼がきたら消しますが、URLをば……。

<http://cookpad.com/recipe/507299>

んで、ご飯のほうは実際に『華麗舞』でググれば出てきます。これ本当にカレーに合ってる美味いです、カレーマニア必見。

もうね。感想じゃなくてもカレーの話でもかまいません。

カレー談義しようぜ！！！！

では、また次回で会えることを祈って。

P・S 無事卒業しました。皆様のおかげです。

## 028 騎士団と再開

028 騎士団と再開

「ソウスケ！おい、起きろ！すぐに出てくるんだ！王都警備隊の騎士がえらい剣幕で店を開けると言ってきたぞ！一体何したんだ！？」

この日のソウスケの朝は太陽が昇るよりも少々早く、まだ空に薄暗さが残っている時間に、工房の扉をジョージが何度も強くドンドンと叩く音で飛び起きた。

飛び起きたといっても、体はまだうまく動かず、意識だけが先行してしまい、ベッドから降りた時にふらついて工房の壁に肩を数回ぶつけるが、それでも聡介は何事かと焦って工房の扉を急いで開ける。

「ああソウスケ、良かった、起きたか！さっき俺たちも下で扉を叩く音と声を聞いて二階から飛び降りてきたんだが、警備隊の騎士が何か急ぎの用事らしい。早く出たほうがいいぞ」

ジョージの言葉を聞いて店の入り口の扉の方を見ると、全身を鈍い鉄の光を放つ鎧の装備で固めた王都警備隊の騎士5人ほどが早く開けるとばかりに店内を見てきていた。

聡介はすぐに、腰のベルト通しにさげたアンティーク調のキーリン

グから店の雇用の鍵を取り出して、店の出入り口の扉を開ける。

「早朝に失礼する。私は王都警備隊所属のベルナルド・バルベリーニだ。街外れの峠で襲われた商隊の荷物が、賊によってこの店に持ち込まれたとの情報があった。大量の鉱石だそうだ。心当たりはあるか？」

「……はい、鉱石なら確かに昼間に大量に持ち込まれて買い取りました」

「よし、確認させてもらおう」

リーダーらしいベルナルドが首だけを後ろに振り向かせて、後ろに控えていた騎士を呼ぶのを見た聡介は、今日片付けようと思い、工房入り口近くに積んでいた鉱石箱4つを店内に並べる。

騎士たちがそれぞれに木箱を開けて中身を確認し始めた様子を見て、聡介が近くの壁に背を預けていると、ジョージがスツと近づいてきた。

「なんだか最近賊絡みの事件ばかりだなあ。ソウスケもしかしてお前呪われているんじゃないか？」

「……いや、洒落にならないんだけど……」

「悪い悪い、別にそういうつもりじゃねえんだ。ただ最近ソウスケのまわりは厄介なことが少々多すぎる気がするのには確かだ。商売だ

から仕方ないと思うが、明らかに怪しい奴とは係わり合いになるなよ」

ジョージの一言でがつくりと肩を落とした聡介を見たジョージは、その様子に苦笑を顔に浮かべつつ、冗談だということを口にする。

「うん、わかった。気をつけるよ」

本当に気をつけなければ、またガーランドの街のときのようなことに巻き込まれかねないと思った聡介は、少し気を引き締めた。

「店主、間違いないだろう。量、内容物、木箱の形状からしてまず間違いなく襲われた小隊の物だ。これらを賊から買い取ってしまった店主には悪いが、盗品は発見され次第元の持ち主に返されることになっている。また、盗品と知った上での買い取り、及び盗品の使用は禁止されており、厳しい処分が待っている。確認のために聞いておくが、盗品ということは一切知らなかった上での買い取りだったのだな？」

「はい、盗品ということとは全く知りませんでした。盗品ということを知らなかったとはいえ、申し訳ありませんでした」

「……よし、嘘は無さそうだな。ではこれらは我らが持ち主に返還しておくので、今後は気をつけるように」

聡介の返答を聞いて1、2秒じつと聡介の目を覗き込んだベルナル



ドは、聡介の目が揺らがないことを見た上で、嘘は無いと判断を下した。

「ああ、そうだ。すっかり聞き忘れていたな。この店は最近できたばかりらしいじゃないか、今後のためにも名前を教えてくださいませんか？」

「そうですね、名乗られたのに返さなくて失礼いたしました。私の名前はソウスケ・カミオです。少し変わった名ですが……」

「さて、ソウスケ・カミオ？もしかやガーランドにいたあのソウスケ・カミオか？」

聡介が自分の名前を名乗ると、その先を防ぐようにベルナルドが言葉挟んだ。

「はい、確かにガーランドには数日前までいましたが……」

「ああやはりそうか！私だ、ヴィリフィエラを売ってもらった元ガーランド守備隊長だ！いや、まさかこちらに移転しているとは思わなかったな。……ああお前たちは先に行ってくれ、私はもうしばらく用事がある」

立ち止まってベルナルドを待っている4人の他の騎士に気がついたベルナルドは、荷物を持って先に行くようにと伝えてこの場に残った。

そのついでとばかりに、用が済んだと思ったのかジョージ達も話の邪魔をしないようにと配慮したのか、最後にジッと観察して危険が無いのを確認して二階へと引き上げていった。

「君にこの剣を売ってもらってから運が向いてきてな。ちょうどガールランドの周囲の森で演習をしていた時に、滅多に出ないんだが手負いのオーガが出たことがあったのだ」

「オーガって……よく無事でいられたね」

ちなみに『オーガ（鬼）』とは人間の1.5倍ほどの身長で、強靱な骨格を有し、極めて凶暴で残忍な性格で人の生肉すら食べると言われる危険な魔物だ。

強靱な骨格を持って人間サイズの獲物であれば、一撃でそれを潰すほどの怪力を持つ反面、知性や賢さといったものがほとんど無く倒すのは注意さえすればなんとか出きるレベルではある。

が、それは装備が揃っていればの話であり、生半可な武器だと突き刺さってしまうば、筋肉を膨張させられて抜けなくなり、武器事態を折られてしまうこともしばしばだ。

「もちろん手負いと言っても相手は腐ってもオーガだ。けが人はそれほど出なかったのだが、武器がちょうど演習用で討伐用の物をあまり持ってきていなかったためにかなり折られてしまっただけ。その時にこの剣を使って訓練をしていた私が何とかオーガを倒すことが

出来、その功績のおかげで昇進することが出来たというわけだ」

「なるほど、それで王都に異動となったんですね」

「そういうことだ。いや、しかし君には感謝している。この剣が無ければこうやってココに今いることも無かつただろうからな。君には感謝してもしきれないくらいだ、おかげで妻にも良い暮らしをさせることが出来ている」

「いえいえいえ！それはベルナルドさんの力があつたからですよ。私はただの剣を売っただけに過ぎませんから。結局はその剣を扱う人の技量が優れていたというだけのことです」

感謝の気持ちを真っ直ぐにぶつけられた聡介は少々焦りながら謙遜して言葉を返した。

「そう謙遜するな。君は良い武器をつくったんだからな。……これはお礼の気持ちだ。盗品だと渡したお金は返ってこないからこれを足しにするといい」

言葉の途中からゴソゴソと鎧の内側を探っていたベルナルドは、言葉を言い終わると同時に紫の布に包まれたモノを鎧の中から取り出して聡介の手の上に乗せてきた。

「いや……流石にここまでしてもらうのは……」

布自体はそれなりに上等そうなものだが、中に入っている何かが硬くゴツゴツとした感触だったために気になった聡介は、失礼だとは思いつつも包みを開き、中に入っていたものを見て驚いた。

布の中に入っていたのは、南国の海を思わせる明るく純粋なクリアブルーの輝きを放つ宝石で、研磨面の寸法や角度の絶妙な関係によって生み出される白色光の内外部の反射・スペクトルカラーの反射・動きによって生じる反射のどれをとっても、宝石の持つ魅力を最大限に引き出している。

宝石にさほど興味の無かった聡介にも一目で分かるほどの一品だったので、聡介はこれほどのものを受け取るわけにはいかないと断つて断ろうとした。

「遠慮するな。うちの妻は宝石を着飾るタイプではないし、私も金銭に困っているわけではない。それに昔世話をした古物商がお礼にとくれただけのモノだ。そうとくれば私が世話になった君に渡すのが正しい騎士道だと思わないか？ここは騎士の私の顔を立てるという意味で受け取っておいてくれ」

流石にそこまで言われて断り続けるというのは逆に失礼にあたると思った聡介は、今度はありがたくその紫の布に包まれた宝石を受け取ることにした。

その様子を見て満足したのか、ベルナルドはそろそろお暇するよと言って来た道をゆっくりと引き返していった。

ベルナルドが帰り、聡介が一息ついて宝石をしげしげと見てみると、次第に朝の澄んだ空気と、だんだんと頭を見せ始めた太陽の眩しい光が店内に入ってきた。

まだ少しか眠気が残っている聡介だったが、太陽の光を浴びて体を伸ばしていると体内時計が調整されていき、伸ばし終わって深呼吸をしたときにはすっかりと眠気が吹き飛んでいた。

しかし、眠気が吹き飛んだからといってまだまだ早朝であることに変わりはない、市場も早すぎて開いていない。

よしんば開いていたとしても、買い付けや飲食店などの大口の注文ばかりなので行ってもすることが無いのだ。

外に出たとしてもすることも無く、店内の整理や朝食作りはガチャガチャとなってしまう迷惑になると思った聡介はとりあえず工房の中に戻った。

工房の中もそれほど物が置いてあるわけでもなく、目に付くものといえば炉と墨と鉄屑と雑多な生活用品ぐらいなので自然とやることは決まってしまう。

工房の中なら多少音が響いたとしても外までそうそう聞こえないので、聡介は暇つぶしがてらに補充用の鉄剣や、鉄とアダマントを混ぜた『アイアンタイト』の剣、ダマスカス鋼の剣を適当に練成していた。

相変わらず練成時にはバチバチと電気の弾ける大きな音が工房の中に響くが、外にもれてはいない。

ちなみに現時点での店内に置かれている販売 possible の剣の性能を比べると

アダマントイト＞ダマスカス鋼    アイアンタイト＞鉄剣となっている。

ダマスカス鋼とアイアンタイトでは性能では    となっているが、実際に販売する値段としてはかなり大きく差がある。

ダマスカス鋼は性能自体もさることながら、その独特の模様も価値を持ったため、何の装飾も無くただの薄緑色のアイアンタイトよりも値段があがっているのだ。

しかし、アイアンタイトには装飾も何もない剣としての剣のためにコストパフォーマンスに優れるという一面もある。

僅差でダマスカス鋼製の剣には負けるものの、性能自体はダマスカス鋼に迫るもので金銭に余裕のない冒険者達には比較的安価で高パフォーマンスの剣となっている。

それではダマスカス鋼製の剣が売れにくくなるのではと思いかねないが、こちらにもしっかりと狙いはある。

ダマスカス鋼製の剣は、主に中小規模の貴族、または騎士団に所属するものなど身分階級を重視する者達用となっている。

剣に中々に見るような模様でなく、それでいて一つとして同じ模様

の無いダマスカス鋼で、値段も安すぎずそれなりに高級なものとあれば例え使われなくとも一種のステータスという面でも売れる可能性もある。

そうして、アダマタイトを創る時は時に慎重になりながらも比較的早いペースでそれらの剣を完成させていった。

あまり数を作りすぎてもいけないので適当なところでそれを切り上げた聡介は、工房の扉を開けて店内に戻る。

太陽は完全に顔を出し、まだ本調子ではないものの砂漠にサンサンと日光を降り注がせている。

午後は結構暑くなりそうだと思った聡介は、練成などをしていたために、そろそろ鳴き出すだろう腹の虫を沈めるために朝食作りに取り掛かった。

4547文字です。

お久しぶりです、皆様。地震大変でしたね……。

私の宮城の友人もあわやというところでなんとか命拾いをしたようです。

私といえば、地震のために神奈川への引越しが伸びたぐらいで、岡山県で何も出来ずにすごしていました。無力さを痛感しました……。

友人が危険に、いや東北の人たちの命の灯火が次々と消えていく中で、私は安全な家の中でTV越しにその中継を見るだけでした。

無性に申し訳なくなり、1000円札をサイフに突っ込み、ちかくの大型百貨店に募金に行きました。

それで、終わりです。自分は何も出来なくてただ他人任せで……。私にできることといえばこの小説を書いて、呼んでくれる人に一時の楽しさを覚えてもらうぐらいです。

この震災でなくなった方にご冥福を、これから生きていく人々が幸せになれるように祈るばかりです。

今見てくれているあなたが無事でなによりです。



## 029 騎士と賊

### 029 騎士と賊

朝食の、黄身が半熟でトロトロのベーコンエッグとふわふわのパンを残さずキレイに胃袋の中に収めた聡介は、オープンに備えて店内の掃除を軽くしておき、武器などに埃が乗っていないことを確認すると、店の出入り口の扉の鍵を開けてOpenの札を掲げた。

包丁の件が成功し、中々にいい評価のある聡介の店だが、開店と同時に人が押しかけるようなほどの知名度はなく、結果として開店して1時間近くも聡介カウンターでぼうつとしている。

聡介と武器しかない店の中へと入ってくるのは朝の気持ちの良い日差しと乾いた風と少々砂埃だけだ。

窓から入り込んできた日光が心地よく、朝サッパリと起きたにも関わらず眠くなってくるのに耐えていると、不意に扉に付けた鈴が力ランコロンと鳴り響いた。

鈴の軽やかな音で夢うつつから目覚めた聡介は、カウンターに肘を着いて支えていた頭を起こして客の応対をしようとする。

しかし、そのときには既に客の男は聡介の目の前まで歩いて来ており、その客のほうに先に聡介に話しかけてきた。

「よう、ボウズ。店主いるか？」

「店主は私ですよ。店主のソウスケです」

葉巻を口に咥えていかにもハードボイルドっぽい雰囲気を滲ませる男は、店番の小僧が何かと勘違いしたのか聡介のことをボウズと呼び、店主がいるかどうかを聞いてきた。

聡介は、元の世界でも東洋人は童顔に見られることが多いと知ってはいたが、自分はボウズと間違われるほどに童顔なのだろうかと一瞬気落ちするが、そのことは表に出さないようにして返答する。

「おう、アンタがか。すまねえな。俺あ集団犯罪調査部のアルバートだ。よろしく」

そういったアルバートが差し出して来た手を握り返して握手すると、アルバートの手のひらが硬くゴツゴツとしていて大きいのが良く分かる。

集団犯罪調査部という肩書きらしいが、聡介はアルバートがどうにも一人で直接乗り込んで犯人を殴り飛ばしていくような人物に感じた

「朝早くに騎士団の連中が来ただろうから、不思議に思っているだろう。騎士の連中はいわば、実行部隊。俺は調査専門だ。実際に切りあつたりするわけじゃない。それで、早速だが……。賊の特徴だ。覚えている限り全部話してくれ」

「え、ええ。……直接交渉したのはいかにも好青年といった感じの男性でした。年齢18前後で背は私と同じくらい、髪の色は明るい茶色、やせているわけでも太っているわけでも無くて、普通の体系でしたよ」

「なるほどな……。この辺りの人間の特徴だ。うまく誤魔化す奴だ、新参の賊」ではないだろうな。他に特徴らしい特徴は覚えてないか？ 例えば表情とか」

特徴らしい特徴と聞かれて直ぐに浮かんでこなかった聡介は、腕を組んでうーんと思い出そうとしてとあることを思い出した。

「あつ、そういえば。その人ですけど、最初から最後まで終始ニコニコして笑顔を絶やさない人でしたよ」

「やはりな……。また『笑顔』か……。分かった。もういい……。それと一つ、忠告しておくが……。首を突っ込むなよ、まだ死にたくないならな。賊とのやり取りってのは命のやり取りだ」

笑顔という特徴を聞いたアルバートは何かに思い当たったのか、渋い顔をして一人納得するとくるりと身を翻して出口に向かう。

出口に向かう途中でアルバートがふと足を止めたが、アルバートは肩越しに目線だけをやり、忠告の言葉を聡介に伝えると、出入り口の鈴をカランコロンと鳴らせて外に出て行った。

アルバートが去っていった店内には、アルバートの吸っていた葉巻

のスパイシーで複雑な香りと、吐き出した煙が僅かに漂っていた。

アルバートが帰ってからしばらくすると、次第に店の中の客の数が増えていった。

しかし、大半が体格の良さそうな男たちが数人のグループで訪れていたり、冒険者ではなさそうな、街の騎士用の少し上等な服を着ていたり、明らかに冒険者と違う装いだった。

そのわりには意外と買っていく人がそれほどいなかったので、聡介は悪いことだとは思ったが、気になって男たちの話に耳を傾けているとその訳がようやく分かってきた。

男たちの話を簡単にまとめると『ベルナルドが最近いい実績を出しているのは武器のおかげだ』ということだった

しかし、それは最近この街に異動してきたベルナルドの存在によって立場が揺らぎそうになる者達の陰口が大半で、性格のいいベルナルドを慕う下の者達からは、ただ単に『ベルナルドが持っている武器はとてもいいものだ』という風にしかとらえられていない。

現に、階級が高そうな上等な服を着ている者達は少々高めの剣でも惜しまずに買っていていき、逆に階級の低そうな者達は、ここで買ったのかという憧れによって来ただけなのか、買わない、もしくは安目に設定されていて手の出しやすい質の良い鉄剣を買っていくだけだ。

ベルナルドの評価はこちらの魔物討伐などによって着実に上がっているらしく、いわゆる有望株なのでそういう状態になっているらしい。

なるほどと納得した聡介は、せっかく多くのお客さんが来ているのだからと、ガーランドの町でやったような鉄などを切るといったデモンストレーションを披露して見せた。

そのデモンストレーションによる効果は大きく、中にはお金がよほど余っているのか、その場でアダマントイトで作られた剣を買っていくような猛者も、片手で数えられるほどだがいた。

しばらくウィンドウショッピングや、真剣に購入を考える人で盛況していたが、夕方にもなると、夜間の仕事が入っている兵士も多くなるのか、次第に客足は遠のいていった。

日が暮れ始めて、空の色も紺色に染まっていくと店内に残っている客もまばらになり、だんだんと店の外へと姿を消していった。

客の最後の一人が出て行くのをカウンターからお疲れ気味の聡介が見送っていると、その最後の客とすれ違うようにして一人の男が入ってきた。

「店主さん、今日は大盛況でしたね。昼間にここを通りがかってビックリしましたよ。ここで購入したらいい人に聞いてみると切れ味がものすごく良いと聞きましたね。」

そついいながら、男は風に巻き上げられて服に乗っかっていた砂を

落としながら店内に入ってきた。

「あの……すいませんが、どちらさまでしょうか？」

つい最近賊に騙されたことと、客が居なくなるのを見計らって現れたようなタイミングの男に聡介は警戒しながら聞く。

「ああ、申し訳ない。名乗りおくれたね。私はここから山を2つ越えた所の街の商人だよ。ほら、これが商業ギルドのカードだ」

くたびれたショルダーバックからカードを取り出した商人の男は、名前も印も押してある正規のギルドカードを見せてきた。

今度は騙されないぞとばかりに聡介はしつかりそのカードを見たが、怪しいところはどこにもなく、とりあえずは信用することにした。

「アッハッハ、そんなに穴が開くほど見なくても本物だよ！まあ賊に騙されたなんてことがあったあとならそれも当然かな？」

「なぜ、そのことを？」

「ん？知らないのかい？そういうことがあると直ぐに商業ギルドの中の掲示板に張り出されるんだ。賊は僕たち商人にとっては天敵だからね」

山を越えてまで仕入れにくるような商人はそういう情報に敏感なんだなあと思った聡介は、商人の男の言葉に耳を傾ける。

「君も商業ギルドにはちよくちよく顔を出したほうが良いよ。こういう注意情報だけじゃなくて、組合ごとの連絡事項みたいなものたまに張り出されるからね。……おっと、もう日も暮れかけているのに余計に話をしてしまったね。それじゃあ早速本題にはいるうか！」

「実は僕は明日この街を出発してさっき話した街に戻るつもりなんだけど、あと一品ぐらいがどうにも決まらなくてねえ。それで今日はあてもなく街をぶらぶらと歩いて何か良い品が無いか見ていたんだけど、ちょうどこの店の前を通りがかったら随分盛況しているのが見えてね。その後も色々見て回ったんだけど、気になって来たというわけなんだ。僕も大型とはいえ馬車で移動するからたくさんはもっていけない。そこで、どうだろう？ここにアイアンタイトの剣っていうのを15本ほどうつてくれないかな？もちろん、向こうでもちゃんと宣伝とかはする。だから……こっちにも利益が出るようにもうちょっと安い値段でうつてくれないかな？」

商人の男は聡介が口を挟めないように、流れるように自然にスラスラと言葉をつないでいき、値段交渉まで一気に話をもっていく。

一気に値段交渉までもっていかれた聡介は、商売が専門というわけではないのでその迫力に圧倒されて知らず知らずのうちに首を縦にふっていた。

「ありがとう！助かったよ、これで馬車もいっぱいになったし良い商売が出来そうだよ！それで値段のことなんだけど……」

そして、値段交渉は終始商人の男のペースで進んでいき、聡介は流されるままだった。

「うーん、流されるままだったけど、どうせ元手もそんなにかかってないし……。まあいっか。商業ギルドのことも教えてもらったから情報料ってことで……」

腕を組んで、これでよかったのだろうかと考えている聡介だが、もう済んだことを気にしていても仕方がないとして情報料ということで納得することにした。

商人の男との取引から四日が立ち、聡介が商業ギルドへと何か情報がないかと確認に訪れてみると、商業用のルートなどの情報をまとめた茶色の簡素な掲示板の中央に、とある街への通行を禁じる旨が書かれた紙が張ってあった。

それは四日前に聡介が取引をした時に、商人の男が戻ると言っていた街へのルートだった。

紙自体には『盗賊出没のため討伐までの通行を禁ず』と書かれてい



るだけで詳しい情報などはかかれていない。

「ん？君この街へ行きたいのかい？今はやめといたほうがいい。なんでもやたら強い賊がでたらしいぞ。ちよつと偵察がてら様子を見に行つた騎士達が瀕死の状態でかえつてきたらしい。今はもつと実力がある部隊を編成しているらしいから数日の我慢さ」

張り紙を見ている聡介に、隣にいた日に焼けた色黒の大柄のお兄さんが親切に教えてくれる。

しかし、そんなことよりも聡介は気にかかることがあり、そのお兄さんに親切ついでにもう少し教えてもらうことにした。

「すみません。その話もう少し詳しくおしえてもらえませんか？」

「え？ああ、まあいいが俺も聞いた話だからハッキリとした話じゃないぞ。えゝつと、確か賊が出たつて情報が出たのは3日前だったか。たまたまその日にこのルートを通る人が居たらしいんだが、その人が街道脇にボロボロになった馬車と血だるまの商人風の男を発見したらしい。その人は急いでこの街まで戻つて報告して、報告を受けた騎士3人が偵察と殲滅を兼ねて数時間後に出発したんだが、その騎士たちも賊と出くわして返り討ちにされたんだとさ」

「ああそうそう！その騎士の中で2人が瀕死の重傷でようやく帰つてきて言つた言葉が、剣が切られた！だったんだとさ。変な話だろう？『剣が折れた』なら分かるが、『剣が切られた』なんだからな。その報告を受けた他の騎士たちも変に思つて何度か聞き返したらし

いんだが、その二人が言葉を変えないんだ。それでその二人の持ってた荷物を調べていると、なんと鎧がすっぱりと切られていた部分があったらしいんだ！それで今はその二人の言葉も信じられることになって、部隊はその対策に忙しいんだとさ」

3日前という言葉を聴き、4日前に取引をした商人の男の顔を思い出した聡介はいやな予感がして、もっと詳しい情報を聞こうとする。

「3日前……。すみませんが、その殺された商人の男の特徴ってわかりますか？」

「いやぁ……。俺も聞いたただだから、そこまで詳しいことは知らないなあ。もし何か気になることがあるんだったら、ここから歩いてすぐのところにある騎士の詰め所にも行ってきたほうがいいぞ」

「そうですか……。ありがとうございます！」

お兄さんに軽く頭を下げ、感謝の言葉を伝えた聡介は、早い歩調で騎士の詰め所へと向かっていった。

「???なんか関係でもあったのか？」

聡介に賊の情報を教えてあげた親切な色黒のお兄さんはその場で首をかしげるのだった。

## 029 騎士と賊（後書き）

4922文字です。入学式이었습니다。

地震の影響で引越しの日も大幅にずれましたが、なんとか間に合いました。

ようやく落ち着いてきたので、更新です・w・

一人暮らしって大変ですね。毎日やることがあって、親にだけお世話になっていたか痛感いたします。

『大人になったら親を尊敬するようになる』っていうのはこういうことに気づくからなんでしょうね。

これからは一人ですが、がんばっていきます。

さて、学校のほうですが何事も問題無くいつています。先日は10人ほどでラーメンを食べに行ったりゲーセンにいたりして親睦を深めました。

皆さん思ったよりも気さくで、これからの学校生活が楽しみです。留学生の方とも仲良くなれたので、異文化交流して見識を深めたいと思います。

もしかしたら、いつかこの作品も大幅に改良されて、商品化ということも0%ではありません。

そのときには、感想などで私をこれまで支えてくれた皆さんへ感謝の気持ちを示したいと思います。

なぜか完結のような感じのあとがきになりましたが、完結ではありません。

これからも不定期更新ではありますが、よろしく願いたします。

## 030 宰相と黒い考え

### 030 宰相と黒い考え

騎士の詰所へと急ぐ聡介の歩調は早歩きから小走りといえるぐらいに速まっていった。

足を高く上げずにザツザツと砂の地面を進んでいく聡介の足で、いくらかの砂が中に舞い上がり、近くを歩いていた主婦らしき人が眉を潜めるが聡介はそんなことには気付かずひたすら詰所へと急ぐ。

賊に襲われて殺されたという商人の男というのが、数日前に取引したばかりの男かもしれないという疑念は、聡介の中でいつのまにか確信へと変わりつつあった

直感的にそう感じたのにも加え、ここ最近賊がらみの事件に巻き込まれることが多いというのもその理由の一つだった。

事実が確定したわけではないが、もし自分の思っている通りだとしたらどうしよう？とふと思った聡介の足は唐突に止まった。

そうだとしたら、自分はどうするのだ？責任を感じて賊を捕らえに単身賊のアジトに乗り込みに行くのか？それとも、自分には何も関係ないとしてこのまま見過ごすのか？

このまま見過ごしたほうが自分は安全なまま過ごせると一瞬思った聡介だが、そこで聡介は自分の作った武器によって罪のない行商人が、討伐に行った騎士の人が殺されるということを思い出した。

アダマントタイトの剣を渡したわけではなく、それなりに劣化のしやすいアイアンタイトの方を商人に渡したとはいえ、それでもその性能はただの鉄剣よりも数段上の物で、しっかりとした技を持っていれば、鉄の剣を切ることも不可能ではない。

それに、鉄の剣が切られたという噂が出ているということは、それだけ優れた技量を持つものが賊ににいるということで、恐らく質のいい武器や高度な魔法の技術をそろえている精鋭の騎士達といえども苦戦するのは間違いないだろう。

となれば、聡介が作った剣によって更に多くの人達が賊の手で傷つけられるということになりかねない。

そんなことは到底許せるものではないと思い直した聡介は、今まで受け身ばかりで事態が好転しなかったため、自分から攻めてみようと思いついた。

決意を固めた聡介が急ぎ足で自分の店へと戻り、サイフとバッグを工房の中の自分用のシングルベッドの上に放り投げたところで、店内から来客を知らせるベルの音が軽やかに響いてきた。

ジョージ達3人に早く先ほどのことを伝えて、対策をとるためのアドバイスや協力を仰ぐと考えていた聡介は、店の表示を『close』に切り替えてなかったことでその動きを止められた。

「すみません、ちょっとこれから所用で……」

工房の扉を開けながら言葉を発していた聡介だが、客の姿を見てその動きがまたも止まった。

「われらは騎士団の者だ。宰相閣下が盗賊事件のことでお呼びだ。至急用意してくるのだ。なお、武器の携帯は道中は許可するが、城内での武器の携行は不可のため、その間は我らがあずかせてもらう」

全身を白銀の甲冑で固められた、まさに『騎士』といえる格好の騎士は、聡介に一方的に用件を伝え、早く用意して来いという目で聡介のことを見てきた。

騎士達が武器も携行していることからして、盗賊の事件で何か疑いを持たれているのだらうと思った聡介は、分かりましたと短く答えて、変に興味をもたれないようにアイアンタイト製の剣の方を腰に差した。

聡介が出てきたのを見た騎士達2人は、聡介を前後で軽く挟むような位置をとると、案内を始めた。

案内を始めたといっても、町の中心部にそびえる王城へと向かうだけなので、メインストリートに出て後は一直線に進むだけだ。

「剣は我方で預かるようにと言われている。これが宰相閣下の許可証だ」

数分して王城の門へとたどり着いた聡介は、門のところの警備員に剣を預けて通り過ぎたところで、後ろに付いていた騎士は聡介が離れたのを確認してから許可証らしき模様が入った札を警備員に見せて聡介の剣を受け取った。

やはり、普通の剣を持つてくるようにして正解だったなあと思った聡介は、そのやりとりを聞きながら王城の中の宰相が待つ部屋へと案内されていった。

宰相がいる部屋に案内され、部屋の中に入った聡介の目の前には、執務用の机に座って数枚の用紙に書き込みをしている宰相の姿だった。

聡介が入ってきたことに気付いた宰相はキリのいいところまで文章を書きあげてから、その顔を聡介に向ける。

宰相の表情はニコニコとしていて人が好きそうに見えるが、銀で縁取られた眼鏡の奥から聡介を見る細い目だけは笑っているようには見えない。

「さて、まずは自己紹介をするでしょうか。私の名前はクラックス・ドウガチ・クロスボーン。この国の宰相だ。ああ。君の名前は

よく聞いているよ。ソウスケ・カミオ、最近この街に引っ越してきたばかりの腕利きの鍛冶氏。私の知り合いや、騎士団の中にも君のところの剣がいいといっている者がいるぐらいだからね」

「そこまでいっていただけるとは光栄です」

一応友好的に自己紹介から入ると宰相は言ったが、聡介にあまりしやべらせようとしないということは、自分がこの話し合いの主導権を握ろうという意思が垣間見える。

予想以上に面倒くさそうな事態になってきたぞと思い始めた聡介は宰相の話に注意して耳を傾けることにした。

「しかし、まずいことになったのだよ。情報源は明かすことは出来ないが、君がある商人の男に武器を売り、それが盗賊団によって奪われてしまったということが分かってね。ああもちろん故意に売ったわけではなく、偶然だと信じてはいるよ。しかし、過程はどうあれ、結果として盗賊達に武器を渡ってしまったというのは非常にまずい事態だ。これがただの武器商人が普通の武器を奪われたただであれば、騎士団を派遣し、即座に盗賊達を潰して終わりだったのだが、盗賊達の持つ武器の質がいいだけに中々そうもいかない。恥ずかしい話だが、向こうにも相当の腕利きが多数紛れ込んでいるらしく、騎士団の武器が何度も壊されているのだ。相手の人数も通常の盗賊団よりも多く、アジトまで作っているのです、このままでは無為に武器の損失と騎士団の消耗を増やすだけで中々解決にこぎつけるのは難しい。」

「盗賊団は騎士団でも手こずるぐらいに大規模なのでしょうか？」



「もちろん、騎士団を本気で投入すればなんとかならないわけではないが、騎士団は他にも様々な案件を抱えているのでそうそう簡単に人員を割ける状態ではないのだ。たしか、盗賊団の名前を『荒野の獵犬』といったか。ここ『<sup>デザートランド</sup>荒野地帯』から奪うということだろう。不愉快な名前だよ。」

「ああ話がずれてきたね。話を纏めると、君に頼みたいのは『盗賊団に通用する武器をわが騎士団に卸す』ということだ。盗賊団に渡った剣の更にもうひとつランクの上のアダマタイトの剣といったかな？あれを15本ほど用意してもらいたい。ただし、払う金額は通常の金額の25%。新開発した、または改造した武器などは登録をしなければいけないという法律は知っているね？武器を新開発したわけではないだろうが、鉄の剣をきれるだけの性能を持った剣だからね、改造武器ということでの法律が当てはまるんだ。ただし、このようなことで良い職人を捕らえるというのも惜しい。だから25%で販売してくれるのならこの件については不問とする。逮捕よりは赤字の方がまだましだと思うけど…どうかな？」

なるほど、宰相の目が笑っていないかったのはこの条件をのますことが出来ると考えていたからなのだろうと聡介は悟った。

鉄を切れるほどの剣を手に入れることに加え、それを更に通常価格の25%で買えるともなればそれを狙わない手はないだろう。

通常ならばそんな無茶は出来ないが法律という言葉をかざし、逮捕と引き換えに……という強く出られる立場だからこそ出来る手だ。

聡介は、商工ギルドでの契約の時にしっかりと契約に関する法律の

欄に目を通しておくんだつたと後悔している。

契約分などをしっかりと確認せずにサインをしてしまうのは日本人の悪い癖だなあと聡介は改めて思った。

さすがに逮捕されるというのは不味いので、聡介はその条件をそのまま飲むことにした

「フッフ、これで剣を手に入れば騎士団内での私の評判は上がり、討伐の実績を与えることで今後の政治で影響力をますことができるだろう。それにあの小僧が潰れたら潰れたで城の方に引き込めばいい。城の奴らが同じものを量産できるようになるかどうかは分からないが、うまくいったな。」

「宰相もひどいことを考えるお方だ。まだまだ相手は若い小僧じゃないですか。流石まつりごとを取り仕切るだけありますね」

聡介が去って行ったあとの室内で宰相は人と接する時の仮面を脱ぎ棄てて、笑みを深くする。

その様子を傍らで控えていた宰相子飼いの騎士が薄く笑いながらいう。

「フッフ、今さら何をいうか。そもそもあの小僧に目をつけたのはお前だっただろう？ 私は友人の頼みをきいただけだよ」

「それはそれは……宰相殿からのプレゼントとは光栄極まりないことですな。これからもどうぞよろしくお願いしますよ」

騎士は宰相の言葉を聞いて、感謝感激恐悦至極とばかりにわざとらしく大仰に礼を返す。

「これでベルナルド・バルベリーニが率いる部隊も目じゃなくなっただけではないか。賊の討伐戦では期待しているぞ。お前の隊が戦果をあげればそれだけお前の地位もあがるだろう。もし、最近なにかと優秀なベルナルドや他の隊が戦果をあげても流れ弾や伏兵にやられてしまつては仕方がないからな。お前も流れ弾や伏兵には気を付けることだ」

「……では、いいですね？」

「ん？何をいつているのだ？ 私は流れ弾に気をつけろと注意を促しただけだが？」

宰相がわざとらしく芝居がかつてとぼけるのを見た騎士は、一歩下がり軽く礼を返して部屋の外へと出ていった。

「クツクツ……。何もかも思い通りに人を動かせるから権力というものとは手放せないな。……さて、仕事に戻りましょう」

口の端を吊り上げて一人わらった宰相は、表情を元に戻すと机の隅に置いてあった用紙を手を取った。

王城に来る時と同じ騎士に連れられて、王城の外へと連れてこられた聡介だが、預けていたはずの剣は、そっくりに似せられている剣とすり替えられて聡介のもとへと返された。

最初に騎士達がわざわざ宰相の許可証まで見せたのはこうしてすり替えをして技術を盗むためなのだろう、とあたりをつけた聡介は、すり替えを指摘するのは騒ぎを起こすことになると思って黙ってその剣を受け取った。

ちなみに、聡介が一目ですり替えられていると分かったのは、持ったときに感じた剣の重さだった。

聡介が預けていた剣は鉄とアダマントタイトの合金だったため、ただの鉄剣よりも軽いので、普段から店頭に並べるために持ったりしている聡介はすぐに分かったのだ。

そして剣に加えて、皮の袋に詰められた剣の代金を騎士から手渡された。

これだけ用意が早いということは最初からこうなると分かっている用意していたということになるが、聡介はこれも何も言わずに受け取った。

剣と代金を受け取った聡介は、なぜか店まで送ろうと申し出てきた二人の騎士に、買い出しなどがあるので……と言って断り、その言葉どおりに夕飯に使う食材などの買い物をして店へと戻った。

さすがに気配まで分かれるとはいかない聡介だったが、さっきまでのやりとりがあつたので監視程度に人がついているだろうと思い、特に目立つた行動は起こしていない。

店へと戻り、工房の中に入って鍵を閉めた聡介はそこでようやく大きく息を吐きだした。

「ふはあ……。なんだか厄介なことにまきこまれそうになってきたぞ……。それにしても25%か……。逮捕と引き換えとはいえ、原価割れ確実、普通なら超大赤字の値段だよね……。でも、騎士団に採用されるっていうのは美味しい話だったな。騎士団に卸したっていう実績があつたら、お店の評判も上がるし、騎士団の人の信用も得られるし、注文も増える……。それになにより、錬金術を使っている自分にとっては材料なんて対外的なものだし、実際はそこまで赤字じゃないんだよね」。宰相は利用するつもりだったみたいだけど、こっちにとっては美味しい話だったし、この話を持ちかけてくれた宰相に感謝しないと。」

実は聡介にとって、宰相の話というのは悪い話ではなかったのだ。

本来なら維持費や材料の仕入れにお金をかけてイイ物を作るところを、聡介は錬金術でそれをクリアしているので、金銭的な面で圧迫されるということがない。

もちろんあまり疑いを持たないように材料などを定期的に仕入れているが、それでも通常より少ない量なので気にならないほどだ。

聡介は思わぬ好展開に嬉しくなるが、宰相が自分をハメようとしたという事実は消えていないのでしっかりと気を引き締める。

そして、聡介は翌日から店の営業を7日間休み、店のストックのアダマントタイトの剣13本に加えて、アダマントタイトの剣を2本を作った。

当然七日間もかかるような作業では無いのですぐに終わらせたあとは工房の中で本を読んだり、なにか面白いアイデアはないものかと考えていたりした。

そして、王城に呼び出されてから8日後の営業の再開の日には、朝のうちに荷運びようの馬車を市場の近くの店から借りてきて、それに注文されていた剣などを運び入れていた。

既に話は通っていたのか、聡介が王城へと到着し、門番に注文をされていた剣を届けに来たというと、騎士団の隊舎がある区画の方へと誘導され、頑丈な鍵のついた倉庫へと案内された。

倉庫の中にはしっかりと整備された武器が整然と並んでいたが、ところどころに傷があったりするので実際に使われているのだろーということが直ぐに分かる。

それらの武器を眺めながら、防犯上のためか1人の門番から3人の騎士へと増えた騎士の人に誘導されて剣を運び入れていく。

奥の方にある、ちょうど15本の剣が収まるように作られた木製の枠の中に作った剣を入れ終えた聡介は、入った時と同じく騎士に誘導されながら倉庫の外に出る

倉庫の外に出た聡介は、その場でまたされていた門番に連れられて門へと戻り、そこから馬車を借りた店へ馬車を返しに行ってから店へと戻った。

そして、それから3日後。

賊のために通行不能となっていた通路が再開通された。

## 030 宰相と黒い考え（後書き）

5780文字です

修正したものを再投稿になります。

今回は前回ほど無茶ぶりになっていないはず…。ただし、何かおかしいと感じた時にはまた感想のところに書いていただきたいと思います。

あと肝心な日数ですが、調べてもよく分からなかったのととりあえず2本を7日間で勘弁してください；w；

あまり日数を取り過ぎても物語として成り立たなくなってしまうので…。

もうここら辺は本当にファンタジーの世界ということにしていただかないと厳しいです。

なるべくリアルに近づけるとか言っておきながら申し訳ないです；

w；

では、また次回で…！



## 031 盗賊団と討伐

### 031 盗賊団と討伐

最近商人を襲撃したところで略奪した強力な武器と、同じく最近になって加わった傭兵くずれの冒険者を盗賊のグループに引き入れたことで、盗賊団「デザートハウンド荒野の獵犬」は活気づいていた。

傭兵崩れの冒険者の腕前は存外に良く、商人を襲ううちに目潰しや、砂かけといった盗賊団らしい卑怯な技を習得していくうちにどんどんとその腕前が上がっていった。

その腕の良さと、卑怯なことにも躊躇しない様にほれ込んだ盗賊団のリーダーは、その元傭兵達に手に入れたばかりの聡介の武器を数点与えた。

強力な人材を得た盗賊団は以前にもまして勢いづき、山中に構えたアジトから頻繁に街道周辺に出没するようになっていった。

そして、今夜も盗賊団は商人の馬車を襲い、警護のために雇っていたのだろっ冒険者達の装備や持ち物もろとも一切合財をアジトに持って帰っていった。

今回の商人の馬車の積荷は、地方の町の商人の物だったのか食料や、調味料、酒などといったものが多く、それらの全ては今晚の宴のためにアジトの中の荒削りの木のテーブルの上に並べられていた。

その中でも酒の減りは特に早く、調子によって用意された酒をガブ飲みしていた数人は既にその意識をまどろみの中へと落としている。

もちろん、外には見張りのために最低限の人間を配置しているが、その見張りの様子を見ると自分たちも参加したくてたまらないというような様子だった。

盗賊団というものに属している荒くれ者達が暴れださずにガマンできているのは、あとでしっかりと飲み食い出来ることをリーダーから保証されているのもあるが、一番はリーダーの統率力によるものだ。

リーダーは各々に嫌がる仕事を押しつけることはせず、盗賊団に入る前にしていた仕事などで適材適所に人員を配置し、それでもまわらない時は負担にならないように考えて人を配置したり、襲撃時に的確な指示を出し、被害を最小限にとどめるなどといった面を見せ、盗賊団に属する者たちからの信頼を得ている。

しかし、だからといって誰にでも優しくしているわけではなく、自分勝手な行動ばかりを繰り返す者や、襲撃対象に対しては一切の慈悲も見せず冷たい目をして文字通り斬り捨てるなど冷徹な面も持っているので、リーダーが甘くみられるということはない。

そんなリーダーを擁する盗賊団だが、一人だけ例外がいる。

それがニールだった。

妹のサーシャが盗賊団によって人質に取られてしまっているためニールは盗賊団に抗うことが出来ないでいるが、心中ではいつかサーシャを助け出してこの場所から逃げてやるという思いがいつもあった。

そして、その最大のチャンスがこの日やってきた。

宴の会場の片隅で片膝を抱えて座り込んでいたニールが最初に耳にしたのは見張り役の言葉だった。

「ふもとの方から何かきやがった！きつと騎士団の連中だ！すげえ数だ！」

宴のために外に出てほどほどにだが酒を飲んでいたりリーダーがその言葉に反応して顔を上げ、情報を伝える伝達役としてやってきた男から詳細を聞く。

「まあ落ち付け。ふむ……そいつらは松明をしっかりと持っていたか？」

「暗闇で人影はあまり見えなかったが持っていたぜ！松明炊いて集団でびつしり固まって動いてやがった！」

伝達役の言葉を聞いたリーダーは何か閃いたのか、酒で程よくほぐれていた気分を引き締めて指示を出し始める。

「なるほどな。そいつらは恐らく陽動だ。大方両手に松明を掲げて人数を多く見せているだけだろう。まずは後方と側面に警戒。ただ

し東側は谷だ。最小限でいい。後方からは上から矢を射られないように開けた高台を警戒しろ。西側では…、そうだな、下手に突っ込まずに様子を見ておけ、そうそう相手から突っ込んでこないはずだ」

「お頭！正面からのはどうすんだ！？」

「焦るな、今言う。正面からの奴らは坂を登ってくるから突破力は薄い。こちら西側同様構えてまっておくか、こちらから矢でも射ってしまえ。相手が数の差で突破しようとしてきたときは防衛用に積んでおいた木材を転がせ。勢いが落ちたり怪我を負ったところの上から襲ってやればいい」

「了解、お頭あ！まかせてくれや！」

お頭の支持を聞いた盗賊団の男は伝達のためにすぐにその場から飛ぶようにして去って行った。

「さて、今のうちに用意をしておくか……」

慌ただしくなってきたアジトの中で一人口元を隠してニヤリと笑うリーダーのキース・オルグレンは、周りにいる他の盗賊団に指示を出しつつ、元傭兵達へさりげなく視線を飛ばしながらアジトの中へと入って行った。

「さて、どうしたものか……」

賊討伐のために選抜されたベルナルドは今の状況からどう手を出そうかと悩んでいた。

当初、ベルナルドの立てた作戦として、夜中に松明を両手に抱えて集団で迫るイメージを相手に与えつつ、実際はごまかした人数分を敵の後方に送り込み、上下から挟撃させるといったものがあつた。

しかしそれは盗賊団のリーダーによつてすぐに悟られてしまったのか、後方に回り込むつもりで動いていた騎士達は予定外のタイミングで接敵し、足場の悪い山の森の中での戦いを強いられていた。

騎士用の甲冑を着た騎士達は馴染みのない足場の悪い山の斜面で鎧の重さで微妙にバランスを崩したり、森の根っこに足を取られたりと精彩を欠いていたが、その反対に盗賊団は身軽な装備のため、練度で劣っていても互角以上の戦いを繰り広げていた。

後方へ回るはずの部隊が接敵したことで挟撃という作戦は使えなくなり、必然的に正面を攻める予定だったベルナルドの部隊は人数的な面でも地理的な面でも突破力が足りなくなり、敵への散発的な攻撃を行いながらのにらみ合いの最中だ。

初めの方こそ、興奮した賊の方から数人が飛びだしてきて武器を構えつつ突っ込んできたが、それ以来盗賊達の方からは特にこれといった攻撃らしいものはない。

盗賊側は皆があるのであくまでも守りの姿勢を崩さなかった。

攻める側としては地理的にもきついので今の何倍かの人数がほしいところだが、砦の後方へと回した部隊は混戦状態のため使えず、西側の部隊はコチラと同じく膠着状態らしく動かせられないので、圧倒的に人数が不足していた。

予想以上の敵の動きを見て、一旦引いて作戦を練り直した方が得策か？と考えるベルナルドだったが、首を振ってその考えを頭の中から追い払う。

「どづしたのか…。」

部隊を預かる身のベルナルドは戦場に一人ごちた。

ベルナルドはその日国王へと謁見することが予定に入っていた。

手負いとはいえ、一人でオーガを討伐し訓練部隊を危機から救ったことや、その他にも多くの討伐などの手柄を立てたことで表彰されることだった。

騎士として、王から表彰されるということはとても名誉なことなため、謁見するための最上級の騎士用の礼服へと着替えたベルナルド

は緊張の色を隠せないまま、自宅をでた。

表彰式自体は、ベルナルドの声が途中で裏返ったことを除けばスムーズに進み、無事に終了することができた。

しかし、それからベルナルドにとってまさに寝耳に水の事態だった。

「日ごろ政務でお疲れでしょうから騎士殿の話でも聞いてみるのはいかがですか？たまには息抜きも必要かと…」

国王のそばに控えていた宰相が国王にそう進言すると、国王もそれもそうだな、たまにはそれでもいいかと、宰相の言葉にうなずき、そのまま部屋を移しての歓談となったのだ。

もちろん最初はベルナルドの活躍した時の話などを語ってみると言われて、不敬にならない程度に冗談を織り交ぜつつ、楽しい歓談となっていた。

しかし、ベルナルドの話が一区切りしたところ合いを見計らったの宰相の発言が問題だった。

「そういえば、最近王都から地方の村へと続く街道の近くで賊が出ましてね。これがただの賊だと思っていたら存外に強く、少々手を焼いているのですよ。」

この宰相の言葉を聞いた瞬間に、ベルナルドはざわっ…とイヤな予感を覚えていた。

「ベルナルド殿。この賊討伐の件をアナタにまかせようと思います。活躍を聞く限り、今のベルナルド殿なら適任でしょう。もちろん、いきなりの任務なので特別に報酬も用意しておきましょう。どうですか？国王も彼が適任だともいいませんか？」

「そうだな。クラックスもいいことをいうではないか！成功の暁には特別に報酬を君の部隊分送ろう。期待しているぞ、ベルナルド」

国王の言葉にベルナルドは片膝を立てて跪きながら了解の言葉を返したが、内心では冷や汗ものだった。

もしかしたら王都から精強な騎士を派遣するのがイヤなだけかもしれないが、もし本当に手こずるレベルの賊ならばベルナルドも当然手こずることは間違いないだろう。

それに活躍を語ってしまったばかりなので、下手な成果を上げて戻ってくることも厳しく、特別報酬も出すとのことなので失敗は許されない。

そして、なによりも一番の問題は国王の発した言葉だった。

国王自体は期待しているぞ！と気軽にいったつもりなのだろうが、もし成功しても、相討ち寸前のボロボロの状態で勝ちを拾うようなに情けない結果だったならば、期待を裏切ったということで国王から処分があるかもしれない。



流石にそこまで怒るようなことはないだろうが、万が一ということも考えると、国王の気分次第で営倉送り、騎士剥奪、死刑まで罪の重さなど思うがままだ。

もし、国王の気分を損ねずになんとか許してもらえたとしても、田舎者だった自分を面白く思わず引きずり降ろそうとする勢力に国王の期待を裏切ったと持ち出されれば、反論は難しく状況は悪くなるだろう。

ベルナルドにとってもはや負けることも、引き分けることも、ただ勝つことも出来ず、良い結果を出して任務を成功させるだけ、がこの難題における達成条件だった。

「ベルナルド殿ー！」

敵のアジトを前にしてこれからどう攻めようかと考えていたベルナルドの耳に後方から声が飛び込んできた。

ベルナルドがその声に反応して後方へと首を回すと、そこには50人ほどの人数の小隊が整列している。

「やあ、ベルナルド殿。私はこの小隊を率いるルミナスです。実は

私も宰相閣下から命を受けましてね。本来ならば共同の任務にあたる者として顔合わせをしなければならなかったのですが、命を受けたのがつい先日で準備の方にかかりきりで時間が取れなかったのですよ。小々遅れましたがよろしくお願いします」

小隊の先頭からベルナルドの方へと甲冑をガチャつかせながら歩いてきたルミナスは、スラスラと言い切ると、よろしくと言いながら手を差し出してきた。

「ああ、こちらこそヨロシクお願いします。貴殿が来て下さったおかげで攻めるのがだいぶ楽になりそうですよ」

思わぬ増援に内心驚きつつ、ルミナスと握手を交わしたベルナルドは、これで攻め込むのに人手が増えると思うと気が楽になった気がした。

「そうですか、それはよかった。では、早速ですが戦況を聞かせていただきますか？」

「そうですね、では……」

ベルナルドは各場所の状況を地面に簡単な図を書きながら説明をしていき、ルミナスはその言葉を聞きながらふむふむと頷く。

「なるほど、戦況は膠着していますね。私の隊を散らしてもそうそ

う状況は変わりそうにないですし……。ふうむ、敵のアジトの門はここから正面に一つだけですか……。となるとこの人数で攻めるにはこの正面から攻めるしかないようですね」

「しかし、相手もそのことは分かっているのだろうな。まだまだ丸太を落としてくれるようにそこら中に丸太が転がっているし、弓もこちら側に向いている」

「そうですね。しかし、いつまでもこうしているわけにもいかないでしょう。どこかで仕掛けなければただ消耗するだけです。……落ちてくる丸太に注意しつつ一気に攻め込むことにしましょう。数も勝っていますし、鎧も来ているから矢も下手なところに入らなければなんとかなるでしょう」

「やはり、それしかないか。それではなるべく散らばるようにして一斉に攻めるとしますか。固まって1つの丸太で大勢が立ち止まるよりはこの方がいいでしょう」

「そうですね、ではその作戦で5分後に」

ルミナスはそういうと自身の部隊のところへと戻り、自分が連れてきた部下達へと命令を出し始めた。

その様子をチラッとだけ見たベルナルドも、すぐに自身の部下達へとこれからすることへの命令を出し始めた。

5036文字です。とても久々の更新ですね。申し訳ありません。最後の投稿から3カ月ほどたちましたね。待っていて下さる方がまだいたのならば、お待たせいたしました。

私は実は今夏休みでゆっくりと時間がとれているのでこうして更新したわけなのですが、夏休みが終わってしまうとまた更新がかなりかかりそうです。

それと理想通りの物語が作れないことへの不満というか、自分への苛立ちというべきもののせいでなかなか机に向かうということもできません。

本当に不定期更新になってしまって申し訳ございません。

更新が止まっている現在でも一日に約400件のユニークがあるのを見ると、少し涙が出そうになります。

これからも不定期になると思いますので、期待せずにお待ちください…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4244m/>

---

廻る世界の錬金術師(元:面倒事が嫌いな錬金術師)

2011年7月28日22時41分発行